明治三十八年十二月五日發行 毎月一回五日發行 明治三十三年十二月二十五日第三種郵便物認可





# 女學世界 第五巻第拾六號 目次

登録
商標

# 良藥にして口に甘し

登録 淺田宗伯先生直傳 商標

# 淺田飴

たんせき一切

肺病の持藥

ひきかぜ

よはき人

老人の滋養藥

登録商標




十二日分 金五拾錢

一週間分 金参拾錢

四日强 金貳拾錢

二日分 金拾錢

日本全國到る處の藥店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町（電話本局壹二一番）

大阪北久寳寺町堺筋（電話東三九五八番）

堀内伊太郎

枯野



# 年の暮

三宅克己筆



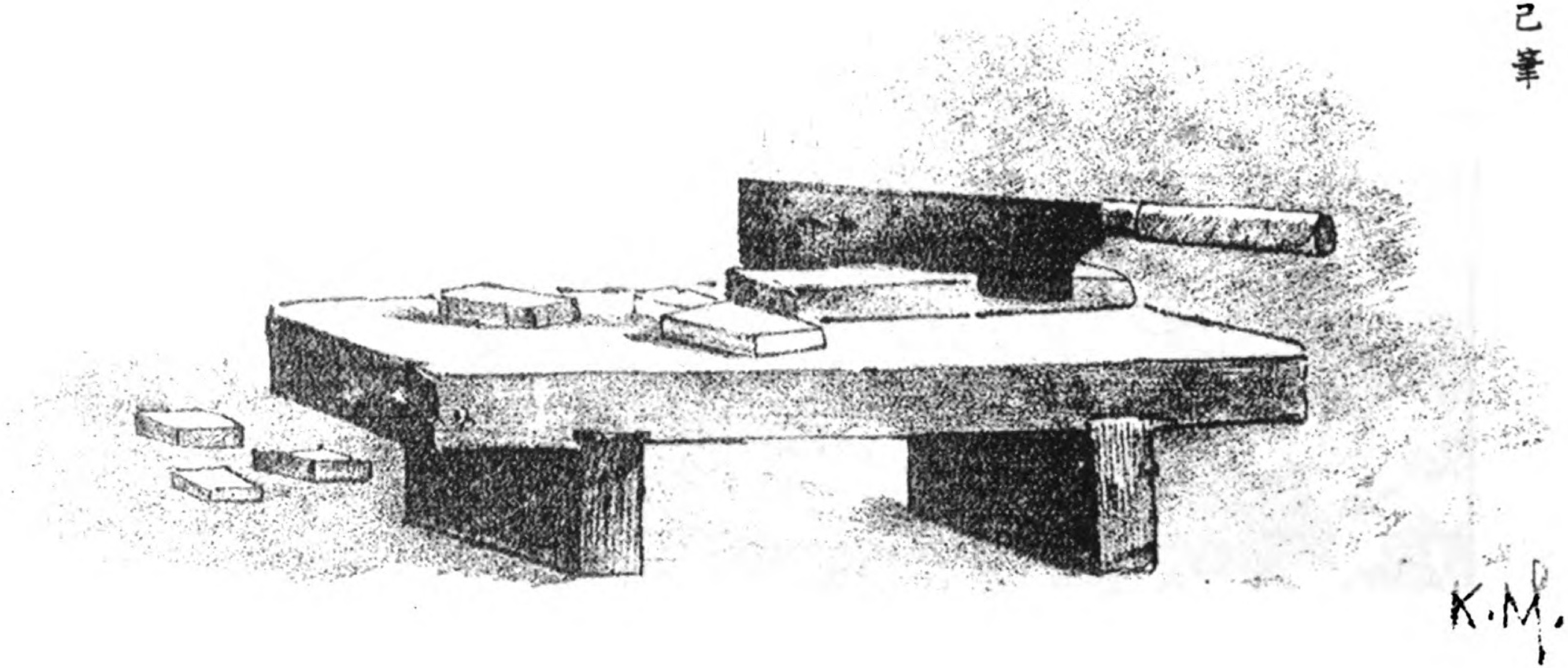


大根洗ひ

三宅克己筆

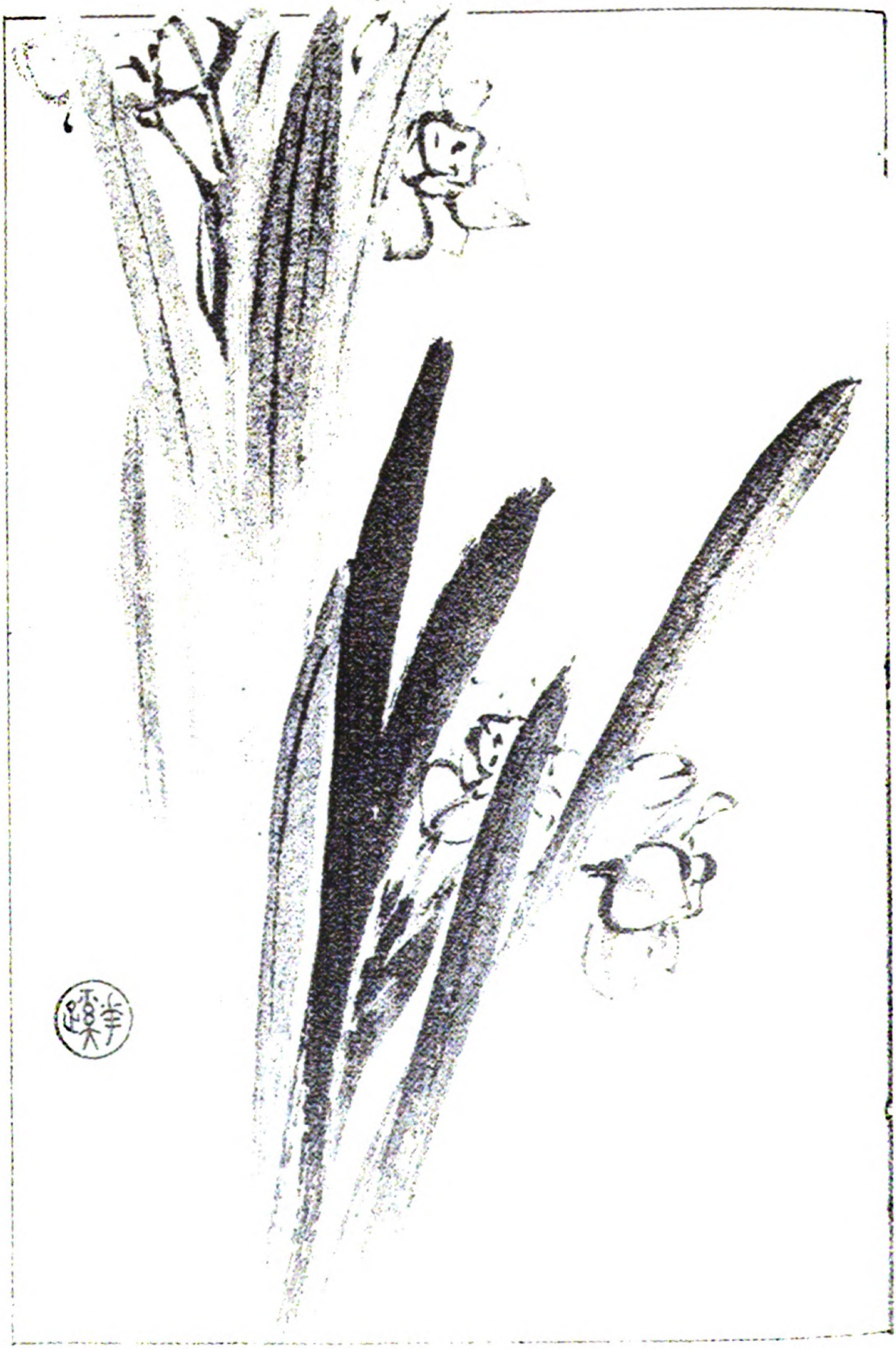
# 正月の仕度

三宅克己筆

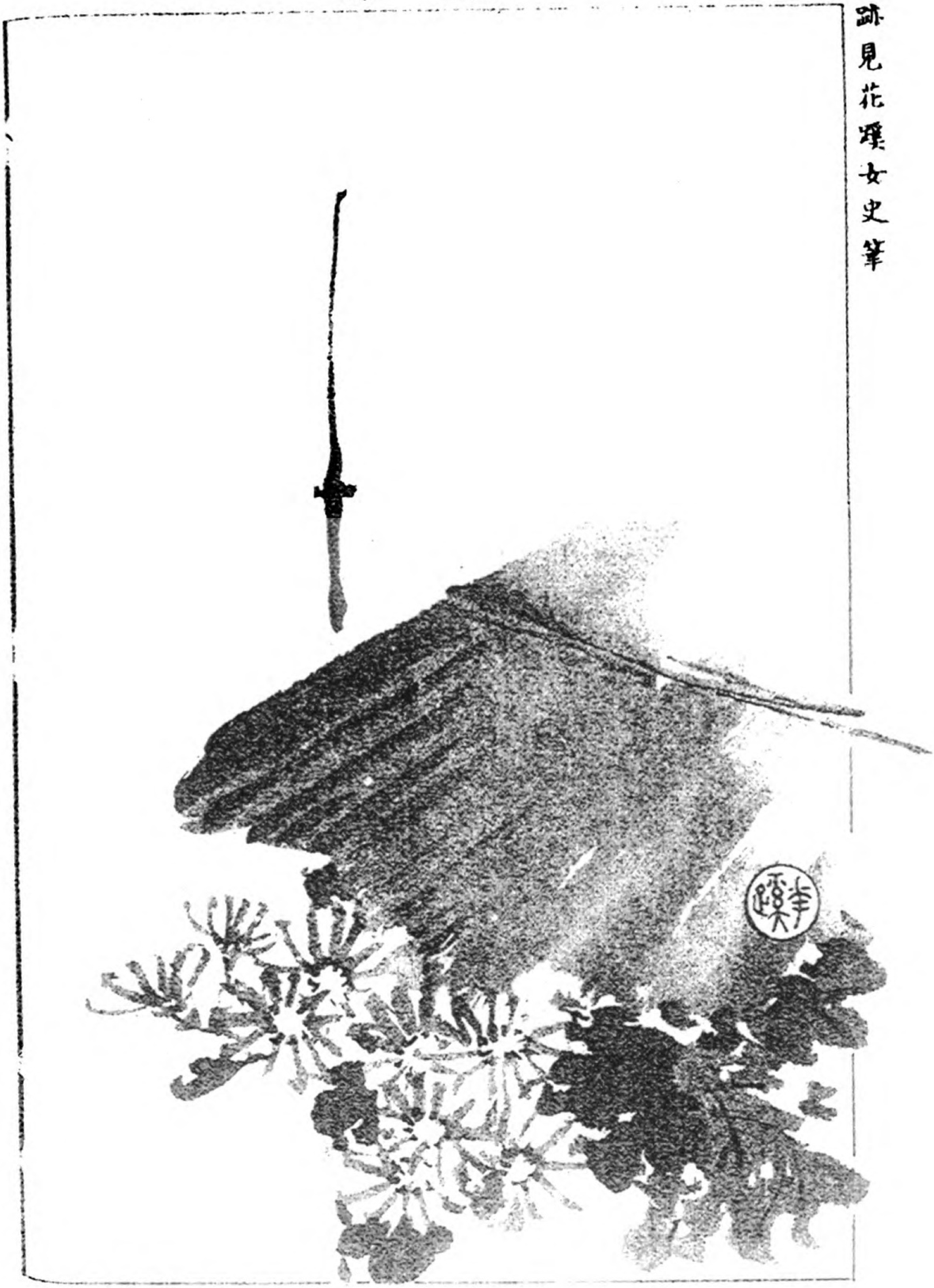


水仙

跡見花蹊女史筆

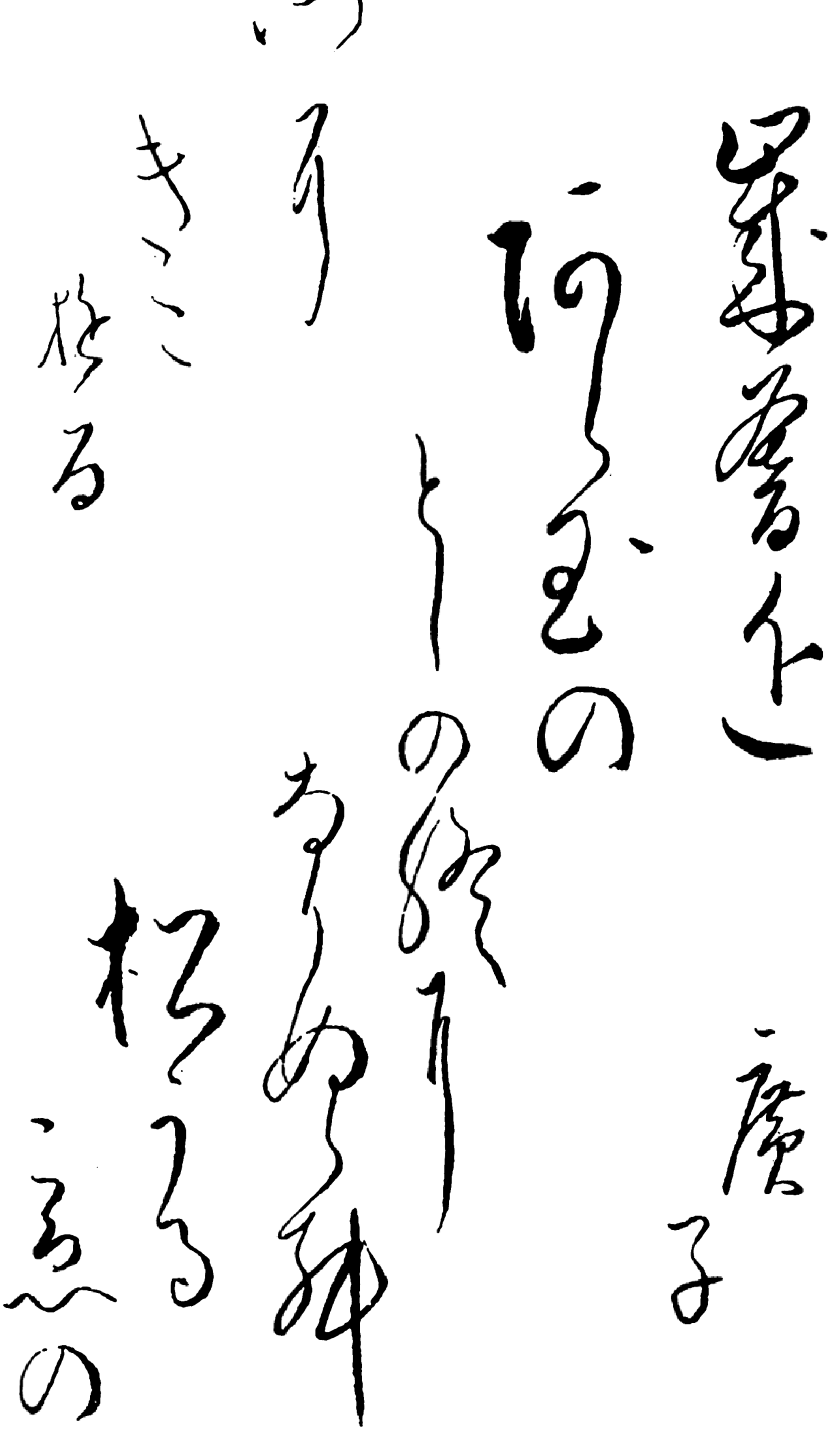


寒菊



跡見花蹊女史筆

日野西子爵夫人筆



# 瓦

廣子

おそろしき姿あらはれぬらし
鬼のはしにてうつろひ徳ひ
あをのくこころ人を見


美術造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

(甲の一)

●圖書總目錄進呈　博文館小賣係

△往復はがきにて御申入あれば進呈す

# ワキガ

わきが病程惡臭を發し人に忌まるゝはなし本病に困難の人は此好期間を逸せず全治の途を計るべし新發明奇藥あり三錢切手送れ即報す

讃岐三本松子星堂

# 肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

# 新發明

| | |
|---|---|
| 將校軍人 | 定價 |
| 敎師 | 十錢 |
| 僧侶 | 廿錢 |
| 演舌家 | 五十錢 |
| 音曲家 | 壹圓 |
| 謡曲家 | |

右は從來内藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候定價廿錢以上のものへは引續御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

美音錠發賣所　萬珠堂藥局

稀敵丸本舖　吉田安五郎

# 毛のはへる事請合　ハロール

ハロールは歐米各國に於て造化の妙工を奪ふの奇効ありとの好評を博したる醫學博士シエアインゲル氏の秘密藥を當館主が深奥なる學理と老練なる技術とを以て多年の研究に依りて其秘を發き之に最近の發見に係るドクトルベンザム氏の生毛に關する新説を參酌し最新藥を配合したるものなれば價額は他の生毛劑に比し稍々高價なるべきも其効能の卓絶なる世間に有觸れたる技術と學理に暗き素人の製造したる藥品の比にあらずまゆげはへぎわひげの薄を濃しやりどできものにて禿たるを生し陰毛等あるべき所に毛なきを生し禿頭病に奇効ある事請合なり前數年間の學術の進歩を應用し更に新藥を配合したれば一層有効確實となれり是非試みよ内容增量改正定價五十錢送料四錢郵券代用三錢切手二十枚送れ

# らい病新藥（送料五錢）

▲▲複方ヂノサール一ケ月分貳圓

▲▲ヂノサール一ケ月分一圓五十錢

此のらい病藥は永年ハワイ國に在留して癩病の研究に從事したる英國醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に最近の治癩新藥を加へ尚ほ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確著なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日にても之を根治せしむる事は難けれども其病勢の甚しからざる中に貳圓分を四ヶ月位服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても六ヶ月位兩藥を並用すれば病原菌をは脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする主趣に基き發賣するものにして無効なる藥品に非常の高價を付け大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を瞞着せんとする賣藥と同視する勿れ容體書に三錢切手封入本舖へ申込あれば委しく通報す

●原料暴騰し到底從前の定價にては收支償はず候に付定價を改正致候然れども從前より御使用の藥を得たる方には從前の價にて差上申候

●郵券代用は途中にて紛失の際調査の途なきに付可成小爲替にて願上候

本舖　三河國碧海郡刈谷町　從世館藥局主

醫士　醫科大學卒業藥劑從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

女（甲の三）




## 偉大の名譽

**ゼム** は勇敢絶倫なる陸海軍將士の愛用を蒙り殊に
東郷大將閣下よりは鄭重なる禮狀を賜はり亦々戰勝國紀念として
ノーヱル大將閣下 の賞讃を忝ふせる光榮を得たり。

**ゼム**は氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他郷或は惡臭の場所に携帶し常に少量を用ひなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防する良劑なり。

**ゼム**は一二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしめ又偉大なる効能の愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必ず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり

定價
優美高尚包 七十五粒入 拾錢 百六十粒入 貳拾錢
四百卅粒入 五拾錢 九百粒入 壹圓
新意匠容器ゼム入 貳拾錢

發賣元 東京市日本橋區馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎

支舖 大阪市東區高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

△全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

交際社會の貴婦人



（齋藤海軍中將夫人春子）



（三令嬢）



桑港帝國領事
上野季三郎氏



（令夫人）

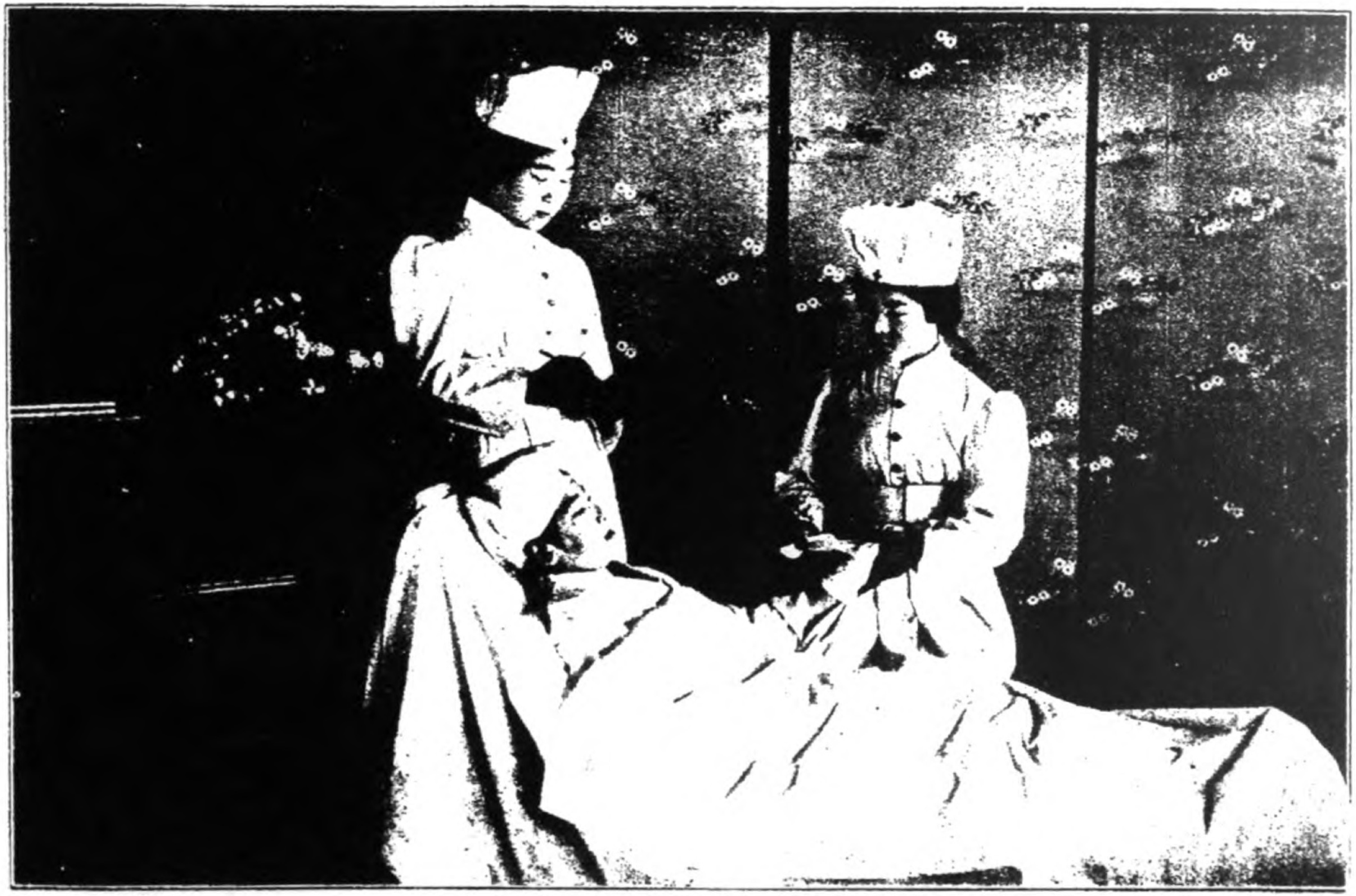


加茂海軍機關大監の家庭

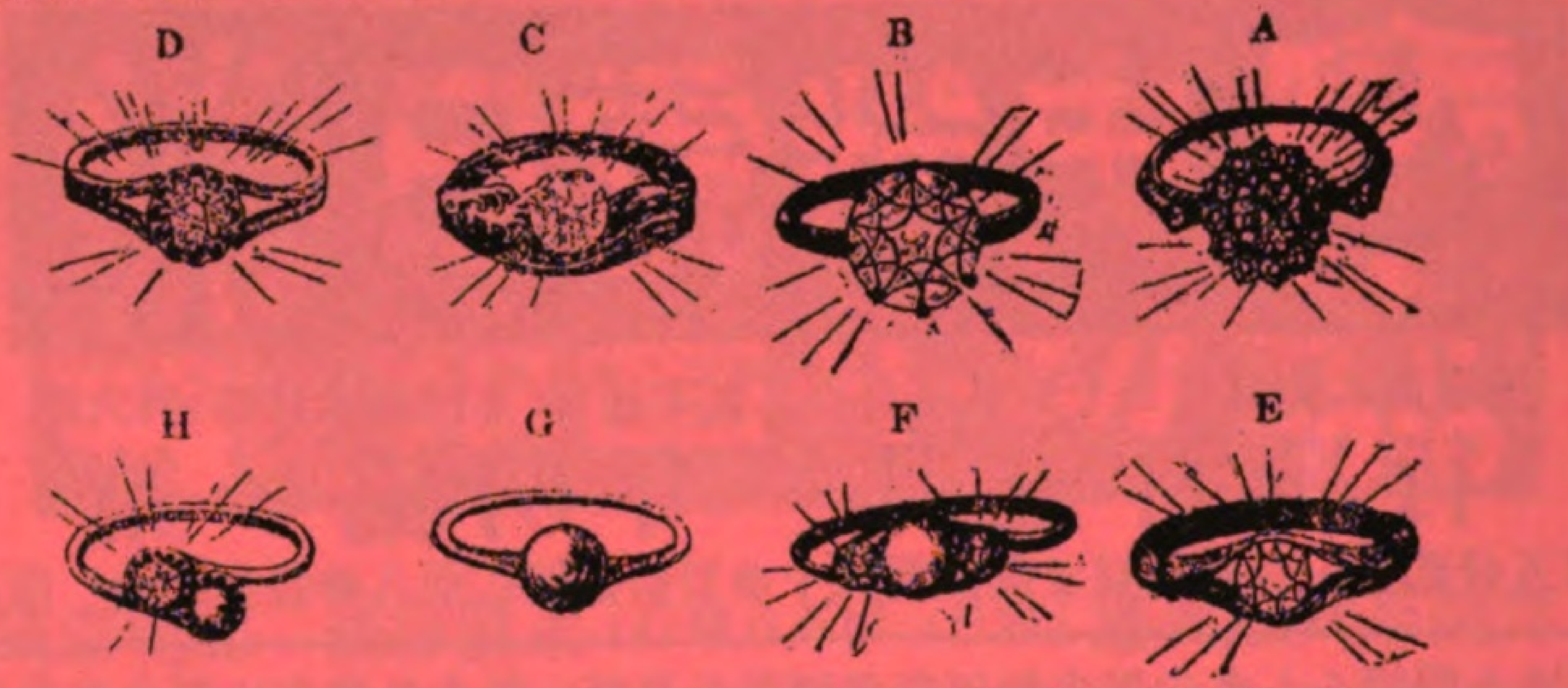


眞田海軍中佐の家庭

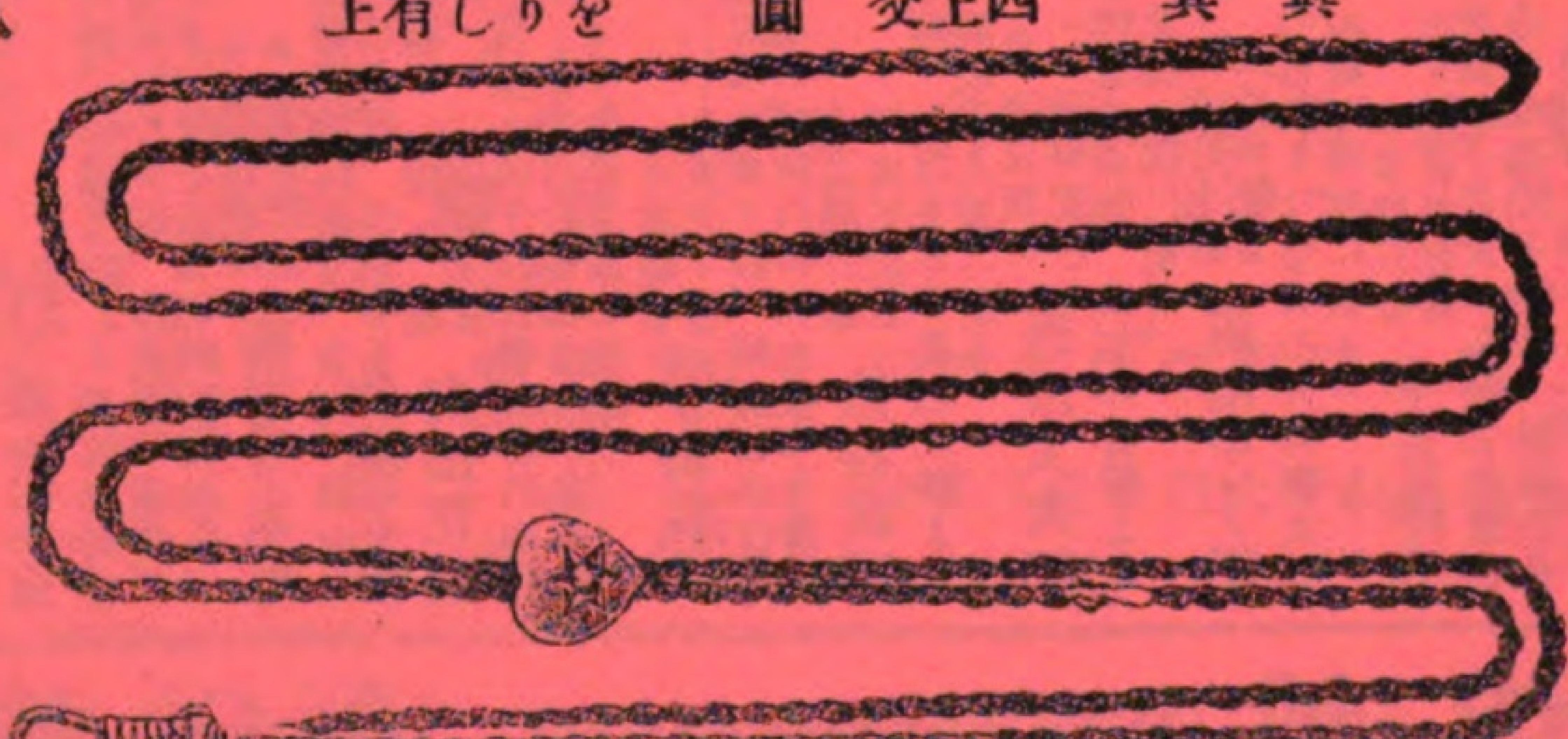
看護演習



高輪裁縫女學校生徒ノ活人畫





女(乙の一)

# 日露戰史

四六判二倍(太陽同形)毎編本文二百頁寫眞版十二頁毎月二回發行

## 第一編明年一月五日發行

正價 一冊參拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓廿錢▲郵税一冊貳錢五厘

日露の戰役は、世界稀有の大戰、我國開闢以來の大事變にして、其陸海軍連戰連勝の偉勳は、有史以還實に比類なきなり。此の戰役の經過は、時々の新聞雜誌に於て、斷へず之を報道せしも、常に軍機の秘密に拘束せられ、僅かに公示して差支無き皮相の外は、全く其骨髓を除かれたり。今は戰役終を告げ、陸海各軍の幹部は陸續凱旋せられ、加ふるに各軍從軍の操觚者も、皆な歸朝し、完全なる戰史を編述する資料と著者とは具さに備はれり。此に於て各軍從軍記者の俊秀に請ひ、各軍の記事分擔を托し、開戰前の外交始末より、開戰以後の戰鬪經過と、各軍隊の勇戰奮鬪、後方勤務の辛酸勞苦等に至るまで、細大漏さず系統的に編述し、文體は現時の文明的戰史に舊時の平家物語太平記等の筆法を折衷し、其間には、數多の明細なる戰鬪地圖を加へ、幾多の戰地寫眞と人物寫眞をも冠し、以て精確にして最も趣味ある戰史を刊行し、此の空前の偉積を不朽に傳へんと欲す。第一編以下編述擔任の定まりたる分は左の如し、但編次の順序は多少變更せらるゝことあるべし。

第一編　日露談判破裂より旅順仁川の海戰、陸軍の輸送、數回の旅順口閉塞の壯擧を經て旅順口封鎖宣言に至る。　太陽記者　國府犀東

第二編・第三編　第一軍の出發、韓國上陸より平壤定州の小衝突、鴨綠江の大戰、摩天嶺の逆襲、橋頭楡樹林子、樣子嶺等の戰鬪に至る。　國民新聞從軍記者　梅田又次郎

第四編　第二軍の出發上陸に起り、金州、南山の激戰、大連灣の占領、得利寺大石橋の大戰より營城海城の占領に至る。　博文館從軍記者　田山花袋

第五編　八月十日の黄海と同十四日蔚山沖の兩海戰大勝より、旅順口の敵艦全滅、旅順開城に至るまでの海軍方面の活動。　日露戰爭實記記者　平田骨仙

第六編　大孤山上陸軍の出發上陸、岫巖分水嶺の激戰、第四軍の編制以降析木城の大勝戰に至る。　東京朝日新聞從軍記者　熊谷直亮

第七編　遼陽總攻擊第一二四各軍の勇戰大勝より滿洲總司令部遼陽入城に至る。　國民新聞從軍記者　梅田又次郎

第八編　沙河の大會戰敵の逆襲、我軍の苦戰より終に全軍の勇戰大勝に至る。　東京日々新聞從軍記者　黒田甲子郎

第九編・第拾編　第三軍旅順の包圍より空前の大苦鬪大惡戰を經て終に敵將降服に至る。　東京朝日新聞從軍記者　半井桃水

第拾壹編・第拾貳編　黒溝臺の大苦戰より奉天の大戰と大勝利、鐵嶺開原の占領半歳間の對陣、最後の休戰條約迄。　東京日々新聞從軍記者　黒田甲子郎

第拾參編　以下樺太軍北韓軍等の偉勳、日本海の大海戰、米國ポーツマスの講和談判始末、對韓對清外交始末等は更に編を追ふて發刊すべし。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(その二)

三拾九年一月一日第壹號發行

# 幼年畫報

洋裝菊判頗美畫（毎月一回五日發行）正價拾錢　郵税壹錢

サア〳〵皆さん！今度いよ〳〵此が出ますよ。坊ちゃん方や孃ちゃん達には、又と無い好い御相手。來る三十九年の芽出度い戰勝の御正月に、十二分の御化粧を凝らして、皆さんのお目に掛るので御座ります。石版の極彩色刷に、寫眞版や、活版の二度刷と云ふ、頗る奇麗な挿畫の上に、益に成る畫解や、面白いお伽噺を加へて、實に可愛らしい畫本であります、而もこの編輯は、お馴染の小波山人。幼年諸君の御友達、少女方の御朋輩には、此の他に誰が御座りませう。世に子を持つた親御さん方！苟も明治の新社界に、眞の家庭の樂みを知ろうとお思ひなら、是非この好雜誌を迎へて、坊ちゃん孃ちゃんの笑顔を見る事を、決してお忘れなさいますなよ。

年刊十二冊▲定期增刊年四回
……（定價同一）
▲石版極彩色刷十六頁寫眞入活版
……二度刷十六頁

◉定價　壹冊拾錢　郵税一錢

▲前金　●四册金參拾八錢●八册金七拾五錢●拾八册金壹圓四拾錢▲外に要郵税

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女（乙の三）

# 文藝倶樂部

每月一日一回發行

## 第拾貳卷第壹號

一月一日出版發賣

▲如何にして來年を迎ふべき▼

さしも荒びに荒びたる日露の風雲全く收り東洋の乾坤再び平和の榮光に浴することゝなりぬ。吾人は須らく劍戟に代ゆるに文筆を以てして、この希望に充てる戰後の文壇を迎ふるに際し、我が「文藝倶樂部」は其の第十二卷に入らんとす。ア、讀者が本誌を眷愛するの深厚なる、號一號其の發行部數を倍加し、東洋第一の文藝雜誌たる實權を得せしめたる、何を以て此の好意にや酬ふべき。是れを想ふ每に編輯同人感奮措く能はず、歲の革ると共に層一層奮勵努力、犬馬の勞を盡くさんことを誓ひ、來年初刊の本誌には、創刊以降未だ曾て有らざる最美最善の大附錄を添附し、聊か報恩の誠意を表さんとす。その如何なるものなるかは、故に今玆に明示せず。讀者は新年の初刊を手にして、本誌が微志を諒さるべきを信ず、來年度の本誌が、その記事に、その繪畫に、その寫眞版に、多々ますます改善の實を擧げ、如何に最新機軸を出すべきかは、乞ふ本誌の實際に徵して知れ！

▲願はくは讀者刮目して待て▼

每月一回一日發行年刊十二冊定期增刊年四回
正價一冊廿五錢 郵稅貳錢五厘 前金四冊金九拾五錢 八冊金壹圓八拾錢 十六冊三圓五拾錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の四)




# 來年の大計畫

年と共に新たに成れる少年世界は戰後の大發展を期して益々記事を精撰し滿天下の少年諸君が多年の素願に副ゆる處あらんとす下に掲ぐる如きは其一端に過ぎずと雖も來る一月一日の本誌が如何に盛裝して諸君の机邊に到るべきか刮目して待たれんことを！

● **お伽噺** お伽噺はお馴染の巌谷小波氏が作眞に之れ天下の逸品

● **學藝談** 學藝は理科に歴史に地理に英語算術悉く少年の好師友

● **新遊戯** 新遊戯は其季節に適ひたるものを選び逸早く紹介せん

● **陸海軍** 軍人立身案内を詳述し加ふるに諸般の軍事談を網羅す

● **農工商** 實業は簡易に詳しく記述し戰勝國の少年の實典たらしむ

● **懇談會** 懇談會は讀者と記者席を共にして互に相談を樂む所也

**少年訓**は[illegible]巌谷主筆の穩健なる筆になり立志冒險等の**少年小說**は益々諸君の大喝采を博すべく**少年文壇**は大擴張を爲し毎號百篇以上を聚錄して諸君の滿足を購ふべし

## 色刷お伽噺

面白いこと他に類なき小波主筆のお伽噺來年より其妙文を飾るに彩色二度刷を以てし諸君を驚かすものあらんとす

## 口繪の改良

大好評を博し來れる博物標本畫は從來の石版に代ゆるに精巧なる原色寫眞版を以てして宛然實物に逼るの觀あらしむべく又新に毛筆畫手本を附し猶ほアート刷寫眞版四面を添ふべし

## 新年大附錄

午の歳に因み競馬遊戲と名づくる新案双六を附錄とす武内桂舟氏の畫く處大版極彩色刷也

發行日 毎月一回 一日發行
定期增刊 年四回 定價同一
●壹册正價金拾錢 郵稅壹錢五厘
前金（四册三十八錢●八册七十五錢●十六册壹圓四拾錢）外要郵稅

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の六）

# 祝出征軍人之凱旋臨時大割引急告

割引期限は十一月十日より十二月二十日迄の四十日間とし下記の『繪はがき』を總て正價の參割引を以て御高需に應じ申候
但し期限後は斷然定價に復し申候

本會の曩に繪葉書數十種を發行して、出征諸氏の勞を慰問せんとするや、博愛義俠なる大方の諸君子は、大に吾人の意を諒とせられ、且つは本會發行品の優美と高尚と嶄新との特色を備ふるに依りて、非常なる好評を博し、多數の御用を蒙り、稍や其目的を貫徹し得たるは、實に望外の幸とする所なり、今や平和克復と共に出征の諸將士は、限りなき光榮と祝福とを荷ひて、萬人歡呼の裡に續々凱旋せられんとす、是に於て本會は其所期せる慰問の實を擧げ得たるを喜び、凱旋の祝意を表する爲め從來發行せる下記の繪葉書は、十一月十日より十二月二十日迄に至る四十日間の御注文に限り定價の**參割引**を以て御需めに應すべし、思ふに時や恰も新年に際して或は歸鄕のつとに或は凱旋の通知に或は年賀用に、最も繪葉書の需用せらる可き機會の多きのみならず、凱旋の式場又は祝賀會の席上に於て、諸名士の詩歌筆蹟を乞ひ、以て出征中の通信と共に好個の紀念品となさんはまた繪葉書の右に出るものなかるべく、隨て繪葉書の需用は例年に倍加せんとす、乞ふ此好機を逸せずして續々御注文被成下度奉希望候

**發行所** 東京小石川久堅町 **日本葉書會**

**發賣元** 東京本町三丁目 **博文館**

| | | 枚 | 定價（錢） |
|---|---|---|---|
| ●水彩繪葉書(三) | 大下藤次郎畫 | 六 | 一八 |
| ●四季の花 | 跡見花蹊畫 | 各六 | 各三〇 |
| ●戀十種 | 鏑木清方畫 | 一〇 | 袋入三五 アルバム入五〇 |
| ●漫畫はがき | 北澤樂天畫 | 六 | 二五 |
| ●滑稽漫畫ハイカラ | 同 | 六 | 二五 |
| ●滑稽繪葉書 | 梶田半古畫 | 三 | 三〇 |
| ●水彩寫生花の中禪寺 | 中澤弘光畫 | 六 | 一八 |
| ●繪はがき愛 | 島崎柳塢畫 | 六 | 二五 |
| ●歷史繪葉書 | 富岡永洗畫 | 六 | 二五 |
| ●風俗十二ヶ月 | 尾形月耕畫 | 上下各六 | 各二〇 |
| ●今樣大津繪 | 淺井忠畫 | 六 | 一五 |
| ●美人風俗やまとなでしこ | 上村松園畫 | 六 | 三〇 |
| ●六[illegible]繪葉會 | 小堀鞆音畫 | 六 | 二〇 |
| ●慰問葉書 | 和田英作 石橋思案作 | 六 | 一五 |
| ●詩葉書 | 下條正雄畫 | 六 | 一五 |
| ●歌葉書 | 井上通泰 | 六 | 一五 |
| ●俳諧葉書 | 齋藤松洲畫 | 春夏秋各六 七 | 各三〇 二〇 |
| ●花と虫 | 鈴島武二畫 | 六 | 一八 |
| ●世界のパノラマ | 中村不折畫 | 六 | 二〇 |
| ●花？人？ | 本多穆堂畫 | 六 | 三五 |
| ●透畫染書涼風 | 中澤弘光畫 | 六 | 一五 |
| ●花紅葉 | 山中古洞畫 | 六 | 一五 |
| ●東京名所繪葉書 | 小川一眞寫 | 上下各六 | 各一八 |
| ●都の花 | | 上下各五 | 各一五 |
| ●歌舞伎葉書 | 同 | 三 | 一〇 |
| ●泰西名畫葉書 | 解說書付 | 五 | 五〇 |
| ●名所十二ヶ月 | 中澤弘光畫 | 上下各六 | 各一三 |
| ●新粧美人 | 東京新風俗 | 上下各六 | 各一五 |
| ●日本名所(新刊) | コロタイプ 各地風景 | 上中下各五 | 各一〇 |
| ●家庭繪はがき | 水野年方畫 | 上下各六 | 各一八 |

（乙の七）

各國帝室及王家御用

# ミルクフウド




歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ◉最モ盛カンニ藥舗洋酒食料品店ニ販賣ス

---

醸造に最も古き經驗を有する本印の品質他品に超絶せるは更に贅するの要なく夙に世間の定評あるあり尚此上とも御愛用奉願上候敬白

天下一品
最上醤油

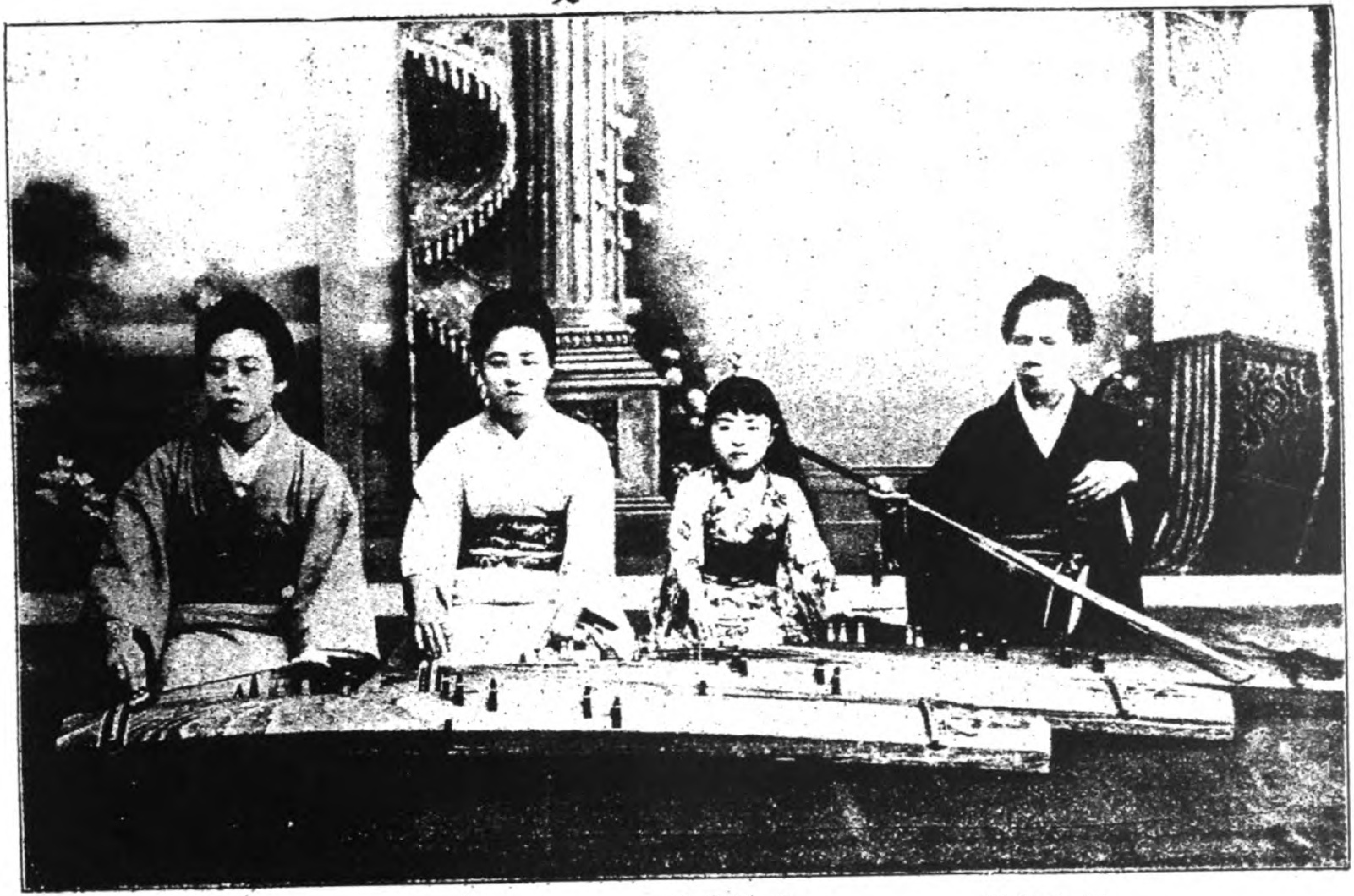
千葉縣野田町
醸造元　茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

（乙の八）

# 合奏

京濱に於ける三曲の名手
原千代春及び其高弟



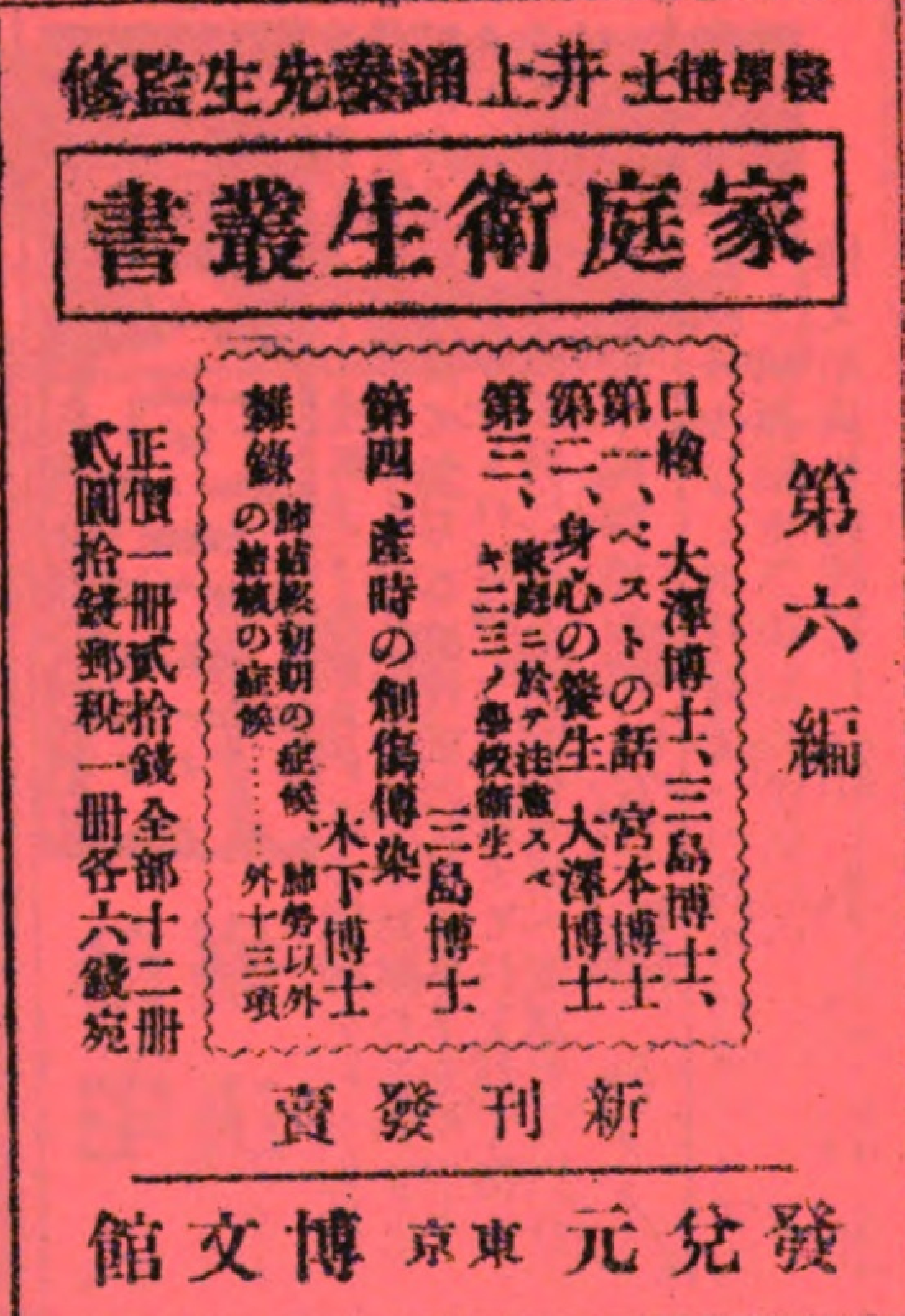
出島芳子　小池君子　小池筝子　原千代春

母と子供



明治母の會秋季大會


五大軍醫
合議製劑
胃活
いかつ
本舗
山田安民


醫學博士 井上通泰先生監修
家庭衛生叢書
第六編
口繪 大澤博士、三島博士、
第一、ペストの話 宮本博士
第二、身心の養生 大澤博士
第三、家庭ニ於テ注意スベキ二三ノ學校衛生 三島博士
第四、産時の創傷傳染 木下博士
雜錄 肺結核初期の症候、肺勞以外の結核の症候……外十三項
正價一冊貳拾錢 全部十二冊貳圓拾錢郵稅一冊各六錢宛
新刊發賣
發兌元 東京 博文館


真正無毒
皮膚艶美
クイーン白粉
おしろい
クイーン水
本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる
化粧料なり
本舗
東京日本橋新和泉町
三井花
取次販賣
は到る處
の化粧品
小間物店
にあり
切れなれ
ば直接に

# 修學旅行



日本女子美術學校生徒の紅葉見旅行(日光含満ヶ淵上に於て)

# 當世令孃の風采



（日比谷平左衛門氏令孃鶴子）

次丁の二

▲出版界空前廉賣豫約緊急廣告▼

日本女子大學教授 鹽井文學士。巖谷小波
女子高等師範教授 尾上文學士。廣津柳浪
東京帝國大學講師 佐々木信綱。山中古洞
先生選評

編輯局校訂



女子文壇

# 懸賞文集

附録 大家文集

全一册 中判洋裝頗美本 表紙石版數遍刷 三百廿頁以上 口繪には選評家肖像及懸賞畫色刷數葉入

定價一册 金貳拾五錢

豫約申込 十二月卅一日迄此割引券を添へ直接注文に限 金貳拾錢 郵送無料

●●●目下印刷中＝製本出來は一月上旬……着金順に送本す

(有効)卅八年十二月末日迄
女子文壇 懸賞文集割引券
(豫約)一册金廿錢郵税なし

本書は女子文壇第一卷投稿の中より懸賞傑作のみを網羅したるものなれば女子が文章を練り詩歌を學ぶに摸範的作文書としては唯一の寶典たるべく殊に附録としては諸大家の作文上の心得となるべき名文を載せ修養の便に供したる無比の良書なり

出版元(豫約申込所) 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 女子文壇社

特約賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂、各書店

(丁の二)

# 女學世界

## 明治三十九年度の新發展

戰後の日本は、戰前の日本にあらず、今や旭旗の光は普く四海を壓して、國運の發展驚くべきものあり、是に於て女子の指導を任とせる女學世界、又た進んで規摸を大にし光彩を新にして同胞諸姉に見ゆるの機運に際したるは弊館の大ひに光榮とする所なり、乃ち本誌が來卅九年度以後に於て期する所は、此の盛代に生れ合せたる女學生及び一般家庭の爲めに必要なる智識を供給し以て婦人界の發展に資するにあり、而も内容に趣味と實益とを兼備ふるは所謂花も實もあるものならんか、乞ふ大國民の妻たり母たらん者は新年以後の女學世界を讀め、其の揭載欄目は下の如し。

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ▲教育 | ▲學校 | ▲家庭 | ▲社會 | ▲說話 | ▲科學 | ▲史傳 | ▲英語 | ▲音樂 | ▲家政衛生顧問 | ▲學事欄 |

◎來年度よりは更に女子の新方面に就て解說し現下の時勢に緊要なる新智識の貢献に努め內容、體裁共大ひに面目を一新すべし、尙ほ音樂欄、教育欄、說話欄を增設し、殊に家庭に關しては、本誌獨特の伎倆を揮つて一層力を用ふべければ、蓋し坐右の良師となすに足るべし。

●模範家庭の紹介　上は公侯貴爵の家庭より下は江湖名流の家風にして模範となるべき家の內容を紹介し、家庭改良の一助たらしむ、蓋し趣味ある家庭を知るは、趣味ある家庭を造るの階梯なればなり。

●口繪　風景、人物風俗、並に婦人の活動を具體的に說明するものは之を寫眞銅版として卷頭に揭げ、習畫手本としては水彩畫、鉛筆畫、毛筆畫、婦人風俗品の施彩鮮麗なるものを紹介し、尙ほ卷頭の美觀としては、華麗なる花鳥人物の繪葉書並に油繪各一頁を添ふ。

新年附錄

**新案女裝双六**　水野年方君筆

縱一尺八寸橫二尺五寸

彩色　三度刷

發行日　毎月一回　五日發行

定期增刊　年四回　定價同

◎壹冊正價金貳拾錢…郵稅貳錢

前金（◎四冊金七拾五錢◎八冊金壹圓四拾五錢◎十六冊金貳圓八拾錢　△外に郵稅

（丁の三）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

# 實業世界 太平洋

## 明治三十九年之大計畫

太平洋は本邦實業雜誌の巨擘として名實兼ね備はれるが中外既に定評あり。本誌生れて茲に三歳來春を以て第五卷第一號を發刊せんとするに當り、偶々日露戰爭全く其局を收め、日本民族の發奮一番、世界の舞臺に立つて大に活動すべき時機は正に到れり。本誌の本領を發揮すべき時機亦た此秋なり。有爲の人士が本誌を伴侶とし、本誌に待つ所あらんとする時期亦た實に今日に在るべし、是に於てか本誌は來春を期して着々刷新を圖り、以て多數讀者の希望に應ずると共に愈々出でゝ愈々一代に大雄飛を試みんと欲す。其の改良の細目に至つては一々此に縷述するの限りに非ずと雖も下に掲ぐるものは即ち來春早々本誌の内容を組成すべき欄の大要なり。若し夫れ口繪寫眞銅版に至つては珍を蒐め奇を盡しアート紙四頁光彩陸離として本誌以外容易に其類を見出し難かるべし。苟も當代の人と生れて志を實業に寄せ、而して本誌を讀まざるものは未だ共に語る可からず。

- ● 論說
- ● 名家訪問
- ● 明代人物
- ● 調査資料
- ● 實業世界 △實用英語△世界の實業△質疑應答△翻譯△貿易事情
- ● 海外渡航案內
- ● 家政案內 △家庭△實業家夫人訪問錄
- ● 職業案內
- ● 內外談叢
- ● 成功指針
- ● 雜錄 △通俗文學△讀者俱樂部
- ● 時事評論
- ● 商況一斑

### ▲新年附錄▼

**滿洲實業地圖**（三度刷 縱一尺八寸橫二尺六寸）

### ▲臨時增刊▼

臨時增刊の發刊は第五回內國博覽會の時以來暫く休止したり、今や共國多事多忙にし、定期の刊行な以てしては悉く讀者の需要に應ずるに足らざらんとす是に來年度より機宜を見て臨時增刊を公にせんとする所にして、亦た本誌が發展の一途たるに外ならず讀者願くは刮目して之を待て

**發行日** 毎月二回 一日 十五日

**定價** 年刊二十四冊▲外に臨時增刊發行四六二倍紙數百十二頁▲外寫眞版四頁

◎壹冊正價金拾貳錢 郵送壹錢五厘

**前金** ●六冊金六拾八錢 ●十二冊金壹圓參拾五錢 ●廿四冊金貳圓六拾錢外要郵稅

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丁の四)

(丁の五)

博文館編輯局主幹 坪谷水哉君編纂

既成發賣

# 日露戰爭 凱旋みやげ

▲附錄＝滿韓戰局面全圖（縱一尺八寸 横一尺三寸）

全一冊

太陽判横綴美本
寫眞六拾枚百餘圖
正價金三拾五錢
郵稅八錢

滿韓の野に於る我軍、連戰連勝の光景を撮影したる寫眞は我軍の功績を萬古に傳ふべき最大紀念なり。而かも從來戰地の光景を全く一冊の中に收めたる寫眞帖無し。是れ最も惜む可し。故に本書は從軍の勇將猛卒が、戰勝の月桂冠を戴いて郷里に凱旋する唯一の土產と爲さんが爲、戰地全般の精巧なる寫眞と地圖とを編述し、且つ成し能ふ限り代價を廉にして以て凱旋將卒の功績を不朽に傳へんと欲す。收むる所の寫眞は大約左の如し。

◎高貴御肖像 ◎皇太子殿下 ◎從軍各宮殿下 ◎滿洲軍總司令官 ◎同總參謀長 ◎黑木、奧、乃木、野津、川村、谷川各軍司令官 ◎各師團長

◎旅順 ◎遼陽 ◎沙河 ◎黑溝臺 ◎南山 ◎金州 ◎得利寺 ◎大石橋 ◎鴨綠江

◎摩天嶺 ◎烟臺 ◎撫順 ◎鐵嶺 ◎開原 ◎法庫門 ◎昌圖 ◎營口 ◎大連

◎京城 ◎平壤 ◎仁川 ◎鎭南浦 ◎大孤山 ◎鹽大澳 等の各方面六十枚 百餘圖

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の六）

醫學得業士 橘 公行君著

# 八丈島保養案内

## 一名肺患者の福音

〔十二月上旬發行〕

全壹册三六判美本
紙數約三百頁
正價金貳拾五錢
郵稅四錢

●石版表紙 寫眞銅版及地圖等數多挿入

八丈島の風土氣候は、肺患者天與の保養地なること、近來世に嘖々として喧傳せらる、蓋し著者橘氏の唱導に起因せり、著者同島に在りしこと一年有餘、其間同島の肺病に特別の効力あることを慥め、之を我館の太陽に一たび論唱せしより、空谷の跫音の如く、天下難治を訴ふるの諸氏、擧つて同島に渡航するの端緒を開く。八丈島は横濱を距る海路百五十哩、南西より來る黑潮即ち暖流を以て四面を圍み、殆んど四季晝夜を別たず一樣の温度を保ち、加ふるに、其風光極めて好絶なれば、保養適妙の靈境仙地なること實に驚くべきものあり。本書は同島渡航者唯一の栞にして、肺患者の爲め極めて親切に福音を傳へたるもの、製本近きにあり、請ふ續々御申込あれ。

藥學得業士 金澤巖君著

# 通俗治療救急法

▲正價貳拾五錢 郵稅四錢

本書は衣食住居婚姻育兒防疫等の一般衛生法より諸病治療看病法及び藥品調製法急病頓死過傷等の救護法溫泉水浴轉地療養其他常に心得べき百般の衛生醫藥に關する事項を細大漏す所なく詳細に記載し且文章平易にして通俗を旨としたれば何人と雖も常に一本を備ふべきものなり

(丁の七)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

# 高等女學通信教授
# 大日本淑女學會

▲貳ヶ年卒業▲講義錄月刊一冊參百頁▲講義平易懇切▲講師は專門の名家▲會費低廉

目下入學の好機　詳細なる規則は申込次第進呈す

(丁の八)

## 本會講義錄之批評

▲報知新聞評　高等女學科の全學科をば知名の女子教育家が講述せるもの也、平易と懇切とを主とせるものなれば、何人も難解の虞なかる可く、各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど、講述者の苦心を見るに足る、且つ有益なる科外講話の外に『姫百合と題する五十頁の附錄あり、博士學士の婦人に關する評議史傳衛生家庭等の文學を掲載して、一面雜誌の觀を備ふ、卷末更に田口掬汀の『學者の妻』といへる面白き小說あり。凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する者斯くの如きは稀なりと云ふ可し。

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せる者、文學平易說明懇篤を盡くせり

▲朝日新聞評　女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義錄を發行せり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲貿易新聞評　從來の講義錄中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大冊子なり

◎大日本淑女學會　東京神田南甲賀町十番地（電話本局三千四百番）◎



# 女學世界

第五巻第拾六號

（十二月五日發行）

## 芽出度く暮れゆく歳

平和の女神は天降りましぬ、友の家の若人は戰地より歸りぬ、吾家の脊子も正に凱旋の途にありと聞く、人々は昨日も今日も歡迎に奔走しつゝ歡呼の聲を擧げぬ、かくて萬歲聲裡に年は芽出度く暮れんとす。

門毎に國旗あり、到る處に凱旋門あり、緑門あり、世を擧げて歡びの聲に充ち滿ちたる時、吾が宿も亦た數には洩れず、松飾、五連繩、引きはへて平和の新年を迎ふる嬉しさよ。

來れ新年、來りて吾等の前に大平の曙光と新福を示されよ。

# 時論

## 男女混合教育に就て

帝國大學教授 ヘック氏

近頃男女學生の墮落問題が新聞雜誌で盛んに論ぜられて居る、事實の如何は私は調べるを好まぬが、將來日本に於て男女學生の墮落を救ふ豫防法として、世の教育家に注意を促したきことが一つある。

それは男女混合教育のことである、男女混合教育は歐米に於ても餘り好ましき結果はないが、日本に於て若し之を行ふやうになつたならば、確に不祥不吉なる結果を見るに至るであらう。

それは日本人の性質を見て、明に知れることである、西洋では年若き男女が手を握るやうなことがあつても數年の教育が殆ど第二の天性となつて居るから左程惡い感覺を與へぬけれども、日本人就中女子の如きは今迄西洋とは丸で別な教育を受けて居るから、迚も今急に之をかへることは出來るものでない、世の論者の中には今急に之を改めることは出來ぬが將來の爲め徐々と之を改良して行つたならば如何だと申すものがある。

私は今急に之を改むることは勿論、將來の爲に之を改めることにも大反對である、議論を申すと際限がないから、實例に照して云ふより外はない、彼の亞米利加を御覧なさい、亞米利加人は洒々落々として何んにも關はぬと云ふ風である、若し男女混合教育にして實際行つて可いものならば、宜しく此の如き國に於て好結果を奏すべきである、處が亞米利加で行はれて居る男女混合教育の實際を調べて見ると實に言ふに忍びざる醜絶汚

紹の事がある、私は一々其例を擧げて申上る積でない、青年男女の爲にならぬから、此の如き例話は申上げぬ方がよいと思ふ。

處で日本が最初から亞米利加主義に倣つたのは大なる誤であつた、亞米利加は何んでも極端の國である、女子のことに就ても同じことである、而して日本の女子は云はゞ、今迄男女席を同うせすなどゝ云ふ教育を受けて、亞米利加とは全く反對な極端に奔つて居つた、極端は何れの方にしてもよくない、徳は中に位すと云ふから、何事も中道に立つやうにしなければならぬ。

それで日本の女子は今迄餘り極端の教育を受けて居つたとするならば、進んで獨逸か佛蘭西あたりの女子位になつたならば澤山である、それですらも日本婦人として、餘りでしやばり過ぎはせぬかと思はれる程である況や亞米利加婦人に倣ふをやせ、之に倣つた日には極端から極端に移るのであるから尙一層悪い結果を生ずるに相違ない。

佛蘭西では男女混合教育はまだ澤山行はれて居ない、近頃巴里大學教授でマリオンと云ふ人、混合教育に贊成の意見を抱いて居るけれども、此種の學者の意は外にあるのだ、即ち基督教の教育を根底より排斥せんとするにあるのである、所謂「アンサタレメチヤシ」の思想より議論を立てゐるのであるから、日本などでは此等の人々の意の在る所を究めずして直に其の議論を採用しないやうに注意しなければならぬ。

男女混合と云へば佛蘭西あたりでは寧ろ基督教の教會に於て何等の弊害なく行はれて居る筈である、少くも敬虔深き基督教者の間に行はれてこそ弊害はないのである、今迄田舍などには信仰深き親共は互に自分の娘を托し合つて、それを一點の疵なく伴れて歸るのを以て一種の名譽として居つたのである、此の如き敬虔深き者の融會には年若き男女が相會して話をしても、手を握りて親みても弊害はないのである、然しそれでも相互に

腰を擁して歩くと云ふやうなことは決して致さぬ、是れは實に可笑なことで、又實に惡感を起さしむる基である。

然るに近頃は日本の某地方のプロテスタン會堂では靑年男女相集り、讃美歌を歌ひ、說教を聽聞して後會堂を出るとき靑年男女が腰間を擁して出たと云ふ話を耳にした、是れは事實でなからんことを希望するが、若も果して之あつたとすれば、日本の靑年男女は最早佛蘭西あたりの靑年男女よりも極端に奔りかゝつて居ると云はねばならぬ、槪して言へば、新敎育者は日本に餘り善い風俗を齎らさぬものである、男女混合の點に於て最も然りである、靑年男女の集合は新敎の會堂から始まつて來たのである、亞米利加あたりから來る宣敎師夫婦が之を行ふのは無理のない話であるけれども、日本人が直に之に倣ふと云ふ點に就ては大に考へねばならぬ。

偖此等の實際の話によりて一考すれば、將來日本に於て男女混合敎育を行ふべきや否やは言を待たずして明な所である、今日男女學生が學校を異にして居りてすら、不品行問題、墮落問題が頻々として日每の新聞の材料となるならば、今後男女混合敎育を實施するやうな場合に至つたならば、果して如何であらうか、洵に寒心に堪えざるものであるが故に、昨今男女學生墮落問題を耳にしたれば聊か之が防禦線として事實談を申上げるのである。

# 露西亞の女學世界

世界漫遊の途上にて　佛國樂師　ベンソン氏

私は露西亞に旅行しまして意外に思つた事が一つあります、それは露西亞婦人と亞米利加婦人とが多くの點

に於て非常に善く酷肖て居ると云ふ事であります御承知の通り露西亞は世界に稀なる頑固な專制國であります而して米國はと云へば世界に類似なき自由國であります、故に國政などの方面より見れば此の二國は極端と極端であると云つて差支ないのであります、然るに不思議な事には此の兩極端國の婦人が非常に善く酷肖つて居るとは實に意想外ではありませんか、是れが本統に「極端と極端とは相接近す」と云ふことでありませう。

今茲に一二の例を引て申上げまするど此の兩國に於て所謂婦人運動なるものは中々盛んなものであります、而も此の運動は男子に對して毫も反抗敵對の意味を含んでは居りません、其譯は亞米利加に於ても露西亞に於ても男子は概して婦人に反抗すると云ふよりは寧ろ之を愛眷する否、崇拜すると云つても差支ない程であります、兎に角如何なる場合に於ても、二十世紀婦人の特徴とも云ふべき學問熱を嘲笑するやうなことは毫もありません、男女の平等主義の如きも國法で認定されて各級の婦人は歐洲にも認められ、特典を有して居ります、例へば其の資産を自由に處分する權利あるが如き即ち是れであります、米國は元よりの事專制國たる露國に於ては實に珍らしいではありませんか。

それから此の男女平等主義に就て頗る珍らしく思はれることは、男女職工の給料問題の均一なる事であります、或る製造的事業になりますと職工の給料は婦人のよりも多うございますけれども、それとてホンノ僅少な差であります、其他郵便局だの、役所だの、銀行だのに於て俸給は男女共に同一であります、尤も男子が時として婦人の働きは到底我等に企及し得ず、特に我等の助を要する煩はしさありなどとて不平を鳴すやうなこともありますけれども、然し其の代り纖手ながらも男子の成し能はざる實効を擧ぐることがありますから、此の不平は左程高まるやうな憂はありません、啻に男女事務員及び男女職工等の間に平等主義が珍しく行はれて居るばかりではなく男女學生の間にも眞正なる友愛が認められるのであります、專制國に於て此種の現象の認め

られるのは、實に珍らしく思はれるのであります、私は實に之を見て異様の感を起しました。
是から貴族及び町家の女子が如何にして敎育せらるゝかと云ふ事を申述べやうと思ひます、恐れ實に露西亞女學生の現況とでも申すべきことでありませう。

貴族の女子は各國の敎員若くは家庭敎師の手に由て敎育せらるゝのであります、露西亞の女子が各國の語を巧に操るのは蓋し之が爲であります、家庭敎育中に於て最早各國の語學を覺えて了ふと云ふのは洵に都合の好い話であります、私はペテルスブルクに於て或る家庭に宿泊して居りましたが、其家には孃さんが二人あり姉は十二歳で妹は十歳、而るに二人共佛英獨の三ヶ國の語を立派に話しました、妹の方は最早歌舞音曲に長けて舞踏などは實に上手でありました、此等の遊藝なども決して遊び半分に學ぶのではありません、最早此の年頃から眞面目になつて一生懸命に學ぶのであります。

又私は或る獨逸の家庭に這入つて見ましたが、其の家庭は實に妙でありました、子供の爲に醫者もあり、敎師もあり、獨逸の保姆もあり、佛蘭西の下女もあり、英吉利の家庭敎師もありて時々奇妙な現象が家庭内に起ることもあると云ふ話でしたが、兎に角露西亞人の一視同仁、四海を友とすると云ふ特質が著しく顯はれ、且之が爲に其家の子女子弟が各國の語を自由自在に話すのを見て一驚を喫したのであります。

此の如く家庭に居るときより多くの外國人の手に育てられ、其の敎育(家庭敎育)が卒ると今度は之を外國に遣はして、又復た外國人の手に托して最終の敎育を授けて貰ふやうにするのであります。

此等の女子は此の如き敎育を受けて終にどうなるのであるかと云ふに、多くは歐洲著名の都府に於て知名の敎師に就て學びたる後、立派な美術品だの織繡物などを携帶して自分の身を飾ると同時にサロン(客室)の裝飾などを美麗にせんことを務むるのでありますが、然し中には其の嗜好がズット高尚になり精神的の樂を好み

時に思想高遠の婦人を出すことがあります、彼のマダム、スウィッチンの如き其の尤も有名なる者であります、私は度々話に聞きましたが、令嬢博士なるものがあり、カントの哲學を學び、ヨハチ、キリゾストムの大著を譯したものがあると云ふことであります。

私は今露國女學生の標本として私の知つて居る而も私の深く愛惜したる一人の才媛を引てお話いたしませう此の才媛は年僅に十七歳になるかならぬ内早や小説家の才が立派に顯はれかゝつたのであります、才色共に秀で、而も其の年齢の質朴なる心を失はず、文筆極めて巧に、構想も亦頗る奇にして四ヶ國の語を以て自由自在に妙想妙文を綴つたのであります、惜いことには今茲に私は此の才媛の物語に綴つた文章の持合がありませんが、それは實に話より立派なものであります、其の伊太利に就ての感想を記した文の如きは、實に得難い妙文であります、殘念の事には羅馬に於て腸窒扶斯に罹つてゐたら花を散らして了ひました、其父は遺稿「ルルー」と稱するものを大切に藏して居ります、實に是れ文壇の珍であります、天が若し之に年を假しましたならば萬衆の希望を全うすることが出來たのでありませう、兎に角二八前後の女流にして世界的文學の才を發揮しかかつたのは珍らしいと云はねばなりません。

露國は大都名邑には貴族の女子の爲に特別の學校が建設せられてあります、ペテルスブルクには八校あります、莫斯科にもそれ位はあります、其他各地方に十六校ほどあります、私は其中の最も有名なるパウロウスキー校を参觀しましたが、實に宏壯美大なものであります、美服盛裝しなければ迚も其の閾を跨ぐことは出來ない感情が起ります、玄關などは金銀を鏤め四邊まばゆき程であります、校長は名門の出で、其の風貌と云ひ、其の姿勢と云ひ、僅に校長たるの資格ある婦人でありました生徒は皆寄宿生でありまして、寄宿料はそんなに高くありません、音樂まで入れて一年三百留だささうであります、私の参觀したときは丁度佛語の教授の時であ

りましたが、敎師は嫣然として巴里婦人の如くでありました、其の發音の巧なること實に聞くも愉快でありました、それから上級の方に行きましたところが、佛國出の敎師が文學を敎へて居りました、生徒が緋色の着物に白の前掛と肩掛やうのものを穿つて居るところ、餘程美觀であります、其中に少し赤味さした衣服を着て居る年長の生徒もありましたが、是れは敎師になるものださうでありまして、最早下級の生徒に敎へて居ると云ふことであります、貴族學校（華族女學校）の目的は交際場裡の婦人と家庭の賢母とを養成するに在りと云ふことでありますが、寄宿生二百四十名の中半分は將校の令嬢達で官費で敎育を受けて居るのであります、將來女敎師を理想するはまだしもの事交際場裡の女王を理想して居ると云ふに至つては、少し抱負が大き過ぎるかも知れません、資産に乏しいから餘程困難でありませう。

他の町家の子女の通學する女學校は歐洲のそれと大差はありません、其處で授くる學課の程度も左程低いことはありません、貴族の女學校と競爭する位であります、目下露國に此種の學校は二百三十二校あります、尙私立學校にして女子の敎育を男子の敎育と並行せしめんと欲するもの四十も增設せられたのであります。

女學士及び女學師なるものゝ出るのは大抵此種の學校に限るのであります、一時嚴格なる家庭を脫して外國に逃げんが爲めに假結婚を擬すると云ふやうなことが盛であつた時代がありました、良家の女子が男學生の許に行きどうか、私の身を救つてくださいと云ふとき、男學生は欣んで之を承諾し、全く之を救ふてやる積で別に淫奔と云ふ程のことでもなく、兩人相携へて獨逸若くは瑞西などに行き、異鄕に在りて多年苦學し、遂に免狀を得て歸國して邦家の爲に忠誠を盡すやうになつたのであります。

今日では父母も餘程緩和になりました、女子の天地も開けんとしつゝあります、私は或る町家の父に會見しましたが、家に在りては先づ嚴酷の方でありますが、然しそれでも自分の娘四人に各種の學科を學ばせ、醫學

だの、樂術だの、各々好きな道に就かしめ、其中には女敎員になる目的で學んで居るものもありましたが、此の娘達の父は私に申しまするに『今や時勢は一變しました、將來どうなるか分りませんが然し男子も敎育ある婦人を娶ることを嫌ふ者はありません、妻と共に談笑して樂むと云ふ風は益々盛になりました、如何なる場合にも敎育ある婦人が勢力を占め、良人も亦之を優遇すると云ふ趨勢になつたのでありますと。』（菊地群子手記）

# 女子と美育

女學子

抑も美といふものは實に造化が萬物に衣被する錦繡の如きものにして森羅萬象の美觀、宇宙の壯嚴は誠に人類をして其心目を愉ましめ、其の美情を煥發せしめ、以て人類相互の交際に平和と趣味とを加ふるに至る、されば社會の發達改良、一家の平和幸福を希ふものは常に吾人の美情を養ひ美に對する趣味を起さしむる事に勉めざるべからず、苟も人類にして愛美の心情を缺ぐ時は他の生物と異りたる處なく身を終るまで私慾の爲に蔽はれて憐むべき厭ふべき野卑の動物たるに過ぎざるなり。

斯くいへば聊か極端の嫌なきにあらざるも抑も人類が其昔殺伐たる穴居野棲の境遇を脫して金殿玉樓に住居するに至りし其原因を尋ぬれば畢竟美の感情發達して人各美を悅び醜を厭ひたる結果に外ならざるなり、彼の往昔野蠻蒙昧の時代と雖も少しく生活上に餘裕を生ずれば其の所有する刀劍、器具等に彫刻其他の裝飾を施したるが如し實に人類が美に對する思想は誠に先天的のものといふも敢て過言にあらざるなり、斯くして人類社會は造化の恩惠物たる自然の美と之を應用したる人工の美とを以て初めて完全に圓滿に發達するものなり

抑も世界の開化は人力の効績に外ならず、然るに人類は有形の肉體と無形の精神とにて成立たるものなれば、其欲する處ろに從ひ、其用に供する處ろの諸般の事物も又二途に出ざるべからず、而して肉體は要する事物は極めて單純にして之に供ふるに容易なれども無形の精神の要求する處は甚だ複雜なり、例へば肉體を蔽ふて寒暖の氣候を防ぎ、身體を保護するに要する衣服の如きも其染色の醜美織物の美不美に關せず其効用は同じかるべき譯なれば、只自然に出來たる色のものにして最も勞力を要せざる簡單のものにても宜しき筈なるに、人間は然らず決して之に滿足せず種々の模樣を染め出し縞柄を織れるは之即ち肉體を保護する效用に供ふると共に精神の慾求する美醜を備はらしむるが爲なり、是實に人間の固有に美を愛する天性に源因するものにして文化益々進み有形の事物の便愈々足るに從ひ精神上の要求快樂を求むる情も自から增加して殆ど極まる處なきが如し、されば繪畫彫刻等の如き毫も實用の便を具へず、單に無形の快樂を授くるものに一層の美觀を增さしむべきは勿論の事なり、されば凡て實用の便備はりたる上は之に一層の光彩をはなたしむべく美を應用せんとするは社會をして一層完全ならしむる所以なり。

美を凡ての事物に應用したるものを美術といふ、然るに世の人は以て美術は玩弄物の性質を帶ぶるものにして未だ衣服食物の如き必要なるものならざるが如くに考ふるもの多くあれど、是過てり、美術の人に必要なること恰も睡眠の吾人に必要あるが如し、世に愛美の思想なき人趣味のなき家族を見ば果して如何なる感情を生ずるや實に乾燥無味淡泊恰も木ありて花なく實のなきが如し、其天然に對しても音樂に對しても或は繪畫彫刻に對しても何の興味も起らずして事物に對する注意淺く從ひて其事物に對する感情冷淡なり、如何に物質的の生活は完全に發達し科學を應用して何の餘す處なく整頓するも單に之のみにては圓滿なる家庭は造られざるなり、實に之を彩る紅の一點なかるべからず、人類の美を愛する特性を有するものなるは論するまでもなく

世に愛美の心なき人と雖も決して先天的に愛美の念なきにあらず、唯其惰の何物にか妨げられて未だ發展せられざるに依るなり、故に宜しく其古有の本性を出來得る限り開發せしめて完全なる域に近づかしめんとするは實に吾人の本意なるべきなり、然らば如何にして其目的を達し得べきか、他なし美育にあり。

美育とは何ぞ普通一般の人をして美の思想を發達せしめ美に對する趣味を起さん事を養ひ以て其人品を高尙にするにあり。

彼の室内は塵芥に汚れ紙屑四方に飛散しあるも又障子窓等の破損するも之を繕ふ事を知らず、蜘蛛の網天井を領するも之を拂ふ事をなさず、下足傘類の散亂するも之が整理をなさず、其他器具の處々に散亂して塵芥に汚さるゝ等不潔亂暴なる言語に絕たるが如きは吾人の最も厭ふ所にして美育なき人の所業といはざる可らず。

凡て室内は先淸潔にして美麗に、光線の流通宜しく愉快ならざるべからず、汚れたる白壁、刀痕ある机、調度等の不規則に並べられたる、掛圖、額等の平均を失ひて、或は右に或は左に傾きたるが如きは、實に人をして不快の感を懷かしむるものにして、不正不規律は最も多く此中に行はるゝなり而して最も之に感化せられ易きは第一に感覺銳敏なる小兒にして成長して規則嚴正の人となるも又不規律なる人となるも、畢竟其幼時周圍の感化に由るものに外ならず。

彼の美しくして一點の汚れなき壁には、如何に惡戲なる子供も手を付くるに躊躇するにあらずや、けれど之に反して少しにても汚れたる處あらば直に落書するにあらずや、一事を以て萬事を推すべし。

要するに美育は萬物に注目し、例へ些細の物の模樣一幅の畫一場の風景とても決して之を輕々に見過さず、務めて醜を避け、美を顯はし知らず識らずの間に之に感染せしむる樣になすべし、常に高尙なる色を見、優美なる音樂を聞く時は、其人自然に高尙優美となるべし。

# 女子分業論

棚橋絢子

世間一般の人を觀察するに其性質又は其强弱によりて萬般の事業を分擔して世界をなせり、其大畧をいへば官員なり、農家なり、職工なり、商業なり、各其性質と身體とを考へ、其堪へ得べき業務を取れり、官吏の政務に於ける、農夫の殖産に於ける、工藝家の美術技藝に於ける、商賈の貿易に於ける、軍人の軍旅に於ける、何れも皆其職分を盡して世の開明進步を輔くる所以に非ざるなく、此の如く各々其天賦に從ひて業務を分擔するが則ち世界と申す者なり、輙ち一言すれば世界實に此分業にて成立つべきものにして之なくば其發達進步は決して見ることを得ざる者なるべし、是に就き世には職務に貴賤尊卑ありと思へる人あり、其は甚しき僻見なりと思はる、貴賤尊卑とは何れの點にありや、官員と農工商とを對照しての名なりや、甲は或部分に從事し、乙も又或部分に從事するのみ、何れも世間に對して必用なり、かく双方とも必用を感ぜしならば、何れを尊として何れを卑しと定めがたし、只其見る所によりて稱せしのみ、かゝれば貴賤尊卑といふ名は只想像に止るといふも可なり頭と足とを區分して、頭は尊し、足は卑しとは何時より定めしなるか、頭は頭の用をなし、足は足の用をなし、其用をなすに至ては各尊き所あり、然れども足を以て頭に代る事能はず、其天然に從て其用をなさしむるの外なかるべし、然るに若し頭にして足の用を羨み、足にして頭の用を羨み、若くは頭足各々同一の用務をなさんと欲するが如き事あらば、誰か是を笑はざらん、男女の其天職に於るも亦斯の如きのみ、男子には男子の本性に叶ひたる天職あり、女子には女子の本性に叶ひたる天職あり、各其分に從つて其用をなさば其功を奏する事容易にして、然も社會の發達進步に實益あるべきも、之に反し社會人事の進步が分業に伴ふ者たる事を忘れ、男女ともに同一の職務に從事し、互に其權限を爭ふ樣の事あらば、社會は徒らに紛擾混亂して、進むべきの文化も爲に其發達を妨げらるゝや亦疑を容れざるなり、試に思へ兵役に服するが如きは男子特有の業務にして、是を女子に求め難く、懷姙分娩は女子の天職にして男子の是に代る事能はざる者に非ずや、男子にして女子を羨み、女子にして男子を羨み、互に其本分を侵すに至らば、其極或は女子にして兵役を希ひ、男子にして懷姙を思ふが如き笑ふべき愚想を懷かざるを必せず、思ふべきなり、

然るに世間の女子往々にして其本分を忘れ、徒らに男子の位置と業務とを羨み、是に習ふを以て名譽の事と思惟するものあるは抑何等の意想に根帶せる乎、是一つには其業務に尊卑の區分ありとする迷想に基き、又一つには男女の同權たる所以を誤解せるに由るならん、職業に尊卑なきは前にも已に述べたる如し、男子の天職が尊貴にして女子の天職が卑賤なりとは、所謂人間の迷想に過ぎず、男子の職とする所は外に顯れて華美やかなるより、尊貴なる如きも只其天賦に基きたる職分として之を見る時は未だ必ずしも尊からず、女子の職とする所は内に隱れて顯はれざるより卑賤なるが如きも其天賦に基きたる職分として之を見る時は未だ必ずしも卑賤ならざるなり、彼の剛柔の性の如きも亦然り、男子は剛、女子は柔、各其稟る所は異りと雖も、剛と柔との間に何の尊卑か之あらん、只相和し相助くるの上に於て如此差別を必用とするに止まるのみ又夫婦の如し、余は斷じて女子には女子の本分あり、女子が之を全くするは則ち天が此世に女子を生じたる原則に叶ひ、社會の發達進步上必用缺くべからざる所にして、所謂女權女權の擴張せらるべき根本なるのみならず、日本の婦人は自營心に乏しく、依頼心に富りといふ世間の攻擊を妨阻する樞機なりと信ず、畢竟今日の女子に自重心なく依頼心多きは男子の如き學問なき故にもあらず、力量なき故にもあらず、家庭の整理其他女子に附屬する百般の職務を棄り、其本分を盡すべき思想に乏しきの致す所にして、其之に乏しき所以は柔以て物を和するの本旨を誤り、徒らに男子の玩弄物と成るに非ざれば、則ち頑愚にして男子の職分を侵し、却て十分に其本務を盡し得ざるが爲に、勢ひ其本務上に迄男子の容喙を免かれざる有樣となり、習慣性と成て到底男子には及びがたし、何事にも一切其指揮を仰がざる可らずとの觀念を生じたるに由るならん、闡

柔の差別あるより論ずれば、妻の夫と權を爭ひ、一家の不和を來すが如きは不可なる事勿論なれど、夫は夫妻は妻と各其分を盡し、敢て其天職を空しくする事なくば、何ぞ互に強て所謂干渉を施し依頼心を發するの必用あらむや而して自重の心も亦從て發達すべきは疑を容れざる所なり

女子の司る所は古へより今に至る迄一家を治るを本分とし、又其根本とす、女子各自に其根本に心を注ぎ、全力を盡したらんには家庭治りぬべし、家庭にして能く治まらば其の一國天大下に及ぼすべきや復何の疑あらむ、而して其一家を治むる先づ何よりすべきか、余は第一に一家の經濟なりと信ず、一家の經濟は婦人の擔任すべき第一の點にて、如何程男子が外の勤に從事するも、婦人にして經濟に疎く、家庭を整理すること能はざれば其働きは決して其詮なかるべし、一國の奢りは婦人よりすと先哲もいはれしことあり、婦人にして其家の分を忘れ、入るを計りて出るを制すの本旨に背き、贅澤を積み、不時の備を爲さゞることあらば、其家の廢滅は立ろに至らんこと必せり、婦人が此點を料理して敢て乏しきを告げしめざるの功は、豈之を男子外部の働きに比して差等ありとせんや、而して其功や又男子の教育費を投じて子女を教發するに比し、優ることあるも決して劣ることなからん、次に裁縫なり、割烹なり、女子の職分内の事は人手を借らず、差支なき樣兼て用意すべく、中にも子女の教育は婦人の擔任にして、最も注意すべき點にて、此一點を誤らば小にしては一家を破り、大にしては一國の不振を起すことなるが故に、婦人たる者は必らず一意專心に之を全くせむことを力めざるべからず。

婦人の任務の重きと、其實權の大なるとは此一二の實證を以て見るべし、斯る重任大權の身にして妄りに其職分を輕んじ、強て男子の權内に立入り、以て男女同權の位置に立んと欲するは、所謂木に縁て魚を求むると一般にして、却りて眞正女子の位置を低くする事となり、所謂虻蜂取らずの愚を免かれざるべし、性質上よりするも經驗上よりするも、女子が内を治むるに適當なることは古より定論あり、偶には男子に匹敵するものもあれど、其は變則にして正則にあらざることとは各國の狀勢に對照しても明かなることにて、歐洲各國は皆正則にして獨り亞米利加のみ變則なるの觀あるなり、我日本女子が其變則を見て一般の正則を誤り、却りて之に習はむとするは實に愚の至りならずや、畢竟獨立だの同權だのと申すことは、其本分の盡せてから後に言ふべきことにて、婦人の如く一家を治むるを任務とせる者は、先己れが身を修め、品行上は勿論、身體上の事に至る迄、人に擬せらるゝが如きことなくして、然る後に始めて獨立他人の容喙を受けざることを得べく、又其權利の男子に劣る所なきを得べし、己れの任務を忘れて男子に容喙の餘地を與へ以て獨立同權などを求むるは豈に之を自から輕ぜるの極と謂はざるべけんや。

或人己れに語つて曰く、女子は家を治むるを以て任務とするは維新前の教にして、方今開明の世に斯る事は却りて一家の不經濟を招き、折角の學問を徒一家に施すに止め、區々として一生を終らしめんとするの觀あり、實に憫む可きの至りと謂ふべし、近來は教師の需用多く、且而給料もよければ、之を奉職せしめ、其俸給の幾分を以て下婢を雇ひ入るゝこととせば、經濟上にも快樂上にも宜しかるべしと、己れは實に此說には正反對の意見を有する者なり、元來女子が内を治むるに適當なる事は、古へより性質上、實驗上、其天然の特前なりと認められ、之をして家内のことに從事せしむることは其自然に任せたることなりとせらる、彼の天地間に於ける森羅萬象を見よ、各其原理あらざるなく、舟は山を行かず、車は海を渡らず、以て各々其功用を盡せり、斯の如く物各々其の原理に從へば、順にして功をなし、逆に用ふれば必らず勞して功なきのみならず、却て害をなすなり、故に女子は其特前の家事家庭に全力を盡し、男子をして一も之に干渉すること能はざらしむるに至らば、男子の天下を治ると大小の別はあれど、毫も差あることなく、各々其天然の功果を收め得べきも、之に反し女子が男子の領分に立入り、其職掌に就きて奔走することありとせんか、其功は到底男子と肩を並ぶる事難きのみならず、事に由りては山に舟を行り、車を海に奔らす如きことなきを保せず、之を以て觀るときは女子が其自然の原理に從ひ、己が職分内に缺點なき樣、進んで止まざるは、是れ其の男子に讓る事なき所以の根本にして、又其の獨立自重の大本なる可し。

# 人事曆

## 十二月

休日（日曜日…三日、十日、十七日、廿四日、卅一日。）

▲一日（舊十一月五日、きのえいぬ）。▲十二日——光格天皇祭。滿月。▲十三日——此日より歲末まで東京市内の所々に歲の市立ち、注連飾り其の他の新年用品を商ふ。又た煤掃ひを行ふ。▲廿日——此の頃より歲暮の囘禮あり、進物として砂糖、鰹節、鮭、鳥類等を知己朋友の間に贈る。▲廿五日——耶蘇降誕日。基督教信者の家庭にては此日クリスマス祭を擧行し、知己朋友の間に物品を交贈す。此日より諸學校休暇となる。▲廿六日——此日より家々にて餅搗を始む。▲三十日——今日より三十一日にかけ各戶門松を立て、注連飾をしつらひ迎年の準備に怠りなし。又た商家は取引勘定にて多忙を極む。▲三十一日——大祓「あら玉の年の終になるごとに雪も我身もふりまさりつゝ」（元方）

**季節**——八日「大雪」廿二日「冬至」。氣溫著しく低下して雨雪頻繁、滿目蕭條の趣を呈し來る。北又は西ノ風の襲來する所寒冷身に迫り、人は綿入を重ねて凌ぐ。

**農事**——播種も收穫も漸く終りて農家閑暇の時季には入れど、未だ全く完結を告げず、冬作の手入を初め、田畑の畔切、溝浚、小松菜の收穫、漬菜の移植、油菜等の施肥等何や角や用事多し。

**遊覽**——年末多忙の折とて、遊ぶべき所なく、見るべき花もなし、但し雪降らば雪見に興ふ所迄心あるべくも可なり、枯野に冬のさびしさを味むるも可なり、又た此月は銃獵の好時節なれば、山野に河沼に狩り暮すに於ては快甚しからん。

**食品**——當月の美味は、魚類にては、こひ、ふな、ぶり、はぜ、白魚、鮟鱇、たら、かき、からすみ、野菜にては、根いも、蓮、ねぎ、もやし若菜、干海苔、其他鳥獸肉は最も口に適す。

# く　さ　ぐ　さ

▲鳩山夫人曰く、今度日本の風土人情を愛重して、來朝された前米國公使バック氏未亡人は、都合に依つて永久日本に滯在されるといふことですが、吾々は十二分の誠意を以て款待し、歐米の上品な社交や禮儀を、日本婦人に教へて貰ひたい物です、是迄會話でも舞蹈でも歐米人から親しく教はつた人は少く無いけれども、バック氏未亡人の如き上流の貴婦人から直接に指導された者は一人も無かつたのですからと。

▲櫻井ちか子女史曰く、今の女學生には「自重心」がないからいけないのです、堕落問題の如きも二三の新聞紙が實例を擧げて居ますが、罪は男子の方にあるに關はらず、獨り女子のみを咎めるは餘りに酷ではありませんか、それも今少し女學生に自重心があつたら、それ程でも無かつたらうと思はれます。今日女學の勃興とか云つて女學生が甚だしく増加した樣に、申しますが、私はそんなに増加したとは認めません、此頃盛んに上京するのは重に技藝の傳習生で、聞けば本郷の某裁縫學校が九百人、九段のが七百人、某校のが五六百人あると申しますから、隨分偉大な事でせうが、それを女學の隆盛と思ふのは間違です。

▲感化院の高瀬眞卿氏曰く、不良兒童の原因は多く家庭の不完全による事は統計の上にあらはれて居るから、歐米の長所を取つて、家庭組織を改良せねばならぬ。不良原因の百分の廿五を占て居るのは愛情の過度で、十二を占て居るのは冷淡なる教育で、是等は根本から兒童教育を誤つて居る事を證明して居る。次に遺傳の不良や生母の不良や妾腹等も少く無いが、之等は家庭の不良より惡感化を來たした事を明かに、示して居る。更に百分中十五を占てゐるのは惡朋友の感化である、そして其惡感化が家庭や學校の教育に打ち勝つた事を證據立てるのである、故に今日最も注意を要する最大急務は、最後の計畫もよいが家庭の教育も大にやるべし。

▲新歸朝者某氏曰く、僅か三年程の間に、非常に女子教育が發達して、女學生の數は夥しく増加した、之を米國婦人界の現象に比べて見れば別に不思議でも何でもなく、結構の事ではあるが、どうも見るのに、女子教育が盛大になつたと云ふよりは、寧ろ女學生の數が殖えたと云ふ方が適當である、之も結構には相違無いが、之に伴つて種々良からぬ事が出來るのは、西洋でもあり勝な事で、當局者は餘程注意せねばなるまい、伯林には露西亞の女學生が澤山に居る、それは露西亞よりも反つて學費生活費が安く上るのと、又一つは露西亞では女子の學問するのを喜ばない風がある所から、盛んに獨逸へ出懸て行く、而して其内の多數は學資に乏しいのに、無理に修業しやうとするから從ひ良からぬ行狀をするやうになる、仍て獨逸の或る大學では露西亞の女學生に限り入學を許さぬのがある。故に日本でも女學生の數ばかり激增した結果、其中にお友達の誰々も東京へ遊學なさるから、妾も是非にと、苦しい中から無理して來たの等も少くないが、勢の赴く所露西亞の女學生の樣なのが、出來ねば善い。

▲棚橋絢子女史曰く、私は學校で挿花の時間に左樣言つて聞せます、花が花屋から來ると、我れ先にと驅け寄つて上下引繰返し、彼が善い此が善いと見比べて撰取りするのは甚だ宜しく無い、第一見苦しい、始めの人が善いのを取れば後に殘るは惡いのと定つてゐる、選んで取つて行く人が花の代を人並以上に拂つてる譯でも無ければ、勿論殘つた花を取る人も不足に出す譯では無い。品物に不公平の有るは、コリヤ自然の運と思ふて上から順々に取つて行くが善い、若し花屋から自分一人で取つて來る物なら選まねばなるまいけれども、一旦生徒の數だけ纏めて學校で買つた以上は、今後そんな事はせぬと約束して貰ひませう、兎角日本人は國家的精神に缺けつて居つて困る。

▲手島精一氏の男女交際論に、日本では未だちと早い、女子の教育がもつと盛んに成つて、常識に富んだ上でなければ、男女平等の交際は出來ない、現今男女共通の話柄が殆んと無いのも、女子の智育が甚だしく男子に劣つて居るからである。

## THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS.

Conducted by Isoh Yamagata.

### THE "KIMONO" CRAZE IN LONDON.

According to a London paper there has been a "Kimono" craze in that city this season. "The Japanese 'Kimono'" it says, "is now the acknowledged theatre and dance 'wrap' for young girls, and, specially cut to suit the occident, it is extremely becoming to all but matrons who have begun to lose their slimness." It is scarcely necessary to add that this is but one of the many instances of Japanese things being admired in the West as a result of Japan's brilliant success in the late war.

* * * * *

### A REMARKABLE OLD LADY.

A remarkable old lady is the English peeress, Baroness Burdett-Coutts, who, at the age of 67, married William Ashmead Bartlett, 30 years her junior. She lately celebrated her 91 st birthday. She is still quite strong physically, and

## 女學世界英文欄

山縣五十雄

### 倫敦に於ける日本服の流行

倫敦の一新聞が報ずる所によれば同市に於て此夏は日本の"きもの"が大流行であつたといふことです。其新聞に曰く日本の"きもの"は今は劇場及び舞踏會に行く時に若き娘が着用して可なりと認められ。殊に西洋に向くやうに仕立てられて。若い時の細ッそりした樣子を無くし始めた年增婦人の他誰にも極めてよく似合ふのであると。いふ迄もなくこれは今回の戰爭に於て日本が美事なる勝利を得たる結果として。日本の事物が西洋にて賞美せらるゝ多くの例の一つであります。

〔註〕 According to に據れば—'Kimono' craze 日本服の大流行—season 倫敦にて交際社會の集まる季節（五月より始まる）—acknowledged 公認されたる（着用して差支なしと認められたる）—'wrap' 着物—cut 仕立てる—occident 西洋—becoming 似合ふ—all but matrons 年長婦人の他總て—slimness 身體の細つそりした樣子—scarcely necessary to add 附言するの要なし—is but one of the many instances 多くの例中の一なるのみ.

* * * * *

### 驚くべき老婦人

驚くべき老婦人は英國の貴婦人バーデットクーツ男爵夫人で。夫人は六十七歲の時にウイリアムアシユミードバートレットといふ自分より三十歲年若き人と結婚しました。近頃夫人は九十一歲目の誕生日を祝ひましたが。身體も精神も以前と同じく壯健であつて。

her mental powers are as active as ever. The Baroness still directs the affairs of her large estate as capably as she did half a century ago, and it is said that she even contemplates a trip to the United States.

* * * * *

## CONSTANT LOVERS.

A very romantic story with a happy ending is told in a foreign paper. I reproduce it here, as I am sure that it will interest my readers :—

After a courtship of more than forty-five years, the marriage was celebrated on August 21 at Constance, Switzerland, of a Swiss named Herzfeld, aged sixty-six years, and Mlle. Steindelt, who is sixty-five years old. The couple became engaged before they were twenty years of age, and soon after young Herzfeld left for America in search of fortune, telling his fiancée that he would not return without £20,000, and asking her to wait for him. During the forty-five years the lovers exchanged nearly 3,000 letters and four dozen photographs, and they recognised each other without difficulty on meeting again. The newly-married pair subsequently left for Chicago, where Mr. Herzfeld has a large business.

五十年以前にしたやうに其大財産に關する事務を自ら指圖し。米國旅行さへ思ひ立つたことでありま す。

〔註〕 Peeress 貴族の婦人—30 years her junior 自己より三十歲若き—physically 肉体上 -mental powers 精神上の力.

* * * * *

## 變らぬ戀人

目出たき終局を告げたる小說的の話が外國新聞に出て居ました。必ず讀者諸子に興味を與ふるならんと思ひますからこゝに轉載しま す:—

約束が出來てから四十五年以上も經た後八月二十一日瑞西蘭のコンスタンスといふ所で六十六歲のヘルツフエルドといふ瑞西蘭の人と六十五歲のスタインデルト孃との結婚式が擧げられた二人は二十歲の時に夫婦約束をしたのであるが。其後間もなく若きヘルツフエルドは其許嫁の戀人に二萬磅（二十萬圓）を持たずには歸らぬからそれ迄待て居てくれと言つて財產を作る爲め米國へ向け出發した。四十五年の間二人は三千通の手紙と四ダース(四十八枚)の寫眞とを交換し。再會の時には雜作なしに互に相認識した。新婚の二人は其後シカゴに向ひて出發したが。同市に於てヘルツフエルド氏は盛に商業を營んで居らるゝのである。

〔註〕 courtship 男子が其戀ふ所の女子に結婚を申込む迄の間をいふ—Swiss 瑞西蘭人—Mlle. 孃 (佛語 Mademoiselle の畧語)—couple 二人—became engaged 夫婦約束をした—in search of fortune 財產を作らんとて—fiancée 許嫁の女.

# 者要心

當今の女子の女學校を卒業せし者は學事は可成に出來上るも卒業の上女教師を拜命する者幾人かある、男子に比して十が一なるべし、其他はやはり嫁して一家の妻となるの外なし、然るに寄宿舍に在し女兒は、とかく婦人必用の裁縫煮炊の事に拙く、廚事儉約ならずして昔氣質の姑の心に入らず、それは其筈ぞかし學校にて學びし家政學は洋風を專らとせる生活の程度高き流儀なるに、我國現今中以下の家には遙に程度低ければ、殆ど其應用爲さざれば用ゐ難し、若年の女子茲に慮り至らず、學びたる處を其儘に行なはむとする故に、忽ち衝突して風波おこり、度重なれば終に破鏡の悲劇を演出し、覆水盆にかへらずの歎となる、嫁の方にも理は有べしと雖、離別の理由は家風に適はぬとの申立なる時は、姑の方を尤ときく者多く、嫁に同情を寄るは里方より外なかるべし、畢竟するに男女とも壯年に身の方向を誤る者、當其當人の惡きのみならず、父母たる者の慮り足らずして、猥りに世の風潮に狂奔する子弟の性質の如何を察せず、早計に學校に入れて只其學資を送るのみ、監督は學校にて宜様にして呉ると思ふべけれど、一向に何百人と多き生徒を舍監、教師、幾人在りとて、如何で父兄の思ふが如く行届く物ならむや、況や惡道に走る者は是等の眼を偸み、相謀りて事をなし、譴責を受ても用ゐざるのみならず、共同して反抗する事あり、終に退學を命ずるの止を得ざるに及ぶ者は、當人の惡きは勿論ながら、父母兄叔父たる者も又放任に過たる脫落といはざるべからず、然りとて今の世に學校へもやらずしては女兒たりとも通用せず、舅姑夫に仕へ衣服飲食の勞を司るのみならば、古風の女大學流が今の學校流に勝る事遙なりと雖、世上交際及び子女を家庭に教育する事は文學亦知なくては出來難し、況や男子無學不文にして世に立たる、時勢ならむや、自分の何たるに拘はらず男女共に學校へは登らさるべからず、而して在學中は其地の親戚又知己の確なるを撰びて監督を依賴し置に止まらず、父兄も折々出京して其子の擧動を察して品行を探り、少しにても疑はしき點あらば決して捨おかず、訓戒し置又監督者にも呉々依賴すべき也




# 社交談

齋藤海軍次官夫人

婦人記者

夫人春子は故海軍中將子爵仁禮景範氏の長女にして、故子爵仁禮景一氏の令妹なり、明治六年三月を以て生れ、同二十二年を以て今の海軍次官海軍中將齋藤實氏に嫁す、人と爲り靜淑優雅、擧止應對に嫻ひ、社交界の百合花と稱せらる。

千古未曾有の觀艦式、歡呼雀躍せる國民、目出たき限りを盡す昨日今日、赫々の名譽を揚げずして、乾々の勤勞に服されたる、齋藤海軍次官の赤坂靈南坂の御邸に、優雅なる夫人を訪問致したのは、秋光淑氣に輝ける十月二十七日の午前で、茶褐色の西洋門を入り、御玄關に進むと愛らしい狆が客を迎ふる狀に見えました。御取次の女中に導かれて洋風應接室へ通りましたが、此室は矢羽根形を散らした花莚を敷き詰められ、花瓶に活けられたる黃菊數莖は懷かしい香を送り、旅順積雪の寫眞、各國軍艦の寫眞などの掛額や、萬歲を唱ふる石膏製童子の置物などは、最も珍しく感じました。見晴し好き御庭の一部は今を盛りの菊畑、胡蝶ひら〳〵憧れ寄る風情で、夫人は紬の袷に黑五つ紋の絹縮の羽織を召し、月萩の形ある濃藍色縮緬の帶を占め、雲鬢ふわりとして束髮の格好よく、極上品な御風姿、記者を心醉せしめられつゝ左の通り話されました。

## △觀艦式拜觀

觀艦式には、前日横濱のホテルへ一泊致して、イル

ミチーションを拜見致し、當日は日光丸へ乘りまして拜觀致しました。ハイ　陛下御上覽の後、ズツト式場を一周致し、悉皆拜見致しましたが、何とも申し上げやうの無い程、御立派で御座いました。畏れ多くも常宮、周宮兩殿下を始め奉り、各宮樣妃殿下が日光丸へ御坐乘遊ばされましたから、私は御側近くで御式を拜觀致し、尙更忝けなく存じました。御式後、兩内親王殿下には、士官方を御艦に召されて、御叮嚀に御言葉を下し賜ひ、尙ほ旅順海戰の際露國に俘虜と爲り此度歸航致した一軍人を召され、種々御下問になりましたが、此人は腕に負傷して居りましたので、兩殿下にはこれに就いて難有き御慰め言葉を賜はりました。兩殿下の御慈愛は今に始め奉らぬ御事で御座いますが、數ならぬ私共まで感激致すので御座います。ハイ御召は紫地に御繡ある御袴で、御髮は御下げのやうに拜しました。本當に兩殿下とも御立派な御體格でゐらつしやいます事。

▲軍港に於ける下士共勵會

丁度大統領令孃が御來京の頃、私は主人と一緒に、佐世保、舞鶴、吳などを廻つて居りました。各軍港の下士共勵會も皆樣の御盡力で大層盛になり、結構な事で御座います。ハイ共勵會は各司令官の將校方の奥樣の御盡力で成り立つて居りますので、水兵の家内に仕事を致させ、賃錢を得させる趣向で御座います。其仕事は軍艦の旗を縫ふたり、服の袖に徽章を縫ひ付けたりなど、種々な事で御座いますが、徽章を縫ひ付けるのは、針數も何本と定つて居つて、却々難かしいさうで御座います。信號旗なぞ左程大きい物では無いと存じて居りましたが、縫つて居る所を見ますと、廣い部屋一ぱいで御座います。此會の創立頃には、水兵の家内達が隨分自墮落な服裝を致して參り、中には襦袢も着ず、素綿入にひつかけ帶をだらりと長く下げて出て來る者もあり、御辭儀の仕樣も存せぬ者がありましたさうで、之を導くには隨分御骨が折れたさうですが、追々感化されて談話なぞも上品になり締りの好い風俗になつたとの御話しで、私が參觀致しました時なぞ、

皆整然とした服装で、髪も取り亂しては居りませず、却々感心な人柄な婦人ばかりで御座いました。子供のある者は子供を連れて參つて仕事を致し、多く働く者は一個月十八圓ぐらゐ收入があるとの事で皆大層喜んで居ります。中には休日にも働きたいと申して出て參る者もあるさうです。水夫の家内達は、良人の乘つた艦が着いた軍港へ出掛けて參つて、其處の共勵會で仕事を致しますから、誠に都合が宜しいのです。一體水夫の家内なぞは、諸方からの寄り集りで、良人は不在勝では御座いますし、隨分不取締りな婦人もあつたので御座いませうが、共勵會



が立ちましてから、勉强と貯蓄の美風が養成され、自身達も幸福なばかりで無く、良人の水兵達も、皆さんで家族を援護して下さるから、留守宅に一向心掛りなく服務し得らるゝと申して、何のくらゐ喜んで居るか知れないさうで御座います。

▲夫人の學生時代

私は東洋英和女學校へ參りましたか、卒業致さぬうちに、横須賀へ轉居致し、それぎり止めて了ひましたから、一向何も心得ないので御座います、唯今學校へ御通ひ遊ばす方々は、何から何まで御學びになり、而して御如才なくて居らつしやいます

けれども、私なぞは誠に御耻かしくつて御仲間入が出來ないので御座います。イヱ何も善く忘れて了ひまして、外國人と御交際の折、御話が充分出來ませんで仕方が御座いません。皆さんは『貴女は御子さんは無し一日御閑暇でせうから、さぞ御書見が出來ませう』と仰しやいますけれども、近頃は何ですか一日暇が御座いませんで、如何か致すと新聞も見ない時が御座います、先達ても或外國婦人から『今日は公園に會があるさうですな』と申されましたが、私は生憎新聞を見て居りませんでしたから、へヱー左樣ですかと返事致し、『貴女は御自分の國の事を御存じないのですか』と笑はれて赤面致しました。朝は主人が出勤致す世話を濟してから、身仕度に掛つて居ります内、御同行の方が御誘ひに御寄り下すつたりなぞ致すと、新聞も見ずに出掛けて了ふことが多いので御座います。新聞では大閉口致しましたから、外國人に會ふ日には必ず新聞を見て行きませうと申して大笑ひ致しました。

▲東伏見宮妃殿下の御謙徳

東伏見宮妃殿下の御通學時代は、御同級申し上げて居りましたが、妃殿下は非常に御謙遜であらせられ、私共なぞへも叮嚀な御言葉づかひで居らせられまして、決して御言ひ捨なぞ遊ばしません。御機嫌伺ひに上りました折なぞ、『此頃仁禮さんの御母樣(夫人母堂)は如何遊ばして居らつしやいますか』など仰せられますので、私は誠に勿體なく恐れ入りますので御座います、(夫人は斯く話され感激の涙を浮べらる)。

▲洋裝

宮樣方へ御機嫌伺ひに上ります時は、日本服で出ますが、外國人との交際には洋裝を着て參ります。日本服は晝も夜も一つ服で構ひませんが、洋服は何樣致しても、晝服と夜服と更へなければなりません。ハイ別に、どちらが着易いと申すことも御座いませんが、私は瘦せて居る故か、洋服でも別段胸が苦しいとも存じません。何分洋服の裝飾は不案内ですから、伊東少將の夫人(元佛國人)に見て頂きます。同夫人は善く『この色の服に此色の飾りは引き立ちません、何樣も未だ日

本の裁縫師には色の配合が能く判らぬやうです」など と氣を付けて下さいます。彼地の人が見ると、定めて可笑しいことでありませうと存じます。

▲伊東少將夫人の淑德

ハイ少將夫人マリーフラパさんは、十七歲の時日本で結婚なすつたので、外國人にしては珍らしい早婚で御座います。最早日本に十七八年も御住ひですが、他の外國人のやうに日本語に慣れない爲めにぞんざいな言葉を御使ひなさらず、極上品で、東北の人より却て解りが宜い位で御座ます。御子さんも四人まうけられ敎育も一人で擔當して、良人への御勤め、家政の整理など善く行屆いて居られます。特に感服致すのは、少將の母堂を非常に大切になすつた事で、御風呂なぞ、必ず夫人が御自身で世話されました。華美な佛蘭西に人と成られたのに、能く彼の御勤めが御出來なさると出入の者が皆左樣申して居ります。



# 日野西侍従夫人の精神修養談

婦人記者

侍従日野西資博氏夫人廣子は有名なる鳥尾得庵居士の長女で、今茲芳紀方に三十三、旣に五人の子女を擧げて居られますが、嚴正な父君の御薫陶を受けられて、自ら端嚴貞淑、凡桃俗李の群を離れて居られ、『私は餘り頑固で世間の事には暗う御坐いますし、御交際が極下手なのです」と常に仰しやるのですが、知己の方が長坐して話し込まれるのは、夫人が善く胸襟を開かれるからで、交際の奥義に達して居らるゝのでせう。夫人は文學趣味に饒まれ、子女薫育に注意周到なる傍ら、優にやさしき三十一文字を連ねらるゝと少なからずと承りました。記者が牛込區新小川町に夫人を訪問致したのは、秋雨しめやかな朝でしたが、御女中に案内されて清雅な二階に通り、チョット障子を開けて、公孫樹の黄葉が瓢形の池に散りつゝある狀を見て居るうち、米澤飛白に栗梅色紋羽二重の被布を召された丸髷姿の上品な夫人は上り來られ、御遠方を折角御出で下さいましても、御承知の通り世間見ずで……と繰り返し謙遜されて――

▲御宅の婦人會

子供多で餘り皆様の處へ伺ひ得ませんので、毎月第二と第四の土曜に、宅へ皆様に御寄りを願ひ、平尾光子先生に御出席を乞ひまして、御話しを伺つて居ります。これは四年前から始めましたので、知己の奥様や御嬢さん方、謠の先生や花の先生、種々の御方に來て戴き、親睦を主と致して、先づ茶話會のやうな事を致して居ります。平尾先生には、私の父が私の心得の爲めに認めましたる「兒戀草」と申す隨筆體の小册子を基礎として御講義を願ふて居ります。これには隨分私なその耳の痛いことが書いて御坐います。

兒戀草の一節に曰く、

婦人日々の行は、家事の外なし。故に其婢僕を召使ふは、家事の手傳人と心得べし、必ず〳〵己が氣儘

に使役すべからず、其事を命ずるにも、言葉づかひを温和にして、禮義あるべし、苟も男子の語勢をなすべからず、其事をかくせよ、其物をかくなせなどと言はず、かくしてくれよ、かくありたし、かくてはあしからんなど言ふべし、彼等の身の上を思ひやりて、萬事いたはり、往く先のためをもはかりて世話すべし、これ皆人の主たるものゝ當然のつとめなれば、相構へて恩にかくべからず、たとひ不調法なる事ありとも、さすがは吾に從ひ使はるゝほどのものなれば、前世の果報つたなく、魯鈍に生れつきしものよと勘辨すべし、ゆめゆめ不足の心を生ずべからず、但目上を侮り、主人を蔑にし、



己が働きぶりを誇り、さし出がましきは、敎へなきものゝ常なれど、かゝるものゝそのなすがまゝに任せ置かば、遂には禮儀を亂り、萬の事を荒める方にのみとりまはし、家風を失ひ、一家のうち賤民のありさまになりぬべし、かやうの者はよくよく言ひさとして改めざる時は速に暇を遣はすべし、殊に幼稚の子供あるうちは、此事最も大事なり、古き諺に、人多ければ罪多し、又人を使へば心をつかふべしと、いかにも諺の通りなれば、人多く使ふよりは、成るべく自ら立ちはたらき、家事を齊へるが、こゝろやすかるべし、

▲信仰

御承知の通り、父は坊さんと評さるゝ程、疑り固つ

て居りました上に、母も信心者で、私は幼少から始終父の話を聞きましたり、母と說敎を聽聞に參つたり、そんな事ばかり致して育ちましたから、唯今以て信仰が精神の基礎になつて居り、何に寄らず是れに依つて考へて見るのが、一とつの樂のやうになりました。其癖よい考も出ないので御坐いますよ。唯歡樂極まつて悲哀の來ることを忘れませず、歡樂に溺れませんければ、悲哀に出遭ふたとき格別驚きませんし、又悲哀極まつて必ず慰藉が來るとし思へば、心胸が迫まらずに居られますので、喜ばしい時唯もう有頂天に喜んで居ると、悲哀に出遇ふ時至然失望に陷つて了いませうと存じます。一生の中の喜憂は始終循環すると云ふやうなことを常に考へて居るので、よく理屈ばかり言ふと叱られますが、思ふた丈けを何方の前でも申して了ふ性質ですから、ツイ生意氣な事を申し過ぎるので御坐います。初めて御目に懸つた貴女に斯樣な妙な御話を致して嘸御笑ひ遊ばしませうが、折角御出下つたのに何も御話致さぬのも失禮と存じて、うか〳〵思ふ通りを申し上げたので、却々口で申す半分も實際に行へる次第では御坐いません。其れで最早近頃は南無阿彌陀佛を頻りに唱へて居ります。私は皆樣のやうに交際社會へも出ませず、雜誌類も餘り讀みませんから、世間の事情は眞闇で、唯自分獨斷で心の目的を定めて居り、誠に御耻かしいやうな次第で御坐います。併し佛敎でも耶蘇敎でも總て宗敎に熱心な御方は、どこか確乎とした處があると存じます。宗敎と道德とは離れないもので、信仰のない道德は、なんですか腹ごたへが無いやうに思はれます。尤も日々に進んで行く社會ですから、婦人もくすんで斗りも居られません、智識才藝を以て活潑に働かなければならぬのは、自然の必要で御座いますが、唯頭へばかり血が上つて腹にこたへが無いと、足元がふら〳〵して倒れさうな事になりますまいかと存じます。一の宗敎に依つて信仰を固めましたなら、心の底から勇氣が出て、堅固な働きも出來ませうし、不慮の不仕合せに遇ひましても、騷がずに工夫をつける事が出來ませう。私は何よりこんな御話が好

きで、或る奥さんが「貴女のやうに誰にでもがみ〳〵云ふと皆さんに嫌はれます」と忠告して下すつた程で御座います。併し何も彼も打明けて何方にでも御隔ては致さず、御交際申上る所爲か『御宅へ來ると他人の家とは思へず、誠に居心地がよい」と皆さんが仰しやつて、何時までも御話なすつて下さいますから、有難い事だと存じて居ります



▲赤松連城氏の法話を聽く

築地本願寺に令女會と申すのが設けられてありますが、本年は十七年期に當りますので、久し振りで參詣致し、赤松連城師の法話を聽きました。師は婦人に冷熱があつては可けない、何時も同じやうな精神を持つて貰ひたいと云ふ意味で說かれ、今回日露戰爭に就いて、婦人方が實に燃る如き熱心で、國家のために働かれたのは感服ですが、凱旋となつて先づ宜かつたと、がつたり氣が弛んで、一時に其熱心がさめて了ふやうでは、何にもならぬ、熱の高いだけに冷えるのも甚しいやうではならないが、兎角婦人には是れがあり勝なので、そこを確乎と定めるのは佛敎の信仰に在ると云ふ法話で御坐いました。總て宗敎の方へ引き付けるのは法話の習ひで御坐いませうが、全

く信仰の力は、何時も〳〵變らぬ堅固な志操を養ふに大切な者だと存じ面白く聽聞いたしたので御坐います

▲順境と注意

艱難の中に人と成り、浮世の鹽を嘗めた人は、僅かの幸福をも感謝致しませうし、又不幸に出遭ふても、經驗があるから左程驚きも致しますまいが、私なぞは幼少から格別難儀も致しませず、是れまで參りましたから、動もすれば衣服なぞの望を起して、それで出來ぬと心に不平を抱くやうな事が無いとも申されません左樣云ふ場合に前申上げた通り禍福の巡ることを考へますと、自分に安んじ感謝する念が起るので御坐います。何でも仕合な地位に在る時が、一番注意せねばならぬものだと考へて居ります。

▲子女の精神的敎育

宅の子供は十歲を頭に、八歲と四歲の女兒、六歲と二歲の男兒で、總領は實家へ預けて御坐います。子供にも信仰を基として言ひ聞かせますが、地獄、極樂は申して聽かせません。唯神佛の照覽あること、應報の必らずある事なぞを敎へて居ります。子供は何か研究したがる者で、神佛は何處に居ますかと尋ねますから、神佛は人間の眼で見ゆるもので無く、人間の力で知ることは出來ないが、何時でも御前方の爲る事を見て居らッしやる、父母の知らぬ事でもチヤンと御分りです。父母は罰しないでも神佛が必ず罰しますと申し聞かせますが、切れ物を翫んで怪我を致した時なぞ、それが罰と云ふものですよと申しますと、大層感じるやうで御坐います。忠孝の道なぞ分つても分らなくても始終話して置きますが、先達も私が針仕事を致す側で手助の眞似をいたし、『私は母樣に孝行をします、姉樣や兄樣も早く孝行をなさいな』と申したので大笑ひ致しました、孝行はよい事と云ふだけは分つて居るものと見えます。

▲小供の仕付

安樂に暮す折の稽古は、別に心配致さずとも宜しう御坐いますが、不幸な境遇に陷つた際の心得は、充分子供に仕こみたいと存じて、萬事不自由がちに育てゝ

居ります。八歳の娘は、竹早町の女子師範學校附屬の小學校へ遣はせますが、供を附けたり、車へ乘らせたり致しません。食物なぞ何でも戴かせますから、好き嫌ひは申しませんが、偶に申す事がありますと、御菜無しで御飯を戴かせ、決して代りの御菜を遣しません。間食は小さい子供だけ十時と三時とに定めて御坐いますので、其他にねだり事は致しません。私は唯自分の考へ通りに子供を育てゝ居りまして、一向世間の流行に構ひませんが、日々に進歩する社會は、十年以後に如何程變化いたすか知れぬと存じますと、子供も餘り世の中に遠からぬやう注意したいとも考へます



併し志操を堅固にして、智識を進歩させるのは、容易ならぬ事と始終心配して居ります。

▲家庭の快樂

私共でも子供を一番の樂みと致して居ります。日野西は一日一晩御所へ詰めますと、二日はあき日で在宅致しますから、よく子供を連れては出掛けますが、主に新宿の御料地へ參ります。御料地の御庭は結構で、動植物の拜見も出來ますし、偶に御知己の一人二人に御目に懸る位で、極閑靜で御坐いますから、誠に樂しく遊ばれます。年寄りの下女一人留守居に殘し、家内中電車で參り、御庭の芝生で手製の御辨當を開き、終日遊ぶので御坐い

ます。私共では演劇や賑やかな場所へ參つて樂しむ事は致しませんが、是れだけ子供が御坐いますと、却々面白く暮しまして充分趣味があるやうに存じます。

△音　樂

音樂は、女の兒に早く仕込んでしまふ方がよいかと存じて、一昨年六歳の時から琴を初めさせました。琴なぞは別に腦を使ふものではなし、且限りのある物ですから、先づ十年で充分と思ひます。而して丁度十六歳頃腦が發達してからみつしり學問を致させやうと考へて居ります。私は音樂も大好きですが、自分は全然出來ません、唯時々御所の蓄音機を、宅へ拜借して伺ふ事が御坐います。

△和　歌

私は華族女學校も僅かの間で止めまして、あとは父の側で書物を少し教はりました位、本當の時代後れで、却々皆様の御仲間入りは出來ません。ハイ中島さんへ參りましたので、三宅さんや矢野さんと御心易くなりました。和歌は下手の横好きで、以前は隨分凝りましたが、唯今は落着いて考へる餘裕が無くなりました。併し餘りジツと考へ込むより、偶然浮んだ方が案外よいとが御坐います。勿論倉卒の際に名歌も出來ますまいが、自然と云ふことだけは寫されます。よく勝手元の用を致しながら、偶然出來ることもありますし、下女の忙しい夕刻なぞ、此二階の雨戸を繰りながら、稍や空を眺めて偶然浮んだ歌に却つて瑕の少いのが出來ることも御坐います。ハイ年のゆかぬ内から興風會の御厄介になりましたので、唯今でも同會へは成るべく參るやうに致して居ります。宿題と即座と何方が作り易いかと申せば、私は却つて即座の方が迷はないで作り易いと存じます。即座の歌は秀でたのが出來ないに違ひありませぬが、宿題ですと餘り種々考へ込んで、拵へたやうな歌が出來て、面白く御坐いません。

△和歌と道とは離れぬもの

『父母の未だ健全であるのに、亡き父母を懷ふと云ふ意味で悲しげな歌を作り、名を衒ひたがる人が往々あるが、それは眞心から出たので無いから、到底名歌の

價は無い、總て和歌は眞實の熱情から言ひ表はさなければならぬ、道を離れた和歌は本當でない」と、善く故中島先生が御諭しでした。ヘイ戀歌で御坐いますか、「貴女方樣親しい御友達を慕ふ心を詠んで御覽なさい」と仰しやる位で、決して令嬢方には作らせませんでした。戀歌がよく出來るやうにならなければ、名人にはなれないさうで御坐いますが、年のゆかぬ方には弊害が多いので餘り御勧へなさらなかつたのです。

初冬の銀杏黄金をばら／＼と　劍花



## 社交談片

山脇夫人

一記者

▲現今婦人の社交機關と云ふ樣な物は月曜會位なものです、是は元内外貴婦人交際會と申しまして、四五年前、鍋島侯爵夫人、三宮男爵夫人、香川、田中兩子爵夫人と前米國公使バック夫人が發起されしもので、會場は各會員の廻り持ちですが、開戰以來は中止の姿でございます。

▲東洋婦人會は、清國韓國の婦人が出席します會で、

鍋島樣が重に世話を燒いて下さいまして、每會名士の演說があります、是れも會場は廻り持ちに成つて居ります。

▲婦人敎育會は毛利子爵が會長で、役員は下田歌子、三輪田眞佐子、門野幾之進夫人、岸淸一夫人と私とで御在ますが、遠からず二三萬圓程の婦人倶樂部を建築したいと云ふ計畫が戰爭前から有つて、既に六七千圓は集つて居ます。

▲婦人衞生會は、鍋島樣が會長で、濱尾夫人、鳩山夫人抔が盡力して下さいまして、是迄は每會虎の門の女學校で開きましたが、此頃は女子職業學校で開きます、それから婦人質門會と云ふのが有りますが、是は津田梅子樣が重にお世話下さいまして、學術上の事を各自質問したり、研究したりするといふのが目的で御在ます。

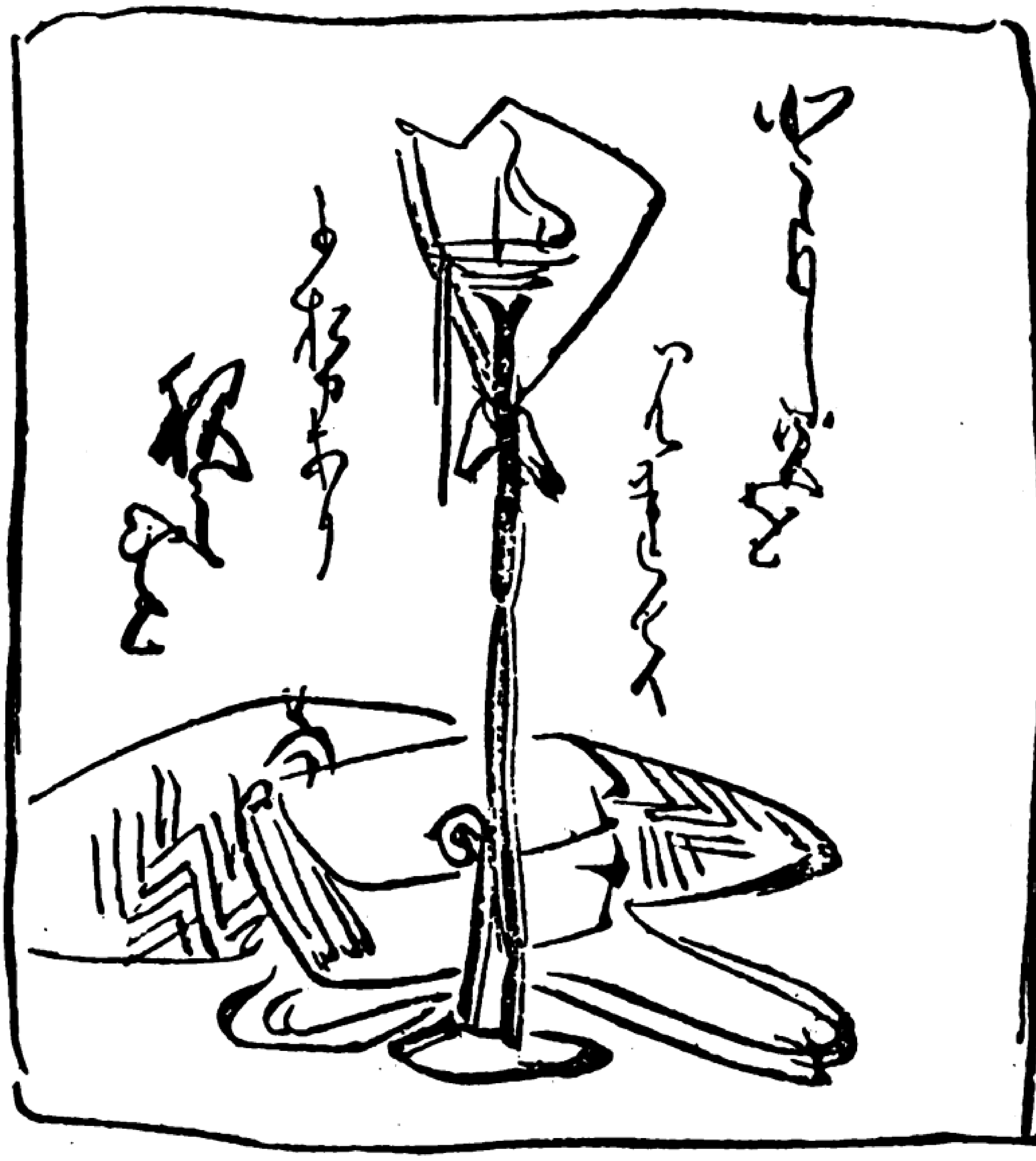
▲それから又た讀書會といふのは、各自讀みました本に就て意見を述べたりなどしますので、會員は每日三十分以上を讀書に費す約束で御在ます、未だ數へたら他にも澤山有りませうけれ共、ザツト是位な物で、是等は婦人許の會で鹿鳴館時代の樣に華かな男女共同の會合では有りません、尤も日本體育會には每月舞踏會をやつて居る樣ですが、彼は女子高等師範の井口さんが重に働いて居て、加納子爵(會長)と岡部子爵が助力して居られます。

▲今の所華族の奧方でこんな事に熱心に盡力して下さるのは、鍋島侯爵夫人、毛利公爵母堂、岡部子爵夫人抔で、尙ほ數ふれば松平正直夫人、黑田侯爵夫人、三井男爵夫人等の方々があります。それから島津侯爵夫人と岩倉公爵夫人とは特に愛國婦人會に力を入れてお在でゝ御座います。

▲各種の慈善事業に、婦人方から寄附金する事が每度有りますけれ共、其度每に良人の財布や、一家の費用の內から出す樣では不可ませんから、各自に働いて親ら生み出した物を寄附したいと云ふ考へから、私共同じ赤坂區內の者六七人で三年許り前から狀袋張りを始めました、斯うして自分で造り自分で賣りますと、

小さな者でも案外賣れるもので、昨年など其純益三十圓を愛國婦人會へ寄附しましたが、最近是を擴張して會員は毎週必づ三時間宛手藝を執つて、それから生ずる利益金を慈善事業に寄附する計畫で櫻會と云ふのを起しました、編物杯の方は反つて利益は多いのですけれ共、小供でも婆樣でも下女でも出來ると云ふ譯には行きませんから不可ません。

▲手藝慈善會と云ふのが、永田町のヴヰストン夫人の宅を本部にして、年二回慈善市を開きます、之は編物を重にして、華族女學校や東京女學館の生徒達にやらせて居ます、會長はヴヰストン夫人で、濱尾さんや私などが盡力して居ます。



▲宗教の方では聖アンデレ婦人會と云ふのが有つて、會長は三宮男爵夫人で御在ます、小浦麻布區長夫人と私とが重に盡力して居ますが、之は月一回第二土曜に集つて會員が仕事をするので御在ます、それで年二回飯倉四辻の神學校内に慈善市を開きます。

▲婦人會の澤山あるのは結構で御座ますが、唯だ何れの會も皆同じ樣な人が役員を仕て居るのですからいけません、數ならぬ私でさへ幾つも勤めて居るのに倘ほ時々賴まれる事

がある様な譯ですから、理由を述べて多忙しいからと斷はりますと、西洋の諺に『事業を起さんとする者は一番多忙しい人の所へ行つて頼め』と云ふのが有りますなど仰在りまして、實に困りました事があります、鍋島様が能く仰在いました『福溜會長は善加減に堪忍して下さい』と、全たくで御在ますね。

## 同盟國の交際振

十五銀行頭取　園田孝吉

英國の交際は、其源を夫婦の關係より生じたもので、交際の主動者は、妻君にあると云ふも過言ではない、從ッて妻を持たない男子は片輪の交際で、交際社會に於ては少しも勢力がない、獨身者は人に呼ばるゝことが出來るが、之を自分の方に呼ぶことが出來ぬのであります、私は十餘年倫敦に居りまして、未だ獨身の内には随分色々の所から、夜會などに呼ばれましたが、總ひことには其返禮として人を招待する資格がなかッたのであります。

交際の主動者は、夫にあらで妻君にある故、從つて招待狀を發するにも、妻君の名を以て夫れ〴〵に人を招くのである、未た獨身の内は男女にかゝはらず、此の招待狀を發する譯けに行きませぬ。

▲受日の事

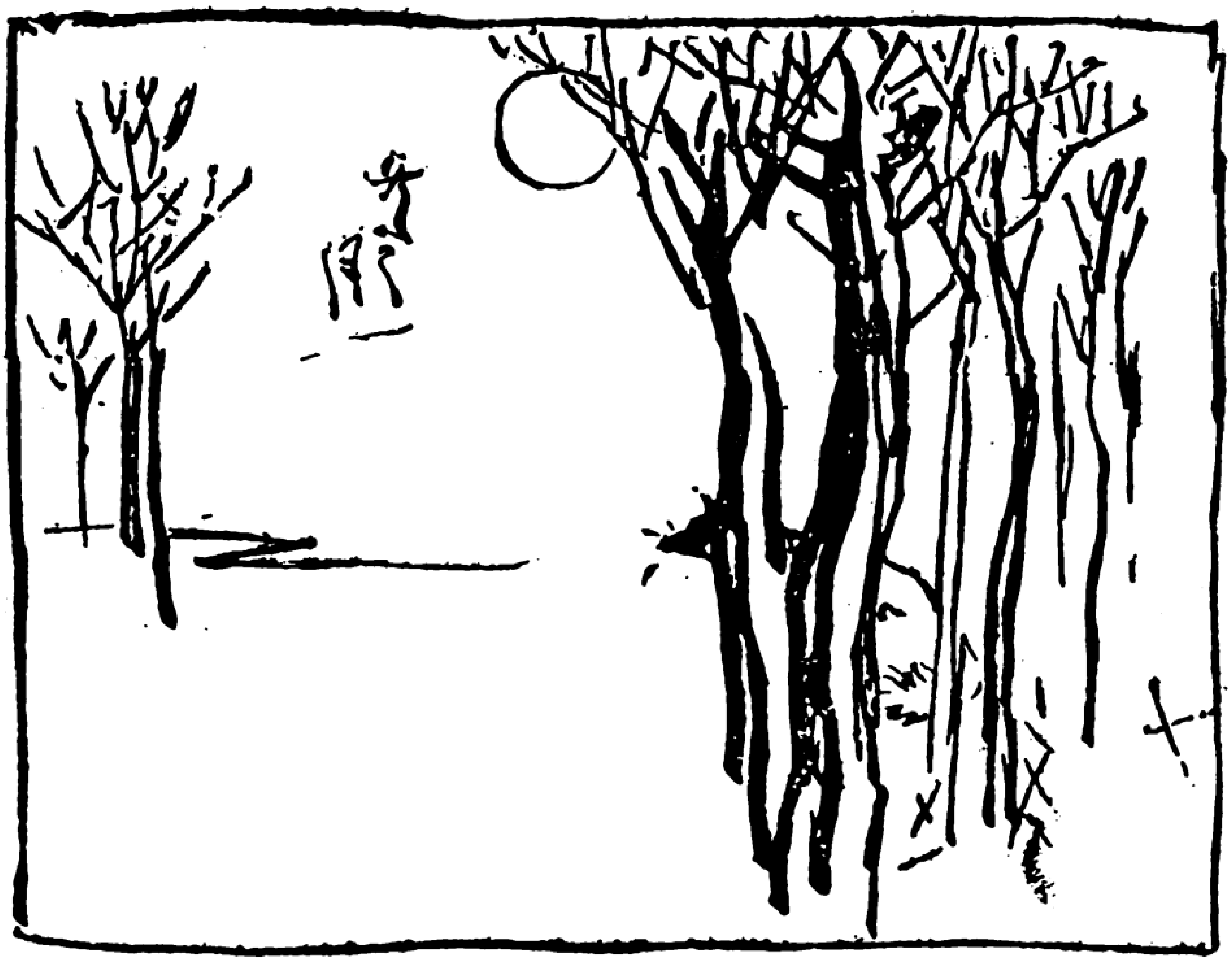
下流社會は何時でも差支はありませぬか、中流からになると、面會に受日と云ふものが定まッて居て、人に應接するには、金曜日とか土曜日とか云ふ日に一定して居る、受日には其家の妻君が、室内を飾り、盛裝を凝らして人か來れば、嬉々として出で迎へるのですが、受日の外は人によりては、敢て面會拒絶と云ふ譯けではないが、室飾りも粉裝も整へて置かぬ故、餘り喜ばないのである、殊に訪問する人になりますと、不在の時が多い故、受日の外に訪ふのは不利益です。

▲結婚後は多額の金を要す

男女とも獨身の内は、人に招待せらるゝも、人を招待するの資格なきもの故、生計には至ッて費用を要し

ませぬが、一度結婚すると完然に交際の資格が出來まするものから、其費用は獨身の時に較らべて四倍も五倍も、掛るやうになるのです。

　今迄徒歩で居たものも、俄かに馬車に乘らねばならぬやうになり、衣服も成るべく流行に連れたるものを着けねばならぬやうになるし、萬事意外の所に入費か嵩むのです、從ッて男などは、一年四五千圓位の收入では容易に妻を娶ることが出來ず、單獨に家を構へて居ります、尤も英國には持參金が流行して居りまするから、御嫁さんが多くの金を持ッてるならば、歳入が少



ない男でも、妻帶することがあります。

　爲めに英國では獨身者、殊に女の獨身者が澤山あります、四十にも五十にもなる娘か御座ります、其の譯けは、英國は航海業が盛んで、多數の男子が海上生活をして居るのと、今一ツは外國に出稼する男子が多い故、女は男に比し多く、其れに結婚後は金がかゝるから、多くは呉服店、郵便電信局などに出勤して給料取りをする者が殖えるのです。

　英國には獨立者多き故、大層倶樂部が流行して居り

ます、男としても容易に妻を娶ッて家庭の樂みをすることが出來ぬ故、倶樂部を利用するやうになるのです、倶樂部には、書籍、新聞雜誌、遊戲場から、電信、電話の類に至るまで、一切を具備し人間の欲望を滿足に與ふるから、獨身者は孰れも爰に出入致します、從ッて倫敦には、日本で云はゞ帝國ホテル以上の建物を有する倶樂部が幾十あるか知れませぬ。

▲物品の贈答

日本では初對面の人にも、菓子箱のやうなものを持て行きまするが、英國では友誼を結んでからでなくば、物を贈らない、初めて逢ふ人に物を贈りもせば、反て其人の感情を傷くることがあります。

又贈品は日本のやうに年中何時でも贈ることはない、誕生日とか、祭日とか結婚とか云ふ塲合の外は、贈答することがないのです、殊に友人の結婚には、必らず紀念品を贈ります。

贈答の物品は、日本では鰹節とか、鷄卵とか、菓子とか、云ふやうな食物、若しくは吳服切手などは贈りませんで、多くは永く紀念になるものを遣ります、結婚に向ては、最も價値ある品物を呈するか例で、ダイヤモンド入の指輪とか、腕輪とか、或は結婚後家政になくてはならぬ、日用器具などを贈るが例になッて居ります。

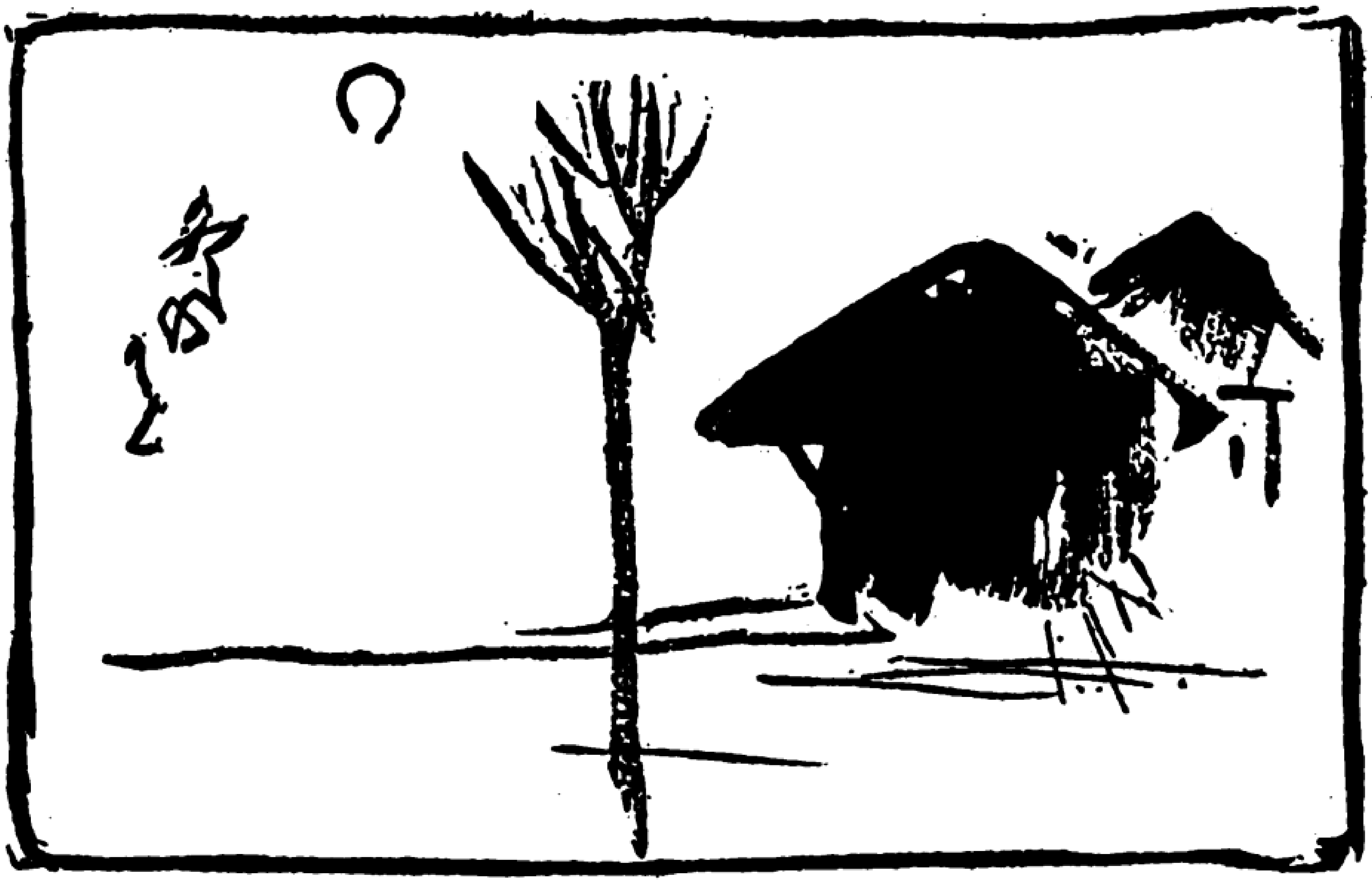
其から贈物を貰ッた人は、其贈られたる品物をば、價値の高下にかゝわらず、非常に大切に致して、殆んと其品物を贈りたる人と同樣に見做しまして、日本人のやうに粗末には決して致しません。

過日私の宅に、外國婦人か參ッて、一ッの絹ハンケチを置き忘れて行きましたが、後手紙を送り來りまして、其のハンケチは友人より貰ッた大切のもの故、何卒御保管下されたしとの意味でありましたが、之を以て見るも、如何に貰つた物を大切にして永く保存するかが判ります。

▲添書の事

英國では交際を結ふのは、甚だ嚴格なるものになッて居りまして、未知の人とは決して、話をせぬやうに

なッて居ります、假令ば汽車中でも、差向に居る人に對しても無暗に話をすることはありませぬ、人に合ふにも日本では、一片の名刺を出しますれば、面會して與れまするが、英國では知人の紹介がなければ、人には會はんことになッて居ります、併し此の添書は、日本に行はるゝが如き輕々しきものではありませぬ、英國では添書を人に與ふるは容易なものでない、此の人は如何なる身分の人にして品行は如何なるものなるやを、能く辨へて此の人を知人に紹介するも、他日知人に迷惑などを掛けることはありはせぬか、又之が爲め自分の名譽を傷けるやうなことはあらぬかと、能く思慮を爲して後、



其人を紹介する添書を與ふるのです。

すると添書を受け取ッた方の人は、添書を送ッた人と同樣に其人を待遇するのです、是れはさうなければならぬことで、添書をよこされた方の人は、添書を持ッて來た人を、飽まで自分の知人として、之に對すると同樣の待遇を爲すは、最も喜ぶべき風習で、日本人なぞは、深く此の點に注意せねばならぬ所です、日本人の中には米國の知人から、添書を持ッて來た外國婦人でもあると、喜ぶ所か如何にも迷惑さうな、御義理合に其人に合ふ位で、御馳走も何もしない人も、見受けられますが、かやうなことでは、到底立派なる交際

場裡に立つことが出來んのであります。

私が外國人の紹介狀を以て、倫敦の或る外國人でも訪ねるとすれば、先方は紹介者の信ずる者故、私を飽まで信用して直ぐに、友人と爲し、歡待優遇至らざるなき有樣であります。

◆交際の季節

交際は年中いつでも行はるゝものでなく、盛なる時と然らざる期節がありまして、二月頃から六月頃迄は、最も盛んに行はるゝ期節であります、七八月より九月にかけては盛夏の爲め、多くは田舍或は外國に避暑に行きますから、交際の最も少ない時であります、二月頃は英國の國會が開かれまして、地方より多くの代議士が倫敦に集り、又外國人も多く入り込みます故市中は賑かになります。

帝室にをかせられては、此の期節に於て、三回位も内外國の貴顯方に謁見を許されまして、又音樂會や舞踏會なども、二三回ほど催され倫敦市中は大に活氣を添へて參ります、帝室にては、市中の賑ひを計る爲めに謁見や宴會を催すと云ふ位に云はれ、帝室が交際に勵めらるゝと否とは、直ちに一般交際の盛衰に關する有樣になつて居ります、其の期節に於て交際に要する費用は、三四千萬圓市中に落つると云ふことであります、又此の期節に帝室に於て、身分ある家の娘が女學校を卒業して二十才前後になると、特に謁見を賜はることがあります、尤も此の謁見を賜ふに就ては、唯身分あるばかりではなく、其者の家柄や、其娘の品性如何を調査して、缺點のなきとき、兩親付き添の上謁見を賜はるのであります、此の謁見と云ふことは非常に名譽の事で、之が序幕となつて其娘は交際社會に顯出しまするやうになるのです。

一度謁見の榮を得ると、官報に掲載して廣く世上に出る故、色々の會合に案内を受くるやうになります、公使館の書記生の如きものすら、品性の正しき人でありますれば、矢張謁見を御仰せ付けらるゝことがあります、すると知らない所からも、續々招待狀が舞ひ込んで參ります。

▲會合の目的

舞踏會や園遊會や、其外で種々の會合を爲す目的は、云ふ迄もなく、友誼を厚ふするにあることは、勿論のことでありまするが、又一つには結婚を爲すの媒介にもなつて居ります、英國は相對結婚で、互に氣心を知り合ふてから、定むるやうになつて居る故、男女相識るの機會がなければならぬのであります、故に諸會合は反面から見ると此の用にも供されて居ると云ふも過言ではありませぬ。

若き男女が交際社會に於て、多くの會に出ると、同じ人に幾度も合ふやうになります、其間には如何なる人であるかと云ふことが判つて參りますから、是れが其の端緒となつて終には結婚の豫約をするのです、英國の中流以上の社會になりますると、不思議の事には人の財産がチャンと判つて居ります、甲さんの家は百萬圓の資産があるとか、乙さんの家は不動産が十萬圓に動産が六萬圓あるとか、甚だしきは長男のチャールスは十萬圓の特有財産で、弟のハリスは八萬圓持て居るなぞと云ふ細密なことも判つて居るのです、其れ故、結婚する場合などには、先方の資産が初めから判つて居るため、安心して娘をやることも出來るのです。

▲日本の婦人に望む

以上英國の交際の大要を申し述べましたから、序に聊か我邦の婦人に向て、希望を申し述べます、我國も日露戰爭の結果と致しまして、世界的の國となりましたから、是非將來は此の上にも、厚誼を結ばねばならぬのであります、殊に我國は戰爭の爲めに十餘億の借金を持ちまして、之を返還するには容易なことでなく、是非とも經濟界を發展して、國の富を多くせねばならぬのですが、此の經濟界の發展を計るに就ても、多くの金がなければならぬのですが、露國よりは一文の償金も取ることが出來ません故、やむなくも外國より資本を借り入れまして、産業に注ぎ、色々の事業を企てねばならぬのであります。

此の多くの金を外國より借り入れるに就ても、能く外國と交際して友誼を厚ふせねばならないことで、其の

友誼を厚ふするには、外國の交際社會の原動者である婦人と深く交際を結ばねばなりませぬ、故に我國に於ても之と交際するのは男よりは女でなければならぬのでありますから、婦人諸君は自分の爲めよりは國家の爲めとも思ふて外國人と深く交際を結ぶことに勗められたいのであります、其れに就ては尙ほ此の上にも外國語の研究を怠らず、又外國婦人の人情風俗から、交際法の如何なるものなるやを心得、他日外國婦人と交るに當りて、立派なる行動を以て、日本婦人の眞面目を發揮し、以て國家に貢献する所がなければなりませぬ、國家今後の盛衰は又婦人諸君の双肩にかゝつて居るのであるから、御奮發を願いたいのである。

## 家の管理

人は貧富貴賤に拘らずその品位を高く持つべきものなり。貧富貴賤は一時の現象なれば強ち心に累するに足られど、品性は人の一生を通ずるものなればよくすべきものなり。一人の品性は一家に及び、延ひて一國に及ぶものなれば品性の大切なること知るべし、正直、勤勉、慈愛、儉樸、信實、秩序、皆家の美風なれば、務めてその美しき習慣を作るべし。朝寢坊すべからず、奢侈に耽るべからず、不潔なるべからず、不規律なるべからず、是れ家を持つの要道なり。時間を大切に守るべし、今日の事を今日に成せ、約束を重んずべし、秩序を亂すべからず、すべて心の働らき肝要なり。

衣食住は經濟と衛生の外に適當と、品位と、便利を兼ねざるべからず、粗服は衛生害なしと雖も品位を損する嫌あればほど〳〵にすべし。家屋は高燥の地に營み、狹隘卑陋ならざるをよしとすれども、經濟上の不便あれば、それも又考へものなり。食物は口に旨きをよしとし、滋養に益あるを專一とすべきなれども、一度び習慣となれば滋味も又旨からず、日々の費用大なれば尤も注意すべき所なり。されば衣食住の三者は家政學の按排如何に依つて損益するところ大なれば、主婦たる者は務めてその活用を誤らざるやうすべし、綱目に入れば種々の利害、得失もあれど要するに金錢を費やさずして衛生にも益あり、適意にして便利なるを期すべし。衣服には衣服の調製、保存等の事あり、食物には營養、調理、保險、食料等の月あり、又住居には建築、裝飾、什器等の事ありそれ〳〵就て學ぶべし。

# 評言

## 女子の目的

大町桂月

造物者が生物をつくれば、それを絶やさぬやうにと工夫せり。かくて、生物は、永久に絶えず。造物者の目より見れば、美もなく、醜もなく、男もなく、女もなし。たゞ繁殖に當るものが、造物者にありては、その意に適するもの也。下等動物にありては、女性が主にして、男性が從也。女性の方が、體が大きく、力もつよく、從つて權力あり。上等となるに從ひて、生存競爭甚しければ、男性が、其任に當り、從つて力もつよくなり、體も大きくなり、權力もあるやうになりたるが、こは、社會の境遇より生じたる事にして、生物本來の目的より云へば、やはり、繁殖の任に當るが尊き也。

子を生むといふとは、生物の第一の目的也、否、人間第一の目的也。されど、生みたるのみにては、役はすます。下等になるに從つて、生みはなしにてよけれど、上等になるにつれて、生んだのみにてはすます。餌をさがす法を敎へざるべからず。少し進んでは、乳をのませざるべからず、最も進んで人間となれば、衣食の外、種々の敎育をさづけて、人間にしてやらざるべからず。されば、人が子を生むとは、單に生むのみならず、二三十年もかゝりて、一本立ちの出來るやうにしてやるが、即ち子を生むといふもの也。こは、個人の事なるが、國家にありても、其目的は、之に異ならず、國家を亡ぼさぬやうに、後の國家を生むが、國家の第一の目的也。從つて、敎育といふとは、人間第一根本の問題也。

女子が、子を人に托して、徒らに文藝にふけつたり交際場裡にはねまはりたりして、男子と同じやうな事して、それで、女子の地位が高まれり、女子の權力が出來たりなど〻思ふものあらば、これ人間といふ事の意義を忘れたるもの也。

## 電車中の女子

電車汽車などの中には、男が女に席をゆづるは、もと弱を扶くるの意にもとづく。されど、男が必ずしも强きにあらねば、女が必ずしも弱きに非ず。老いたる男よりは、年壯なる女がつよく、年壯なる男も、身體の具合惡き時は、老いたる女よりも弱し。女はいつも電車の中にて、席をゆづらるゝ特權ありと思ひて、席を讓れがしの顏するは、吾貴女の品性として取らず。

この頃電車中にて見たる事也。余が感心と思ひたるは、女學生らしき女性、入口の方に腰かけ居りしが老いたる男、よぼ／＼と入り來しも、誰も席をゆづるものなきを見て、つと立ちて、席をゆづれり。余は、その人と、七八人をへだてゝ、はなれ居りたるが、このさまを見て、その心根を思ひやりて、いとゞ感に堪へず。かゝる人こそ、電車中にて席をゆづるの眞意を辨へたるものなれ、否、人の人たる道をわきまへたるものなれ。

あさましと思ひたるは、三十ばかりの女の、子を負ひたるが、入り來りて、例の席をゆづれがしの顏をして、席を讓られたるは、よけれど、負ひたる子をうしろのガラス窓に押しつけて、くるしさに、その子が眠をさまし、泣き出しはせざれど、もじ／＼するをも知らぬ顏也。子を負ひたるものは、自分は苦しくとも、皮にぶらさがりて、子の體をらくにせむとこそすべけれ、たゞ我身體の便を圖りて、子を苦しむる、その心は、鬼乎、じや乎、親としても、妻としても、たのもしからぬ人也。

以上二つの事實を見て、余は、ぞつとしたり。ぞつとするは、一なれど、そのぞつとする所以は別也、一は、その心のやさしくして、神の如くなるに、一はその心あさましくして、鬼の如くなるに。

## 一人娘と末娘

少し裕福ある家にても、子が澤山あれば、さうは、

手がまはらず、それが、一人娘なれば、啻にちやほや甘やかさるゝのみならず、愛におぼれて、贅澤にそだてらるゝが常也。一粒種ならずとも、年上の娚や姪があるやうな末子にありては、親の愛、或は、一粒種にもまさる。かゝる子は、親に可愛がられ、よい着物きせられて、親が自慢の鼻たか〲と、人中につれてゆかれ、ねだるものは聽かれ、きびしい躾もせられず、芝居が見たい、それ行け、自轉車に乘りたい、ほい買つてやらうと、たゞ氣樂にのみそだちて、自からも好運兒とよろこび、人も仕合者とほむれど、世上、風雨多し、和煦たる陽春の氣にはぐゝまれし蕾も、一朝、雨にしぼみ、風に散りて、泥土に委す。少時の仕合は、長じて、不仕合となり、少時の不仕合は、長じて仕合となる。夫を擇ぶに當りて、一人息子と、年上の娚ある人とは、大に考へ物也。妻を擇ぶに、一人娘と末娘とも、大に考へ物也。

人の性質は、一半は生れつきにより、一半は境遇による。親に甘やかされし子が、すべて惡く、少時苦しみし子が、みな善しといふわけにあらねど、一粒種の子に通有なる長所もあれば、また短所もあり。おほやうにして、こせつかず、無邪氣にして、ひがまず、これ其長所也。氣隨にして、すね易く、怒りやすく、愼み易く、よろづ己れを主にして、察しなく、思ひやりなし、これ其短所也。この短所は、小人の氣質のおもなるものにして、世の俗人に多けれども、親に甘やかされたる子は、概して、この短所を免れざるが如し。

同じく甘やかされても、富める家の子は、少したちはよくても、ぽんつくになり、貧しき家の子は、少したちが劣れりとも、間は拔けず。されど、いづれも、氣隨が必ずしも惡しきにあらず、偉人豪傑は、すべて氣隨者也。唯其氣隨に大小高低あり。人物大なれば、氣隨も大に、人物小なれば、氣隨も、亦小也。理性發達し、意志つよければ氣隨も大くなり、從つて、大なる事業をも爲す。つまり氣隨のよしあしは、智の明るきと暗きとに因る。智明るき氣隨は、進んで大我の城に至りて、あつて、却

つてよきものなるも、智くらき氣隨は、小我にとゞまりて、まことに厄介者也。かゝる夫をもつ妻は、常に泣かさるべく、かゝる妻をもつ夫は、氣にくはぬ事のみ多くして、一家が面白くなくなるべし。朝は、ねたきまで寢る、晝寢もする、腰が重くして、はたらくがいや也。好きなカルタでも取れば、子供が泣いてもかまはず、一家の經濟をよそに、我着物をねだり、夫の爲め子の爲とは思はぬにあらねど、眼前直接の我が氣がすむやうにしたく、少し氣にくはねば、直にすね、少し癪にさはれば、直に怒り、少し損すれば、直に恨み、なでらるれば、小猫の如く、じやらつき、ぶたるれば河豚の如く、ふくれあがる。これ畢竟するに、萬事、己れを主とするより出づることにて、少しも反省する所なく、察しなく思ひやりなく、自分は氣を利かしたつもりにて、間が拔けて居ることには、氣が付かず、叱らるれば、叱るものが無理とのみ思ひ、わが身の惡きことには、氣が付かず、叱る人の心の中は、少しも思ひやらず、よしや、少しは、我身の惡きことに氣がつき、叱る人の心を思ひやるとも、唯叱られたることが、くやしくして、泣いたり、怒鳴つたり、恨んだりして、始末がつかず。かゝる人に、わけを聞かしてやりてもとても、わけがわからず、口では、わかりても、心では、わからず事柄の意味はわかりても、そのどんぞこの眞理は、わからず。世に、話せぬ人とは、かゝる人の事也。かゝる人が長官となられては、迷惑也。友として面白からず、夫としたくなく、妻としたくなし。そのわけが、わかりたるは、眞に分かりたるに非ず。敎へむとするも、敎ふべからず。他の忠言を、惡口と思ひ、他のおせじを好意と思ふ。利口なるものは、之を敬して遠ざく、古人が。女子と小人とは養ひがたしと云へるは、かゝる人をさして云へる也。

さらば、貧家の子女は、みな養へるかと云ふに、それも、斷言は出來ず。人は人中にもまるゝが藥なれどそのもまれ方にも由る。幼にして、意地惡き繼母に虐待せらるゝか、家亡びて、流寓して、餘りに苦しき目に遇ふか、などすれば、すなほな心うせて、强情一方

になり、ひがみもすれば、拗ねもし、意地惡くなり、殘酷になり、艱難には屈せざれど、横着になり、温々たる和氣うせて、人物圓滿ならず。かゝる人も、年長じ居らば、終に養ふべからず。

われ斯く口には利口げな事いふも、われと我が身を顧みれば、疚しき事多し。何を隱くさむ、われは、愚なる生れつき也、お人よし也、もし富める家に生れてちやほや言はれて、そだちなば、若様ならで、馬鹿様となりしなるべけれど、幸にも、家は富まざりき、兄妹多かりき、ちやほや言はれざりき。余は、貧家の子となりしことを感謝す。五歳より十歳まで、繼母の手にかゝりたるも、虐待せられしにはあらず、十二歳より、父をうしなひて、流寓したれど、さまで殘酷な目には遇はず、唯耻づらくは少時、家庭の温味を知らず優雅にして圓滿なる性情は得られず、幾分か強情の點あり、我ながら、我身に愛想をつかさゝるを得ず、あゝ、われは凡夫なる哉。

## 育兒上の一注意

子供をそだてるには、規則正しくする習慣をつくらせるやうにしたきもの也。起るも規則正しくし、食ふも規則正しくし、勉強も規則正しくし、運動も規則正しくし、寢るも規則正しくすれば、習慣、天性となりて、世の中に活動するに都合よくなり、身體の健康上にも至極結構なる事也。規則正しくするついでに、便通も規則正しくさせたきもの也。日本にありて、多年貧兒を教育せる、或る西洋婦人の言に、『便通も、毎朝あつても、無くても、規則正しく、やらせつくれば、終には、毎朝必ず便通があるやうになると云へり。實驗上の話しなれば、事實なるべし。便通の如きは、事小なるやうなれども、人が生きて居る間は、食はずには居られず、食へば、便通なきを得ず。飲食と便通とは、密接なる關係を有す、便通の一定し居らぬは、人事の上にも、大に關係す。學校に行き居りても、役所にゆき居りても、汽車にのり居りても、便通の爲めに

稽古をさまたぐることとあり、事業をさまたぐることとあり、色々の不都合を生ずるとあり、途にて便通を催して苦しむことあり、小兒は、塔へかねて、衣袴をけがすことあり、幼稚園、小學校の初級の教師のこまるは學兒の便通也、かゝる教師は、學問を教ふるのみならず、學兒の便通の世話までしてやらねばならず。之を衛生上より云ふも、便通は、一大要件也。便通は、先づ腦の健否に關す。腦の具合わるきものは、必ずや便秘するもの也。其他胃に關係し、氣分に關係し、あらゆる身體の機能に關係す。便秘を治する藥をのめばよしと云はゞ、それ迄なれど、そは、一時的にして、永久的に非ず。又、よろず藥のみをたよらば、世に衛生法は無用なるべき筈也。藥をのまずとも、育兒上の注意によりて、毎朝、必ず便通あるやうになるならば之にましたることなき筈ならずや。

余の實驗に徵するに、青年の頃より、暴飮暴食のために、胃病にかゝりて、十年以來、益甚し。されど、腦の具合を云へば、少年の頃は、時々頭痛して、

こまりしことあり。二十三四歳前後は、胃病の爲めに腦を害し、殆んど學を廢せむかと思ひしこともありしが、この十年以來は、胃は益々惡くなりたれど、腦は益々よくなれり。且つ絶えて、頭痛といふことを知らぬやうになれり。如何なれば、斯く身體上の變化を來たしたるぞと、素人の判斷を下すに、このやうな事を貴女の前に云ふは、ちときたならしき話しなれど、衛生上の事なれば、いたし方なし。又、專門の醫者に笑はるゝかも知らねど、余の身體にとりては、すぐ氣のつく事實が新に起りたり。そは、毎朝必ず便通あるやうになりたる事也。便通不定の間は、腦も惡く、且つ折々頭痛したりしが、毎日便通あるやうになりて、腦もよくなり、頭痛も全く無くなれり。斯く云はゞ、第二の問が起るべし。如何なれば、斯く、毎朝必ず便通あるやうになりたるぞと。人の事は、知らず、余にありては、これ飮酒と關係するが如し。余もと酒を好めど、書生時代は、毎日晩酌といふ贅澤も出來ず。學校を卒業する前後より、毎晩食事に際して、一二合獨酌

すといふ贅澤をはじめたり。後に知りたるが、それにつれて、毎朝必ず便通ありといふ新事實起りたり。毎晩獨酌、毎朝便通、頭痛無くなれりといふ三個の事實は、素人考へに考へても、余にありては、互に關係ありさうな事也。

便通の御話したる後に、酒の御話するは、折角の酒も、まづくなるの感あるべく、少し門違ひなるべく、又我田引水のそしりもあるべけれど、きたなき糞の話のみにても持ち切られず、便所のかたはらを通りて來たまひたれど、こゝは、アンモニヤのにほひなき表座敷也。いざ、下戶の人達も、來て耳をかたむけ給へ。酒は、精神上に大益あるのみならず、身體上には、大益あるもの也。衞生をなまかじりにしたる人は、直にアルコールの害を口にすれど、如何に滋養ありと稱せらるゝ牛乳にても、大飮すれば、必ず胃を害すべし。酒に害あるは、大酒の罪也、酒の罪にあらず。余が健康を害し、命を縮むとも、その罪は、酒にあらずして大酒にあり、大酒にあらずして、我れに在り。即ち、自業自得といふもの也、晩酌終りて、こんな下らぬ文を草す。若し、こんな下らぬ事をいふが、お氣に障らば、そこらで、全く酒の罪と、大目に見のがし給ふべき也。

## 拾ひ反古

### 一

御手紙拜讀、いつも相變はらぬ御厚情、感謝に堪へず候。士は己を知るものゝ爲めに死すといへり。現今羽振よき鬼山將軍が、小生風情の者に、才色の聞高き令孃を下さるとのおぼしめしの由、世にもうれしきことの限りに候。されど、後日、女房故に出世せりと云はれむは男子として、苦しきことの限りに候。この苦しさはこのうれしさに換へられず候。女房は下のものより貰へとは、小生が平生信じ居る所に候間、折角の御厚情を無にして、相すまず候へども、主義は如何とも難く、止むを得ず、この度の緣談は、御斷申上

候。嗚呼、彼の令孃が、鬼山將軍の子ならざりせば、小生より進んで、命にかへても、貰ひうくべきに、まならぬ浮世にて候ふもの哉。何卒、小生の心事、御賢察下されたく候。

## 二

それも好からむ、言ふ通りにさせて置けと、宿は、例の氣質に候へば、無頓着に候へども、女の身としては、さうは、あきらめられず。武雄樣は、夢にも御存じあるまじけれども、鬼山將軍の令孃は、この頃、四百四病の外の病にかゝり居られ候ふぞや。お目にかゝらば、そつと、お脊中をたゝいて、果報者と申してあげたきくらゐなるも、情にあつき御身の事故、令孃の病氣を、大時代と、冷かには見給ふまじ。女房は下のものより貰へとの御言葉は、さる事ながら、今の處、既に未來の將軍と、軍人一般に重んぜらるゝ御身、後日御出世なされたりとて、驕慢の故にと思ふ人は一人もあるまじくと存候。宿をさし置いて、さし出がましく候へども、令孃がお氣の毒にて堪へず。今一應、御再考を煩はしたく候。もとより廻はらぬ筆、もし御氣にさはるともあらば、何卒御許し下されたく候。あらあらかしく。

## 主婦の務

家に賢妻あるは猶國に賢相あるが如し、一家に於ける主婦の務は一國に於ける宰相の務めに異なる事なし、故に宰相が一國の政治を總理するが如く、主婦は家事全般に亘つて是を管理し、その責任を盡さゞるべからず、是れ家政の經營なり、而して婦人は其性質溫和にして忍耐の德を備へ、又綿密にして諸般の家道を守るが如きは其の性質に適ふものなれば、家政は必ず婦人の掌るべきものなり、抑も家政は衣食住を始めとして、金錢の出納、子女の教養、其他百般の事項極めて煩雜にして緻密を要するものなれば、之を治むるは是非とも婦人の手に待たざるべからず、且つ社會の進歩に伴ひ、男子は外に出でゝ、執るべき務め次第に多きを加ふれば一人にして内外の事を處理せんは難事なれば、一家の經營は擧げて婦人の手に委ねざるべからず、是れ主婦たるものゝ家政の責任ある所以なりと知るべし。




# マックス翁二十世紀婦人觀

一記者

現代の歐洲に於て通俗哲學者の稱ある批評家マックス、オーレル氏の婦人觀察は奇警にして、辛辣よく人生の裏面を洞觀するに於て衆人の愛讀を受くるものなり今其一斑を紹介せん

## ○理想の良人

百人が百人別々の理想を持つ女子に就て其良人觀を説述すべし。今こゝに社會の初舞臺に登れる巴里の一少女は曰へり。

妾は其妻の爲めに一生を犧牲とし、一擧一動皆其妻を中心とし、心力體力を盡くして妻の幸福を希ひ、永久に美しく世に生存せしめ得るの資を供する良人を喜ぶものなり、斯る場合に於てはその妻たるものよろしく其良人に對して十分の尊敬を拂ふべし』と。

是れ多數少女の理想を言ひ盡したるものならずや。

次に又總ての婦德を備へ其良人をして十分に滿足せしめつゝある一既婚婦人は曰く、

妾の理想する良人は萬事其妻の自由に委せて家政其他の些事に一々關渉せず、又うるさく忠言を與へず妻を滿足せしめんとして爲したる事を少しも恩に被

せず、小言は少ドからず、言行は必ず一致し、不斷妻に對して厭味を言はぬ男こそ、理想の良人となすべし。妻は曾つて人の妻となるは態の好き奴隸となるに等しきものと思ひ居たるに反して今は極めて氣樂なり、妻も自由なれば良人も又自由なり、されど、夫婦別居して互に其消息を知らざるが如き意味の自由には非ず、則ち或遠慮といふものゝ外は其間に一の隔壁ある事なし。兎に角夫婦の間に深き愛情と深き思慮と厚き敬意と遠慮のあるが爲めに親んで相狎れず互の愛情も爲めに永續するの心懸けこそ緊要なり」と。

又或賣出しの美術家と結婚せる一婦人は曰く

妻の理想の良人とは才智の勝れたる男をいふにあらず。著作家にせよ、畫工にせよ世に卓越せる人物を一婦人の力にて之を壟斷する事は出來得可からず。彼等は常に沈思し或は默考し其の天職に經營慘憺する方專らにして彼と共に棲息せる一小動物（妻を指す）の爲めに顧みる遑極めて尠し。其夢想より覺め來るや、不滿……寧ろ憫むが如き一盼を以て側に侍せる妻を顧み頗る之れを卑むが如き態度を示すを常とするなり。

妻の理想的良人といふは文學や美術の如き藝術的の天才家にあらず、只妻と共に相愛して生涯を送り得る良人を言ふなり、勿論妻とても偉人、大詩人、大畫家、大彫刻家等を愛せざるにはあらず、去れど良人としては望ましからず」と。

又其容貌は左ほど美ならざるも快濶にして愛嬌に富める一婦人の曰く、

妻の良人は決して美貌たるを望まず、唯だ紳士らしく氣輕に、快濶に、何時とても不機嫌な顏を現はさざる男を希望す、彼の時々刻々氣變りして、爲めに妻を煩すが如き男は絕體的に排斥するものなり。と

勿論婦人諸君は萬事放任的にして寬容あり、男子らしくあり、信實あり、節操ある男子を選ぶ事に異論なかるべし、其の婦人は更に一歩を進めて曰く、

吾が理想の良人は寧ろ美貌を好まず、美といふも何

程の事かあらん、然もそれが爲めに自負心を起されて、妻の煩ひたる事少からざるは迷惑千萬ならずや。

或る貴夫人は曰く、

理想の良人として何よりも大切なるは其人品確乎として馬鹿らしき眞似をせず、努めて婦人の注意を引かんとするが如き女々しき振舞なき男にあり。女の愛情は良人の大概の缺點を寛容するに吝ならざるも、馬鹿らしき振舞の一事に至つては終に之れを忍ぶ能はず。」と

實に男子の馬鹿らしき言行は、其妻をして穴にも入り度き思を起させる（西洋にては床の下一里も下に在りたいといふ）のと同時に良人に對する敬意全く消滅して又回復すべからざるに至らしむ。



亞米利加の一婦人は曰く

理想の良人とは彼の女王たる妻の目前に衣服、言語、行爲の禮を亂さぬ心掛けを始終失はぬ男子を云。」と

○結婚準備の困難

結婚は女子に取りて少からぬ苦勞に相違なし、去れば之れが爲めに、結婚準備を大層に考へ爲めに失敗に終らしむる事往々あり。女子の結婚期に達するや誰れしも肩よりは羽を生じ、頭の周邊より輪光を放てる天女にも劣るまじと勉むるが常なれども、男子の方よりいへば斯る天女よりも却て凡庸の婦女を好むものなれば、かゝる天女の失

意に終る場合多きは笑止千萬なり。
又女子の中には人傑英雄を良人に持たんとの希望を懐くものあれど扨て結婚の曉に至れば、遂に凡庸の男に配せるを發見するならん。又友人の我が爲めに撰び與れたる男子と良緣を持續けたる例は極めて罕なり。
彼の自由結婚とかいへる如く女子の婚を約するに當り、相談すべき筈の兩親へ相談せずして、行ひたるものは後悔多し彼等若し其以前に相談せしならんには多くの空想を醒ますに足る訓誡も與へられたるならんに惜むべし。と
譬へば男子が靑年時代に軍人たらん事を夢想するがごとし、其原由を尋ぬるに、唯だ華麗なる軍服をまとひ、帯劍をなし、冒險的生活と、是れに伴ふ榮譽を博すといふに過ぎざるなり。夫婦生活に對する女子の夢想も又之れと同じく、唯だ美しき衣服や寶玉の飾や、相愛的生活、といふに過ぎざるなり。去れど軍人たりとて常に戰鬪し常に榮耀あるものにあらず、又良人たりとも間斷なく其妻を愛すべきにあらず。是れ軍人生活と夫婦生活の屢々失望に了る事多き所以なり。
娘時代に十分の準備を爲したる人も新世帶を經營するに當つて、案外に多くの費用を要し、良人に之れを謀るも、普通の男子は家政上に關する智識の無き爲め一も同情を表さず一の補助をもなさず、去れど其家計に對しては不平や、御談義や、澁面やにて、彼の天女に對しては餘り面白からざる現象を生ずるに至る。
理想に耽る靑春の娘も結婚の一事に對しては其裏面を輕々看過し、既婚者の忠言に耳を傾けざるあり、經驗に富める老婦人は曰く、
新夫に接するは恰も猛獸を飼ふが如し、其飢えつゝある間は到底愛らしかれと望むべからず。
又一人の經驗家あり
新婚の一年間は決して儉約などいへる事を念頭に置くべからず相應に華美にし相應に散財すべし、良人も之れを是認するものありと。

○一見の戀

一見せるのみにて戀に狂するは女子よりも男子に多し

是れ單に空想上の戀にして決して眞の戀にあらずこのごとき戀は何時又他の婦人に對して同じ戀を繰返さずとも限らず、女子は努めてこのごとき男子を避くべし、かゝる男に確乎せる心あるものは甚だ稀なり、女々敷男らしからざる戀といはんのみ、此種の戀を爲すものは精々詩人か、美術家か、俳優かに過ぎざるべし、良人としては三文の價値無し。一見せるのみにて戀に狂するてふ事は其心の弱くして自制の念爲きを表せるものなり、男らしき心無き證據にして結婚するも永續の見込なしと知るべし。



眞の戀も始めて一見したる時に根さずとは斷言せざるも、まづお互に相識り相交るに至つて其言行の美に魅せられ、漸次に戀增るてふ種類の戀こそ望多きものなれ。

要するに堅固なる戀は情と共に、又理に依つて支配せらるべきものにて、情のみに依賴するの戀は危險なる戀なり。情以外更に理を放れずして戀せよとは誠に青年男女に對して剴切なる忠言たり

○女の天職

唯物論者は單に婦人の天職は人の母たるに在りと說けり、同論者たるナポレオン一世は「最も勝れたる婦人とは如何なる婦人なりや」との或る貴婦人の問に對

して。

世に最も勝れたる婦人は多産（多い子持）の婦人なりと答へたり、人間を大砲の餌食とのみ心得たるナポレオンにしてこの答あるは寧ろ奇といふべし。倫理學者は更に一歩を進めて婦人の天職は人の母たり妻たるに在りといへり。

婦人果して前二說以外更に天職を有せざるか、否、婦人は家族的たると共に又社交的たるを要す、文明社會は一大粧飾物たり婦人の世に在るは恰も庭園に花あるが如し。

人或は婦人を目して罪惡の原動力なりと批難するも亦一方には男子の企てたる偉業の鼓舞者たるの實證を認むべし。もし社會にして婦人無からんか男子は懶惰となりて零落すべし。吾人は親切にして且つ愉快なる婦人の無き處には生存するの價値を認めず、世に空氣無くも尙ほ忍ぶべし婦人無くしては片時も忍ぶ可らず吾人は寧ろ唯物論者、道德先生に反抗して美術をして婦人に其美則ち肉體美、心美、情美を以て社會を美化するものたりと絶叫せしめよ。

故に婦人は自ら出來得る丈け美しくするの務、柔和、可憐以て一世を魅するの務を忘却すべからず、若し之れを怠るが如き事あらんか、是れ人類社會に對してのみならず、天に對して其責を免るべからず、婦人の勢力ある國家は益々興隆すべし。

## 家庭間の交際

松山俊子

個人が寄り集つて一社會をなして居る以上は、互に交際するの必要がありますし、また是非交際せねばなりませぬ、併し個人と個人との交際は既に多くの人によりて說かれたとでありますから、余は茲に之を言はず、餘り人の筆にせぬ家庭と家庭との交際に就て、私見の一二を陳述致しませう。

さて家庭間の交際と申しましても、種々の區別があります。今左に其大要を圖解すると。

家庭
- 親戚
  - 家長系及び主婦系
  - 父方及び母方
  - 遠姻
- 他人
  - 朋友的關係
  - 知己的關係
  - 師弟的關係附主僕的關係

尚ほありませうが、大要こんなものでせう、今之に就て少しく記しませう。

◆家長、主婦系　の最も新しい關係は兩方とも他より養子養女となつた場合ですが、これは左迄多くはありません、大抵は其家の長子に他より嫁が來るのですから、主婦方の親戚は一番新しい關係なのです、故に茲には先づ之に就て陳べませう、さて緣ありて今迄他人であつた女が嫁して來ると、爰に新しい親戚が出來ます、之に對する良人及び其家族の態度如何と云ふに、其家によつて異いまするが、大體から申せば左の如くであると思はれます。

一、儀式的のとは無論眞面目に執り行ふが一よろしい、けれとも始終四角四面で、恰ど社杯を着て端座して居る樣な態度はあまり好ましくない、一と通りの挨拶が濟んだならば、圓く打解けて先方の家族に對し、恰も己が家族に對するが如き態度をとるがよい。

二、是等の外に外用の歸途とか何かの折は門口丈でもよいから立寄るがよい、若し時分時でもあれば請ふて家庭と共に食卓に着く樣にするがよい、併し之を餘り再三してはなりません。

三、双方の家にて執り行ふ儀式上の折に助け合ふとは云ふ迄もありませんが、時には春花秋月、相招き相招ねかれ、時には義兄弟と共に散策に出づるもよい。

四、特別の場合は格別なれど、概して云へば、己より先方の內政上に關係せず、たゞ相談に會ふて始めて相當な提議に及ぶべし、而して成るべく「斯く爲せ」的に出ずして「斯くしたならば如何でせう」的に出づるがよろしい、つまり「！」でなくて「？」にやるのです。

要するに家庭間の交際は奇麗で淡泊なる方が最も無難で、又た永遠の法です。

▲父、母方　これは家長から云へば、伯叔が其主なるもので、一家にとりては最も關係の深い親戚です。是等互の關係に就ては、生活程度の如何によりて異ひますが、一般から申すと、お互に夫れ相應に生活し、父母若夫婦達者である間、即ち共に大した事のない間は無事平穩でありますが、どちらかに何かの事變が起りますと、頼る所は此身内ばかりですから、常々最も親密に交際して居らねばなりません、併しこの種の關係に就て、例により一つ書をしますと。

一、平生は互に内事にあまり立入らぬ樣にし、清く正しく交際して居るがよろしい、時にお互に反目する樣になるが、親類交際をせぬなど〻醜い騷ぎの持ち上がるのは濫りに伯父風を吹かせ、家の内事に迄干渉をするからであります。例へば嫁を貰ふとか嫁にやるとかなどの折に當人も承諾し、父兄も至極同意なのに、方角の家柄のとくだらぬ事を申立てたり、子女の教育に就て干渉がましき事を云ふたりして、當然其父兄の權利に屬することを兎や角う云ふなどの事です。元より御互の家の興廢や、なにかに關することは談合はせねばならぬし又た親戚間より折合はねばならぬが、さりとて干渉は宜しくありませぬ之を約言すれば獨立權を犯さずして、互によく讓り合ふ樣にする事です。

二、其代りお互に迷惑を懸けぬと云ふことを心掛けねばなりません、干渉を受くる樣な事になるのも畢竟迷惑を懸くる爲に起ることが世間には隨分あります。一番明かな例は金錢問題或は生活問題であります、此事に就ては詳しく申さなくとも判ることであれば述べません、唯だ充分注意して、獨立の生計をなしお互に餘り立入らず、また親戚に迷惑を懸けぬ樣になさいませ。

三、何等かの事件で親戚會議を開かねばならぬ場合にも、決議書を作り調印する計りで濟まし了ひ、實際に開會せぬはよくあることだが、あれは矢張眞面目に開く方がよろしい、唯だ調印ばかりで濟して居り爲めに意外の出來事が持上つて來ることが珍らしくない。

四、不時の出來事の時は金品なり勞力なりと充分に助け合ねばならぬが、其他の儀式的答贈は一切廢して

貰ひたい、これ舊慣を敗る破荒かも知れませんがこれが世の虚儀虚禮を匡正する原因となるのですから、先づ親戚間より始めるがよいと思ひます、かう云ふ余の如き三四年來實行して居ますが、其結果極めて良好であります。

五、五節句を始めとし誕生日とか、祖先の紀念日とかは眞面目に執り行ふがよい、或人は無意味だとハイカラ染みたとを申すが、余は左樣は思はぬ、つまり是等は機會を利用して親戚互に親睦するので、無意味の中に有意味があるのです。

其他申せばなほ種々ありますが、理想は一切言はず、唯だ事實いづれの家庭でも出來得る所を記するに止めます。




▲婚姻に關しては前第二項の例を斟酌して應用すればよろしいでせう、併し「遠きものは愈疎し」との諺もあることですから、餘り遠々しくならぬ樣に氣をつけるがよろしい、けれども「其間心を用ゆる處なくんばならず」と云ふことの眞味を御察し下さい。

さて是で親戚間の交際に就て大要を申終つたとして、是から他人との關係の一二を述べませう。第一は

▲朋友的關係であります。一言に朋友と申しても親友もあれば昵友もあり、親粗の關係は種々ありますが、今一々之を陳述するは容易ではありません。ま

た左程必要もないと思ひますから、たゞ普通の事丈を少しく述ぶることに致しませう。

一、會心の友と云ふものは誰しも有ちたい、けれども容易に得難いものであると申ます、併し是等のとは暫く云はず、假に爰に此會心の友を得たとして其交際に就て申ませう。

爰に新夫婦があると致します、これが双方とも御互に會心の友を有つて居ると假定しませう、若しそれが夫婦であれば猶更結構ですが、さうでないとしても、よろしい、個人としての交際は勿論の事、家庭としても親密な交際をせねばなりません、他所に世帯を持ち親戚は遠方だといふ場合は殊に入懇にせねばなりませぬ。總じて會心の友と云ふものは、時に兄弟よりも多く心事を打あけることが出來るものですから、是等の友を得ることが大切である、けれどもこれは容易に出來るものではないが、若し得たならばお互に天與の幸福となし交際を永續する樣に努めねばなりません。申せばまだありますが交際と云ふ主題に遠くなりますから、管々しくは申しませぬ。

二、竹馬の友、學校友達など會心の友に近い友人(會心の友は多く是等より來る)などはよく撰擇して、親しく交るがよろしい、けれども或程度に止めて置く樣に注意せねばならぬ、即ち金錢上の關係などは殊に然りであります。

▲**知己的關係**　これは中々範圍が廣い、而して普通の交際の廣いとか狹いとかいふのは多く此の多少によります(これは朋友關係と類似して居り、また分ち難いものもありますが、暫らくかくわけます)さて此關係も種々ありますが、今其一二を申せば左の如くでせう。

職業上の交際　同業的或は取引的、及び同僚

嗜好上の交際　例ば圍碁とか詩文とかの如き道樂仲間の關係

隣保互の交際　即ち向ふ三軒兩隣の近所交際

途上的の交際　即ち知人の知人といふやうな見知越で途中逢へば挨拶する位の薄い關係

などでありますが、是等は一言に申せばあつさりと

交際するがよい「親しむべく近けしむべからず」これ根本的の交際主義であらうと思ふ。併し前四項小職業上と隣保間の交際は、出來る丈、許す丈親しくして置くことが肝要です。而して「善惡共に評判せぬ」のが宜しい、所謂口は禍の種で、交際を破る原因になるから、謹しむべきである。けれども善事は多少語つてもよろしい、が、程を忘れてはならぬ。それから又談話中他人の風評をしてはならぬ、何となればこれが其の人とどんな關係となつて居るかも知れないから。



▲師弟的關係に就ては、師の方では何時々々迄も「我は汝の師なるぞ」と云ふ樣な思想を脫し、次第々々に同等の待遇に及ばねばならぬ、そして陰に陽に其の弟子をあまり目立たぬ程度に於て引立てゝ行くことを心掛けねばならぬ（今斯樣なことがありやなしや、中々に心細い譯です）、又弟子の方では如何に自分が立身し時に舊師を凌ぐ樣なことがあらうとも、先生は矢張先生として何處々々までも敬重する心事をなくしてはならぬ。斯く云ふ余の知人中に此點に大に注意して居る人があります、其は斯ういふのです、彼は今大學の助教授をなし、且つ秀才として多くの希望を屬せられて居る青年ですが、彼の小學時代にお世話になつた教師は時勢に後れた結果さる官衙の門衛になり、今は郵便

配夫になつて居ますが、彼は決して幼童當時の事を忘れず、折々その家を訪ふて舊交を温め、其子の教育に就ては種々骨折つて居り、また勿論學資も補助して居るが、自分の手から出て居ると云ふヿは毫も知らせず、學校から奨學金と云ふ風にしてやつて居る、これ實に好箇の例ではありますまいか。世は如何に翻雲覆雨のあさましいとは云へ、斯様の人もあるのです。

▲主僕的關係　に就ても、如上の呼吸を呑み込ねばよろしいと思ひます。

　さて是より交際の楔子たる

▲談話及話柄　と云ふことに就て一二を述ませう、さて談話は動ともすると種子が絶ゆるもので、殊に出ること少き婦人は左様であります。

　扨こゝに來客があつたとして、先づ天氣はどうの、御機嫌はのと一通りの挨拶が濟みて兩々對座致しますると、談話はぱたと止まつて何となく手持不沙汰に見ゆる人が多くある様に御座います。されぱと云ふて同じ事を繰返すのも亦た變なもの、或はまた睨み合ふて居るのも、不躾千萬でありまする。そこで一家の主婦たり或は人と繁く交際する婦人は、常々談話の種子を蓄へて置く様に心掛けねばなりませぬ。

　如何にすれば之を爲すことが出來ませうか、これさして六ケしい事でもありませぬ、特別に研究するを要しませぬ、唯だ少しく注意して世間の出來事や、四時折々の事柄に注意するのであります。そうしますると談話は滾々として湧き出る様になります。併しながら材料が充分なるに任せ、對者を見ずして無暗に何でもかでも喋り散らすのは所謂多辯者で寧ろ擯斥すべきであります。佛者ではありませんが、人を見て法を説けと云ふことを深く記臆せねばならぬ、即ち其人相應に談話するのであります。これは鳥渡困難の様ではありますが、其人の風采や始めの談話のし振りで大抵はそれと察せらるゝもので、少しの注意を拂ひさへすれば大抵は間違はないものであります。

　併し誰人にでも通用される、また當りさはりのないのは、草木のヿなどで、來客が床の間に活けられて居

る花に目をつけた時或は庭先の草などを一見して居る時など、それに談話をしむけ、それからそれと話すのであります。

されど訪者も被訪者も氣を注けねばならないことは人の批評や、金錢のことなどで、特別なる場合の外は決して話してはなりませぬ、或時のことでした某博士の夫人が手に傷を負ふたから繃帶の儘さる集會の席に出ました、すると他の一婦人がそれを見て種々慰めてから、どこの醫者にかゝつて居ると問ひますから、博士夫人は何の某と申ますと、そんな藪醫者にかゝらないで云々と云ひ出しましたから、博士夫人は覺へず流汗背を濕しました、これ實はその藪醫者と云はれた醫師の母親もその席に居つたのでしたから。



此の如き不注意は遺憾ながら兎角ありがちで御座います「物言へば唇寒し秋の風」實に是等をや云ふので御座いませう。

要するに一般の婦人は今少し談話といふことに注意し、且つ其種子を蓄へることを勸めそれから之を口に發するに當り其對者、其場合を觀るに忠ならんことを望むものであります。要するに談話は交際上缺くべからざるものであります、また人の品位を高め、或は卑くする追分てあります。

▲無言の言葉　とは外國語の所謂 Tell-tcre tongue の意

味を譯したので、即ち音聲を發せずして所思を對者に通ずることを申すのです。我國の所謂「目で物を言はせる」「身振で悟らせる」などは此の類であります。私見によると、整頓して居る家庭は騒しくなく、不整頓な程騒々しい、例へば同じ兒童を誡むるにも、親が聲を涸らして云ふても改めない様なのが騒々しい方で、唯一言靜かに「これ」と云ふ丈で、兒童のいたづらがひたと止まるのが整頓したことです、それから是れは接客の時にも應用されます。如何に言葉巧に接待しても、其顔色や姿容に伴ひませんでは、客の方でも快よい感じが致しません、若し之に反してそのすべてが眞情を滿して居たならば、大なる滿足を與へ得らるゝであらうと思ひます、是等の點が彼のテルテールトングの要用な處です。併し此應用に就て注意しなければならんのは來客の前で家族に應用せし場合です、若し是を誤用すると、意外な惡感情を與へます、要するに此應用は其人の常識に訴へるより外ありません。陶淵明曰く「但識琴中趣、何勞絃上聲」と、Tell-tare tongue の眞意はこれであります。

家庭間の交際に就ては未だ十の一を盡しませんが、再び題を更めて申すことに致しませう。

## 家庭暦に就て

白井みちしば

余は今回覺束なくも家庭暦なる一表を編みぬ。これ元より淺學なる余一個の私見なれば、漏れたるもあるべく、謬なるもあらむ。而してまた編成法に於ても整はざる處多かるべし。若し讀者にして余が愚を憫みて高教を垂れ、他日模範暦を編成するを得ば、ひとり余の幸福のみにはあらざるなり。

まて私見のまゝ。少しく申上げん。

▲前半期　自一月一日至六月三十日　半ヶ年間

○元旦祝會　一家族相會し共に慶す、儀式方法等は各家慣習あれば、敢えて記さず。

元日や神代のこともおもはるゝ　（守武）

○仕事始　家族各々其職務に就くの式を行ふ。家長の命令或は約束あるなど、其家庭のまに〳〵。

○節分　例の「福は内鬼は外」の聲高し、

世の中はかずならねどもひゝらぎの
色に出てもいはじとぞ思ふ　（爲家）

○初午　男の子等の喜こび樂む所なれば人の知れる如し、

はつ午や稚手に唯うち鼓　（川支）

○紀元節　こはいふ迄もなし、君が代の曲東西に響く家庭に於ても小祝會なかるべからず。

○涅槃會　佛家之を行ふ。

負ふてきて母おろしけり涅槃像　（彈譯）

などゝ家庭としてまた面白からずや、



○桃花の節　雛祭など必ずなすべし、舊弊とか無用のとなどのたまひぞ、これ一家の娛樂ぞかし、

めぐり來る彌生も久し三千年に
なるてふ桃の花のさかづき　（爲家）

彌生三日枕負ふ子の姿かな　（尙白）

○春期彼岸會、即ち春期皇靈祭日嚴かに守ると共に萩の餅などつくりて一家相樂め、

戸障子を明はなしたる彼岸哉　（水札）

隔なき團欒の樣ども解されてをかしからずや。

○灌佛會　或は佛生會。これまた佛家のとなれど、時や長閑なる春の頃老若須く詣すべし。

灌佛のその頃清し白襲　（尙白）

○觀櫻筵　これ家庭の春の親睦會、相携へて名所なり郊外なりに遊ぶべし、日も地方により家族の都合によりて定むべし、

わが心春の山べにあくがれて
なかく〵し日を今日もくらしつ　（貫之）

見渡せば柳櫻をこきまぜて
都そ春のにしきなりける　（素性）

○汐干狩　海近き人は試むべし、

青柳の泥にしたるゝ汐干かな　（翁）

○摘草　姑も行け嫁も行け祖母も孫も、山に野邊に

はゝこ草よめ菜もともに摘み入れし
かごには春のいろあふれつゝ

○端午の節　男の子のあるは勿論、その他の家にても祝へや、

けふ見れは玉の臺もなかりけり
あやめの草のいほりのみして　（拾遺集）

長刀の五條を通る端午哉　（百里）

---

○地久節　これ國母陛下の御誕辰、祝ひまつれ、崇めまつれ、天長節のその如くに、

○花の祭　六月三日即ち第一日曜にして小兒の日ともいふ、少年男女互に花を携へ來り、一堂を飾り花の德を頌し、歌ひつ語りつ舞ひつして花の德を慰めよ、かくて後病院なり、病者なりに贈りて病める人を慰藉せよ、これ我が切に家庭に勸むる所、日は必ずしも此日ならずもよし。余は記臆す、明治卅年の此日京都に在りて一堂に昇らんとして門前大原女の花を呼びつゝ通ふを見て歌ならぬ歌一首を口ずさみき、左の如し

花や花花をめせ花花や花
いろさまく〵の花をめせ花

○半期整理日　既往半ケ年間會計記錄其整理をなし、また後半期の準備をなすこと肝要なり、夏越の祓あるもこの日なり。

みなかみもあらぶる心あらじかし
浪もなこしの身滌しつれば　（伊勢大輔）

▲●●●後半期　自七月一日至十二月卅一日半ケ年間

○星祭、牽牛と織女と相會ふといふ日にして竹に短冊を附して相喜ふなど興あることなり。

はるかなる年のわたりも限りあれば
漕よせけりな天の河舟 （景樹）

○靈祭 亡き人の靈魂を祭るは人の知れる如し、盂蘭盆など云はでも哉、

靈祭る宿や晩鐘常ならず （調柳）

○納涼筵 こは夏の家族親睦會にして、時により家により山に海に森に將た家にそのむき〴〵なすべし。

おのづから涼しくもあるか夏衣
ひもゆふくれの雨のなごりに （清輔）




○觀月筵 望の夜一家團欒して明月を賞す、興多きこと云ふ迄もなし、多く説明せぬこそよけれ、

くまもなくかゞみと見ゆる月影に
心うつらぬ人はあらじな （長賀）

われ人のあらそひなくて月見かな （野披）

○重陽 月と日と九、陽の數に叶ふが故に重陽といふ、如何にして樂みまた歌ふべきか
かもまた人知れり。

けふになりて菊つくらふと思ひけり （二水）

限なき齡のみかは見るからに
こゝろものぶる白菊の花 （清[illegible]）

○秋期彼岸會　春の彼岸と同じ
　尊まる彼岸の空や黍團子　（蕉字）
○孔子生誕祭　釋奠とて二月八月の上丁日孔子及び十哲を祭りし例は古來多し、なれど近來は此陰暦八月廿七日生誕を紀念するもの多し、
○茸狩　これ愉快なる秋の郊外運動なり、家庭の主婦は時をはかりて一日の遊を試みよ
　茸狩や鼻の先なる歌かるた　（其角）
○天長節　說明を要せざるべし。
○紅葉狩　狩くらは秋の一と日興やつきざるべし。
　いつの間にめぐりはてけん村時雨
　・そめのこしたる山のはもなし　（景樹）
　かつ散りて御簾にはかるゝ紅葉哉　（其角）
○七五三の祝　髮置、袴着、帶解の祝にて此年に當れる幼兒を伴ひて產土神に詣するは今もなほなり。
　髮置や千筋と撫る親心　（白雲）
　袴着や子の草履とる親こゝろ　（子童）
○煤拂　十二月鬼宿に發り吉日なれば煤を拂ふと云ひ傳ふ陽成天皇の御時に始るとか、
　夫婦してはづれぬ戸なり煤拂　（乙由）
　何方へ行て遊ばむすゝ拂　（車白）
○翌年計畫日　翌年の歲計その他一ヶ年の豫算をたつる爲に此日夫婦よく談合するを要す
○聖誕節　即ちクリスマスにて基督教家は勿論其他の人にても祝す、家族親戚知己の物品贈答或は慈善をなすなど、その人の心々。
　このゆふべまづ咲きそめし梅が香の
　のぼるや神の御前なるらむ
○大祓　嚴かなる神事あるは誰も知れる如し
○除夜會　すべての用を終へて後、家族相會し一年の感謝會なり、開くべし。福壽麥などもおもしろからむ。
　もの〻ふの八十うぢ川をゆく水の
　流れてはやき年のくれ哉　（宵朝）
　われ曾て讀めぬものあり年の暮　（尙白）
▲●●●特別暦　これ其家々によりて異なれば、各これに記

入せらるべし、家庭としてはこの暦必ずなかるべからず。

○祖先祭　即ち先祖を祭る、

○考妣祭　父或は母の永逝の日を紀念す、法會もよし、紀念會もよし、なすべきとはその家によりて異れり。

○誕生日　家族各人の誕生日を祝すべし。方法は家々にて適宜になすべし。

○家族祭　こは一家の中の永逝者を紀念する會。

○起業紀念日　一事業に着手せし日を紀念し、當日の多忙勞苦を忘るべからず。

○結婚紀念日　こも亦た祝せざる可からず

○親戚會職　日を一定し置き、何かと談し合ひ併せて親睦會となすは必要ならん。

○苦難紀念日　天災或は其他苦難に遭ひし日を紀念すべし、例へば會津の人々が落城の日を紀念し濃飛の人が地震を紀念するが如し、又一家内に關することにてもよろし。

▲小暦　一々掲ぐるに暇あらず、そのむきに定めらるべし、こゝには普通なるもの一二を掲ぐるのみ。商家の夷講、俳諧家の翁忌、其他針供養、雛祭、西行忌、などそれ〴〵なり。

睦じうして一と塊の乾けるパンあるは
爭闘ありて居れる畜の盈たる家に愈る
――ソロモンの箴言――

## 牛乳の損得

茨城さだ子

凡そ幼兒は、其親の乳を以て育てるべきものである、これは哺乳動物一般の原則である。生理上如何しても母の乳を以て育てる程生兒に取つて宜い事は無いのである。處が不幸な事には、多くの人の中には種々の病氣の爲、又は職業上の都合、或は種々の事情に依つて、乳の出ない人達が、止を得ず己れの乳に代へるのに牛乳を以てするのである、實に其生兒は生理上、

又經濟上又恩愛上から誠に不幸な子と云はなければならぬ。

第一母の乳と云ふものは如何なものであるかと云ふと、最も其生兒の體質によく適つて出來て居るものである、即ち胎兒が生れると胎便と云ふものをする、之れは生兒がまだ母の胎内に居た時に、自然に其腸の中に溜まつた處の排泄物である、云ふ迄もなく之れは一時も早く外に出してしまはなければならない、其處で其頃の母の乳は此排泄物を外に出す必要上下し藥と同じ効能を持つたもので、即ち生兒が其乳を飲むと、其爲に身體に不必要な排泄物は皆外に出てしまふ、母乳は已に初めから生兒に極必要な樣に出來て居る。而して子供の生れたては、まだ胃の働きも腸の力も充分で無いから、極消化し易い樣に、薄くて脂肪の少ないものが出て來る、次第に生兒が成長するにつれて分量も增せば其中に含んで居る性分も次第に濃く變つて來て、丁度其時々々子供の體力と、相當したものが出るのである。而して其溫度も冷たからず熱からず、丁度體溫と同じ溫度を常に保つて居る。

然るに牛乳は然うは行かない牛乳は牛の子を育てる爲に出るものであるから牛の兒には適當して居るが、人間の子には元より適ふ道理が無い、生母の乳に比べると第一甘味が足りない、夫れに大變濃くて到底其まゝでは生兒に與へる事は出來ない、又脂肪を多分に含んで居て薄弱な子供の胃腸には到底消化出來ないのである、夫れから溫度が大變に異ふ事等と斯う云ふ風に生母の乳に比べると只其性質だけでも劣つた處がある此性質の異なる爲、之を用ふるにはなるべく其子の消化力に適ふ樣即ち生母の乳と同じ樣なものにしなければならない、之れが又非常な手數で、生母が懷をあけて張り切つた乳房を直に子供の口に含ますのと比べたら其の手數は實に容易な事ではない、即ち甘味が足りないから之れに適當な甘味を付けなければならない、之も直ちに常の砂糖を用ゐては消化に惡いから、一度灰ぬきをしたものを用ひれば充分とは云はれない、次ぎには薄めなければならない、此薄め方も一定しては居らない、次第に日を經るに從つて生兒が大きくなれば何時迄も初めと同じ薄さにしては置かれない、且つ夫れだけでは溫度が子供の身體に適當して居ないから生母の乳と同じ位の溫かさに溫めてやらればならぬ。

扨又夫れを入れる機械が一ツの手數である今は大變に結構な器械が出來て消毒した牛乳にすぐと其瓶に乳首をつけて飲まされる樣になつて居るけれど、我々が

まだ五ツ六ツの子供の時分にはそんなものは無かつた、否都には有つたかも知れないが偏鄙な田舎では不完全なものを得るのでさへ容易では無かつた、而して夫れは丸い平たい少し口のまがつた瓶で、其口には孔があいて居て、其處から硝子の管をはめ上には長い五寸も六寸もあるゴムの管を接いで、其先きに乳首を付けたもので有つた、斯う云ふものであるから夫れを掃除するのが誠に厄介で、長いゴムの中を洗ふのには中々骨が折れる、而も細い長い間であるから如何しても充分に洗ひ清める事が出來ない、で二三日も經つと一種氣持の惡い匂がずる様になる、消毒など云ふ事も充分に出來なかつたから恐らく瓶の中にも管の中にも乳の洗ひのこりの腐つたものが殘つて居たに違ひない夫れに比べると當節のものは改良して簡便に而も充分に殺菌も出來るで有うけれども、之とて中々容易の事ではない、少し注意を怠れば危険な黴菌が續々出來て來る、夫れには其度毎に湯を沸すなり消毒薬を用ふるなりして、丁寧に洗はなければならない、斯ふしなければ完全に牛乳を以て子供を育てる事は出來ない。而かも斯様に多くの手数を掛けても生母の乳より完全なものは出來ない、如何しても劣りがちのもので



ある。

のみならず此牛乳は最も早く腐り易いものである、一度消毒しても一旦空氣に觸れると直ぐに空氣中に居る黴菌が之に付いて夫れを腐らせる。

瓶や乳首の隅に少しでも洗ひ殘りのものが付いて居るのを氣付かずに牛乳を入れると、其洗ひ殘りの中に居る黴菌が忽ち其中で繁殖を初める。殊に夏は空氣の温度の高い爲めに其繁殖は猶更速かであるから、少しも油斷は出來ない併し冬だとて決して安心は出來ない。今飲ましたのだから大丈夫だろうなどゝ云つて飲み殘りの乳を其まゝ置いて又夫れを飲ましたが最後已に其中には黴菌が早くも入り込んで腐敗を初めて居るのである。世に小さい子供の胃腸病に罹るのは生母の乳を飲むものより牛乳を飲むものに多いのは事實で、夫れは如何にしても牛乳は腐敗し易いからである、又自分の家庭では如何程注意しても、若し牛乳屋が不注意ならば何にもならない、此頃は警視廳の取締りが八ケましいから、滅多に惡い事は出來ないけれども、脂肪の少ないのと濃いのとを一所にまぜて持つて來たり或は搾りたての牛の乳をまぜて來たりする事が有つて決して油斷は出來ないのである。

斯く油斷の出來ない處から、牛乳は必ず一度煮立てる乎、しかし一度煮立てたものは其中の滋養分は或は減じ或は不消化のものと變るのである。

牛乳の効能を充分に有效とするには、自分の邸内に牛を飼つて、夫れから搾り立てのものをまだ温かい内に飲むのが最も好いのだ。併しそんな事は容易に出來る事で無い、又出來るにしても其牛の種類を餘程よく調べてからで無いと大抵の牛に肺結核の黴菌を持つて居らぬものは無いと云ふ事であるから却つて然うした爲めに害になる樣な事が無いとも限らぬ、まづ少しは不消化になつても滋養分が減つても、まづ一度煮立てゝ夫れで滿足して置かなければならない。

之れを何にも心配氣のない母の乳に比べたら何れだけの手數と心遣ひとが要るかわからない。

夫れから之れは身體に直接に及ぼす害ではないが、精神上に及ぼす重大なる事がある。

母は其子を朝夕我膝に抱きかゝへ己が乳房をふくまして育てればこそ其愛情と云ふものは限りなく、深く凡ての上に深い注意の行き渡るものである、乳を與へながらつくづくと其顔其身體を眺めては何處に如何云ふ傷が出來たとか、腫物が出來たとか針で突いた程の傷でも直ぐに氣が付く。

又其子にしても軟らかに温かき母の胸に抱かれ、慈愛ふかき母の温容を眺めつゝ育てらるゝ内に、云ひ知らぬ感化を受けるのである、此感化と云ふものは實に

大きなもので、只乳を與へると云ふばかりでは無い、心なき下女や子守が牛乳の瓶を持つて與へるのと同一にならうか、實に無言の教育を此間に與へるのである。牛乳で育てるとなれば如何しても己が乳房をふくませる様に親しくする事が少ない時には、冷かな人の手に依つて與へられる事も自然に出來て來るので母子の愛情尊敬の念も従つて薄くなるわけである。




斯ふ云ふて來ると牛乳には一ツも取り處の無い様に思はれるが、然うばかりにも行かない又牛乳で無くてならない場合もある。

次第に社會が急がしくなつて來て、婦人が外に出て働かなければならぬ事も澤山に出來て來る、今迄の様に家にばかり居れば牛乳の必要は無い様なもの、斯る場合には如何しても子供をつれて歩くわけには行かないから、つまり時間の餘裕を作り社會に出て働く人には牛乳のお陰は大きなものである。

又牛乳を與へるとなれば自然時間が正しく守り易くなつて、懐をあければすぐに乳があるのと比べると、子供に規則正しい習慣をつけるのに都合の宜い事もある。

先一利一害である様なものゝ到底健全なる母乳に比べる事は出來ない。夫れを自分の大事な子を態々牛乳を以て育て人手にまかして置くのを自慢の様に思つて居る人があるが、之れは大きな間違である。止を得ない自分の職業や遺傳病の爲如何しても其乳を飮ましては子供の

爲めに惡いので仕方なしに牛乳で育てるのは是非も無い事であるが自分の不養生な爲めに身體を損じて、乳の性質が惡くなつたり、出なかつたりして夫れで牛乳を用ゐるなどは、誠に賞められない話、ましてつまらない感情の上から今迄出た乳が急に出なくなつて、其爲に牛乳を用ゐるなどは實に親甲斐も無い事で、第二の國民に對して誠に濟まない譯である、併し又一方から考へて見れば人は老少不定なものである、何時病に罹つて死なゝいとも限らない、不幸にして其母が死んだり、又は大病に罹つた場合などに、今迄生母の乳ばかり飲み慣れて居て、何しても牛乳を嫌つて甚だ困る事がある、斯う云ふ場合の要心に、小さい内から少しづゝ飲む癖をつけて置く事も又必要であらう。

## 患者生ぜし時の心得

### △早く病氣を發見する必要

病氣の起り始に、何處かに痛みを感ずるとか、咳嗽が出るとか、大小便の區別がないとか、眩暈がするとか鼻血が出るとか云ふやうな、素人にも直ぐにわかる症狀があれば、病氣に罹つた事が即座に知れるが、若しさう云ふ症狀の見えない時分には、餘程病勢の進て來る迄知らないで居ることがある、所が病氣によつては、少し手遲れになつても、非常に治療のむつかしくなる物があるから、早く病氣を見出して醫師の診を乞はなければなりませぬ。

身體の熱なども、一時に高く昇れば、家族が驚きなどして、素人にも分るが、毎晩五分や一度位昇ると云ふやうな熱は、久しく氣付かないことがある、所が此樣な熱は恐るべき結核の兆である事があるから、早く氣付かないと手遲れになる、故に素人の家でも體温器の一つ位は備へて置いて、少し惡寒でもすれば、折々熱を測つて見て、若し熱があれば醫師に見て貰ふと云ふやうにしなければならぬ、ソレモ一日二日位なら、少し風邪の氣味でも熱の出ることもあるが、二週も續けて毎晩少し宛熱の上ると云ふやうなのに至つては、警戒を要する。但し素人は體温器の用ひ方を誤ると危險であるから、是等の事も注意しなければならぬ。

小兒の病氣は大人よりも更に見出し難い、而かも小兒の病氣の中には急に惡くなるものがあるから、殊に注意しなければならぬ、小兒の乳を始終吐くとか、泣き聲がかれるとか、鼻汁が多く出るとか、便通がないとか、續けさまに泣くとか、手足が痙攣するとか、皮膚の色が變つたとか。云ふ時分には何所か惡いのであるから、兎に角醫師の診察を受けなければなりませぬ。

中には餘り用心が過ぎて、病人でもない者を醫師に賴む人もあらうが夫にしても唯手數が掛たと云ふ丈で、害のある譯ではないから、寧ろ此樣な過まちが出來る位に、日常病氣に注意されんことを望む。

### △手療治の危險

病氣の手療治は甚危險なれば、最も戒むべし、手療治をするより擬生だけに注意して、打棄て置いた方が安全である、手療治は無効に止まるだけならまだしもだが、却つて害になることが多い、親戚に醫者があると云ふ位の人が、得て素人療治をしたがるものである、吳々も生兵法をやつてはなりません。

賣藥もまた危險の一つである、尤も劇しい害を來たすの恐あるものは政府でも賣買を許さないから、大底は無効無害に近いものであるが、中には濫用によつて病勢を進めたと云ふやうな實例も少くない、單に眼の病氣、耳の病氣、胃病、子宮病と云つても、醫者の方から見れば幾百種にも分れて居るので、其種類によつては甲の病氣と乙の病氣とは丸ッきり反對の療治をせねばならぬことがあるから、眼の藥、耳の藥、子宮の藥など云ふ一切に効のある藥のありやうがない、若し夫が假に甲の病にきくとすれば、乙の病には害がなければならぬ筈である、記者は切に世人が萬病退治など云ふ妖言に惑されぬことを望むのである。

賣藥の中でも通じのない時に下劑を買つてのむ位はよからうと云ふ人もあるが、それも不可、何故かと云へば、便祕にもいろ〳〵の種類があり、下劑にもいろ〳〵の種類があつて夫々用ひ方が異るで、唯通じをつければよいと云ふわけのものではない、小兒、老人、姙婦などが、やたらに賣藥の下劑を用ひた爲に、回返へしのつかぬ失錯を仕出來すのである。

然し手療治の中でも怪我をして血の出るのを假に縛つて置くとか、誤て毒物を嚥下した時に咽喉に指を入れて急に吐かせるとか、醫師の處へ駈付る時間さへないやうな塲合の手療治は、咎める所か是非實行しなければならぬ、斯樣の所置の大體は素人でも平素から心得て居て貰ひたいのである。

## △醫師を撰ぶに就ての注意

病氣には皆夫々專門の醫師があるから、眼が惡ければ眼科、耳が惡るければ耳科、小兒には小兒科、婦人特有の臟器には婦人科と云ふやうに夫々專門家に就て診を受けるがよい、然し時としては、素人では、どの專門に往つてよいか分らぬことがある、又一時に二ヶ所以上の臟器の病氣があつて、專門醫二人以上の診察を受けねばならぬこともある、此樣な塲合には、先づ全科醫の診察を受けて、夫から專門家の門を叩くがよい、素人が眼の病氣で有ると思つて居ると、實は腦の病であつたり、腦の病氣と思つたのが、婦人科の病氣であつたと云ふやうなことは、決して少くないから、此邊の事も注意をせねばなりません。

さて一旦醫師の診察を受けたからには、其醫師に不信任の廉がない以上は成るべく同じ醫師の治療を受けるのが病人の利益である、夫は其醫師が最初から病氣の經過を詳しく知つて居て、治療の參考に供することが出來るからである、若し住地を轉ずると云ふやうなことで、止むを得ず醫師を換へる時分には前の醫師から病の經過と夫迄の治療法の概畧を聞いて置いて、次の醫師に告げるがよい。

なり〳〵は不信任の醫師を體よく謝絕する口實としても使はれるやうであるが、さうでなく方角が惡いと云ふやうな迷信から醫士を換へるのは、患者の爲に誠に不利益なことであります。

## △醫師の命令を嚴守する必要

病人を治療する上に就ては、醫師は實に無上の權力を持つて居るもので、塲合によつては刀を加へて人の腹を割きもする手足を斷ちもする、或は眼球をえぐり出し、喉笛を搔切ることもある、斯樣に醫士は病人に

對して、帝王と雖抵ふことも出來ぬ權力を持つて居るものであるから、其命令は神聖犯す可からずとなし、又た其の禁止をも能く守つて貰はねばならぬ、然るに若し患者と其の周圍の人とが、醫師の命令を守らなかつた時には、いくら醫師が一生懸命になつても、到底目的通に治療の出來るものではない、例へば一日三度に飲むべき藥を二度に縮めて飲んだとか、寢中では病人が氣持をわるがるから、醫者は止めて居たけれど、つい開へ連れて行つたと云ふやうなことは、別になんでもないことのやうに素人は思ふが、病氣によつては幾分之が病人の豫後に關係せぬとも云へぬ。

故にたとへ些細な事でも、一度醫師から命令を下されたことは、必守ると云ふ覺悟がなければなりません。

## △病室、病褥、被服等の注意

是等の注意は看護婦の居る所では、凡て其擔當に屬するのであるが、どの家庭にも看護婦を雇ふと云ふ譯にはゆかず、又病人は凡て病院に送ると云ふことも出來ないから、其大體は心得て置かねばなりません。

病室は住居の中でも最も閑靜で最も光線が能くはいる所には餘り光線の入りすぎない樣にする注意の要ることもある、又光線が室内へ直射することはどの患者にも宜くない。且つ空氣のよく流通する室を選ぶがよい、廣さは少くも六疊以上あつて、清潔でなければならぬ、室内には多くの什器などを置かぬがよい、殊に每度出し入れを要する日用の家具などを置いて、塵を騷がせるは甚だ宜しくありません。

臥床は洋風の臥臺で之に蒲團を敷いて作れば最もよいが、一般の日本風の住居では、矢張疊の上に蒲團を敷いて作つても差支へない、久しく臥る病人には成るべく軟かな敷蒲團を用ひるが可い、而して其蒲團は時々他のと取換へて日光に曝らし、蒲團の上の敷布は每度洗濯をせねばならぬ、殊に汗をかく病人や、熱のある病人には此の手當が必要である。掛蒲團は成るべく輕くて温かいものがよい、毛布は綿の蒲團よりも適當である。

永く臥て居る病人には少しの皺が背に觸つてもこたへるのであるから、敷布を敷くときには能く皺のないやうに注意しなければならぬ、又折々臥床の方向を換へて、病人に違つた側を見せると云ふことは、大に慰めとなるものです。

着物は軟かな、窮屈でない、汚れ目の見え易い物を着せ、よく其背中の皺を延し、緩く兵兒帶を締めさせて置き、每度取換へて洗濯するがよい、甚く汗をかく病人は每日でも取換へてやらなければならぬ、掛け蒲團さへ十分ならば、寢衣は綿の這入ぬ物の方が洗濯するに都合がよい。

## △飲食物及排泄物

病人の飲食物は凡て醫師の差圖を受けねばならぬ事勿論である。飲料は煮ざましの水、乳汁などがよい、兩方共生まの儘ではいけない、茶、珈琲などの濃いのは宜しくない、病人によつては薄いのでも禁じなければならぬ、醫師の特に許さぬ限は、酒類はたとひビールのやうな薄い物でも漫に用ふることは出來ぬ、熱ある病人などが、多汁の果物の汁だけを吸ふのは差支へない。

食物は病人の消化器が健で、左程衰弱して居ない以上は、通常の物を與へてもよいが、健康の人にてさへも消化わるしとする物、たとへば餅とか、鮓とか、貝類とか、章魚、烏賊の類、脂肪多き肉類などは、廢めて置くがよい、若し消化のわるい者、衰弱したものであれば、醫師の指定を乞ふて、其品だけを與へるやうにせねばならぬ、たとひ同じ原料で

も普通法で消化し易くもあるから、此點にも注意を要します。

空腹だらうからと云つて、時刻外に食物を與へるは悪るい、たとひ腹に溜らぬ程の物でも度々食べさせれば、為めに消化器を傷めます。

起き上ることの出來ぬ病人ならば、飲食は硝子管にて吸はせ、食物は匙で採つて食べさせるがよい、食事は出來る丈徐々させるがよい。

食物は餘り一度に多く見せない様にした方が、病人の食慾を進めて可い。

痰壺は少し許水を入れて置いて其中へ吐かせ、よき程に溜つた時之を消毒して便所へ捨てるのである、消毒の方法は醫士に能く聞いて置がよい、大便小便は厠へ行くことの出來ぬ病人は、便器でとらればならぬが冬などは便器の冷たくないやうに湯にて温めるとか、周圍に布巾でもあてるとかしてやらればなりませぬ、便は醫師が見る必要があるときの外は、直に捨てゝ了ふがよい、傳染病殊に「コレラ」「チブス」「赤痢」杯の便は、適當の方法にて十分消毒しなければなりませぬ。

### △來訪者に就ての注意

醫師の診察に來る時が、前以て分つて居る場合には用意をして置いて醫士に成るべく時間を費させぬやうにせねばなりませぬ、たとへば湯の入用が分つて居れば、前以て沸かして置くと云ふやうにするのである、醫師に茶を出す為に、手間取るやうなことは宜しくない、況して酒とか食事とかの用意は無用の遠慮である、病人の病容態に就ては決して病人の前で云つてはならぬ、又何事にしろ醫師と私語くは病人の感情を傷ふものであるから謹むが可い、たとひ不満の事があつても、患者の前で醫士を軽侮するやうな素振を見せるは宜しくない。

來訪人は、必要のない限りは病室に通すに及ばぬ、若し醫師の命があれば、一切斷るがよい、病室に於て喫煙、飲食などさせるは凡て宜しくない、來訪者があつたとて、折角眠つて居る病人を起すやうな事は最も慎むべきである。

### △病人に對する注意

止むを得ない時は仕方がないとしても、病人に家事上の相談をかけるは眞々宜しくない、重い病人には、たとひ其精神が確固でも、一切相談をなしてはなりませぬ。

花瓶の花を取換へ、寫眞畫を枕元に置くと云ふやうなことが、病人の慰になるは殆想像以外である、故に是等の事は家族の殊に注意せねばならぬ點であらうと思ふ、あまり精神を刺戟しない世間の平和な出來事などは度々話して聞かせて退屈を紛らせるがよい、戰爭の噂などは、たとひ大勝利の吉報にしても、病人には不向であります。

加持祈禱などは病人が望まぬ以上はせぬがよい、神佛の供へ物を戴くと云ふやうなことは、為にならない、云ふまでもなきことながら、宗教上の迷信にて醫藥を怠るが如き族が、醫師の治療上最も迷惑を感ずるのであります。

病人の容態が急に變つたと云ふやうな時に、家人が騒ぐのは最もわるい、出來るだけ平穏にして居なければなりませぬ。

### △病後の注意

治療は醫師から可いと云はるゝまで續けなければならぬ、少しよくなると、服藥などを怠つて、全く廢めないまでも、二日に用ひるべき量を三日に用ひなどするやうになる、之が為に快復の期日が非常に永引たり甚しきは病勢が逆戻りをすることがあるから、注意しなければならぬ。

運動も急に過度に行つてはならぬ、醫師の指圖を受けてぼつ〱始めるがよい、病後の轉地は矢張醫師に適當な場所を撰んで貰ふが安全である、病氣によつて海邊のよい人もあれば、山中の温泉場のよい人もあるのだから、いよ〱快復後業務が執れるやうになつても尚一二ヶ月は精神も身體も健體と同樣に使ふことは出來ぬ、飲酒、喫煙なども決して平素通りにやつてはなりませぬ。要は靜養が大切である。

## △體温の測り方

人體の温度は通常攝氏三十七度であるが、病氣に罹れば此温度の上ることが多い、然し中には平温を保つものもあれば、却て幾らか下るものもある、温度の上り方が烈しいものは、四十一度若くは四十二度に迄も騰する、温度は病勢の進退に連れて始終昇降するもので、幾日も同じ體温を續けるやうなことは少ない、若し四十度以上の温度が幾日も續けば隨分危險な病勢であると云はねばなりませぬ。

體温は醫師が病氣の經過を知るに最も必要のものであるから、之を測ることを命ぜられた時には、其時刻々々に間違なく測つて置いて醫師に知らせなければなりませぬ。

人體の温度を測る驗温器は、何處の醫療器械店でも賣つて居る、代價は七八十錢位です、或は醫師に頼んで取寄せて貰つても宜しい、但し其驗温器は正確であるかと云ふことを確かめて置かねばなりませぬ、又年月の立つ中には狂がくるから、久しく使つて置いた驗温器は更に驗べればなりませぬ。

驗温器は、左右何れか腋窩に當るのが通常である、汗などの出て居る時には、乾いた手拭にて拭き、驗温器の水銀の溜つて居る部分が丁度腋窩の眞中へ行くやうにして、病人の腕を十分に胸側へ着けさせ肘から先を曲げて胸の前に置かせるやうにする、小兒とか精神の確かでないものの體温を測る時には腕を押へてやらればなりませぬ、デ十五分許經てから驗温器を取出し、其度を見て驗温表に記入して置くのである、通常驗温器の人體の常温、即ち三十七度の所は、赤い字で見はしてあります。

## △脈の數へ方

脈も病氣によつて増すことが多い、通常熱の病氣は脈も早くなる、病氣に因つては減ずることもある、其他脈が強い正しいも、病氣の容態を知る爲に大切で、是は素人方にはわかりませぬ、通常健康な人の脈搏は平均一分間に七十二である、然し此の數は健康な人でも種々の原因で變る、運動した時、食事の後、精神の激した時などは脈搏が増し、眠つた時、安靜にして居る時などは脈搏が減ずる、病氣では脈搏が百二三十以上、甚しきは百五十以上にもなつて數へきれぬことがある、あまり多い脈搏が永く續くのは危險な徴候である、脈は昔から醫者の手掌の方で手首より五分ばかり上の外側に近い所で測る事に成てゐる、即病人の手を執り、其部分に示指、中指をあて、十分に脈が知れる樣になつてから時計を眺めながら、脈を數へて、一分時間の脈數を正確に數へるのである、時計の「セコンド」が丁度六十秒を指す時から數へ始め、再びそこへ廻つて來る迄數へる樣にするがよい、途中から數へ始めると云ふと間違ふことがある、また四分の一分即十五秒時の間の脈の數を數へ、それを四倍して一分間の脈搏數となるやうな横着なことをせず、ちやんと丸一分間數へる方が確かである、若し少しでも怪しいと思はば、二度測り直すと云ふ位の勞を厭ふてはなりませぬ。

體温でも脈搏でも、あまり變つて居た時には、早く醫士に知らせなければならぬ。但痛などは急に増して、急に減るのが危險である。

## △薬の用ひ方

薬の用ひ方は、凡て醫者の差圖通にせねばなりませぬ、食事の前に飲めとか、食事の後に飲めとか、食事と食事との間に飲めとか醫士の云ふのは決して勝手に言ふのではない、皆夫々薬の性質に應じて必要があるからです、故に之に反いてはなりませぬ、同じ一日中に用ひ並すべき薬でも、三回にのめと云はれたものは三回に用ひねばならぬ、若し之を一回に纒めて服めば中毒せぬとも云はれぬ、飲食物の中には薬と同時に用ひてはならぬものもあるから、夫は豫て醫師から聞いて置くが宜しい。

投剤した人、小兒などは、幾回にも分けて用ひて兎に角一日中に飲みつくさねばならん、もし薬を厭ふ小供であつても何うにか誤し宥めて、是非服ませねばならぬ、こんなに厭がるものを服ませるは可愛さうだと云ふやうな親の慈悲の爲に、隨分愛兒を見殺しにすることが世間には間々ある、よくない事です。

咽喉へ塗る薬、耳を洗ふ薬などは、迚も素人が用ふることはむつかしい、強て用ふれば危險であるから、之は醫師に頼まれればなりませぬ、眼に點す薬、含嗽薬などは、能く醫師に用ひ方を聞いた上でするがよい。若し故あつて薬を用ふることが後れ、日を經て殘りの薬を用ひやうとする時には、一應醫師に差支へなきかを問ふた上にするがよい、殊に水薬、點眼薬などは時日を經れば腐敗し、變質する恐れがある。

二種以上の薬を用ひる時、たとへば内服薬と外用薬とを醫師から貰つた場合、又は同時に一家に二人以上の病人があつて、夫々薬をもらつた場合などには素より醫師の方でも間違ない丈の注意はしてあるが、患家でも十分注意を加へて置き、場所を別々にして置かねばならぬ。

薬によつては日光にあてゝならぬものもある、凡て暗い涼しい場所に置くが宜しい。

## △氷嚢使用法

氷嚢は急性の炎症のある部分、充血した場所、身體の内部に出血のある時などに其部分に最も近い體の表面にあてるもので、其當てゝよい場所、氷嚢の大さ、數などは凡て醫師の差圖を乞はねばならぬ。

氷嚢として用ひられるのには、牛の膀胱「ゴム」嚢、油紙製嚢などがある、何れを用ひてもよいが、就中膀胱が最多く用ひられてゐる、氷は錐などにて能き程に碎き、嚢に入れ固く其口を縛り、若し吊るすことが出來るならば、紐で吊るして體に重みのかゝらぬ樣にするのです。また幾らか氷塊の殘つて居る間は、嚢の中の水は氷の冷たさを保つて居るものですから、取換へるには及ばぬが、氷が溶けはてる迄打やつて居てはならぬ、冷やす場所は續けて冷やすと云ふことが最も必要であるから、始終注意して氷のなくならぬ中に取換へねばならぬ、又夜更けて氷が切れないやうに、餘分に見積つて買入れて置くが宜しい。

腹などに氷を當てた時には病人の寢返りをした時に、他の方へ、はづれて居る事があるから時々しらべなければならぬ、當てる場所がはづれて居ては何の甲斐もありません。

永くつゞけて氷嚢を用ふる時には凍傷を起することがある、之は一つは氷のあて方がわるい爲ですから、注意しなければならぬ、之を防ぐには氷をあてる場所に乾いた布巾を敷き、氷嚢の周圍も能く拭ひて成るべく氷の着いて居ないやうにし、且平均に重みが加はるやうにするのです若し凍傷の氣味があれば早速醫師に告げなければなりませぬ。

## △病人を清潔にする注意

入浴を許された病人は、度々入浴させるがよい、但し餘り湯に入れたり長湯をさせるは宜しくない、入浴後は靜に臥せて置くがよい、健康の人といへども食後直に入浴させると云ふことは、誡なければならぬ、俗間では種々の藥湯を用ふるが、さほど利き目のあるものではない、藥湯は皮膚を强壯にする効がある、冷水浴も之と同じ効用があるが、衰弱した病人などにはよくない。

入浴の出來ない病人は、身體を拭いてやるがよい、之を行ふには、冬は室を温めて置かなければならぬ、汗の出る病人などは、毎度身體を拭いて、寢衣を取換へてやれば大に爽快を感ずるものです。

朝目の覺めた時、食物を攝つた時などには、淸水にて含嗽をして、口中を淸潔にせねばなりませぬ、之は健康の人も同じであるが、病人には尙更必要である、含嗽を先にして、夫から食事をすると、大に食の進むことがある。

髮を梳り、爪を剪るやうなことは別に害にはならないから、大病人でない限りは之を行ふた方が寧ろ宜しいのです。

## △病室の掃除、空氣の交換

病室を掃除する時には、病人が動いて差支へない者なれば、他室へ移して置くがよい、さうでなければ、病人の顏に「ハンケチ」などをあて、塵埃の立たぬやうにせねばなりませぬ。

病室の空氣は、毎朝及午後にも一度窓を開いて交換するを要する、但し外に風が强くて塵埃の立つ時などは見合はせるが可い、冬の寒い朝などは、殊に室内が冷えては宜しくないから、日が當つて來てからするがよい、室内で病人の便通があつた時、又は繃帶でも換へた時は、臨時に窓を開けるがよい、窓は病人の枕の方よりも横手の方か、足もとの方を開けると云ふ注意が肝要である。

日本の障子は寒氣を防ぐことが出來ぬ代りにたとひ閉ぢて置ても空氣の流通はよいのである。故に冬などは別に之を用ひて空氣を換へるには及びませぬ。

## △傳染病の注意

急性の傳染病例へばペスト、コレラ、赤痢、腸チフスなどの始つた時は政府でも十分注意して豫防消毒を行ひ、病人は避病院に連れて行つて治療することになつて居るから、是等の病に就ては多く語るに及ばぬが、只一つ注意をして置きたいのは、急性傳染病の流行時には、各自十分攝生を守り、身體を强壯にして、病毒に抵抗し得るやうにしなければならぬ、消化器にやどる急性傳染病の如きは、消化器の損して居る者に最も感染し易い、故に大掃除なども結構ではあるが、唯やたらに家の周圍へ石灰を蒔き散らしただけで、飲食物などには一向注意せず、不相變暴飲暴食をやつて居ては何にもならない、腸胃さへ健康であれば、コレラでも腸チフスでも、恐るゝに足らぬと云つてよい程であるから、此點には十分注意せねばなりませぬ。

慢性傳染病中、殊に肺結核は世間に最も多い病氣であつて、極めて慢性のものではあるが、誰にでも傳染するから、甚危險である、此病毒は主に痰から傳染するのであるから、病人自身も周圍の人も注意をせねばならぬ、近來此喀痰の取締が追々嚴重になつて人の集會する場所では、凡て痰壺以外に吐いてはならぬ、病人自身も人に傳染させまいと思ふならば、いつも痰壺を携へて其中へ吐き、溜れば消毒して便所へでも捨てるやうにせねばならぬ、又病人が咳嗽をする時、小さな痰が飛び出して之が近傍の人の口へはいることもある、其他病人の夜具の襟に痰がつい

て居て、其他の人が着た物に傳染したこともある、何れにしても、病毒の或る患者は成るべく隔離して、其用ふる器具も他人と共用しないがよい。

黴毒は直接に人に傳染するのみならず、子孫にも遺傳して害毒を流すと云ふ恐ろしい病氣である、此病氣は重に男子の不品行によつて感染し之を家庭に傳へるのであるから、其豫防は男子が品行を愼むと云ふことが第一である。

淋病も亦家庭の間に恐ろしい害毒を流す病氣であつて、其數は黴毒よりも遙に多い、夫から全身に廣がつて行く病氣ではないが、甚多數でしかも甚厄介な病氣は、眼の「トラホーム」である、此病氣は眼脂から傳染するものであつて、手拭、ハンカチーフの共用などが、最も危險である、尚「トラホーム」の事は井上通泰先生の「トラホーム」御話を見ればよくわかりますから茲には言ひますまい。

# 和洋折衷料理

龜井まき子

○鉢肴

むし魚　黄味酢かけ
粉ふきぢやが芋
輪切茄子

一　魚は鯛か、いさきか、せいごか、小鯛か、鰆の切身か、鮃の切り身など、何れにてもよし、鯛、小鯛の如き、小魚なれば鱗をひき、鰓をぬき、腸を出してよく〳〵水洗ひをし、鹽をふりおく事、凡一時間斗にして、之を洗ひて、むすべし。

むしたる魚に、かける黄味酢製法は、味醂一合の中に、鹽を猪口に半杯程と、オウラミ粉少し入れて、よく煮立たせたる中へ、葛を猪口に、輕く一杯を、茶呑茶碗一杯程にて、溶かし、攪廻しながら入れ、暫時にして之を下ろし、味醂一合に付、玉子一個の黄味のみを入れ、よくまぜて、又此鍋を火にかけ、凡三分間斗にして、之を下ろし、よく冷ましたる後、酢を凡二勺位を、そろ〳〵と入れて、攪回して後、此むしたる魚の上にかくべし、

粉にある、オウラミ粉といへるは、食料の黄色粉にして、之は、大なる種菓子店、又は食料紅を商ふ、薬種店にあるなり、

一　粉ふきぢやが芋は、馬鈴薯の皮をむき、小なるものなれば、竪に四割とし、面とりにむき、(大なるものは、此小なるものゝ、竪に四ッ割としたる、一ッ位

の大さにきるべし、）水に放しおき、鍋に水をさして、此馬鈴薯を、水より出したるを入れ、かぶる位の分量に水をなし、鹽を芋五合に付、五勺位入れ、煮るべし柔らかくなりたらば、水をすてゝ、此鍋をじやが芋の入りたるまゝ、火にかけよく鍋を、ふり動かす時は、水氣は全く切れて、粉のふく如くなるなり、夫より、鍋をおろし、白砂糖を、前にいへる金杓子に、半杯程ふりかけ、よく鍋を動かし、此砂糖の一體に、廻るやうになし蓋をなして、よくむらしおくべし、かくて二十分も、經たる時、取り出せば、鹽氣もありて、甘味も少し加はりたる淡泊なるものとなるなり、是を前にむしたる魚の、前に附け合すべし、

一　輪切茄子は少し小なる茄子の前後をきりて、後二ツにきり、水に放し、凡そ三十分も經たる後、之を笊へあげ、水氣を切り、鍋に胡麻油を、少し入れて、此茄子を煎るべし、茄子の色替りたるを度とし、西洋紙を敷きたる皿にならべ、此輪切りにしたる茄子の眞中へ、食鹽一とつまみと、胡椒をふりかけおくべし、

此茄子も、又前に記せる馬鈴薯の、粉吹煮と共に、むしたる魚の附け合せとす。

○皿　田家の月
　あんかけ
　まき松茸つけ燒

一　田家の月は、馬鈴薯の小なるを、十二個位、皮をむきて鍋に丸ごと水から入れ、鹽をも少し入れ、凡二十五分位ゆでたらば、大概ゆで上るなり、此水をすてゝ、芋の入りたるまゝ、鍋を火にかけ、芋の水氣を去るやう、よく〳〵振り動かし、夫より此芋を出して裏漉しなすべし、（かく水氣を、よく切るといふは、水氣のあるを、うらごしなす時は、ベト〳〵となりて、用に立たぬなり、然るに今いふ如く、水氣を切りて、うらごしなさば、サラ〳〵として、用ひよく、且風味もよくなる故に、かくするなり、）夫より此中へ、鹽少少と、胡椒少々と玉子の黄子一個、（爰にいへる、馬鈴薯の分量につきて丈の分量なり、）を加へ、よく練り合せおき、天火の中の敷皿へ胡麻油の煮沸して、冷ましたるを引きて練りたる馬鈴薯の半分を、幅一寸五分

厚さ五分位に、よくならして、其中へ、玉子をゆでゝ皮をむき、前後を少しづゝ、切りたるを、順よくならべ、(爰にいふ馬鈴薯の分量ならば、中位の玉子四個ゆでればよし、)あとに半分殘しある、馬鈴薯を、此上にのせ、ゆでたる玉子をつゝみて、丸き筒の如き形となすべし、夫より、天火の中へ入れ、上下に火を入れてやくべし、やけ上りたらば、此皿より爼板の上に出しよき程に庖丁する時は廻りがぢやが芋にして、中よりゆで玉子の、輪切にしたるが、現はるゝなり、此輪切の玉子は月の如くみへ、又馬鈴薯を、此玉子の廻りにつくる故に、田家の月と名付けたりと知るべし。

あんかけは、味醂一合と、醤油五勺を煮立て、よく沸騰したる時、葛を猪口に輕く一杯を、茶呑茶碗一杯の水にて、とかし攪廻しながら入れ、しばらくして、此鍋を下ろし、前の田家の月の上にかけ、胡椒を少しふりて出すべし。

一　さき松茸は、松茸を鹽水に一時間も、つけ置て後外皮をむきて、石づきをとり、之をさき、醤油をつけて、網の上にのせ、兩面をよくやくべし、之を前に記せる、田家の月の、前につけ合すべし。

○燒もの

黄金むしやき

一　黄金むし燒は、魚(何魚にてもよし)を、鱗鰓腸をぬきて三枚におろし、小骨をぬき、細かにきり鹽をふりて、凡卅分間位も經て後、之を水洗ひし沸騰したる湯にて、ざつとゆでべし、夫より此湯(凡そ一合位)の中へ、椎茸を水に一時間も浸して、石づきをとり細かにきりたると、時節の野菜、たとへば、三つ葉とか、芹とかいんげんとか、青きものを、細かに截りたるものを入れ、よく煮へたる時、醤油を一勺ばかり入れて此汁を煮つめ鍋をおろし、魚を入れ(魚は目の下七八寸の魚なれば、一尾位の分量とす、)さましおくべし、夫より玉子の黄味六個を入れ、よくかきまはしおきて後、白味をよく〳〵泡立て之に交ぜ、丼か又は天火の中の敷皿の中に入れ、天火にてやくべし、やくこと凡そ三十分斗りなり、又やけ上りたらば、之を出し、適宜に庖丁して皿へもり出すべし。

此ゆでたる湯を用ゐるといふは、此湯は恰も肉汁の如きものなる故、之を棄つる事なく、用ゆる時は、魚の養分を失ふ事なく、且經濟にもなる事なれば、之を用ひて、肉汁或は煮出しの代用とす。

# 患者の食物

△ビーフジユース

半斤の良き牛肉を網に挾み、つよき火に載せ温まりたる時之を絞り、其汁を、暖めたる茶碗に入れ、鹽を加へ、焼きパンと共に食せしむ。

△冷肉湯

牛肉一片を細かに切り、水一合三勺鹽一茶匕を加へて器に入れ、之を華氏九十度の温度にて二時間置き、而して後汁を絞り出し、漉して冷やし、赤色の茶碗に入れ與ふべし、

△ビーフジヤレー

寒天一本の四分の一を水百二十グラムにて煮、而して後漉し、ビフチー二百四十グラムを混じて之を茶碗に入れ、冷やし固くなりたる後、皿に入れ與ふ

△ソツプ豆腐

一個の鷄卵の白身と、二個の黄身とに少し鹽を加へ、能く攪きませ、ビフチー六十グラムを混じ、鉢に入れ、蓋をなし、熱湯に其儘投じ、固まりて皿に移し供す、

△ビフチースープ

一合五勺の牛乳を煮、少し粉を入れ、塊とならぬ様能く混せ、而して後三葉芹を細かに切り、入れて煮、而して後、漉して與ふるなり。

△スープ飯

能く煮たる飯一食匕に熱湯二食匕を入れ、ビフチーを湯呑に一ぱい加へ、共に沸騰せしめ、鹽と胡椒を能き加減に加へ、焼パンと共に與ふべし。

△牛肉湯

新しき牛肉一斤を取り、脂肪を切り去り細片に切り蓋のある器に入れ、水二合五勺を加へ鹽四分の一茶匕稀鹽酸五滴を加へ、固く蓋をして華氏百五十度より以下の温度に保つべしこれをビフチイといふ。

△ビーフロース

一斤の肉を細片に切り、鍋へ入れ、水二合五勺鹽半茶匕入れ、一時間そろ〳〵煮、而して後漉し、醫師の許可あれば胡椒を入れ焼き、パンと共に食せしむ。

△牛乳と鶏卵の白身

牛乳二合五勺と卵の白身二個に鹽を少々加へ、瓶に入れ、栓をなし五分間振りて與ふ。

△フロズンビフチー

小さきブリキの鑵を桶に入れ、其周圍に鹽と氷の小塊を入れ、冷えたるビフチーを鑵に入れ、十分間其儘に置き、蓋を取りて能く混せ、又蓋をなし、此の如くすること二三回なる時は固まりて滑かになるべし、之は發熱ありて兎角冷えたる食物を好む病人に適す。

△牛乳玉子

一個の卵の白身を能く攪き混せ、砂糖一食匕を、加へ、黄身も別に攪き混せて後に混じ、能く熟したる蜜柑の汁一食匕を加へ、而して後牛乳一合を冷熱いづれとも望みに從て入れ混せて與ふべし

△牛乳豆腐

牛乳二合五勺を少し暖め、鹽を少々加へ、酢若くは橙汁二食匕を混じて能く攪きませ、少し冷へたる後薄布を用ひて漉し、水分を取り去りて能く匕にて雜せ與ふるなり、之に砂糖と乳酪を合して食せしむ

△粥の上汁

米四食匕を能く洗ひ、水七合五勺に鹽少々を加へて一時間煮、後漉し、之に卵の黄身一つを能く攪き混せ、砂糖一食匕を加へ、其漉したる稀粥の沸騰を待ちて之を混じ與ふべし。

△葛湯

葛粉一茶匕を牛乳一食匕にて解き、後之を沸騰せる牛乳一合三勺の中に混じ、五分間文火にて絶えず攪亂して塊とならぬ樣、又焼けぬ樣注意し、後砂糖一茶匕鹽少々加へ、又香料を望めば肉桂粉を加ふべし。

△片栗粉湯

片栗粉一食匕を牛乳にて解き、二合五勺の沸騰せる乳の中に入れ、半時間煮鹽半茶匕加へて漉すべし、下痢患者などには良き食物なり。

△スープの素

牛の下腿の肉二斤を洗ひ一升の水に二茶匕の鹽を加へ、之を煮、浮く物を取り去り、夫より肉の和かに離

る丶迄文火にて煮、後冷かし、脂肪を取り去り、貯へ置きて用ゆるなり、然れど凍らしむべからず

△こゞり蜜柑

寒天一本を二合の水にて煮、砂糖を茶碗に一パイ蜜柑の汁二合五勺と氷水二合五勺を混合して之を漉し之をアイスクリーム器に入れ凍らしむ此を作るにアイスクリーム器械を得ざるときは此分量にてなし難けれど一人前を作るにはブリキの鑵を用ゐ之に入れ、而して此鑵を他の入物に置き、其周圍に氷と鹽を入れ置く時は次第に凍るなり

## 雜菜いろ〳〵

▲納豆汁　納豆を能く擂り、酒にて延し、前の擂り味噌へ加へ、擂り流すのである、取合せは岩茸、小鳥杯がよい、吸口は辛子。

▲擦し汁　大根、牛蒡、蕪菁の類を料として、水の中へ擂り入れ、後に其の水を絞りて、味噌汁へ入れる、尤も牛蒡、蕪菁は其のまゝ擦して湯煮をせねばならぬ、(牛蒡なれば一寸酢を汁に加へるがよし)、取合せは燒き小鯛、剝き海老、裂き海老、干海鼠、に濕菌がよい。

▲ねぎ汁　水に酒を加へ、能く煮立せ、味噌を解き、又煮汁を入れる、材料が葱なれば然せざると臭味脱けず、劣等の調理となる、注意すべし。

▲高麗煮　鯛をおろし、又骨切りにしても、二回程米汁七分に酒三合を加へて煮返す、鯛は別に水にて茹で、好き時間に水に入れ、鹽梅をする、吸口は柚子。

▲鱈のすまし　鱈を切り、切れ目にサツト鹽を撒り暫く置いて後鹽を洗ひ、用ふる、すましは鰹節と昆布を等分に交せるを好しとする、總てすましに色の付くは嫌ふのであるが、之れは少分に醤油を加へて鹽梅すべきことで、併し便宜に依り、常のすましに仕立てもよい、又鯛、白魚杯の取交せを用ふるときは常の通りにせねばならぬ、で鱈に味を付けること肝要である、昔時は鰹節、昆布の煮汁の等分の上に、鱈の煮抜きの汁三分一、能くすましたるを取り、右三汁を交せて煮汁

に遣ひ塩梅した、之れは人々の手腕に任せるべし、偖取交せは半辨、淡雪、青昆布、くゝ立菜、三ツ葉、芹、土筆、海髪、海松、鶴藻、神馬藻、蕨、柚子、茗荷、胡椒の粉等を撰むが宜しい。

▲塩鱈　四五日前より全体のまゝにて水につけ鱗を落して塩を出し、用ふる前日に切りて再び塩を出す、之れを煮る煮汁は上等の鰹節を薄く削り水にて洗ひ、先づ湯を煮立せ、塩氣を去りし昆布の厚きものを撰みて右煮汁と共に入れ、好き程に取出し、古酒、醤油を汁に入れて塩梅するが肝要である、之れを煮物とすれば醤油の過るも苦しくない、取交せ物は干海鼠杯を適當とする、之れ等を二の汁の料にする時は結ひ昆布の昆布を短冊に切つて、取合せるも可い。

▲鮑の濃漿　これは茶席料理に適當のものなり、先づ鮑は別に煮置き、上味噌を能く摺り、葛を入れ煮汁にて煮、好き時分に山葵を入れる。

▲鯛の蠟焼　鯛を調理て、切り身にして、薄塩を撒り、串に刺し、能く焼き、玉子を溶した中へ、少しく饂飩粉を交せたるを塗り、四五度も塗りては炙り、串を抜くなり。

▲煎り鯛　鍋に塩を焼付け、薄く切りたる鯛の肉を入れ、之れに最上酒を少しく注し、文火で、徐々と煮て、酒氣の去つたところへ、三番米汁、極薄き米汁（前夜に米を洗ひたる節の汁を貯へ置く）を程好く注して、一寸煮りておろす、至極淡泊で、至極よいが、これに茸類と葱の切りたるを加へれば一層趣味がある。

▲鯛の駿河煮　鯛の切身に串を刺し、炙いて醤油一合に、上酒三勺を合せて煮る。

▲鳥と摘入　雛雞の肉を能くたゝき、丸めてから、薄醤油にて、ザット煮上げ置き、摘入れ（半辨の材料を、杓子で少さく掬ひ取りたるもの）を入れてから、醤油味醂で、煮ころがす。

# 世界奇聞

田島梅子
出島策子

▼最も古き玻璃は現時ロンドン博物館に藏する物、これは埃及にて發見し、紀元前三千〇六十四年の製造。
▼普魯西のポツダム宮殿の穴倉に、國家の急變に應ずる爲め數代前より多額の黄金を貯蓄しあり、又佛蘭西にては、十九世紀の末葉より戰爭の用意として、ツーロン軍港に二十萬噸の石炭を準備す。
▼北米合衆國の國會議員に多妻主義のモルモン宗徒の當撰したる抑々の元祖はロバートと云ふ人也。
▼歩兵に揃へ靴をなさしむるの規定は、西班牙國に始まる。
▼軍人に一定の制服あるは、千六百六十八年佛王ルイ十六世の勅定に基く。
▼野蠻國以外の文明國中、小兒にして實扶垤利亞と天然痘を患ふは露國最も多し。
▼故殺犯の最も多きは伊太利にして、自殺犯の最も多きは、露國なり。
▼十七世紀にあつては新聞紙の數僅かに一種類のみなりし米國が、十九世紀の後半に及んでは、英、佛、獨の諸新聞を合算するも猶比肩すべからざるの盛況を呈す。
▼ピアノ一臺は四十八種の異れる物質より成り、少くも十六ヶ國より蒐集せる材料を要すと。
▼花もなく、實もなく、枝もなく根もなき植物は、唯だ菌あるのみ。
▼世界の人類中、腦漿の多量なるものを支那人とし、其支那人に優るものは只蘇格蘭人あるのみ。
▼生物中軀幹の割に合せて、最も大なる腦髓を具ふるものは、人類にあらず、獸類にあらず、魚類にあらず、蟻也。
▼世界最古の艷書として英國博物館に保存せらるゝものを見るに、現代を距る約三千七百年前、埃及の一公子に送れる結婚申込狀にして書體は同國の古文字を以てし、磚に刻せる文書なりとぞ。
▼歐洲の美術家や寫眞師の説によれば、人の横顔は一般に右側よりも左側が美なりと。
▼動物中、口を閉ぢて鳴くものは、只蛙あるのみ。
▼アラスカ地方にては、氷の爲めに傷はるゝを恐れて犬までも靴を穿ち居れり。
▼アラビヤの駿馬は、沙漠を旅するに當り、夏時は二十四時間、冬時は全二晝夜、水を與へざるも別に健康を損せずと。
▼紫色の甲をもつ蟹は全世界中、たゞ西印度にのみ產せり。
▼智利の南端に產する蟹は、晴天には其甲白く氣壓の降るに隨つて其白い面に赤き斑を生じ、雨天となる前には全然赤色に變ず、土

人は之を以て晴雨を卜知すと。

▼海藻より製したる紙は、其質硬くして、窓玻璃の代用に適すと。

▼蜜蜂の種類中に一時間よく三十哩を飛行し得るものあり、英國に產す。

▼輕氣球にて地上一哩の高處に昇る時は、猶に九十六哩四方を瞰下し得べし。

▼カナダのフンデー灣は潮の差引最も甚しき所なり潮の加減にて七十呎の高低を見、僅かに五分時間に一呎の高度を示すと。

▼トランプの繪は、もと人間の階級を表示したるもの、ハートは僧正スペートは貴族、ダイヤモンドは市民、クラブは奴隷を代表す、スペートは伊太利語の劍より來る。

▼傳書鳩は一分間に通常千二百ヤードを翔り、風力を利用すれば千九百八十ヤードの遠距離にまで達す。

▼獅子といふ動物は總べて左利なり、他の動物を打つに必ず左りの手足を用ふ。

▼虎は獅子よりも力強く、獅子は五人の力よく之に匹敵し得るも、虎は九人の力にあらざれば打勝つ能はずと。

▼義脚及義手は、紀元前七百年の昔埃及にて初めて行はる、當時醫師を兼業とせる同國僧侶の製造にかゝると。

▼世界最古の貨幣は、獸皮にて作られたるものなりと。

▼螽斯の最も大きなもの南亞米利加に產す、其脚五吋、兩翼を張れば一呎に達すと。

▼ロスチャイルド氏が全世界より蒐集したる胡蝶の標本は正に十萬磅を値す。

▼軍艦に大砲を裝置せしは、千三百七十七年ベ子チヤ市人が、ゼノア市人との戰に始まる。

▼ピストルは十六世紀の中葉英國騎兵の使用せし處、延いて今日の流行となりぬ。

▼人間腦髓の重量は智力に何等の關係なく、全く氣候によるものなり、即ち寒帶地方の人民は一般に熱帶地方の人民より重き腦髓を有せり。

▼聾者は寒帶に多し、是れ寒氣の耳神經を刺擊すること多きが故也。

▼郵券の世界各地に於て發行せらるゝもの、現今一萬三千四百餘種ありと。

▼巴里は家高くして街狹く、ロンドンは家低くして街廣し。

▼盜賊の一番少き國はフインランドにして、健康者の多き國はノールウエー也と。

●時好　三越呉服店の機關、濱田四郎氏の編輯以來大に觀を改めたり、本號には奇麗な縞柄模樣をいろ〳〵陳列したる外操泉子の婚禮の調度、煙村子の着物軍備、得知翁の俳優衣裳藏、櫻桃子の吳呂の今昔など興味ある記事また尠からず。

# 飢饉の話

東北地方未年の飢饉は實に非常なものにて六十年來曾つて知らざる大厄年なりしといへり、右に就て宮城縣某村の古老の語たる處ろによれば、天保七年度の大凶年にては土用中毎日雨を催し天日を拜すると至つて少なく七月を過ぎ八月始に至つて天氣晴れしかど八月十三日の夜大霜降り凡ての草木全く實る能はざりし次第にて稻の如きは殆ど秕のみにして全きものなく殊に白稻と云へるは大に不作にて黑穗稻少し實りしかど一束にて二三合の收穫なりし其他山澤の田は殊に凶なりしが故に十束にて一二合の米を得しのみ然るに本年の氣候は之れ程にはあらざりしかと思はれしなれども土用中に雨多かりし工合及び一般氣候の八月迄不順なりしに九月初めより持直したるが如き其他九月十五日より十九日迄雨天且つ冷氣にて廿一日に霜を結びし事など殆ど天保の樣なりしが只天保七年は風多く非常に低温なりし爲め唐辛が遂に赤くならざりしに反し本年は赤く熟せしを見れば幾分か天保よりは寒さ輕かりしを以て稻作は天保の方より上出來の方なるべし即ち天保には一坪より平均一合位の收穫なりしに本年は籾にて三合五勺の收穫あり倘ほ翁は語り續けて曰く「當時私の内は質屋で御座りましたが非常の凶作のことゝて遂には火箸釜鍋等を質入するものも御座りましたそれから翌年即ち天保八年の二月頃でした私が石の卷に行きました時分には慘狀も絕頂に達したる頃で米は無暗に高價になりし事とて之を買つて食ふものもなく左ればとて食はずには居られぬものですから商家の女子を湊と渡し網の間で殺し其肉を切つて食ふと云ふ有樣で魚の臟腑を生で食ふものなどは決して珍らしくありませんでした道傍には飢えて死せしもの倒れて食を求むるもの或は到底助からざるを以て衣類を初め一切のものを賣り拂つて食にあき酒に醉ひ死を決して手に手を組んで橋より落ちて共に溺死するもの等世の中の物騷な事は殆と今思ひ出してもゾツトする位なものですが當節は世が開けて來ましたから天保のやうなことは御座りますまい云々」何樣東北の飢饉は近年稀なるものなるべし

# 家庭衞生

## 素人藥物學（三）

糸左近

注意＝今回は前來質問の多く有つた皮膚病に關する藥物數多掲げたればその御積にて御覧を乞ふ。又之を纏まるゝ前に第五卷第十三號の(其二)を參考せられたいのである。

「石鹸」＝石鹸には色々樣々の種類が此頃流行するけれども、藥としては、藥用石鹸、加里石鹸の二種である是等は性質製法等に就いて述べたいが、何れも化學上より說明せねばならぬから、悉皆之を略し直ちに効能用法等に移らう。

石鹸を內服して胃中に入れば、胃中なる消化液の一成分たる鹽酸と化合して消化を害するものであるから之を內用に供ふることは殆んど無い、けれども鹽酸や硫酸などの酸類中毒に當つて、他の解毒劑無き急劇の場合に、之を溶して服ましめ、頗る効力を呈したる例も澤山ある。余が知人の妻君が歇私的里病に罹り、憂鬱煩悶の結果、硫酸を一口この世の名殘と飲み終るその一剎那、其夫は之を見つけ、スハ一大事と驅け寄り豫て石鹸の解毒劑なることを聞いてゐた爲、直に其の溶液を飲ましめ、一方には使を醫師の許へ走らせたため、哀れ絕えなんとする露命を取止めたることがある、斯る場合には一個の石鹸亦以て千金萬金にも勝る寶と謂はねばならぬ、之を以ても藥物の知識は誰にでも有りたいものである。

外用としては、甲乙何れも多くの効能を有つてゐる即ち藥用石鹸は之を微温湯に溶かし灌腸すれば直腸を刺戟して蠕動機を興奮せしめ、且つ硬い便を軟かにし數日溜つてゐたる頑強な敵も難無く降り、ア丶善い氣持になつたと叫ばしむるものである。又齒を淸潔にする目的を以て、左の處方に從ひ、之を用ゐることもある。

藥用石鹸　三〇、〇　沈降炭酸加爾曳謨　一〇、〇

丁香油　一、〇

右三品を鍋の中に入れ、文火にかけて能く混和し之を齒に塗けて磨けば、頗る奇麗になるものである。

又、糠粃疹（皮膚がザラ／＼になつて白い小さな糠のやうな屑が剝がれ滅ひの無い様になる病）慢性濕疹（皮膚面から粘い液を漏し常に濕うてゐる病）或は癜風などに不斷外用すれば多少の効がある、又皮膚毛髮の垢を落す所の浴料として普通石鹼に代用すれば普通石鹼よりも宜しきのみならず皮膚病の豫防ともなるものである。

加里石鹼は藥用石鹼よりも、其の刺戟が強いから、皮膚の寄生物を除く目的を以て、單獨に之を外用し、或は他の藥と交せて使ふこともある、即ち疥癬或は白癬、或は痒疹（漿液を含んだる小さな粒を生じそれが非常に痒く搔けば出血し、ために痂皮を作るもの）或は黴菌の原因たる禿頭病などに用ゐ、又消毒殺菌の効ある所から、傳染病者の皮膚襯衣を洗ふ用にも供ふるものである。

石鹼の功は浴料兼て又
皮膚病、灌腸、酸の中毒

〔百露拔爾撒謨〕＝これは中央亞米利加のサンサルヴァドール國のバルサム濱といふ一地方のみに生えてゐる喬木を立木の儘にその樹皮を打ち敲き、それより出づる汁を直ちに取るか、或は又その部に布片を纏ひ、これに其汁を吸ひ取らしめ更に之を製したるものである

その効能に就いて、或者は慢性氣管支加答兒や肺結核などに内服せしむれば痰の分泌を制限し、且つ防腐の力ありと唱へ、又或醫者は色々の潰瘍或は火傷、凍傷などに外用すれば大なる功ありと言ふけれど、これ皆陳腐に屬せる舊說で、今やこの目的に向つては、之より勝る良藥續々發明せられてある、けれども獨り疥癬の蟲を殺す効能に至つては、この右に出づる良藥は恐らく無い、即ち如何に頑固なこの蟲もこの藥に觸るるや、二十分間長くも四十分間經てば必ず往生して了ふ、斯樣に効力が確實であるばかりで無く、頗る爽快なる芳香あると且つ之を皮膚に塗けても刺戟することの少いとで、醫者社會には大に賞用せられてゐるのである。之を用ゐるには先づ患者をして入浴せしめ、加里石鹼を以て垢や脂を洗ひ落し、然る後四、〇乃至六

〇瓦を其の倍或は同量を五十瓦程の酒精に溶かし、之を塗擦し毛布を以て其部を繃ひ大凡一晝夜間に二三回反復し、その間は臥蓐にゐるが可い、さうして全治したらば被衣服を悉く着換ることが肝要である、斯くして數日の後再び痒さを感せば再び之を反復し大事に至らぬやう注意せねばならぬ。

厭ふべき疥癬の藥數あれど
いとも利くのはペーロバルサム

［薔薇油］＝新らしき薔薇の花に水を和せ、之を蒸餾して得たる揮發油であつて、えも言へぬ馥郁たる芳香を有つてゐる。

効能は調香料であるが、或醫者は之を左の處方に依つて、皮膚に塗れば、皮膚の質を細かくし且つ色を白くする所の妙藥である、何ぞ亞砒酸の如き毒藥を内服するの必要あらんやなどゝ擴張過大に述べてゐるが余は之を用ゐたる經驗も無く、又之を學理上より詳しく說明する力も無い、且つ高價なものであれば、何人にも試用して御覧遊ばせと勸むることは出來ぬ、兎に角その處方を記して讀者諸君の御參考にまで供へておかう。

薔薇油　五、〇　稀酒精（但し無臭のもの）一〇〇、〇

右一日五六回毛筆にて塗布すること大凡七八ヶ月連續すべし。

果して某醫士の言ふが如きこの効能あるものを假定し、その上藥用石鹼を以て皮膚を清潔にし且つ前に述べたる齒磨劑を以て齒を白くし、後に述べんとする毛髮刺戟藥を塗けて髮を濃くし、花顔皓齒小野の小町も三舍を避けるといふやうな窈窕たる姿であつた所で、その心美ならずんば、是等の藥は「アラいやですよ病」の材料になつて了ふ、實に慨かはしい次第である。

色白く質を細かくせぬまでも
げにかんばしき薔薇油かな

［イヒチーオル］＝（Ichthyol）は燃土質化石より製したるもので、其の化石は大洪水以前の魚類及び海獸の遺物とのことである、斯る昔の遺物を今は取つて以て藥用に供ふるとは、造化の力否人智の應用亦以て巧妙な

ものと謂はねばならぬ。

効用は甚だ多くあるけれど、一口に言へば色々の皮膚病藥である。第一に面皰に用ゐて確効あり、次は酒皶鼻、次は毛髮脱落症、次は前に述べたる糠粃疹、濕疹、痒疹、次は凍傷、火傷、次は癩病、次は僂麻質斯、歯痛等に其儘或は水に溶かし或は他藥と交せて塗れば何れにも多少の効あるものである。面皰に塗るには爪にて脂を厭出し、然る後イヒチオル軟膏（イヒチオルと單軟膏とを合せたもの）を擦り塗け、之を數日間續け、それより酢を以て洗ふが宜い。酒皶鼻には晝間水蛭を貼け、能く血を吸はしめ、夜間に至つて右イヒチオル軟膏を塗るが上分別である。毛髮脱落症には初め石鹸を以て能々洗ひおき、一時間程經てイヒチオルを十倍の水に溶かして塗れば頗る効あるものである。糠粃疹、濕疹、痒疹にはイヒチオル十瓦ラノリン五十瓦といふ割合に混せて塗擦すべし。凍傷にはイヒチオルと的列並底油とを等分に交せて用ふる方が宜い。火傷にはイヒチオル二瓦華攤林軟膏百瓦の比例にて能く混和したものを塗布すれば、その創を早く癒えしむる効あるのみならず痛みをも鎮むるものである、されど余の經驗に依れば瘢痕を殘し易いやうである。癩病には矢張ラノリン五倍を混せて塗ければ、勿論全治の効は無いが、他の內服藥等の効と共に莫大の助をなすは、ウンナ氏及び其他の醫者の認むる所である。僂麻質斯にはイヒチオル一、巴羅賓軟膏三といふ比例に交せて塗ればこれ亦內服藥の効を助くるものである。歯痛には少量のコロ、ホルムを混せて綿に浸し用ふれば甚だ効ありと述べてゐる醫士もあるけれど、果してイヒチオルの効なりや否やは疑はしい。斯の如くイヒチオルは色々の皮膚病藥及び鎮痛劑として用ゐらるゝ所の重寶な藥である。又或醫師は癩病僂麻質斯其他の病に一日量大凡一瓦乃至二瓦を水に溶かして內用すれば大なる効を呈する云々と述べてゐるけれども、多くの醫士は大抵塗擦藥として外用に供ふるものである。

　　樣々の皮膚の病と色々の
　　　痛みも治るイヒチオルかな

〔撒里矢爾酸〕＝これは一名水楊酸又單に撒酸ともいふ西洋紀元千八百七十四年コルベといふ人が防腐の功ありと報告して以來、世の中に非常に用ゐられ、今は解熱と僂麻質斯とにまで良藥として重んぜらるゝやうになつた、然れどこれには第五卷第十三號に述べたる撒里矢爾酸曹達の方が善ければ爰にはその防腐等の事に就いてのみ說いておかう。

防腐としては石炭酸に及ばぬけれど、石炭酸を用ふべからざる場合に代用せらるゝことの多いものであるさうして石炭酸の如く臭氣無く且つ毒分の弱いものであるから種々なる食物の防腐料に供ふ、第一日本酒には撒酸を入れて無いといふのは殆んど無い、されど其大量を含める不良の酒に至つては、胃の消化を妨ぐることの多いものなれば、大いに注意せねばならぬ。斯く胃の消化を妨ぐるにも拘らず胃の醱酵物を防ぐために、一回量〇、一を用ふれば甚だ有効を呈するものである、即ち俗に云ふ溜飲症にこの量で五六回服めば一方ならぬ効あることは余の屢々經驗する所である。

右の外撒里矢爾酸の外用は頗る良効を呈らす場合が多い、彼の厭ふ可き腋臭を始とし、鷄眼、皸裂などに他の藥と交せて塗布或は撒布し、又その水溶液を子宮病、淋病に注射し、又口中の病に含嗽藥として用ふ、されば其等の處方を左に掲げておかう。

撒里矢爾酸　二、〇　ラノリン　五〇、〇
酸化亞鉛　二〇、〇　澱粉　二五、〇

右四品混和すれば糊の樣になる、之を塗れば腋臭を全治すること妙なり。但し之を行ふには腋下を屢々冷水にて洗ひ、屢々襯衣を着換へ、半年間も倦まず撓まず塗けねばならぬ、然うせずして四五日も塗け、何うも効能が無いなどゝ不平を訴へられては閉口〳〵。

撒里矢爾酸　一、〇　古洛冑謨　八、〇

右二品能く混和して鷄眼皸裂に塗れば、著しく軟かになつて、効を奏するものである。

撒里矢爾酸　一、〇　微温湯　五〇〇、〇（大凡二合半）

右一日數回スポイトを以て子宮或は淋疾に注射し

或は口中の病に含嗽をなすべし。
撒酸は腋臭鶏眼皸裂に
その他いろ／＼防腐するなり

〔翔苔利斯丁幾〕＝一名芫菁丁幾ともいふ、これは昔恐る可き毒物として取扱はれたる班猫といふ蟲を乾して製したる粉末一瓦と酒精十瓦との割合を以て五日間冷處に浸し、之を搾り濾したる物でこれぞ名にし負ふ芫菁丁幾てある。

其の効能に就いて、昔は色情の無い人に或は陰萎病に催淫剤として内服せしめたさうである、否今も尚之を迷信してゐる者がある、けれど斯る効能は無いのみならず、其量を過つて飲めば一方ならぬ毒性を逞うする所の劇藥である、然らば現今の醫士は何に用ふるか、曰く讀者諸君も既に知らるゝ通り、毛髪の發生を促す刺戟藥として外用するのみである、けれど其の用方が惡いと皮膚は赤くなり其上水泡が出來て、揚句に薄い毛も禿げて了ふやうな滑稽を演らかしたる例も往々あることである、されば之を試用したき方は左の處方に依り、これも亦腋臭の療治と同じく數月數年續けねば効の無いことを前以て御斷り申上おき候なり。

芫菁丁幾　一、〇　リチ子油　五〇、〇
ベルガモット油　五、〇

右三品よく混せたるものを一日數回塗けるが宜い但し之を塗ける前に、加里石鹸を以て洗ひおくことが肝要である。世には藥舖に毛の生えてゐる畜など揭げて、針小棒大に廣告する生毛藥もあるけれど、利を貪らんために毛小棒大藥と心得て宜い。

芫菁は毛の發生を促せど
根の無き禿は生ゆる例なし

〔芫菁軟膏〕＝翔苔利斯軟膏又は發泡膏とも云ふ。これは翔苔利斯末と阿列布油、黄蠟、的列底とを交せて製したる膏藥である。これに強弱の二種あるが、唯その混藥の多少に依ると心得て可い。

効用は何れも引赤誘導即ち吸出膏藥である、されば速かに膿汁或は毒物を吸ひ出さしむるの目的を以て、七八時間も塗けておけば、大抵その効を奏するもので

ある。彼の狂犬に嚙まれたる場合などに、一刻も早くこれを塗擦すれば、その毒を蔓延せしめずして濟むことがある。

恐ろしき狂犬毒も芫菁の
膏藥塗けて吸ひ出しにけり

## ▲衛生顧問▼

注意＝歯を白くする法、雀斑、皮癬、色白藥、赤鼻、歯痛、痳病、腋臭、凍傷、「うをのめ」「あかぎれ」毛生藥、石鹸の良否その他色々の皮膚病藥等に就ては今回の藥物學の章に述べたれば、是等に對する質問者は同章を讀まれたいのである。

前號即第五卷第十五號の「衛生顧問」の原稿數枚を活字拾ひの者が過つて紛失せしめたる爲、何だか譯の分らぬ答から始まりしは、硬毛女及び其他の方に對して、甚だ申譯も無き次第、御許し下され度候。今回は題目の定め難き問にのみ答へたればこれ又諒せられたいのである。

(問) 私は夏冬共に寒さを感ぜずして、度々寒冒に罹り、その度毎に聲が嗄れ、唱歌の教授に甚だ困難を致しますが、何卒その豫防法を教へ玉へ(駿河の藩逢女)

(答)寒冒を防ぐには第一皮膚を清潔にする事、第二衣服の增減を怠らぬ事、第三皮膚の抵抗力を強くする事、第四運動を實行する事等でありますこれには皮膚の冷水摩擦が何と言つても宜い、之を行へば清潔にもなるし、抵抗力も強くなる、序でに申しておきますが、初冬の節、中夏の候は最も注意せねばならぬ時であります。

(問) 私は廿二歳の婦人にて幼より耳鼻を病ひ、先年上京して金杉博士の診療を受けたれば、沃度〇、二沃度加里〇、五石炭酸〇、二倔里設林四〇、〇といふ處方箋を下され、之れを咽喉へ塗れとのこと、それより歸國してより以來實行してゐますが、咽喉へ塗れば耳鼻にも宜しいのでありませうか、且つ連續してゐても害の無いものでありませうか、先生には御老體にて御多忙の御身甚だ恐れ入りますが誌上にて御答を乞ふ。(越前志加枝)

(答)咽喉より耳にも鼻にも通じてゐるものであるから、咽喉にも塗れば從つて耳鼻にも宜しいのである、連續しても左程の害は無いが、時々鹽剝水の含嗽をなさる方が宜いでせう。私は四十歳には未だ間のある身なれば、老體といふ程でもありますまいから、御遠慮無く質問あれ。

(問) 私は健全なる身でありますが唯臍より常に少量の臭膿を分泌し、困難致します、何卒これが治療法を乞ふ。(三ノ國田舍村堅子)

(答)屢々石炭酸水にて洗ひ、然る後亞鉛華軟膏を貼けておかれなば治りませう。

(問)妾事乳房の周圍に毛を生じ剃つても尚生えます行末案じられ候間これが退治法を御教示下され度候。(出羽鶴岡多毛女)

(答)乳房とは乳嘴の事ならんが、剃るから尚生ゑるのであります、哺乳せ

しむれば自然と取れます、されば生えてゐた所で案じられる程の事も無いでせう。

(問)秋より冬にかけ頭髪にフケが澤山出で見苦しく、痒く、不潔極まるのです、何卒この退治法を御教示下され度鶴首致居候。(讃岐の清潔好孃)

(答)毛髪の衛生法を守られたい、即ち時々刷子を以て雲脂を落し、屢々加里石鹸を以て毛髪を洗はれなば毛も美しくなりますし、雲脂も無くなります。

(問)妹(二十一)歳は身體も發達し、病氣も無く候へども顔色は白きのみにて血色更に無く候、何卒頬のあたり少し赤くなる方法ありますまいか。(周防の水野たまき)

(答)血色の無いのは種々の原因もありますが、兎に角貧血は免れますまいから、御地の醫士と御相談の上左の鐵劑を服んで御覧なさい。

還元鐵 〇、三 規尼涅 〇、一 甘草末適宜

右六丸となし一日三回食後二丸宛

(問)十九歳の女多年子宮内膜炎にて候が完全なる治療を施せば全治致しませうか。且つ全治せば妊娠致しませうか。(無名氏)

(答)果して子宮内膜炎などは治療攝生さへ宜しければ必ず治ります。妊娠云々は神ならでは受合はれませぬ。

(問)生れつき多血性にて顔が赤く何時も怒つて居るやうで甚だ困つてなります、何卒これが治療法を御教せ下され度候。(伊豫の白波)

(答)常に便通を宜くし、月經を調ふるやうにして居られなば、従つて宜しくなります、それには毎度申すことながら蘆薈葯剌巴丸朝夕二丸宛などは大いに功ありませう。(但し毎月十日間位の事)

(問)日本藥局法の蘆薈葯剌巴丸を大阪市中の藥店殘らず尋ね候へどもこれ無く、如何致して宜しきや御教示を乞ふ。(大阪のうめ子)

(答)そんな道理はありませぬ、大阪は藥の本家本元と言つても可い、されば右丸藥の製法を揭げておきませう。

蘆薈末、葯剌巴石鹸、甘草末の三品を等分に和ぜ、然る後一丸に就き(〇、一五)の重量ある丸藥にしたるものでありますから、乳鉢と乳棒とさへあれば何人にても製せられます。

(問)小生儀親の意見も用ゐず放蕩致したる天罰にて、今や梅毒性網膜炎とやらにて兩眼殆んど見えぬも同様になり、治療を受けなり候が、再び天日を見らるゝやうになりませうか御教示を乞ふ。

有難き親の言葉は聞ゆれど
姿の見えぬことぞ悲しき(男の女學世界愛讀者)

(答)眞に盲目とならぬ前に治療さへ宜ければ、うすいながらも見ゆるやうになつた例もあります、併し眼疾の治療よりも寧ろ驅黴法を專一になさらねばなりませぬ。

(問)私事春秋になりますと、逆上いたしてなりませぬが、その豫防法を教へ下され。(越中射水のしぎたつ女)

(答)(伊豫の白波女)の(答)を行うて見玉へ。

# 科學

## 自然界の現象

落葉

### △其一

今茲に化學實驗の時に使ふ一つの試驗管を取つて其中に適當の水を入れ、其水の中にはある動物と植物を入れて少しの空氣を殘して其管の口を塞いだものを拵へて、さて夫れをよく考へて見ると管の內には空氣がある、水がある、而して其中に植物と動物とが這入つて居る、即ち宇宙を形造つて居る自然界の小さな標本である、而して此小天地に棲む動物と植物とは此內に在つて安全に何時迄も其日を送つて行く事が出來るのである

如何して此少さな內に數年間變らずに其生命を保つて行かれるかと云ふに之れ動物と植物と相互に助け合つて各々兩者がある爲めに生きて居るのである、若し此內に植物だけを入れて置いたならば一日二日は生きて居るか知れないが數年は愚か十日とは安全に生き延びる事は出來ないにちがひ無い、動物にしても亦其通りである事は今更實驗として見なくてもよくわかつて居る。

而して見ると此小管內のものは動物は植物あるが爲めに生き植物は動物あるが爲に生きて居るのである。已に此自然界の標本が然うだとすれば吾人が生活して居る此廣大なる自然界も亦此の原則に依つて今日種々様々の者が安全に否種々の現象を表はしつゝ生活して行つて居ると云ふ事は亦疑はれない事實である。

此地球が球形をして何處迄行つても涯と云ふものが無い樣に吾々生物が生活の有樣と云ふもの常に相めぐりめぐつて環の如くで何處といつて境と云ふものが無いのである。

吾は人の爲めに生き、人は吾れの爲めに死し植物は吾等の爲めに缺く可らざる食物となり、又吾等は彼等の爲めに食物となつて居る、

實に考へて見れば人間が死ぬのも生れるのも、植物が生熟するのも、枯れるのも、又は數萬の蚊軍が來襲して人を螫のも、又獵者が利器を取つて野山に獸物や鳥を捕ふのも又は漁夫が大きな網を張つて何千石と云ふ鰯を捕へるのも皆之れ自然界の自然の必要上の現象である。

然うして見れば吾人は此自然界の現象の爲めに泣き悲しむ事もなければ又悦ぶ事もない、之れ自然である宇宙の小分子たる人がいくら泣いたとて悦んだとて此大なる自然の力に反抗する事が出來ようか、禍を變じて幸とする事が出來ようか。

△其　二

凡そ禍福は前知しがたく利害は豫期しがたいものである、昔から人間萬事塞翁が馬とは實によく自然の現象を云ひ現はしたもので、廣大無限の此宇宙から見れば、實に針の先き程にも當らない、此細分子の人間は只自然の内に自然のなすまゝに生活して行くより外は無いのである。

今靜に庭の一隅にたゝずんで、植物や、其まはりの有樣を眺めて居ると、梅の枝には無數のあぶら虫がたかつて居る、

此あぶら虫も自然の内に生活して居る一ツの動物で便利な事には雌ばかりで盛に生殖の出來るもので有るから、一匹の成虫が居ると夫れから澤山の子が出來る而して出來たものも矢張り母虫と同じ性質のもので暫時の間に生育して夫れが又盛に子を生み出す。

斯樣にして此虫は誠に幸福に梅の新葉を食べつゝ日に日に其數を增して生活して行くのである

處が猶よく見ると其澤山のあぶら虫の間を蟻が頻りに彼方此方と行つたり來たりして居る之れは何をして居るので有るかと種々に考へて見ると。

元來此蟻と云ふ虫は人々のよく知つて居る通りで誠に感心な虫で、常に蟻同志一ツの社會をなして其内には一匹の王が有つて、其下に或は食物を取り集める働き蟻がある、又は外敵を防ぐ處の兵蟻もあると云ふ樣に恰も人間と同じく各々分業して生活して居るのであ

る事を嘗て聞いて居た、夫れで今此處に來て忙しそうに往來して居るのは即ち其働き蟻で、小さい動物には似ず誠に智慧のある虫であるから、丁度人間が澤山の牛を飼つて、夫れから乳を搾り取つて飲むと同じ樣に、蟻も亦此あぶら虫が其體中から一種の甘い汁の出るのを知つて、夫れを取る爲めに此あぶら虫を保護し、而して其汁を取るのである、夫れ故あぶら虫は益々他の害を受ける事なく日々平和の内に多くの子孫を增して生活する事が出來て居る

處が此處に一ッ大變な事が起つて來た、夫れは何かと云ふと彼のてんとう虫と云ふ黑い豆粒位の丸い形をした處々に赤い點のある虫



が、冬の内此處に彼れの玉子を生み付けて置いたのが、丁度此次になつて孵化したのである、其生れた處の子虫は、此今迄平和に暮して居たあぶら虫を頻りに食べ出した斯くて今迄の平和は破れて枝の上に大戰爭が起つて、あぶら虫は續々殺されてしまふ、此虫に取つて之れ程の不幸が又と有うか、之れに續いて蟻は自分の大切な家畜を片端から食ひ盡されて行く

人間にしたらどんなで有う一生懸命に澤山の牛や豚を飼つて置くのを狼や其外の野獸が來て片端から食つて行つたならばどんなに困るか知れない、蟻に取つては誠に氣の毒な事である

△其　三

併し夫れが吾々人間に取つて幸になるのである、思へば初め梅の木を植ゑたのは其香りの好い匂ひや、愛らしい花を愛で樂しみ、又は大切な果實を取る爲めで有るのに、其木が折角葉を出そうとする時に、あぶら虫の爲めに害されて芽が皆縮んでしまふ、猶其上に憎いと思つて居るあぶら虫を助ける蟻があると思つて居れば又一方には其憎いあぶら虫を殺すてんとう虫が出て來る。

考へて見れば誠に不思議なもので、初めあぶら虫が殖ゑた時に、大變だと思つて夫れを一生懸命に取り殺すにはあたらない、日に何萬と云つて殖ゑて行く虫をいくら焦つたとて容易く捕へ盡せるものか、それで自然にまかせて置くと、即ち自然はてんとう虫と云ふものをして夫れを皆食ひ盡さしてしまふ。

我等の食物に多くたかつて、玉子を生み付けたり、糞をしたり、又は恐ろしい病氣の媒介をする蠅と云ふ虫が居る、之れは實に人間に取つて害をする惡いものだが此有害なる虫は又ある他の者に殺されて居る、夫れは何かと云ふと我々が常にバクテリアと云つて恐ろしく思ひ、又我々に害をなす處のものだ今度は吾人に必要なものとなつて、即ち此蠅に寄生して夫れを殺すのである、之れを以て見れば必ずしも人間に有害なのであるか、又は有益なのであるか分らない、消毒々々と八ケましく云つてバクテリアを防ぐ内には必ず我々の爲めに働いて居る有益なバクテリアも殺して居るにちがひない。

ペストが流行すると不幸にして其媒介者は鼠だと云ふ事が知れて、夫れ以來鼠は續々と捕へられては交番に持つて行かれる、然うすると五錢づゝもらへた今ではもつと澤山に貰へると云ふ事だ而して其内には籤に當つてやれ百圓取つたの五十圓貰らつたのと悦んで居る人がある、之れをよく考へて見ると百圓當つたのと五十圓貰つたのも一體何のお蔭で有らうか此處に至つて吾人は思はず奇と云はざるを得ない、即ち夫れは何のお蔭でも無い恐ろしい危險なペスト病が日本に這入つて來たからでは無いか。

△其四

人間でも動物でも死んでしまへば其體は土の中に入つて腐つて種々のものに分解されて、初め有機物で有つたものも次第に無機物となり鑛物となるのである。

此鑛物を食物として生きて居るものがある、即ち夫れは植物で、植物は絶へず其細い根から鑛物質の溶けたものを吸ひ取つて成長して行くのである。

而して其植物は我々に取つて大切なものである事は云ふ迄も無い、吾人の常食とするものは大かた植物性のものである、植物も人間



の爲めにいくらづゝか死んで行かなければならない、死ぬものは吾人の爲に食物を造るのと同じ事である。

△其五

吾人の身體は多くの部分は水から出來て居る、水程人間の身體に取つて大切なものは無いと云つて居るかと思へば又一方では吾人の身體を犯す恐ろしい傳染病や流行病の病毒は多く水から來て居ると云つて大變に怖はがる、植物の大事な葉を食ひ盡し吾人の食すべき菜や種々の野菜に害をする青虫は散々害をし盡して大きくなるだけなつて蝶に變

化する、
　やがて生れ變はつた蝶は丁度種々の花の咲く頃野や山を浮れ遊んで花の蜜を吸ふて歩く、其蜜を吸ふ時に其花にある雄蕋の花粉が足や羽子に着いて夫れが雌蕋の柱頭に運ばれるからこそ其花の實が結ばれるのである。
　今日吾人が賞美する處の果實や野菜類が其子孫を絶やさないで何時迄も吾々の眼を悦ばし食慾を滿足させる事が出來るのは實に此蝶のお陰では無いか、吾人は青虫たる者そも亦多大の感謝をしなければならない。
　思へば吾々が何かおかしい事が有つて笑ふ、其笑つた時の空氣の振動が四方に傳はりて行くと共に何處に行つてどんな有益な事の源因となつて居るか知ない、又は有害な事をして居るか知れない、實に吾々の一擧手一投足も必ず何かの源因を何處かでして居るにちがいない、甲の悲みは乙に取つては悦びになる事もある、今有害と思つた事も後に行つては却つて益になつて居る事もある。

△其六

　彼の英國は誰も知つて居る通り世界の内で並ぶ國の無い程強い盛な國であるが其源因は何處から來て居るかと調べて見ると實に意外な處に其源因が潜んで居る。まづ一番近い源因は英國人の體格が立派で强健で有つた爲めである、云ふ迄もなく此强健な身體には矢張り强健な精神が伴なつて居る。
　今一歩逆つて斯く英國人が强壯な忍耐深い處の身體と精神とを持つ事が出來る樣になつたのは何の爲めで有るかと云ふに夫れにも種々源因が有るで有うし又人種にも依るで有うが、其最も主因となつて居るものは生活に缺く事の出來ない食物で有た事は、亦疑はれない事實で英國人は常に比較的美食をする人種である。
　美食と云へば滋養分の多い野菜や肉類を多く食べる事だ中でも最多く使用されるのは牛肉で凡て英國人に限らず歐米各國の人が皆立派な體格を持つて居るのは一方から云へば主として肉食をするからである、滋養の多い食物を食べるからである。

△其七

さて此美食の中の主なる肉類中でも牛肉を供給する牛は何に依つて日々生活して行くかと云ふと英國に澤山生ずるアカツメ草と云ふのがある、之を牛が常食として肥滿し繁殖して英國人に今日の利益を與へたのである、然るに此アカツメ草と云ふ草も亦然う絶へず食べられては一方に盛んに繁殖しなければ終に其種類が絶へるわけで有るが、之れには又夫れを助けるものがある、即ち此草は一種の虫媒花植物で其媒をするものはくま蜂で有つた、くま蜂が蜜を取る爲めに其草の花に止まつて蜜を吸ふ傍らに雌蕋と雄蕋の媒介をする爲めに此草が實を結んで其種類が絶へずに常に牛の食物となる事が出來るのである、夫れであるからくま蜂はアカツメ草に取つては最大切なものである、



處が此くま蜂には一ツの大敵がある、夫れは鼠の一種で野鼠と云ふのが此くま蜂の巣を常に害する、實に此くま蜂の巣の三分の二は此野鼠の

爲めに犯されて居るので即ちくま蜂の繁殖は常に此動物に依つて妨げられて居るのである。

然るに此處に又都合の宜い事は一方に猫が居て、くま蜂に取つての大敵たる野鼠を取つて食る事である。

此處で靜に考へて見ると若しも英國に猫と云ふものが居なかつたならば如何で有うか、くま蜂は野鼠の際限なく繁殖する爲めに終に絶やされてしまふで有う。

已にくま蜂が居なければ之れに依つて實を結ぶ事の出來るアカツメ草も最早や其子孫を殖やす媒介者が無くなつて一方からは牛に食べられて自然に其草は絶へてしまふにちがひない即ち牛の大切なる食物が無くなるにちがひ無い。

斯うなつたら牛は何とするで有うか、之れも食物が無くなれば又前の樣に盛に生活する事が出來なくて其影響は終に引いて英國人に美肉を供給する事が出來なくなる即ち英國人にして今日あらしめた一番近い元が無くなる。

して見ると英國人が斯く今日世界の列國の上に立つて國威を振るつて居られる其源因を次第に逆ぼつて考へて見ると實に猫の爲めでは無いか英國人と猫とは斯樣に深い關係を持つて居ると云はなければならない、實に不思議な事では無いか、

されば猫の死は英國人に取つては最悲しむべき事であるにちがひない。

# 水道問答

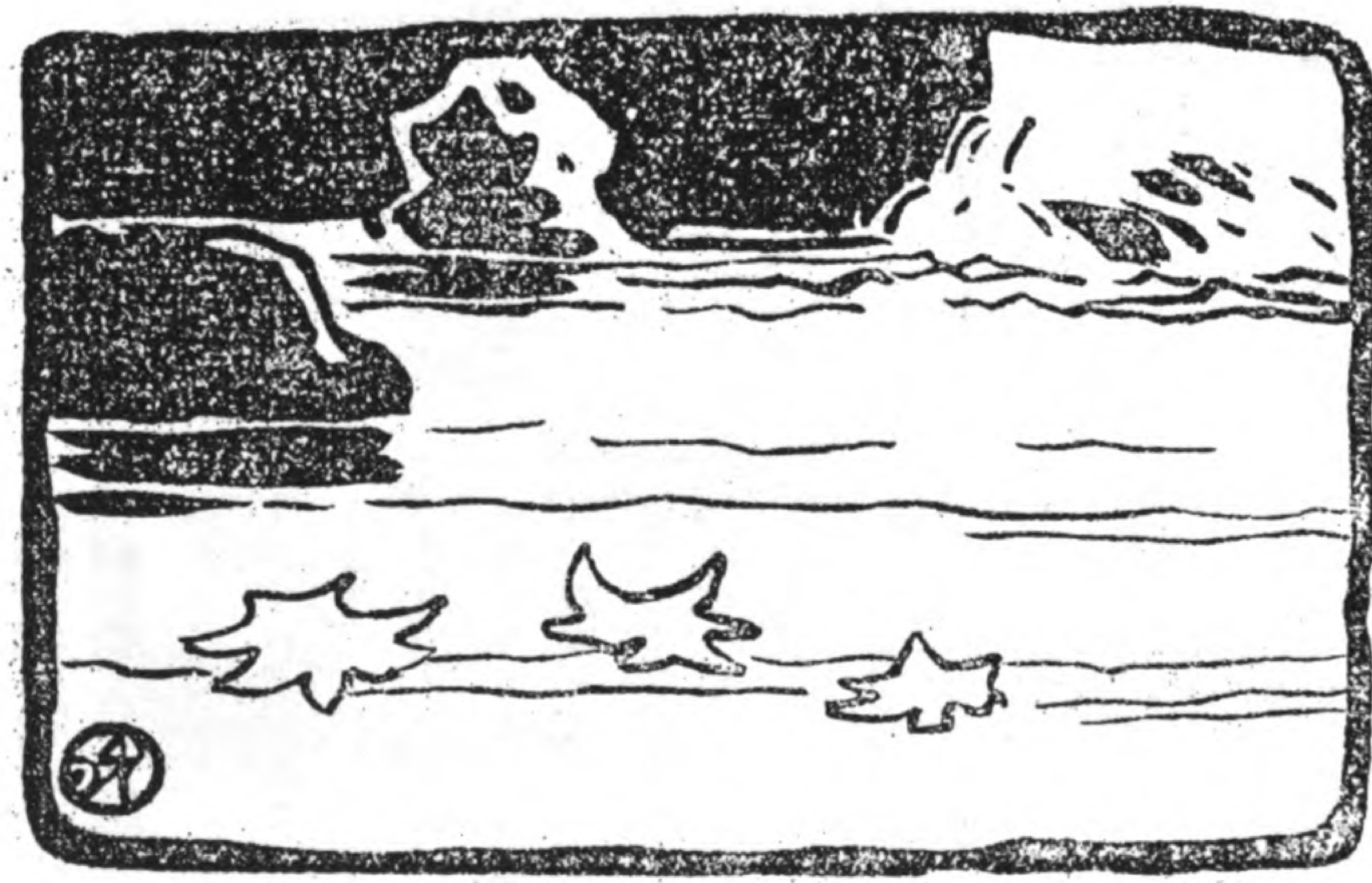
冬の寒風吹き荒み、殊に小雨などしよぼ〳〵降る日には、今更に水道の便利なることを感ずるであらう。居を都に負はるゝ諸孃の中には、一寸一つ螺旋を捻れば、滑き水の迸り出づる設備を見て、眞箇に便利だわねえの嘆聲を、思はず發せらるゝお方もあるであらう、乃で一つ水道の問答をせん哉！

問　水の性質のことを伺ひたし。

答　水の性質は、種々あります、如何なる水も全く純粹と云ふのはありません、多少の無機物及び有機物を

含有して居るのが普通です。此中で、無機物は有害と云ふ程でもありませんが、然し餘り多く含んで居るときは一般の用水にはなりませぬ、此無機物は通例濾過法即ち濾して除くことが出來るけれども全く除去し盡すことは到底出來ません。

有機物は濾しても除去し盡すとは通例出來ないとなつて居ります、併し如何なる塲合でも有害な者でありますから、水中に有機物がある時は、飲料水には不適當です、此他、水中には倘バクテリアと稱する者を多少含有して居る者がある、之は非常に有害なもの



で、之を含んで居る水は飲料水に全く不適當のものであります併して此のバクテリアは有機物のある所でなければ存在して居りませぬ、換言しますれば、有機物を含まない水は、バクテリアも水中にないものと見て差支ありませぬ、故に水に有機物を含有して居る塲合には、凡て飲料水には不適當のものと見做さねばならぬ。

問　一人が一日に使ふ水の分量を伺ひたし。

答　歐洲では一人には一日普通二立方呎より六立方呎と定めてある、米國では之より多量の割合に定めてあります、本邦では一人一日の分量を次の如く定め

てあります。
極めて小なる都會に在りましては一日一人に付2½立方呎、即ち約三斗八升五合。
之れより大なる都會では一日一人に付三立方呎、即ち四斗六升二合。
尙ほ大なる都會、即ち東京大阪名古屋等の如きは、一日一人に付3½乃至四立方呎、即ち五斗三升九合乃至六斗一升六合。
以上の割合の中には、防火用の水は計算してないから、之は別に計算に加へねばなりませぬ、本邦で既に出來て居ります水道中、横濱の如きは一日一人2½立方呎の割合を用ひましたが、多少不足を感ずるそふであります、また東京市水道は一日一人4立方呎の割合になつて居ります。
以上は平均の水量ですが、人間の消失します水量は常に變化します、則ち一年中では氣候に因り、又た一日の中でも其時刻に由り、種々異なります、之を例へますれば、二十四時間中に晝間は最も多く用ひ、夜間は全く水を用ひない時もあります、斯の如く一日中最も多く用ひます割合は、一年中の平均量に比すれば、殆んど五割程多いと云ひます、即ち一年中の平均量を1とすれば、或る一日非常に多く用ひます時は1.5となります。
水道の水源池は、人口增加に依て幾分の餘裕を見込まねばなりませぬ、現在の人口だけで設計しますれば、若し人口を增して來た時に、忽ち不足を生じますから、豫め增加の割合を計算せねばならぬ、其の增加の割合を定めますは至難のもので、多く見積るときは餘分の入費を要しますから、通例其都會が現在まで增加の割合を見、之れを今後の割合と見做して差支がない樣です、然し若し其土地が或る事情により急に增加する見込みある場合は、別に充分調査すべきものです。
右の如く望むだけの水が水源地にあるか否かを調査し、而して其水源地が充分であるかを定めるには、通常左の三つの場合に分つて考へるのです。
（一）　一日の最少供給水量が、一日の最大消費水量

に比し、同じきか或は大なる場合、

(二) 一日の最小供給水量が、一日の最大消費水量に比し少き場合、但し一年中の供給水量が一年中の消費水量に等しきか、或は大なる場合、

此の第二の場合は、第一の場合に比較しますれば、幾分か不可でありますけれども、貯水池を設けて水を貯へますれば供給に差支がありませぬ即ち貯水池を水源地と見做すことが出來ます。

(三) 一年中の供給水量が一年中の消費水量に比し小なる場合、



此の第三の場合は、如何にしても供給する方が少なくなるから、水源地としますには不適當であります、依而水源地は第一第二を撰ばねばなりませぬ。

問 貯水池とは？

答 水量の多き時に貯へまして水量の少なきときに其の貯水で補ふのです、即ち水を等分に供給する爲に設くるものであります、時には此貯水池は同時に沈澄池の働きを兼ねさしむることがあります、最低使用水面より下部は、沈澱物を集める爲めに備へるのですから、平常は之を用ひませぬ、大修繕の時でなければ之は流出せしめませぬ、貯水地の容積は、降雨の日數の多

少により定めねばならぬ。

問　貯水池の位地は？

答　二つの谷の出合ました所で勾配の緩かな所が最も好良な場所です、谷の合しまして峽くなりました部分に堤塘を築いて、人工の湖を作りまして、之に貯水するのです。

問　堤塘とは？

答　堤塘を築くには、一般に泥或は石を用ひます、高さの低い場合は通常泥土を用ひますが、非常に高い時は石を用ひます、之を築くときに、充分注意しませぬければ水の溺れる恐れがあり、又た降雨の爲めに出水し破壞される恐れがある。

石にて作る場合には、堤塘の內に水を充分に滿した時、水の壓力のために堤塘の轉覆する恐れのない樣に注意しなければなりません、即ち石自身の重量で水の壓力に堪へ得る樣になすのです。

問　水量が增して堤塘を越すことはありませんか？

答　あります。ですから降雨のため增水するも、貯水池內に充滿しない前に、流出せしむる一の道、即ち放水堰を設け、堤塘の破壞を防がなければなりません。

問　放水堰とは？

答　放水堰は貯水池中の水が充滿しない中に、他に流出せしめる一つの道ですから、堤塘の高さよりは低き處に設けねばなりませぬ、水は此一方へ集まり流れ出て非常の勢になりますから、其勢のために時々破壞されることがあるから、其築造は充分注意しまして、石の如き堅固な材料で造るべきものです。

問　沈澄池とは？

答　水中に浮游して居る汚物を沈澱せしめる爲に設けますもので、時には貯水池に兼ねしめさして、殊更に設けないこともある。

問　沈澄池の容積は？

答　別に一定して居ませぬが、小にしても三日間は支へ得べき水量を貯へるだけの容積に作らねばなりませぬ。

問　沈澄池の形狀は？

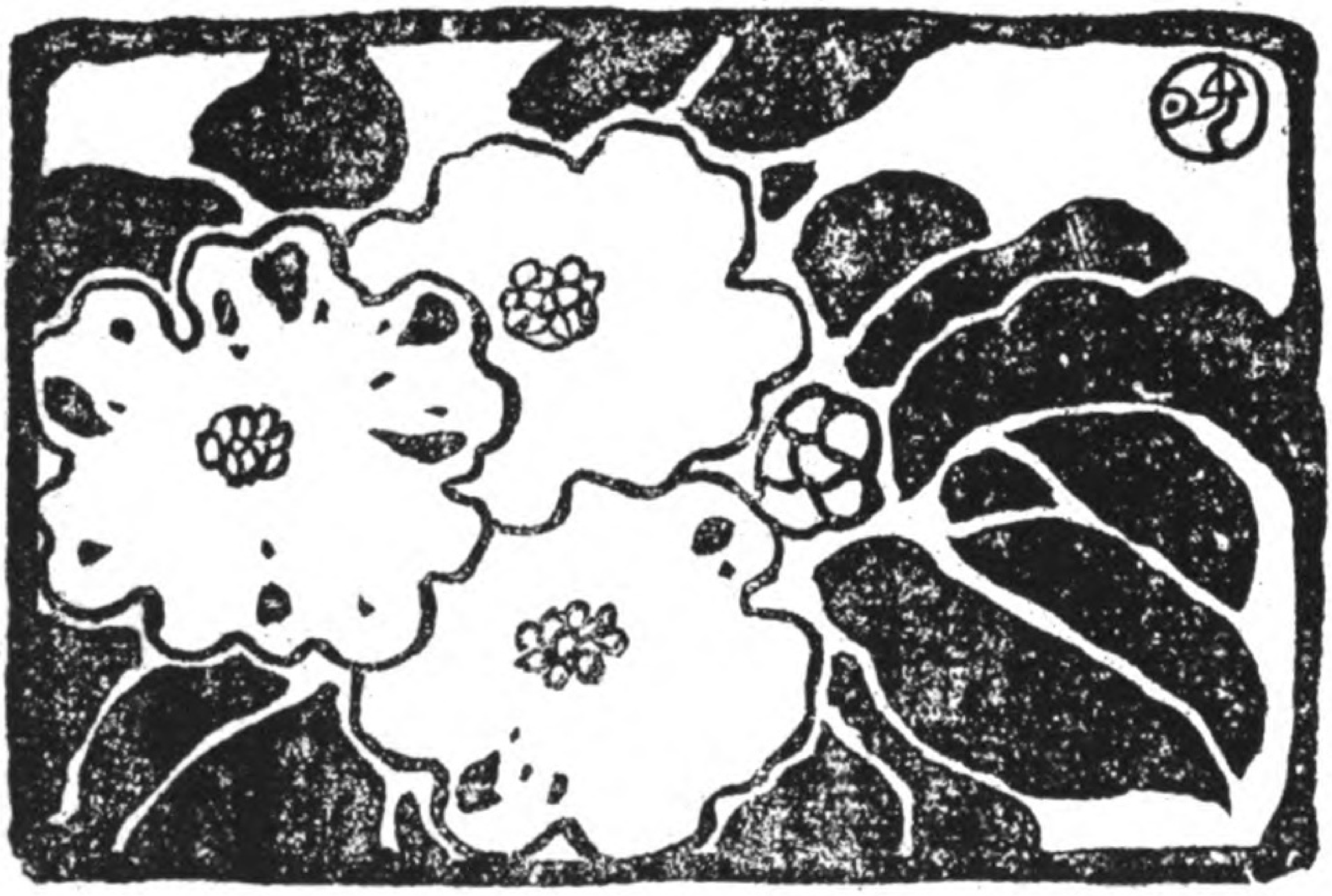
答　普通長方形で、長邊の方向に流れる樣に作ります深さは通例十四呎乃至廿呎の間を用ひます。

問　濾水池とは？

答　字の通り濾す所の池であります、沈澄水では水中に浮游して居る汚物を除くだけで其餘は除くことが出來ませぬから、此池に水を通過せしめて無機物有機物を共に除くのであります。

問　濾水の時間は？

答　餘り早く通過しない樣にせねばなりませぬ、早ければ其效力が薄くあります、其程度は通例廿四時間に十呎の速度で通過する樣にしますして



其池の面積を定めますにも、尚ほ一定の速度よりも早く通過しない樣に定めねばなりませぬ。

問　濾水池の構造は？

答　其形狀は通例長方形を用ひ其中央の部分に一つの暗渠を設け、其溝より左右に復た多くの溝を作ります、而して其上に水濾し砂利を一呎乃至二呎位の厚さに敷き、其上部に砂を二尺程の厚さに置くのです、其底は通例混凝土等で作り、中央の溝には少しく勾配を付し左右の溝も中央に向つて幾分か勾配を付けて、絶えず流れて居るやうに造るのです。

　砂利を置くには成るべく荒きものを下に置き、細きものを上

に置く樣にするので、而して上面に鋪く煉瓦は、間隙を開けるものであります、之れは水を通過さす爲の孔であります。

水の深さは通例三呎位で、其周圍は煉瓦で作り、而して漏水を防ぐ爲め、後方に粘土を詰め込み、底は場合によつて異なりますが、東京水道は下部一尺程粘土を敷き、其上に四寸以上の混凝土を敷設してあります。

凡て此濾水池には空氣の通ずる道を作らねばなりませぬ、之れは初め水を入れるに、上部より鐵管で入れるから、下部の溝の中の空氣は行く場所を失ひますから、管を設けて其空氣を除かねばなりませぬ、此空氣の管は壁に沿ふて作りますが常です。

濾水池は、二時間も續けて使用します時は、砂の上部に漸次汚穢し來り、終に水を充分濾すことが出來なくなりますから、其時は之を清潔にし、且つ乾かさねばなりませぬ、依て此砂を掃除します場合は、其汚れました部を浚ひ上げ、別の水中で能く洗ふのです、即ち沈澄池より此池に水を送る途中に、一の溜池を設けまして、三つの濾水池の一のを常に空虚となし、掃除をする時に交替に之を使用するやうになつて居ります。

問　淨水池とは？

答　水は一晝夜中に使用分量の相違がありまして、即ち夜中は少なく、日中は非常に用ひますから、一日中の不平均の使用分量を平均に送る樣にする爲めに、淨水池を設け水を貯へるのであります。

問　淨水池の形狀は？

答　普通長方形で、深さは沈澄池と同じであります、而して此池は上部を開けて置きますときは、塵埃が入り、又は日光の爲めに水草の生ずる恐れがありますから、一面に木材又は煉瓦、或は鐵材で「アーチ」を作つて覆ふべきものであります。

池の中は煉瓦で仕切りがしてあります、斯くすれば古き水の溜ります恐れがありませぬ、若し仕切りがないときは、先きに入りました水が後れて出る樣の事があるから、腐敗する恐れがあります。

問　淨水池の容積は？

答　昔は三日間の水を貯へ來りましたが、今日では斯の如く多量を貯へる必要がありませぬ、多く貯へますと、却て其質を惡しくする恐れがあるとの說が盛に行はれまして、通例十時間位の水量を貯へることになりました。

問　水を各家に配る方法は？

答　其法に二つあります、一つは水を時々供給するので、他の一つは間斷なく水を供給することと是れであります。

水を時々供給するのと、間斷なく供給するとの得失は如何と云ますれば、一日中時間を定めまして一時間又は二時間水を配布する方法では各々家根の如き高き所に水溜を設け、水を送り來たつた時に之を貯へて次回に送り來るまで之を用ひねばならぬから、甚だ不便であります、殊に水溜が高所であるから、監督も甚だ困難で、又た不潔となり易く、且つ火災の時に一時に多量の水を供給することが出來ぬから、此法は或る場合の外現今は使用しませぬ、間斷なく供給する方法は、晝夜絕へず供給して居るのですから、不時の用に供することも出來て、不便が更にありませぬ、現今では世界各國とも此法のみを使用します。

## 看護婦慰勞

同會は去月十一日慈惠病院内に於て行はれ、有栖川、閑院兩宮妃殿下を始め、鍋島侯爵夫人、嶋津公爵令孃、松方、土方、佐々木の三伯爵、四男爵、東郷大將、曾我男爵の各夫人、林子、加藤子、德川伯、嶋津男、德川賴倫、伊東軍令部長、伊集院次長、同夫人、澁澤男、千家府知事、豐川近藤中野等の各實業家、醫學博士其他朝野の紳士淑女約一千三百餘名の來會者あり後園には各店の寄附せるサンドイッチ、ビール、おでん、すし、日本酒、水菓子等の模擬店を配置し其正面には餘興舞臺を設け舞臺の正面を來賓席として數百の椅子を配列し少しく進みて各宮妃殿下の御席を設けられたり斯くて有栖川宮妃殿下外御一同御着席あらせらるゝや院長高木男爵は凱旋看護婦の一隊を率て醫員一同は幹事長妃殿下の御前に進み當日の御來臨を拜謝し昨年十一月本院の看護婦も救護班として戰地に就職したるが幸に醫員の指導宜しきを得て無事茲に歸院するに至りしは本院の名譽とする所、云々との挨拶を述べ一同敬禮の上看護隊は徐かに列を正して退場し來賓一同敬禮夫れより餘興に移り各種模擬店も大に繁昌したり

# 世帶說法

家事經濟は收入を案じて支出を爲すにあれど、生計は須らく收入と獨立して經營すへし、是れは經濟の目的にあらざるも、一家を經營する上に就ての最好方便なればなり、細目に入れば種々學問上の智識を要すれども、まず一般に勤勞を爲し、節儉をつとむべし。家財を多くすべからず、人を多く使ふべからず、物にも人にも不足勝にすべし。是れ經濟の要義なり、古物を棄てゝ濫りに新物を求むべからず、舊物の未だ廢れざるに濫りに新規の計畫を施すべからず、一時に多くの物を購求すべからず、日の立つに隨ひて必らず廢物に歸する事あるべし。家に不相應の物品を置くべからず、一個の銀の急須は購ひ易きものなれど、その急須が引つける魔力は恐ろしきものなり。家に不相應の物品を備へつけるは、恰し盜賊を買ひ置くと同じ結果を生ずべし、家事經濟は金錢の利用にあれど、金錢の利用といふ事は中々にむづかしき問題にして常人の能くする處にあらず、故に是を利用せんと欲せば、まず務めて物を買はざるをよしとす。買はざるは利用の第一と知るべし。但し生活上買はずして濟まざるものあれば買ふべし。買ふに就ては買物の心得あるべし又財產の整理といふ事は家の貧富によりて相應に面倒なるものなり。されば下駄傘の仕末だに按排よく出來れば幾萬圓の財產とて決して整理の出來ぬ事はなきものなり、一家の財產を整理するには決して人の智慧を借るべからず。よしやその遣り方は少々拙にても自分の力にて整ふべきものなり、財產の整理は富を殖さんよりは富を減せざる工風肝要なり。家道の安全は智慧を働らかすにあらず、愚を守るにありと知るべし。たとへ人よりは無能に誹られ、吝嗇と嘲けらるゝも頓着するに及ばざるべし。財產に忠實なるの人は他人に惡しく言はるゝ事と覺悟すべし



史傳

# 賢母のほまれ

白菊女史

ミルトンが英國人の誇りなると同じく、ユーゴーは佛國人の誇りなりき、十九世紀の佛蘭西に輝きしものは、大ナポレオンの外にユーゴーあり、其の眼は正義に輝き、其の心は博愛に滿ち、其の手は強者を壓へ、常に貧民の味方となりて強暴なる權威に抗しつゝ一生を轗軻に終りしも其の名聲は世界に轟き、佛蘭西の歴史に燦然たる光を放ちたるウイクトルユーゴーの幼時の家庭生活の有様こそよき語り草なるべし。

雄豪は佛蘭西大革命の終りて那翁一世の埃及遠征より歸りて間もなき頃、佛國ベサン市の或る武人の家に生れたり、この子生れて一年ばかりが間は其肩力なくして頭は常に胸の方にうなだれ、一體羸弱の質にて頭は人並より大なれども嬰兒に似合はず手足細く、體又弱々しくして活氣なければ、見る人はこの兒將來滿足に育ち行くかを危ぶみたりし程なりき、されど、其の母は尋常の人にはあらざりけん、只管、愛と、忍耐とをもてこの兒を育て、日夜精細なる注意を置きて、ついに彼れを壯健なる男兒に育てあげたり。然るにこの病弱なる小兒は、適當なる育兒法と、熱心なる母の奬勵によりて八十五歳世にもめづらしき長壽を得て、而かも其の名は佛國の飾りとなり、光りとなりて世界に殘

るに至らんとは。

雄豪の父ゼ。ヨセフは那翁一世に仕へて後少將に進みたり、雄豪は斯る名家に生れしかど平素父には行かずして多く母に懐きたり。

彼れは功名づきなる父の血を受けし半面には、又意志强き母の血を受けて、幼童の頃より中々利かぬ氣の腕白ものなりしといへり。

### △意志强き兒童

雄豪の意志强く、體面を重んずるの深かりしは生れて僅かに五歳なる幼童の頃に於て既に其の素質を示しぬ、或時雄豪いたく母親の折檻を蒙りて、やるせなく泣き出せしに父なる人これを聞きて、大に怒り、嗚呼汝は何とてかくは女々しきぞ、斯く泣くものはよも男子にはあらじ、汝は女なり、以來は男兒の身裝を成さしめずとて少女の服を着せたりければ、五歳の少童も小供心にいと恥かしくや思ひけん、それよりは一切泣くことをせざりしとぞ、是れ彼れが後年那翁三世に抗して一歩も讓らざりし意氣の豪壯なりし三歳兒の負けじ魂の偶々發したるものなるべし、彼れは那翁三世に抗していへり、予は赤貧なり、予には助けなし、予には富もなし、又權威もなし、されど唯こゝに一拳あり、この拳は正義なり、那翁は兵士を有す、那翁は劍と彈丸とを有し、又權威と富とを有せり、されど予は赤手空拳を揮ふて那翁に當らんのみと叫びて權勢の前に一歩も膝を屈せざりし其の意志の强烈なる、實に佛蘭西の一名物として傳へられし雄豪が五歳の魂に現はれたりき。

### △天才の發露

雄豪の少年時代は好んで物を學びしが其都度種々なる問を發せしに、其間は誠に奇拔にして大人も屢々呆るゝばかりなりき、殊に其學才は天禀に出づとも稱すべき程なりき、程なく彼れは父の後を慕ふて西班牙に赴くことゝなりしが、當時母は雄豪兄弟に命じて三ケ月間に西班牙語を學ばしめんとせしに雄豪は僅々六週間にして粗々これを使用し得るに至れりとぞ、西班牙滯留は彼れが十歳の春より翌年の冬までなりしが、此

聞は首府マドリッドにありて貴族學校に入り、有名なる時人の羅甸詩を翻譯して教師を驚かしたる事ありき、當時西班牙の國勢は日に増し、危殆に瀕したりければ、母は子供等の身の上を氣遣ひて、そこ〳〵に引きあげ、巴里の寓棲に歸りける。



さて其の家といふは巴里の極めて邊鄙なるほとりに構へられたるものなりしが、あたりの寂寥なりしだけ、庭園廣く、樹木繁りて、園あり、林あり、こゝにはうるはしき花の紅を見、かしこには、をかしげなる草の綠をしたゝらしぬ、風をだやかにして四時鳥うたひ、蝶舞ふ、まことに幽かなる田舎の趣きに充されぬ。

當時佛蘭西の國は奈翁一世の全盛少しく傾きかゝりし折柄とて、歐洲全土は兵馬の塵みち、巴里も又暫らくも寧き日とてはなかりけるが、雄豪兄弟は此の靜かなる田舎家にありて母と共に日夕を樂みけるが、當時彼等が家居の樣は極めて靜閑にして、兄弟は賢德ある母親の薫陶によりて智德を啓らくの傍ら種々なる實務に從ひぬ、蓋し雄豪の母は彼等兄弟が單に智識をすゝむるを以て滿足せず、猶も其の筋骨を逞ふして後日實社會に出でし時物の役に立ち後れまじき樣にとて、ここに庭園の仕事をこしらへて兄弟に課し、或は鷄を飼はせ、或は草花を培養せしめ、又種々なる手工を敎へ、

大工業を習はせ、又室の壁張り、鶏舎のしつらへ、垣根のつくろひ、など専ら賤の手業をすゝめ、文學、詩作の事はその餘暇のすさびとして務めしのみ、是れこの母親が彼等兄弟の前途を思ひはかりてすゝめたる業なりける。

△田園の薫化

歐洲にては一時、歴山大王の再生と呼びて、ひたすら其の武勇、大略に驚き、英雄崇拜の佛國人は蓋世の大英傑とまで稱へたりし那翁一世も、時の運つきて、あはれ亞弗利加西南の一孤島に流竄の身となるや、一朝の榮華は夢に歸して世は又もやブルボン家の朝廷となり、路易十八世代りて王位に即きぬ、時に雄豪は僅かに十三歳コルゼーの學塾に學びつゝありしが兄雄善は十五歳にして共に同窓なりければ、二人は早くも少年組の餓鬼大將となり、弟雄豪の組は犬黨と稱し、兄雄善の組は牛黨と唱へ、双方共に事に觸れて爭ひたりき、雄豪は塾にありて諸事に丈けしが學科はすべて成績良く、數學の如きは尤も其の長ずる處なりき、されど雄豪の尤も喜びしは何よりもまづ詩にてありき、其頃の佛蘭西は都鄙一般に詩を作るの風流行し、學校にては教師も生徒も皆詩の神を崇拜したりき、されば寧繫兒雄豪の如き天稟のいづくんぞ徒爲にしてあらんや、その詩才は忽ち時勢に鼓せられて日夜詩を作るに熱中し韻法なども自分自から發明して短詩長詩手にまかせて拈出し、彼の廣き數場にて自から俳優となり、數多の少年を集めて卓子幾個かをならべ、舞臺をしつらへ、卓子の下を樂屋となし、紙を切りて勳章をこしらへ、石をつなぎてエポレットとなし、いづくも同じ少年の意匠、さまざまの服裝、器具を備へてまことしやかに芝居を興行なしたりき。

當時雄豪が遊び仲間の中に極めて喧嘩ずきの者ありしが、彼れと何かの事より爭ひを生じ、窃かに手巾に石塊をつゝみて撲ちたりければ其石、雄豪の足に當りてしたゝかに疵を受けたり、其疵重くして、外科療治を施さゞれば治療覺束なしとの事に雄豪は苦痛を忍びて足の幾部を切り取りたり、斯る大疵を蒙りしに拘は

らず、彼れは其の相手の何人なりしかを終生人に語らざりしは彼れの意志の强固なりしこと以て尋常人にあらざるの證とするに足るべし、殊に彼れは此の偶然の閑暇を幸として病中あらゆる詩文を研究し、且つ作りつゝ樂しみたりき、後年雄豪夫人が其の良人の傳をものさんとして舊き文筐を檢したりしに、偶々雄豪十四歳の時の詩を集め書したる謄寫本十冊ばかり發見せしが其表紙に、幼き手跡もて記されたるは「吾が生れし前に書きし戯言」とありて其下に卵中の雛の粗畫を描けり、卵中の雛は即ち彼れ自身を意味したるものにて、その殼を破りて將さに世に顯はれんとするの意を寓せるものなりき。



△名譽の賞牌。

雄豪が文才を世に知らるゝに至りしは千八百十七年、彼れが十五歳の折の事なりき、當時佛國の學士會院にて一の問題を懸賞にて募集したる事ありき。雄豪は勿論同窓の學生中にも此の懸賞に應じて投稿せしもの多かりしが、選定の時、或る一篇に作者の年齡十五歳未滿とあるによりて選者に當りしが學士先生はいづれも奇特の思ひをなしたりしが其の篇を熟讀するに及びて其の作の巧妙なる、中中に斯る少年の作とも見へざるに、いづれも怪しみ十分優等に上るべき價値ありしを認めしにも拘はらず、只名譽賞牌を與へしのみなりき、されど無名の天才は決してこれが爲めに埋もれ了るものにはあらざりき、間もなく學士會院に於て公衆の前に各々の詩篇を朗讀

するに及び最も喝采を博したるは即ちこの優等に洩れたる雄豪の作なりき、兄の雄善はこれを見て大に驚き、走りて此事を弟に報らせければ、時に雄豪は同じ友達と打毬の遊びを爲し居たりしが、この報を聞くも猶ほ耳に入らざりき、程經て學士會院の報告書出でし時、作者ユーゴーなる者十五歳とはあまりに年少なり、若し果して、年齢に僞りなくば學士會院はよろしく斯る年少秀才を奬勵すべきものなりとの一言ありしかば雄豪の母はそれを見て大に憤り、學校より直ちに雄豪を引つれ、其誕生證明書を懷ろにして學士會院の書記を訪ひしに、書記は雄豪の顔を見て舌を卷きて驚嘆したりと、又當時佛國第一流の文豪シャトーブリアンは盛んに雄豪の文才の偉なるを稱賛し、斯の少年前途恐るべしといへりき、シャトーブリアンは雄豪が日頃敬慕して措かざりし、理想的人物なりしかば、此の一言を聞いてその嬉しさは腸にもしみ渡りしならんと、

雄豪が學士會院にて名譽を博したる後數月の事なりき、學校仲間の中にて競爭小說を作りたることあり、その期日は二週間なりしが、出來上りたるものは、バクジャガルと題するものにて、西印度諸島に於ける佛蘭西殖民地にて土着人と居留人との間の爭鬪を描きたるものなりき、これは當時の實況を小說にしたるものにて事件の成行おもしろく、天才のひらめきありて、中中十六歳の少年の作とは見へざりき、而して此の處女作に於て雄豪が一生の間に發達せし觀念及び技倆の面影を顯はしたり、大凡雄豪の著作を通じて貫徹する獻身的の精神は實に此の一小處女作にひらめきあらはれたり。

### △慈母の奬勵

元來雄豪の父は那翁黨の人なるに、其母は之に反して熱心なるボルボン家の黨なれば、夫婦の間に議論常に波を揭げつゝありしが、那翁の朝倒るゝ頃より夫妻別居する事となり、爲めに雄豪兄弟は母の保護を受くる事となりき、殊に母は雄豪に尤も望みを矚し、將來必らず、國家に盡す事あるべきを信じたれば奬勵と誘掖とに日夜怠らず、千八百十九年偶々烈しき肺炎に犯

されて病蓐の人となりしかば、雄豪兄弟代る〳〵看護を爲したりき、當時恰もヘンリー王の銅像を建設するに就て懸賞もて詩を募るの事ありて其期日近々數日に迫りたりき、この時、母親は傍らに侍して看護しつゝありたる雄豪を顧みて、汝の應募すべき詩は已に送りたるやといふ、雄豪は事繁くしていまだ作り得ざりし旨を答へければ母は聞いて痛く失望の面地にて、見よ、吾が病氣は運命なり、致し方なし、されどそれが爲めに、汝が世に出づべき機會を逸するは誠に惜しき事なりといへり、雄豪これを聞くと等しく直ちに筆取り出して詩作に從事し、徹夜燈火の下にありて一篇の長歌を草し終りて翌朝母の眼さむるをまちてこれを母の手中に置きぬ、母は我が子が心力を盡してものせるを見て、喜び滿面にあふれたり、かくてこの一篇はまづ慈母の涙にうるほされて後發送されしが、天いかでこの孝子の作を徒爲にすべき、ついに優等の賞を受くるに至れり。



雄豪は慈母の奬勵と天才のはたらきによりて學校を出でゝより、ひたすら文學上の修養と著作に餘念なく、屢々賞を得て漸く名聲を江湖に博するに至れり。

△母の永眠

これより先き雄豪の十二三歳いまだ田舎的生活をなしつゝありし頃、雄豪の胸に忘れちれぬ少女の面影ありき、名をアデルと呼び、當時十一二歳フォッセー家の乙女にて、屢々雄豪の家を訪づれて、雄豪と鳥の巣を爭ひ、林檎を爭ふて遊びくらしたりしが、十二三歳の小娘は、今や俊秀なる少年となり、當時リボンのうるはしきを誇りしアデル孃も亦美しき妙齡となりぬ。兩人相逢ふ毎に、口に言はずして眼自づから言ひ、騒げる胸はくれなゐの面の色にいづるほどゝなりければ、双方の親は少年少女の齡のなほ弱くして、資力のいまだ家を成すに足らざるを慮かりて、兩人の身の爲めなればとて相計りて兩家の往來を暫らく止めぬ。斯る折しも雄豪の母は病勢次第に募りて千八百二十一年の夏、二人の孝子の看護の下にありて長き眠りに就きぬ。雄豪は悲みに堪へずして、歩むともなくフォッセーの家の邊りに至りて窓より望み見れば彼女はまさに花の帽子を着かざりて舞ひ躍るに餘念なし、この日は彼女の誕生日にてありければ其の家族はユーゴー家の母の亡せし事を彼女に包みかくせしなり、明る日雄豪が再び其家を訪ひてアデル女に花園の中に會ひぬ、雄豪の、色蒼く、悲哀の情面にあらはれたるを見て、彼女は駈けよりて其故を問ひ初めて其の不幸を知り、さても妾の誕生日に、御身の慈母は逝きませしぞ、昨日嬉しと泣きし妾が涙は卿が哀しと泣き玉ひし涙なりしかと、こゝに二人の契約は成り立ちぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それより雄豪は種々樣々の困苦を經へ、艱難を凌ぎ、貧乏と鬪ひ、窮厄と戰ひ、備さに世路の悲慘を味ひつゝ、自家の針路を開き、自家の運命を開拓し、少年時代の名聲は年と共に加はりて、佛國理想派文學者の泰山北斗と仰がれ、又政治家としては正義の友、自由主義の楯となりて赤手を以て那翁三世に抵抗し、以て一代民衆の敬仰を受くるに至りしものは、實に彼れが其の意志強く、思慮に富める賢母の薫陶に依らずんばあらざるなり。大那翁曰く、世に女は尊からず、されど

母は尊しと、蓋し有爲の人物を生むものは母なればなり。

# 奈良朝の春日局

（贈正一位犬養橘宿禰三千代）

井上秋劍

青丹好し奈良の都の八重櫻、今を盛と咲き匂ふ、國の榮ぞ貴とけれ、當時に於て東洋第一の先進國たりし印度支那の文明は、隨唐以來年に月に輸入せられ、憲法十七條と爲り、大化の革新と爲り、太寶令の制定と爲り、遂に奈良朝の文華を生む、奈良朝最初の天子元明天皇は、實に大化革新の黒幕宰相たり近江朝廷の主權者たりし天智天皇の御娘



にして、持統天皇の御妹、文武天皇の御母なれば、たとへ女帝にはおはしますとも、國家の興隆を謀るには、社會の文明を進むるに如かずてふ思想は其血管を傳はりておはしませしや疑無し、盛なる哉奈良朝、文物典章大に開け、政治、宗教、文學、美術に於ては特に顯著なる發達を爲せり、而して此時代の子として生れ文明鼓吹の任に當りし人物には藤原不比等、橘諸兄、藤原百川、和氣清麿、吉備眞備、藤原仲麿、弓削道鏡、行基、玄昉、柿本人麿、山部赤人等あり、其の他唐の留學生と爲りて其の秀才彼朝廷に惜まれ竟に留まりて

彼れに仕かへし才子あり、我國空前絶後の大佛像を鑄出だしたる美術家あり、閨秀にも和氣法均尼、藤原中將姫あり、元明、元正、孝謙の三天皇及び、聖武天皇の皇后天平應眞仁正皇太后藤原光明子あり、而して此の奈良朝の最初より中頃に至るまで宮中の實權を握り、併せて府中に向かつても其の勢力を及ぼし居たる贈正一位縣犬養橘宿禰三千代あり、彼の女は如何なる人なりや、天武天皇の朝始めて宮中に仕かへ、持統天皇後宮より出でゝ大統を受け玉ふや、三千代亦た掖廷の一宮女より出でゝ暗に政治に參劃せり、之れより先き三千代は美努王の室と爲り男子を產み、王に後るゝに及んで、恰かも藤原鎌足の長子不比等の室を亡なひたる時なりければ、則ち之に嫁して繼室と爲り女兒を生めり、不比等は其門閥に於て、學識に於て當世第一の人物たり、而して美努王との中に生れたる男子は一代の大臣左大臣正一位橘朝臣諸兄と爲り、不比等との中に生れし女子は聖武の后、孝謙の母たる奈良朝の明星光明皇后と爲れり、光明皇后、幼にして聰慧、早く聲譽を播く、十六にして血統に於ては其甥たる十四の皇太子(聖武)の妃と爲りし時、衆御を攝引し人皆をして其歡を盡さしめ、前代未聞の賢き貴女なりと云はしめ、竟に奈良朝の一大明星と爲るに至りし者、悉く三千代の資性を承け、三千代は敎養を受け玉ひし結果ならずんばあらず、從來不文の皇室典範とも云ふ可く用ゐられし習慣に、天皇の正配は必ずや皇族より取り、之を皇后と爲し、其他は妃、或は夫人と稱し、臣下に列す、決して皇后と爲る能はざりしに、聖武の御代に至り、藤原氏の功德偉大なりとの理由を以て光明子に對し皇后宣下あり、藤原氏は臣下にありと雖も其祖先の勳功に因り、長く天皇の正配たる皇后を出すを得るてふ事、是れ亦た不文の皇室典範となり長く後代に傳ふるに至れり、此の如きこと直接に間接に三千代が勢力の然らしむる所にあらずとせんや、三千代が奈良朝に於ける經歷は元正天皇の養老元年正月從三位に叙し、養老四年八月夫婿右大臣不比等の病あるや、朝廷の非常なる待遇を受け、尋で不比等の薨するに及

び、朝廷の哀悼、廢朝、優勅、弔賻の禮群臣に異なるに逢ふ、未亡人たりしより、一層專心に宮中に仕へ、聖武天皇の天平元年八月其所出の光明子皇后と爲りしを見、同四年正月其所出葛城王（橘諸兄）從三位と爲りしを見、同五年正月內命婦正三位を以て終に薨せり、天皇に於ては繼祖母たり、皇后に於ては生母たり、且つ天武以來列朝に仕へて功勳大方ならざるの故を以て、特に從四位下高安王等をして喪事を監護せしめ、葬儀を賜ふこと散一位に準す、今日の國葬なり、淳仁天皇の天平勝寶二年天平應眞皇太后を尊ぶの所以を以て、正一位大夫人を贈らる、天恩遺骨に及ぶこと此の如し、以て在世時の權勢推知す可し、嗚呼入つては宮中の才媛として宰相の實權を



握り、出でゝは府中の名臣に配し、隱に黒幕宰相と爲る、繼子宮子媛は文武天皇の夫人と爲り聖武天皇を生み、所出光明子は聖武天皇の皇后と爲り孝謙天皇を生む、繼子藤原武智麿外皆大臣と爲り、所出橘諸兄亦た大臣たり、而して身は天武、持統、文武、元明、元正、聖武の六朝に仕ふ、しかも其間甚だしき失敗なかりし者、三千代の決して感情に人を傷り奸智自ら用る多くの女性權勢家の亞流にあらざりしを知る可きなり、三千代薨じて玄昉の事あり、道鏡の事あり、宮掖屢々醜聲を出だす、一國の興廢一人に係り、一宮の盛衰亦た一人に係る、三千代の如きは實に女流の武内宿禰なるかな、又徳川將府の春日局に比す可し。

# エスキモー人の生活

一 記者

先年米國より二十五人の一行を以て探險隊を組織し、冱寒、窮厄を冒しつゝ北極の風土を探りて無事歸國したる人々の記事あり、窮北の生活聊か珍異を價するものあるを以てこゝに譯載す。彼等の一行は、いづれも少壯活氣に富んだ靑年であつた、始め新約克から船に乘つて北方に向つたのが其年の六月で途中、種々なる危難を冒してやうやくにしてメルビル灣につき、こゝから綠地の西の方の海岸に到着したのは、其年の九月であつた、見ると此の島は北緯七十度以北に在ることゝて、山は皆白雪で蔽はれ、四面皚々たる樣、恰も水晶宮にでも行つた樣な心地がした。

一行は此の島に着するや、まづ一棟の家屋を作つた、それは此處を探險隊の本據として、陸路を進んで北方に向ふつもりであつたからで。一體、北極を探險するには海路から行くのが便宜ではあるけれども、そうすると北方に進むに隨つて、寒氣の爲めに海水が凍つて、遂には氷海の中に閉ぢ籠められ進退を失ふの恐れがある、そこで、陸路を取る事に定め、氷上を跋涉し、行々測量をすることに決したのである。

北氷洋といつても盛夏一ヶ月の間は暖帶地方の氣候と同じく日中は單衣を着て汗の出るやうな事もある、それ故、水晶の如き氷山も暖氣に遇ふては一面に融け始め、或は流れて川となり、或は碎けて崩雪となり、時として彼の巨大なる氷塊が碎けて海中に墜落する時には宛がらの海嘯を起して海面數尺の高處に激波を打あげ、轟然雷の如くに鳴動するのである、彼等の建築した家屋は海面上四十尺の處にあつたけれども、海嘯の災難に罹つて食物、其他の貯藏品を攫はれ、非常の困難に遭遇した事があつた。

乍併北極の寒島でも又多少風色の變化はあつた、丁度夏の八九月頃となれば、山々に張りつめた氷が融けて流るゝ際には川中の巖は一面の靑苔が生えて、恰も綠靑を點じた樣に見へる、間もなくこの苔が腐敗す

る頃に至れば地上に種々なる草が芽を吹き出して、北極地方相應の草花が、點々として地上を飾るのである。

緑地の氣節は一年を二期に分けられる。八月上旬から十二月中旬までは晝の世界で、太陽は常に地平線の上に在つて、東より南に轉じ、南より西、西より北、北より又東といふ樣に、地平線の上をぐる〳〵と廻つて夜といふものはない、之れに反して十二月下旬より翌年七月下旬まではすべて夜の世界である。一年の半分は全く常暗の世界であるから、永く此の地に住するものは往々憂鬱病に罹るといふ事である。

斯る異候の土地であるから衣服の如きは元より一種特別なものであつて、まづ海豹の皮の毛のある部分を肌につけ、其上衣は鹿の皮もて造り、之に毛皮の頭布を縫ひつけ、頭より冠る樣に造つてある、又股引は熊の皮靴下は兎皮、長靴は海豹の皮、といふ有樣で、それぞれ防寒的の獸皮で造られて在る、けれどもまだこれだけでは夜間の寒氣を凌ぐ事が出來ないから、其上に鹿の皮の布團を被るのである。この布團は日本などにある物とは大に違つて、毛を裏にした袋のやうなもので、全身この袋にはまつて頭と手足の端に紐をつけ、寢る時にはそれを引締めて寒氣を防ぐのである、それ故探險に出掛ける時などは、積雪の中に氷を枕にして睡眠を取るのであるから、恰も大きな嚢の中に人間を包んで捨てたやうな奇々怪々なる狀態である。

扨又其土人の食物はどうかといふに、これは重に海豹の肉、海馬の肉、脂肪などである、海馬は單に食物として必要なるのみならず、皮は衣服となし、靴となし、紐となし、齒牙は武器となし、獵具となし、脂肪は煖氣を取り、又火を點じ、其の效用は實に莫大なるもので北海の絕島に斯る天與の賜物のあるのは、恰も赤道直下の熱帶地方で、椰子の生產するやうなもので、造化の妙配劑と言はねばならぬ。

一行は成可く北端に達せんと欲して犬を橇につけて曳かせた、その橇は一臺に十五匹の犬をつけるのであるから、一行十五人の橇には總計二百匹の犬を養ッて置かねばならぬ、その爲めにそれ〳〵食物の用意をも

せねばならぬ、一行はまづ携へ來ッた牛肉、砂糖、鹽、脂肪などを交せ合して造ッた一種の食物を握り飯ほどの大さにこしらへてそれを一日の食糧として、生命を維いで居た、探險に出掛けて三週間目に犬の食物に缺乏を告げたから、止むを得ず、弱い犬を殺して、其肉を強い犬に與へて居たが、それも段々と少くなッて、終には例の糧を與へる事とした。一體この邊の犬は元と狼であつたのをエスキモー人が漸次に馴らして今日のやうに旅行用に使役するやうになッたのである。彼等は綠地の北部を探險して、いよ／＼その地の島であることを確めたが、それより更に進んで北極に到らんと思つたけれども、途中種々なる危難に遭遇して遂に目的を達する事能はずして、引き返したのである。

併し一行はそれが爲めに、十分にエスキモー人の生活を研究する事が出來た、エスキモー人は極めて穩和な人種で、現今では人口僅かに三百人、身體矮小、僅かに四尺を超ゆる位であるけれども體軀は頗る强壯で殆んど病氣に罹る事はない、彼等の家屋は獸骨から造られ、其上に獸皮を蔽ふて雪や風を防ぐのである、内には日用品や食物や、を貯蓄する棚がある、燈火を點ずる場所もある、その燈火は海馬の脂肪を油とし、苔を燈心としてこしらへたものである、けれどもその室では夏は温暖に過ぐるから別に夏の家屋を造るのである。

又彼等の獵具は多くは槍、弓、又は銛で是等は皆一角獸や、馴鹿の角で造る、又彼等が漁獵した動物を運ぶのには極めて堅牢なる船又は橇である、その船は海馬の肋骨を組合せ其上に海豹の皮を被ッたもので、どんな荒浪の中へ乘出しても決して覆へる恐れはない、又其橇は百數十本の骨から成り立つて居るもので其堅牢なること中々文明人の機械的製造も遠く及ばず尤もそれを造るには半年乃至一ヶ年の歲月を費すもので、至つて手ぬるいやうであるが、一たび製造すれば何十年使用しても破損する事はないのである。

彼等は平素漁獵の餘暇には音樂を奏して嬉遊する風俗である、其の音樂といふのは、重に太鼓である、太

嚢は是も又海豹の肋骨を以て胴となし、之に海豹の皮を張つたもので、音の高いものである。

エスキモー人種は極めて穩和な人種である、一人の言ふ所は何人も同意して決して其の言に反對の事を言はない人種である、又その宗教心はどうかといふのに、別段是れといふて神を信ずるのではなく、只死後に於て魂魄は天に昇るものであるといふ事を信じて居る、或る一土人は天上の一大星を指してあれは我が父の精であるといつた。又彼等の中には酋長もなければ、政府もない、皆同一の自由を得、人々互に爭鬪するやうな事はなく極めて平和な生活を送つて居る、隨つて結婚、埋葬なども極めて簡單なものである、勿論彼等の生活は唯漁獵して其の生を送るといふ丈けで奢侈もなければ、慾望もない、眞に太古の民である。

探險隊の一行は綠地に在る約一年にして稍く食物の缺乏を告げたが、窮厄の裡に大凡探險を遂げ、翌年の夏に至つて米國政府より回送された船に乘つて無事歸國する事を得たのである。

# 西洋茶ばなし

S、R生

一時は無冠の帝王と呼ばれし世界屈指の金傑、曾ては米國の金融を一手に支配せしといふ彼のヴアンダービルト家の家産は先代の主人コンモードル、ヴアンダビールトの組立たるものにして、塵も積らば山となるべく、滴も集まらば海となるべし、湧來る水も篩にそゝがば溜らざるべく、玉の盃も底なければ用を爲さじとは先代ヴアンダビルト氏が畢生の格言なりき、氏はよくこの格言を實行して以て二億萬弗以上の財産を積みぬ、其名は世界に轟きたり、然るに今の主人コーネリヤスといふは財産を作りし經驗ある人にあらず、身は幼よりして錦を衣とし、玉を食とし、未だ曾て飢餓凍餒の趣味を知らず、其れも其筈年々歳々幾百萬弗の金は父の遺産中より湧出して、一年三百六十五日其心を支配するものは唯消費の一點にあるのみ、今其の家に雇へる料理人(佛人)は元と獨逸先皇帝の料理番をつと

めし人にて五千圓程の年俸にて宮廷の料理一切を主宰し居たるものなるが、先帝の崩御に際し、一まづ暇を取りて巴里に歸省中恰も好しヴアンダービルトが歐洲漫遊に際したれば其まゝ米國へ連れ來りしものなりとぞ、此料理人の給料は現今米國にて一國の大政を主宰する國務大臣の年俸よりも高價なりといふ、實に驚ろくべき事にこそ。

斯る有様なればコーチリヤスヴアンダビルト氏が舞踏會に臨まんとする時、其乘用とする一輛の馬車は價數萬金に上り、合衆國高等法院の門よりも廣ろき石路を入りて階下に立では、此時甲の從者は鈴を曳きて用意の整ひしを告ぐれば、乙の從者は戸を開きて之を聞き、丙の從者は馳せ入りて之を傳ふなり、やがて夫人が金玉燦然たる服をつけ、厚やかなる上衣を被ひつゝ玄關に立てば一人の婢は手荷物を持ちて其側に添ひ一人の婢は夫人の裾をかゝげて靜かに歩み來る夫人が階を下らんとすれば二三の下僕は華麗なるカーペットを石路に布きて歩行に供するなり、かくて車上に登る時はヴアンタビルト出で來りて共に坐を占め、車の將さに發せんとする時、家人一統敬禮をなす、其の時の有樣は恰も英國女皇の發輦のそれに異ならずといふ、コーチリが曾て巴里に遊びし時、一夕同地の歌妓を招き數時間の談話をなせしことあり其の緣故もて三千圓の謝禮をなしたることあり、又曾て新約克に於て客を招き、宴を張りし時二萬弗を費やすを通例とせりと、然るに斯る富豪の驕奢に對照してこゝに憐れなるは恰度ヴアンダビルトの住宅の隣りに住へる細民にぞある。

此細民は一家數人の小兒をかゝへて、夫は去る工場に通ひて僅かばかりの給料を得れども以て其口を糊するに足らず妻は古衣のつくろひなどして夜を日に繼いで働らけども其の身を温むること能はずして終年營々として飢寒に泣きつゝありと金權萬能の米國にては往往にして斯る實例を見ることそうたてけれと、彼の地よりの通信に見へたり。

## まなびのしをり

# 歌を學ぶ心得

翠香女史

曩に撰歌に就て少く歌の事をかきたるに、忽ち諸方より種々の事を問合せ來りて、一々返書に遑あらねば、貴重の紙上を借て申さん、大凡は初學者にて歌は如何爲たら讀る樣に成歟との問多し、如何も如斯も有ませぬ、唯何角なしに一首でも數多く種々雜多の題をよみ試るにあり、其よみ方は始から歌らしく雅言のみにつゝらむとしては思ふ儘にいはれぬ物也、よく知れたる雅言ならば用ゐるもよけれど、確かにも得知らぬ詞をソウデアロウの推量に遣ひては、意外間違を生じて、反對の意となる事あり、又いかなる意とも解し難く成るもあり、加筆は其詠人の心を夫と聞ゆる樣に添削すべき物なるに、其意のある處わからねば甚だ迷惑にて、是非なくよい加減にこちらにて其題に適ふ樣に引直せば、全然代作同樣にて、折角よみ出たる甲斐なき事と成り畢る、されば拙なる雅言を用ゐて、先生を困却めむよりは、俗言の儘にいひ置を可とす、俗言なれば假令地方言或は訛言にても、雅言を間違へたる程わからぬ事はなし、然れば其歌主の意を心として聞ゆるやうに加筆出來るなり、斯うして返送すれば俗言にコウ云ふを雅言にては爾いふと知らるゝを一ッ〳〵記臆しゆきて、凡そ歌の二三百首もよむうちには、大體の雅言を覺えて、逐々と歌らしき歌のよめるやうになるもの也。

歌をよむには先てにをは、語格、かな遣、等を確かめざるべからず、それには如何なる書を求めて宜き哉と問ふ人多し、てにをは語格違ひては歌聞えずかな違ひては歌にならず、故にそれらの書必用なるに相違はなけれど、扨其書どもを見ても、極初心の人には急に解る物に非ず、たとへ少し解とも、是を守りて違へぬ樣に歌よまむと爲れは其むづかしき事殊の外にて、折角思考得たる趣向も何もいはれず、コウいへば語格が

進ふ、是にてはてにはがあはぬ等、四方八面に差支て自由にならず、終に一首もよむ能はざるに至る事あり、是書の爲に拘泥て苦しむ也、さる難行苦行は譬ば禪宗の悟道に等しく、天才穎敏の人ならでは爲遂難し、普通の人はやはり他方本願の念佛宗の如く、只管師に縋りて其敎授を乞ひ、難解事は幾度も了解迄質問して服膺おくべし、歌數多くよみて修行の功積ればいつとなく知らず識らずの間に、てにをは、語格も違はずなり、假名遣いをえの端奥も記臆せられて、扨後に其書共をみれば明瞭に克悟りて、いよ／＼確實に記臆らるゝに至るもの也、是易より難に入の道也、語學を先にして歌に及ばむとするは師弟共に困難なり、歌より始めて只管修行すれば語學もかなづかひも自然に覺えらるゝなれば、嶮岨を攀て苦まむよりは、平路の歩行易きにしかず、然而到着ば同じ事也、のみならず語學を先に一骨折たる上に、歌は又改て修行せざるべからず、歌よりするは兼修と成譯なれば、餘程捷徑なるをや。

▲凡そ何年程學ばゞ歌讀とならるゝやの問

について

人各自性質を異にす、親子兄弟と雖同じからず、敏きは何事も速く、鈍きは萬事遲きが常則なれど、文才と世才とは別物にして、文に敏なる人必しも賢からず、常に迂遠也と笑はるゝあり、世上の交際拔目なく、商工業にすばしこき人却て文才なく、手跡さへ惡筆なるありて、世才文才兼備は稀なるもの何れか一方へ傾きて各々同じからぬを、一律には云ひ難けれど、多年の經驗上より申さば、凡何藝にても丸三年修業すれば卒業に至るを普通となす、夫より早ければ敏、遲ければ鈍の組也、勿論月日は同じ三年にても、勉勵と怠惰にて大差を生ずべし、何藝に拘はらず拔出て上手名人となるは天才に非ざれば能はぬ事なれど、凡普通の處までは誰にても學びて修行の功を積めば出來る筈の物なるを、とかく其處迄の耐忍力なし、始は珍らしくて面白く感ずる儘に、頻りと凝て勉強するも、何藝とて然面白き斗に非ず、いづれ難關に遭ふ物也、其處を通り拔れば、一級を昇進す、如斯事何回も有りて、終には最後の大難所に罹り、泣にも泣かれぬ苦みに自棄爲歟、是迄の辛苦も學資も水泡と消はてむは口惜、去ながら先生何人ぞ、吾何人ぞ、同じ人の爲る事なし得られぬ事やはあると、大に勇氣を鼓して一心不亂に勉強すれば忽然として悟る所あり、夫より後は其藝の趣味を覺え眞に面白き事始の面白さとは大に起なりて、生涯消去る物に非ず、猶進みて上達すれば、終に世に名を知

らる〻程の先生ともなるべき也、諸藝各々其業は違へども稽古の順序は同じく一致せり、歌にてはいかなる題を取ても、夫相應によみ得て、先生なしにても過ちをせぬ迄に至り、我歌他歌共に其よしあし又是と彼と比較して孰か優、孰か劣と云ふ事を見出し得る力の附たらば、一人前の歌詠と成たる也、其歌の巧拙は天性に有、歌は拙くとも過ちなければ卒業したる人也、奇抜に工なる歌よみても折々疵のみゆるは未一人前とするに不足也、歌を詠習ふからには一人前となる迄は耐忍してつゞけたまへかし、中途にて止ては何にもならぬなり。

▲歌は婦女子に最も適當の藝なる事

曾ても申しゝ如く、昔は山がつ、賤の女迄も歌よみたるを思へば、歌は決して六ヶ敷ものに非ず學問せねばよまれぬにもあらず、勿論學才あらば猶更よけれど、しひて小六ヶ敷漢文や横文字を學ばずとも歌よむには差支なし、唯雅言を克おぼゆれば足る、却て餘り學者になれば其歌理屈に陥りて宜からずといふ説もあり、



歌は果くあどけなく童女の天眞爛漫たる趣なるを最上とす故に女に適する也、歌は幼くよむべし理屈をいふものに非ずと云ふ教もある也、始のうちこそあれ、少し道附けば縫針を爲ながらにても、夜分寢ながら、又は臺所事及び、小兒に乳を呑ませ乍にも歌は考へらる〻物にて、何も机に懸り書物を繰かへして、貴重の時間を歌の爲に費すにも及ばぬ仕事なれば、婦人のたしなみとして是にしく事有べからず、歌に心を寄すれ

ば月花紅葉や、雪は更にもいはず、みる物きく物に附て風流心おこり、自然と高尚に成て、身は下賤も品位そなはるの徳あり、彼衣裳を着飾り、演劇を觀の外、娯樂を知らぬ女子と同日の論に非ざるなり。

▲歌の稽古は恥羞まじき事

何事を學ぶも極く初心は恥かしき心持する者なれと、殊に歌を始むるは他に見きかるゝを恥る事甚しくて、師と頼む人にすら其詠艸を見する時には面を赤くし、胸を轟がす、況や他人には隱してみせず、其癖同門の人の歌は強に見たがり、聞たがる物なれど、然恥怯してのみ居るは斯道の爲に甚宜からず、學びても敎られても記臆られぬこそ恥ならめ、知らぬ故に學ぶに何の恥る事かある、師となる者とて始は知らざりしなれば、學びて知り修行を積て終に師となれるのみ、譬ば小兒の時は誰も皆片言をいひたるが、次第に詞を聞覺て、終に何事にてもよくいひ得るに至るが如し、歌も雅言を克記臆すれば、奈何成事にても思の儘にいはるゝ也、然れば假令笑はるゝ事ありとも、初心なればば、當然の事と鐵面になりて、先輩の人には歌をみせ、批評を乞ひて、一々其說を筆記し、又成べく古歌を暗誦すべし。

▲歌會には必ず出席すべき事

未だ歌のよまれぬに、會に出席など思ひもよらず、克修行したる上にて等いふ人多けれど、そは甚宜からず、如何となれば、既に門人となる以上は、其先生の月次會には必ず出席すべき義務あり、或は餘儀なき差支ありて缺席するとも、其兼題の歌に會費を添へて贈るを至當の勤とす、其上に會に出れば當座即吟をよみ習ふの得あり、我家にのみ在て種々の題をよみ試むとすれど、思ふ樣にいはれねば、其題を止て外の題と取替みてもやはりよまれず、果は飽みて其儘止にする事初心者に多し、夫にては稽古にならず、會席なれば衆人皆よむに、我一人讀まれずとて止らるゝ物に非れば、苦み乍もとかくして讀出る中には、存外可なる什も出來、よみ口も漸くにとけて、捗くなりゆくもの也、然れば會に出席するは修行の一つなれば、我師家のみならず、何處の會にても怯ず臆せず出席して、諸人の歌話を傍聽すれば、吾が思ひも寄らぬ事迄も聽得て、大にとくの附もの也、我一人師に質問する事は限りありて事狹く、進步も從て遲し、世間廣く交際すれば、知識も早く弘まり進步速なり、先生に依て自己が社中を誡めて、他家の會へ▲

サト交はれば、歌風弱くなるなどいふもあれど、夫は畢竟我門弟を他に奪はれじとする卑劣心なるのみ、然様の氣の狹き事我等は大嫌ひなり。

### ▲初心者のみるべき書并心得

古今集を始め、代々の撰集、又近代の名人大家の歌を蒐めたる草野集等、其他何にても廣くみるは可と雖も爰に一の心得あり、それは今體と稱して定家卿に始まり、二條冷泉の兩家專ら歌道を司り、詞に制限をたて、禁句あり又哉止は発許を經ざれば用ゐられぬ等、種々所狹き定を置、假名遣もをおいゐを置替たり、うをむとして馬をむま梅をむめとかき、八重はやへなるを八ゑとかき、をとめは、少女なるを殊更におの音なる乙女とかく等、すべて轉倒のかなとしたる也、然るに四大人等世にいでゝ、是を有まじき僻事也とて大に古學を再興し、かなづかひも元の如く古に返されたり、方今宮内省御歌所をはじめ、世上押なべて古體を尊び、二條冷泉の今體は廢されたれば、歌人たる者は、殊に遵奉すべき也、然るに俗間女兒輩の翫弄ぶ百人一首は、今體流行の頃に板本となりし物を、猶其儘に用ゐ、再版するにも其通を寫して改ず。



故に其歌む（う也）べ山風（少也）乙女の姿、八ゑ衛、やゑ櫻等、今體がなのみを幼少より見習かき馴て、先入主と成の習ひ歌を學ぶにも夫が邪魔に成てかな違する也、然のみならず古今をはじめ、多くの歌集、源氏物語の湖月抄と ても、古學の行なはれぬ先に版本となりたれば、皆今體にてをにのかな轉倒したれば、古學を心得たる先輩の朱を入れて直したる本に非ざれば、湖月抄に斯かきてあればとて當にならぬと知るべし、今體は大方御家流の丸き字にて記してあれば、御家風は書風は至極眞目面に惡洒落なくて、女兒に手習さするに宜けれども、惜哉今體かな多ければ、手本と爲がたし、今にして手本として習ふべきは御歌所の坂正臣先生の書なるべし、是なれば假名遣の疑慮なく、手跡も正しき書風にて、癖なければ邪路に迷らざるべし、歌よみは手を克かゝざれば短册懐紙等をかくにみぐるし、古き女學世界の口繪に正臣先生の書あれば手本として習ふべし、扨歌書どもは上件の如く書き本は多く、今體がなければかな遣を慥に服膺したる上ならば、何をみる共惑はねども初心のうちは縣居本居の流なる書、又明治と成てのちの博士達の編纂中にも、落合氏金子氏等の物たしかにて宜かるべしそれらの本閑暇ある時に讀味はひて解難き處あらば書拔て先生に質問し克記臆しおきて扨歌をよむ時には書物を見ずして考案するを宜とす、其題を得て其題のある書類をみ作よまむとすれば、其書にある趣向も詞も其儘丸探に竊たくなる、先人の心を竭してよみ識たる歌を 恣に自己が物とす、竊盗に非ずして何ぞや聖竟法律に明文なければ、警察の手にはかゝらずとも、道德の罪人なるべし、されば歌よむには書をみずして他の用事を爲つゝ考るが一ばんよき也。

### ▲歌會に出席する心得

會日より前に兼題の歌をよみて先生に添削をこひ、（獨立の力有る人は此限に非ず）短册にしたゝめ置、之に會費を添へて其日持參する物とす、發納（發とは一月の始、納とは年の終也）會又は賀莚、追悼等の別會は総の方懐紙を本式とし、竪詠草之に次ぐ、然雖其摺物に料紙、短册と記入あれば短册にてよき也（短册及懐紙竪詠草の書法のちに云ふべし）時刻は大てい午後一時か或は三時頃より始るも有り、其土地に依り家によりて相違はあれど、東京の如きは皆然也、

會費も同じく相違すれば、目今の相場にては發納會は壹圓を並とし身分よければ壹圓五拾錢位それも自宅にてすると出席にてすると、主方の失費大に相違するなれば、客も又其斟酌あるべき也、賀莚追悼などの別會は料理等も鄭重にするなれば、會費貳圓位を並とし、上等は參圓以上大華族、紳商なれば五圓より尠くは出し難かるべし、月次會は何方にても蕎麥か鮓に、酒を添るも有、添ざるも有、又は菓子斗の家もあり、そは會主の心次第なれど饗應の如何に拘はらず並廿錢、上等五拾錢が相場なるが如し、京都は東京に比して物價廉也、尾州邊は又一段廉なるべし、華族、紳商、有名の紳士、豪家は上等たるべく富には非れど、貧くもなしと云ふも中等僕婢をもつかはぬ程の身ならば、下等半减にても苦からねど、僅の事を惜みて人中に恥をうるべからず。

會場へ出席するには短册、及名所よせとかな遣ひの小本、半紙及懐中硯、墨筆と是だけは必用意して持ゆくべし、短册挾みを始め何も角も輕便に製たる品あり、短册は若書損したる時償はむが爲、又有名の人に逢たる時、其歌を乞はむが爲也、主人の注意行届きたるは重硯の筆墨共によきもあれど、大方は硯はいつ洗たる事もなく、墨の滓こべりつき墨は斜に摺歪め、筆は郵便局の如く尖きれて短册等かゝる物に非れば也、入口に受附員あらば夫に短册と會費を出して名を書附させ受附なければ會主の傍に至り挨拶して差出すへし、十人内外の小集ならば一々挨拶するもよけれど大會の席にては先正面より上座に向進みて一間斗の處にて上座へお辭儀なし、次に少し下りて左へも右へも諸先生御一統などと詞をかけて、一度宛お辭儀なし、次の間に下りて猶居ならぶ人に左右へも同じくす、扨改て中央に出ある文臺の前迄進み行て、當座短册、撰艸紙を一宛とるべし（但大會なれば大方は世話人ありて是等を配る也）



然て我座すべき處は主方より爰へと差図すべければ、其いはるゝに任すを可とす、猥りに固辭して入口通路に座して亭主方を困らすべからず、此事場なれぬ人の克する事にて、自分は遠慮の心にても主方に迷惑を掛るは甚失敬也、大會ならず共すべて會席は主方の都合よき樣に心掛るが客の禮儀也かまへて片意持張べからず交際場裡の笑ぐさとなる事也。

會主の心々にて一定はせれど大體は兼題の外に當座題ありて文臺上に書付て出し又は其席の鴨居の柱にはり付あるなれば克みるべし衆人同題をよむを通題と稱し又多くの別題を小紙にかきてちいさく折たるは探題といふ是は各々其一ツを採て我席に歸りて後開きみて其題をよむ也中には六か數題に當る事もあれど既に一度開て見たる後收替る物に非ずされど初心のうちは會主に乞ひて其免許を得たらば取替るもよしされど例外の事なれば一度切幾度も取替るは失敬也取替ても又よまれぬ題出る事もあればさる卑怯の事は斷然爲ざるをよしとす競點題ある時は其料紙として細く切たるとちいさき紙と添有り細きには其歌をかき小紙は投票の用紙也是をも一枚づゝ取て置べし扨先一番に競點題より取かゝり二三首も出來たらば、是を我先生にみせて直しを乞ひ、其うちによきを細紙に短冊の如くかき名をもしるしてちいさく折て、其入物にいれおく競點に各評立評の二樣有り各評とは一座不殘投評するを云ひ立評は有名の先生出席あれば其先生一人、又は二三人にて撰ぶを云ふ、各評なれば其歌仙に相談せず、獨斷にて出す也、次に當座題に取かゝる始め先づ其題と我名とを詠艸に記し置、歌出來たらばかくべし、替歌とて必二三首同題をよむ物とす、詠艸の書法は次に云ふべし、獨立の人にても歌は必らず二三首を記して會主の處へ持ゆき、呈すれば會主は押いたゞきみて其内氣に入たるをお端(一番の歌)とか、奥(終の歌)とか、又三首なれば中をなど云ふ即其歌を當座短冊にかく也、(かゝる事ども書立れば初心者は當座によむさへ心配なるにもし六ケ敷題を取らば奈何せんなど恐れて出席せぬなれどそは甚心得違也始にも申す如く引込て斗居てはいつ迄も進歩遲ければ先生の月次會には門人たる者義務として出べき物と始より覺悟して歌の出來不出來に拘はらずとにかく出てみるべし案外こわくも恐ろしくもなく、兩三度に及へば當座も相應によめるやうに成もの也、他家の會にも先生が付て居れば、何事も先生が引廻すなれば大丈夫、少しも案じるに不及、斯て度重り會に馴れば心配どころか面白く成て樂しみに其日を待もの也歌も始より當座よみすれば口疾く成習ふより馴よの諺の如く少々六か數題にてもさのみ苦しますよまるゝ樣に成者多し是即吟に習ふのとく也

## 披講の時の心得

集會中にて熟達人又は聲のよき人、主より乞はれて披講者と成る此披講といふ事本式は重き役にて、先生大家の爲る事なれど常の會には會主自身爲も有り、

又若手の門人に勤させるも有、出席者の歌揃ひたる時を見計ひ、文臺の前に進み出、會主傍に控へ居て各人の歌を大聲に讀上（其節國處宗々にて大いに異なれり偶々きけば可笑きもあれど夫々流儀有事なれば女兒輩笑ふ勿れ失敬なり）位階ある人より始て次第々々によみ不參者は省くなれど有名の人の歌はよむを例とす男子を畢て女流に及ぶ、近來は男女同權論歌社會に迄波及して男女混交によむも有り、昔は貴人のは何々君何々卿何朝臣など と百人一首の様に云ひたりしかど、明治の御代には皇族に限り何々君何御方などいへども人臣はいかなる高位にても悉皆呼放に可讀と定まれり同名ある時は其苗字を加へて分つ、



一座各々謹聽て我名をよまれたる時、兩手を突て謹み居、よみ畢たれば一禮すべし、披講者自身の歌は一禮して節なしにさらさらと讀を禮とす、扨よみ〳〵て最終に會主誰といふ時來客一同に禮を爲披講全く畢るを期して酒飯或は鮓蕎麥等を出し此間に競點出來上れば、中央へ持出て披講す是は一首を二三度宛よみ上れば客各々耳に留る佳と思ふ歌を拔撰ぶ也天地人の三首

とするも有、甲乙丙丁戊等の五首拔も有り、扨其拔歌は番號斗かき下に拔者の名を記して函に入れ、揃ひて後是を開き、其拔をそれ〲に出入れて、一點にても多く撰拔されし者を勝とする也、天地人へは景物を出す立評なれば先生斗にて、歌數に應じて十首、又廿首を拔て其中優たるを天地人とす、又餘りに多人數なる時は歌數も多き故、其日は會主預り置、後日先生に點を乞て、一統へ披露する事もあり。

會に出席して若止を得ざる急用起るかさなくも他へ行用を兼て出たる人、中座せんと思はゞ、當座競點共に手早くよみ置て會主に其由をことわり、一座の挨拶始の如くして立べし、然雖披講より前に中座は失敬と爲なればよく〱の急用に非ざるよりは爲べからす、成べく披講の終るを俟てたつをよしとす。

枯野　富田まき子

夕日かげおちし枯野に行くれぬ
宿のよすがもなきぞかなしき

# 學問の効用

ふじのや女史

明治の教育の一端でも受けた者から考へて見ると女大學や、いろは手本を習ふ位が關の山の昔の婦人は、あれでよくも日々の事がやつて行けた者と思ふであらう、昔と云はず今でも中等教育を、受けた身ですら解らない事ばかりであるのに如何に經驗を積で凡て常識で行つて行つたとは云へ實に感心なものであつた。

併し又一方から云ふと教育を受けた者の天地は廣く、無教育の者の見解は狹いのは確なる事實で、無教育者が道理にはづれた事をするのは寧ろ憫むべきである。

物事を知れば知る程夫れから夫と疑が起つて來て、益々夫を研究し樣とする氣が起るが、何も初めから知らなければ何が不思議なのかと云ふ疑の心すら起らない、つまり疑の起し樣がないのである、泰西の聖人の言に自分は物事を知らない者であると云ふ事を自覺し

て居る人が眞の物知りだと云ッてあるが眞に然うです。

たとへ又經驗の方が學理よりは上手な事があるにもせよ、又一方から云へば學理と實際とは永遠に相反して行くものではなくて、三十年五十年の後には必ず相一致すべきものである。

經驗と云ふ事は吾々の常に崇拜して居る處であるが、經驗は不確實なものである、一定の法則に基いてするものではなく、只永い年月の間幾度も幾度も同じ事を操り返す内に、自然に熟練したものであるから、其人一人には上手に出來るが、扨他の人に其通りの事を爲せ樣としても迚も出來ない、之に反して學



理理法に依つてする事は、確實なもので、如何なる譯で斯うなるのか、と云ふ基の理屈から割り出したのであるから、其行ふ處に少しも不安がない。

斯く理論から物を研究して行くと例へば今迄は腐敗したものとして棄てゝしまつたものもある、方法を用ひれば立派な食物として用ふる事の出來るものも有る、即ち牛乳の如きもので、牛乳の酸味を帶びたものは誰も腐つたものとして棄てゝしまふ、勿論これは正しい牛乳ではないが、併し又吾人の厭ふ樣に吾人の害になる物ではないので、夏などは故意と乳を酢くして種々他の藥品や砂糖などを加へて清凉飲料とする事もある。

酒や醬油も之と同じわけで、吾人は腐敗と醱酵とを一所にして居る、けれども學理が開けてから次第に此區別が明になつて、經濟上にも衞生上にも大に益になる事が出來たのである。

又夏の日、軒につるしてある硝子球の金魚が、いくら水を取かへてやつても一寸怠ると直に弱つてしまふ、何したものかと不思議がるのも道理、彼の口の小さい入れ物に一杯に水を入れて、中へ金魚の三ッや四ッも入れて置けば半日もたゝずに弱つて仕舞ふのは當然の事で、金魚だつて一の動物である、動物は凡て酸素を吸收して生活すると云ふのは一般の通則で、金魚も亦水中の酸素を吸ふて居る、然るに少しの水の中に澤山の金魚を入れて、夫が絶へず水中の酸素を取つて居るのだから、忽ち酸素の缺乏を告げる、處が入れ物の口が大きければ水が空氣に接する面も從つて廣くなつて、缺乏した酸素を充分に空氣中から補ひ取る事が出來るけれど、少さな口の處迄一杯に水を入れると、水の多いわり合に空氣に接する面積が狹いので、丁度人間が閉て切つた小さい室の中で窒息すると同じく、金魚達は水中で窒息するか、夫程に至らない迄も弱つてしまふのである、其處で之を防ぐには何すれば宜いかと云ふと、水の中に植物類即ち藻などを入れるのも一ッの方法で、皆樣の御承知の通り、植物と動物とは酸素と炭素との取代へッこをして常に生活をして居るものであるから、不足した酸素を藻から供給して割合に永く水を代へなくても生活して居る、又夫でなくても少ない水に多くの魚を入れない樣にするのは、勿論であるが、彼の球の入れ物の丁度半分位迄水を入れて置くと、前に云ふた理屈で、空氣中から充分に酸素の不足を補ふ事が出來るから、そう度々水を取り代へなくてもすむ譯である、此理屈から云へば瓶の中に魚を入れて置くなどは最も早く魚を殺す譯である。

淺草の水族館に行つて見ると水の中に管が出て居つて、其口から丁度ラムネの樣に泡が出て居ます、彼は取も直さず水中の酸素の缺乏を防ぐ爲に特に酸素を他から供給して居るので有る、斯な事も永い間試みて居

たならば終には以上の事にも心付くで有う。

子供の躾を甘くしては不可と云ふ事は誰れも知ツてゐる、併し我子の可愛さにはつい溺れて仕舞て惡いと知りつゝ云ふなりにして子供の爲にならぬ事を感情にまかせてする樣になる、其時は子供に滿足を與へた樣でいゝが、よく後々の事迄考へて如何なる結果が來るかを思ふと實に寒心に堪へない事である。



同じく人に對する感情の働きでも、少しく物の道理の分つた者と分らないものとは大變な差がある、一寸した事にも腹を立てゝ見たり、管らない事に意地を張つて見たり、怒つたり、悲しんだり、又恐にも付かない事を根に持つて自分から不愉快を招いて居る、つまり度量が狭い故でも有うが、こんな人に少しでも學問さして、物の道理を知らせたなら、これまでした自分の行爲に赤面して、必ず顧る樣になるで有う。

殊に夫婦の間に少しでも故障が出來て來ると、直に例の女の狭い心の特長を表はして、夫を責る、口汚く罵る、他に宿つて來でもすれば厭味を云ふ、こんな事で夫の否を改めさせやうとは女の猿智慧で、

又男子には女の心に測り難い遠大な希望を抱いて居る事がある、此企ての爲には目前の生活が困難になろうが、そんな事には餘り頓着しない、物の分らぬ女子は只眼の前ばかりに氣を取られて居るから不如意になればぢつと堪へては居られず、種種樣々の恨み厭味を云ふ、之れ位男子の心を弱らせるものは無い、實に男子は涙を呑で忍耐するので有う、此忍耐力のないものは終に遠大なる希望を打すて、境

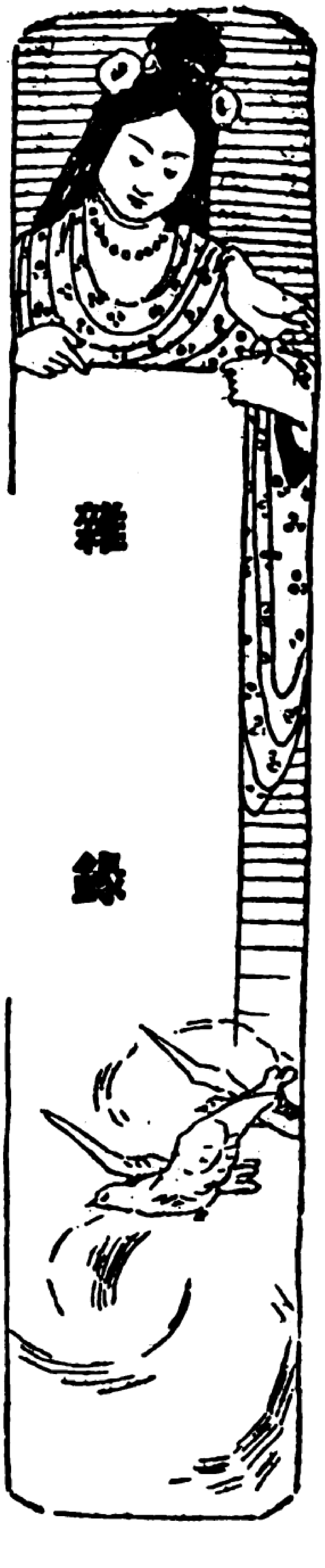
過の奴隷になッて仕舞ふ。

斯る物の分らない女子があるから女子と小人は養ひ難しなど不名譽の言葉が出來たのであらう、物が分らないと云ふ事と、人からの忠告を有難いと思ふて受け納れる事の出來る心の餘裕を造つて、今迄の不名譽を雪がなければならない。

學問の効能を擧げ立てたら數限りもないが、之等は學問をした人には餘り必要では無いけれど女子に學問をさせると生意氣になるとは今猶多くの人の頭と存する考へで、之は實に皮相な見、まだ／＼生意氣な内は學問の仕樣が足りないからで、精神の修養が充分でない内學問の仕足りない内が自分程ゑらい者はない樣に思ひ込んで、自然生意氣になるのだ凡て中途半端ものは高慢で生意氣の樣に思はれる舊華族より新華族の方が横柄だし、博士より學士がゑらがり、大臣より小役人の方が鯰髯をひねつて意張ると云ふた樣なわけで、自分の位置が高くなり、物の道理が分るに從つて、次第に謙遜の心が出て來るもので有る。

## クリスマスの贈物

クリスマスも早や二週後とはなりぬいでや祝賀準備の參考に一ツ二ツを記さんカードは最も手輕なれば贈答せらるゝこと極めて多し是迄はクリスマスカードとて殆ど皆舶來の品なりしも近來は我國にても中中美はしき物店頭に列ねらるゝに至れり本年は戰時とて之に因める品も少なからねど賣行意外に捗々しからず、去りとてユダヤ風の圖畵も餘りに用ひられず内國向は瀟洒たる山水花鳥或は小兒嬉遊の圖など多く見受けらる外人向はさして異る所なけれどフジヤマ即ち富士山圖最も愛好され之に次ぐは日本的山水なり花鳥は殆と顧みられざるも櫻花、菊、花菖蒲などは好かるゝ物の部類ならん爰に注意すべきは外國或は外人に贈るカードは舶來種を以てすると大なる間違ひにして贈る人は必ず其心せざるべからず又是等の圖は肉筆更に妙なるべく挿入すべき文字も歐文よりも日本文字なるが宜し市場の代價は普通一枚十錢位より六七十錢にてそれ以上は一圓、三圓、五圓と高價のもあれども邦人間には格別用ひられず。又キヤアレンダー即ち七曜日を示したる暦にてカードと共に多く用ひらる是にはカード形の輕便なるもあれば十二ヶ月に分ちたるもあり、從つて代價一定せずカード形栞形のものは格安なれども室内裝飾ともなるべき物は大抵一圓より五圓にて殊に外人の最も愛好するクレプペーパー、キヤアレンダーと云ふは縮緬紙を以て製し日本畫をも刷込みし優美の者なるが一部廿錢より七十五錢夫れ以上は其人々の好なるべし。




# 四川省の風俗

竹川澄子

唐紅の、錦織りなす蜀江の上りに、久しく留まれる眞人より、見るもの聞くものにつけなかしき節々を、船の便りのたび毎に、知らせ越せしもの數々ある中に就き、彼國の婦人社會の有様は、我國にて昔より言ひ傳へ聞き傳へたるものとは甚く、趣異なりて耳新しきことの多ければ、こゝに通信の儘なる數節を拔き摘みて世に紹介するとは爲しぬ、同じ亞細亞の黄人種、唇齒輔車の由緣りはいやまし深くなりもて行くけふ此頃、强ち徒ら事にはあらざんめり。

▲研究すればする程分らなくなるのは、清國社會の内容であるとは、從來支那通を以て任ずる人々の、異口同音に嘆息する所で、通り一遍の旅行家などが、皮想の觀察を以て、何のかのと斷定を下すものゝ、能く能く研究すれば、一切萬事矛盾だらけ、一面に、云々の現象があるかと思へば、他面に於て、必ず反對の例證が擧つて來る。女權の尊卑問題の如きも、同じくそれで、世人は、一概に、支那を男尊女卑の樣に合點して居るやうであるが、之は飛んでもない間違ひ、一たび内實を究めて觀れば、男尊女卑處ではなく、世界一の女尊男卑。ヤンキー婦人などよりも一層女權が强いやうに見える。

▲歐米諸國の婦人が、遮莫で、お轉婆で、無暗に威張る樣に見えるのは表面丈けの現象で、其の實山の神が暴威を逞ふするような事は滅多になく、男の方で優し

くすれば、女の方でも、愛情を表する、加之、歐米の婦人は、敎育があるので、耻と云ふことを知つて居るが、淸國婦人と來ては、敎育もなければ、自重心もなく、女らしい優美もなく、只尊大に構へて、空威張りに威張る斗りなので、同じ女尊でも、西洋の女尊とは、餘程趣きを異にして居る。

▲最も、世人が支那を以て男尊女卑國と思ひなすのは、夫の一夫多妻主義や、婦人を外に出さぬ事や、女の賣買の行はれることなどを理由とするのであらうが、之は社會一般の道德が進まず、法律制度が完備せない處から、無意識に、這樣な外觀を爲して居るので、別段男尊女卑といふ譯ではないのである。或は言ふであらう、よし無意識にもせよ、凌辱は何處迄も凌辱であると、成程、凌辱と云へば、凌辱に相違ないが、更に他の方面に於ては夫れ以上に婦人が跋扈して居る。一人の男が、第一の妻、第二の妻、第三の妻などと稱へて、一家の内に、二三人の妻妾を蓄へて置く處などは、文明國人の目から見れば、豕かなんどを畜ふにも似て、沙汰の限りのやうに思はれるが、祖先の祀りを絕やしてはならぬと云ふ儒敎主義から割出して、多妻主義を奉じて居る彼等の間では、男も、女も、平氣なもの、妾と云つた處が、只一番籤を抽き損なつて、二番目、三番目の妻になつた斗りと觀念して居るから、妾其者が、耻辱であるとは夢にも知らない。妻と妾との間には、時には角突き合ひの喧嘩もあり、妻が妾を虐める、妾が妻を凌ぐ、などのことは、有勝のことであるが、之は女同志の事、男に對しては何時も威張て居る。尤も、男が妻或は妾の一人と攻守同盟を形作り、そして孤立の妻或は妾を虐める事があるけれども、男一人女一人で相對する場合には、女の方が何時も强いのである。

▲婦人の外に出ぬのは、男子の爲めに幽囚監禁せられるのではなく、男女七歲にして席を同ふせずと云ふ儒敎から、男女の間に、障壁を設け、婦人は神聖にして犯すべからざるもの丶樣に翠帳紅閨の奥深く祭り込まれたのによるので、男子の爲めに女權を侵害されたと

云ふ様な意味は更にないのである。其證據には中流以上の婦人は、内に引込んで、氣取て居るが、餘裕のない下等社會の婦人になると、屋外に出て働いてゐる。又、婦女子の賣買の如きは、人權の重んずべきを知らない結果であつて、獨り女に止らず、男とても亦賣買せられるのである、醜業の目的に女が賣られるのは、男が女を賣ると云ふよりは、寧ろ親が子を賣るので、故らに女權を蔑視すると云ふの意味は少しもなく、若し男の兒で間に合ふものならば、女の兒よりも男の兒を賣るのである。



▲女の兒が人手に賣られて、親兄弟と別れる一刹那に於ては、色々の愁嘆話もあるが、一たび嫖女となり、妾となつて男子に對する時は、女本位の權利を振りまはして、男子を嚙んではき出さん斗りに愚弄するのである、支那は元來奴隷と云ふ一階級があつて、男と云はず女と云はず、牛馬同様に、賣買もせられ、又た轉賣もされるのである。故に田舍の富豪などでは、澤山ある奴隷の中で、互に結婚させ、數代相傳のものさへある、であるから彼國では、富豪等が、奴隷の數の多いのを誇るのが古來の風習で、昔し司馬相如の舅であつた巴蜀第一の富豪卓王孫

が、八千の奴僕を有して居たと云ふのも、ツマリ今日の所謂奴隷の事なので、日本では、婢僕と云ふ字を、サーバント及びサーバントメイドと解釋して、單純に年季奉公の男女の上に當て篏めて居るが、支那では、「一生飼ひ殺しにする男女」と云ふ樣な意味を含で居るのである。さて僕と婢とを對照して見れば、旦那附きの僕よりも、奥さん附きの婢の方がズット巾を利かして威張り散らしてゐるのを見ても、支那婦人の模樣が判らう。

▲以上は、世人が支那の社會を以て男尊女卑だと誤解する要點、即ち支那婦人の弱點と見らるゝ一側面に就て云ふたものであるが、此弱點以外に、婦人の得意の方面を探つて見れば、支那の社會が、女本位の國柄であることが能く判る。彼國にては、男子が女子を打擲することでもあれば、周圍の人々が、寄つてたかつて、其男を打ちのめしても差支なく、又男と女で、喧嘩した場合には、如何なる理屈があるにもせよ、裁判所にては、男の方が罪せられる事になつて居る。

▲西洋の貴婦人は、レデーの品位と云ふ事に注意して、同じ話をするにも臺詞がかつた高尚な音調を用ひ、假初めにも人の前で、口穢なく罵るなど云ふ事は無いやうに聞いて居るが、支那の婦人は、氣取れば氣取る程、叱咤怒號の聲を揚ぐる、今日支那に行はれてゐる小説や、芝居は、實に其社會の小照で、何れも、婦人が男子を叱り飛ばしたり、擲りつけたりする圖斗りである。彼等は閉ぢ籠つて何にも御存じないように思はれるが、實際は中々そんなぼんやりではなく、主人公の一擧一動は、悉く其監視する所と爲り、外から歸れば、出先の事を糺問せられ、內では立聽きをせられ、其話が內君の御意に召さぬことでもあれば、忽ち怒鳴りつけられるのである。九尺二間の裏長屋では怪むに足らぬ事ではあるが、支那では堂々たる大官の家庭でも、矢張り此通りで、小説などにもある、某大人內を畏るとか、某々大官、密語する時、忽ち室後に獅子吼あり、兩人色を失ふて屏息すなど云ふ文句は、必ずしも形容詞ではないのである。則ち則天武后や、西太后などは、

蓋し支那婦人を說明するに最も適當の標本であらう。

▲そして支那婦人は、家の中で斗り威張る、所謂内辨慶であるかと云ふに、決してそんな弱虫でない。のんべん遊び暮らす餘裕のない中流以下の婦人にありては、糊口の樣な小い足で、覺束ない步みを運びながら、薪を負ふて稲手路を行き、田園に出て耘つたり、屋外で洗濯したり、なかなか活潑なもの。又廣東地方の足の大きな婦人は、南清一帶の各開港場に出稼ぎして、男子と共に、船を漕で居るのもある。其處で、彼等は、屋外に何な態度をして居るか、と云ふに、家の中でお山の大將をきめ込んで居た氣位は、外へ出ても同じく其通り、何んなに、混雜する街中にても、男が當然道を讓るべきものと思つて、自分の方から避けようともせず、もしも衝き當りでもしようものなら、破れ鐘の樣な聲を出して怒鳴り立るのである。



▲凡そ支那人の喧嘩は、上方者の喧嘩の樣に、口先き斗りで、滅多になぐり合ひなどがない代りに、騷々しい事は非常のもので、殊に婦人の喧嘩と來たら、一層八釜しい。彼等は見る〱間に、百人も、千人も、黑山をなす群集の中で、大音聲を張り上げて、爭論するのであるが、其爭論は、半ば相手を罵倒し、半ば群集

に向て喧嘩の起りを演說するのである。之は男子對婦人の時許ではなく、凡ての喧嘩がそれである。そして群衆の中から口利きの仲裁者、或は巡査が來て、男を抑へて、左右に引分けしめ、半町か一町隔たつた時、再び後ろに振り返り、臂を張り、力足を踏み、役者のような身振をしながら、口を極めて相手を罵る。相手の方で、口答へをすれば、此野郞め、と云はん斗りに、身を躍らして、六七間も前進してくる。一方が前進すれば一方は口を噤むで退却する、こんな鹽梅だから、本物の立廻りを始めることはない、五六返、追ひつ、追はれつ、行きつ、戾りつして界隈を騷がせることは非常なものである。

▲支那の婦人は、耻とか品位とか云ふことは全く頓着せないやうに見ゆる、であるから多辯で、厚顏で、圖圖しく、騷々しいのである、同じ多辯でも、西洋婦人は、一言、一句、其音調に注意しながら話すから、左程騷々しく聞へないが、支那婦人と來ては、四邊に遠慮會釋もなく、殺伐の大聲を發して、而かも甲一語、乙一語、不秩序に話すのだから、四五人の婦人が、寄らうものなら、殆ど村雀の囀るが如くで、耳も聾せん計り其の喧噪しさはお話にならない。イヤ此喧噪と云ふ文字は、支那人社會の全般を說破するに足るもので、劇場でも、酒樓でも、街上でも、埠頭でも、堂々たる衙門でも、個人の家庭でも、悉く喧噪であつて、喧噪即ち支那人と解釋してもよい位。取り分け婦人の喧噪が一層耳障りである。下等社會の婦人は言はずもがな、中流以上の家庭に於て、婦人達の、ガヤ〳〵騷ぐことと來ては、夏の日の蟬と言はうか、燕と言はうか、殆ど譬へ樣がない。彼等は戶一枚、衝立一ト重を隔てた蔭で、喋々喃々の聲を放ち、其が客に聞へても、きまりが惡いの何のと云ふ遠慮は露程もないのである。

▲彼等が、外來の男に顏を見せぬ樣にするのは、虛式を守る丈けで、衷心男を畏れるでもなく、憚るでもない、其の證據には會ま旅行でもして、汽車か汽船に乘る時などには、形式丈けの、隱蔽物の裡で、殺風景の大聲を出して雜談したり罵詈したりして、下卑た性根

を公衆の前に暴らけ出して敢て耻とせぬのである。

▲支那人の家庭は、右にいつたやうに、喧噪なる計りで、高尚の趣味と云ふものは、少しもない。併し其一家族を組織してゐる關係が、餘程面白い。支那にては、三夫婦位は極少ない方で、多いのになれば、五夫婦、六夫婦以上の家族が同居して、二三十人の家族は、珍らしくなく、多人數なのは百四五十人位のもある。そして家族の多いのが、門戸の光榮を誇る所以であつて、都會よりも田舍の方が大家族が多いのである。都會では、祖父母と、父母と、自分等夫婦と、其子供とで一家をなし、或は父母と、自分等夫婦と、兄弟の夫婦で、



一家を爲すなど、三組か、四組の夫婦で、三四十人の家族を形成るのが關の山で、夫れ以上になれば、何處にか屹度分家してゐるが、田舍の富家になれば、一町四方位の大きな構内に、ヒシ〳〵棟を聯ねた其中に、祖父母と、父母と、父或は母の兄弟の夫婦と、自分に、五人の兄弟があれば、其五人の夫婦と、各夫婦間に生れた從兄弟や、再從兄弟とで、百人も百五十人もある大家族を形作て居る。

▲最も右のやうな大家族は、一部落に、一戸か二戸しかないが、兎に角一般に大家族を尚ぶと云ふ風である。家の區劃は、大概門の入口から亞字形に作られ、中央に空地を殘して、

其周圍りが學校の寄宿舎の樣に、廊下傳ひに、各部屋に通ずる樣になつて、其中に客の應接間もあり一家團欒の食堂もあり、各夫婦及び其子供等の部屋も、夫れ夫れ區別されてある。又一段大家族になれば、亞字形の廓を二ッも三ッも累ねて、門が幾つも建てられてある。ソシテ一夫婦毎に、部屋は別つてあるが、女は女同志で寄り合ふ溜り所があるので、一寸としても、五人や六人の、姑や、嫁や、嫂や、姪などが、集つて、井戸端會議ならぬ大騷ぎをするのである。彼等は女の客の來た時丈けはチヤホヤ歡待するが、男の客には、少も頓着せず、却て蔭でゲタ〳〵笑ひの、隙見をしたりして、無躾の振舞ひをするのである。

▲家庭に於ける婦人は、お月樣の樣に、家の内に和氣靄々たる愉快の光りを放つものであるのに、支那婦人は、來客の聲を聞けば、直に雲隱れにし夜半の月、家庭としての趣味は少もなく、男斗りで應對すること丶て、殺風景で、喧噪を極めることは、野外の運動會か酒樓の宴會の樣である。最も、家の構造が日本とは異つて、土足の儘出入し得らる丶明ッ放しの土間（支那では門扉は固く閉づるも、邸内の各部屋は出入自在なり）に於て應接することであるから、殺風景に流る丶のも無理ならぬ事ではあるが、我々外邦人から見れば、家庭ではなくて、倶樂部かなんぞのように思はれるのである。

▲支那人の早婚は有名なもので、女子は十五六才から嫁に行き、男子は二十歳前後で子供の一人二人は必ず有つて居る、當今日本に留學して居る七千有餘の支那留學生の殆ど九分九厘迄は、故郷に妻子があるのである。尤も奇異に感ずるのは、子供が生れると、親々の間に前途生死不明の子供等の爲めに、豫約的許嫁の式を擧ぐることである。こんな鹽梅に生れ落る時から、結婚の支度をして、乳臭の去つたか去らぬかと云ふ頃には、早や合衾せしめるのだから、一家の内に、祖父母から孫迄三組の夫婦が存在して、曾祖父母と曾孫とが同時に健在するなどは、必然の結果で、不思議とするには足らぬのである。

▲支那人は、子供の内は、活潑で、聰明であるか、二十歳前後になると、因循で、惰弱で、子供の時と生れ換つた様に、凡骨になるのは、ツマリ早婚の餘弊であつて、年々、歳々、其國民の數は殖へて行くが、無教育の者と羸弱の者とが増す許だから、餘り感服することは出來ぬ。

▲支那は、文字を作つた本家本元で、東洋に於る文學の淵源であるから、もしも勸學院の雀が蒙求を囀り、門前の小僧が習はぬ經を讀むと云ふならば、支那の國民は、誰でも文字を解する筈であるが、實際は却て夫れの反對で、全國民を通じて文學を解する者は、何程もない。殊に婦人の無學は驚くべきもので、自分の名の讀み書きが出來るものは、千人の内で二十人あるかないかである。支那の留學生が、日本に來て、いの一番に、本國に通信するのは、日本では宿屋の女中迄が、文字を解すると云つて驚くことである、驚くのも無理はない。支那では、男子でさへも、下流の子弟は、文字を解する者はなく、女子に至ては、上流社會の一部分丈けが、家塾に於て、學問する許りで、而も其學科は經史と習字とで、範圍が狹い代りに、時としては、奧深く到達して、詩文書畫に堪能の女秀才が、輩出することもないではないが、併し之は例外である。

▲間一髪　明治文壇の老大家と稱する須藤南翠[illegible]史の近作なり、材を日露戰爭に取りて事件の錯綜、人物の配合流石に老練大家の作たるに耻ぢざるの概あり、但、結婚の間際に於て新夫婦が忽然として兄妹の間柄なりしといふの一事稍か落語めきたりと言はんよりは異感を催ふましむるに終るは惜むべし、金尾文淵堂發行價六十錢

▲家庭童話母のみやげ　敎訓を主としたるものあり、開智を主としたるものあり、滑稽あり、御伽話あり、いづれも趣味ある材料もて書きあらはしたるものにて小供の讀物として極めて佳良なるものなり、定價六十錢同文館發行

▲模範自治村　村治に於て日本第一の稱ある、伊豆稻取村を始めとして模範的三ヶ村の治績を詳述したるもの、度視する勿れ苟も郷たる一村の治績といふを以て度視する勿れ、苟くも、公共に從事するもの此心掛を以てせんか國家の富強期して待つべし、定價三十五錢新公論社出版

# 婚禮の一時間

菊池雪子

婚姻は人倫の大道且家庭の基礎ですから東西如何なる國に於ても鄭重に行はれますさて日本も戰捷後の今日では益す西洋と交際が頻繁になり現に日英同盟再締結以來は日本人と西洋人との接觸は尙一層頻繁な加へるやうになりました、最近の事例を引きますればルーズウエルト孃の來朝、英國水兵の歡迎等に日本の男子ばかりでなく上は貴婦人方を始め、下は（餘り感心は致しませんが）藝妓までが多く出て歡迎しましたそれで今後の日本婦人は歐米各國との交際上どうしても西洋の婚禮式を一通りは存じて居らなければなりません、尾崎市長が今回の結婚式の如き、今日の日本婦人の大に注目すべきことゝ思ひます。

西洋の婚禮式の如何に鄭重神聖に執行せられますかを申ませう、然し近頃流行するところの自由結婚は無論除外で正規の手續を經て結婚する者に就て申上げるのであります。

先づ西洋では結婚する前一ヶ月位の間婚姻公告と云ふものがありて、會堂で牧師が日曜日毎に前後三回衆人に公告するのが恒例です、是れは若もこの人が結婚するのに故障を申したいといふ人があれば私に牧師の許に參つて告げて下さいと云ふ趣意より起ッた例だと申します日本人から見ると如何にも變な規則のやうに思はれます、又婚姻する人はそんな事まで公に告げられた日には迷惑でせうが然しそれは畢竟婚姻を輕卒に行はれない事と障碍のあるのを隱して好加減に取結ぶことの出來ん事とを示すので實は婚姻を重んずる所より起つた規則であります。

婚姻は牧師の面前に行はれまして證據人二人若くは三人を要します、勿論牧師の面前でなければならぬと云ふ嚴しい規則はないのですが然し出來得る限りはこうした方がよいです證據はどうしても自身が臨席して之を證明しなければなりません。

以上はほんの結婚前の心得ですが是より本統の禮式を申すと、先づ婚禮の式場は通常會堂です、乃ち婚婚者は證據人と又出來る丈け兩親とに伴はれて會堂に

參りて祭壇の前に跪いて居ります、勿論此時は一生に一度の晴衣を着て參るのです、花婿は通常の禮服ですが花嫁の方は白紗の長い面帽を被り、頭から裾の邊まで垂れるものを被つて參ります、此時牧師は二人の侍祭をつれて結婚者の前に來て侍祭を左右に侍らせ先づ初めに結婚の神聖なることを說き次に結婚者の意志を尋ねて合意的結婚なりや否やを明瞭に答へさせます、第一花婿に向ひ

『何某氏……貴下は神前に於て此處に居らるゝ何某孃を本妻になされむことを誓ひますか？』

と申します、此時『誓ひます』若くは『然り』と云ふ言葉を明瞭に發しなければなりません、次に花嫁に向ひ

『何某孃……貴孃は神前に於て此處に居らるゝ何某氏を本夫になされむことを誓ひますか？』

と申します矢張前記の如き答を明瞭に發しなければならぬ、此時明瞭なる答が出なければ婚姻は成立ちません、言葉は意志の顯表ですから、默して居つてはいけません、首肯ばかりでもよいですが然し可成はつきりと答言をするのが必要です。

之に就いて面白い話がある、而も最近の事實談ですが、未亡人なる某母親が其娘の意志を強ひて、是非何某と結婚せよと勸めたけれど娘はどうしても其人と結婚するのを承知しませんでした、母親の方はどうしても結合しやうと思ひ娘の承諾がないのに結婚の準備をすつかり整へて愈よ結婚の日になりました、母親は花婿と娘とを會堂に伴れて參り祭壇の前に跪かせました、其時牧師が出て來られて、例の通り結婚者の意志を尋ねやうとして先づ第一花婿に問ひましたところが、よろこんで『然り』と答へました、さて花嫁の番になりますと、牧師は「貴孃は神前に於て此處に居らるゝ何某氏を本夫になされんことを誓ひますか？」と問ひましたところが、花嫁は「私はいやでございます」とキッパリ答へましたから母親は花婿や證據人に面目なくてゐたゝまらず娘に向ひ何ぜ承諾せぬかと迫りましたれば、娘は今度は根本的に「お母さんが其れ程この方をお好きならお母さんが結婚なさるはうが宜しいではございませんか……私は此方はいやでございます」と云ひましたので一座の人が之を聞いて呆れ果て何の言葉も出ませんでした。此の如く西洋では婚姻の成立は全く此時の諾否によつて決するのであります、お轉婆娘もいけませんが、然し婚姻は親共の結ぶのではなく、娘其者の結ぶのでありますから、自由結婚もほめられませ

んが親共の關渉過ぎるのも餘り感心いたされません。

左様な譯ですから西洋では結婚する者は自由意志で以て相互の意志を明に言顯はした上でなければ、結婚は到底成立たぬものであります、結婚式に親共や證據人の立合ふのは大切ですが是れは唯結婚の成立を證明することゝ、結婚式を盛大にする迄の事で婚姻其者の成立には毫も關しません、婚姻は結婚者兩人相互の合意の上に直に成立つものですから牧師さへも此時は單に結婚式を神前に於て祝するだけのことです。

偖愈々結婚者の意志が此の如く明に顯はるれば牧師は兩人に向つて相互に右の手を伸べて握り合ふやうに命じます、是れは爾後相互に身體所有の權があるといふ事を表明する徴兆なさうで右の手を握り合はせますのは忠誠を誓ふときの徴候で又權利を示しますから夫婦相互の身體を所有する權利を示すにも都合がよいと云ふことです。

此時牧師は結婚者の頭の上に手を翳して天の祝福を祈り、神前に堅く結合せるを示し、聖水を以て兩人の身に洒ぎます、それから指環を祝して花婿の手に渡し、花嫁の藥指に其れを篏めさせます。此指環は夫婦の愛情を他人に濁さぬやう堅くしめる意を示すものなさうです。

これで新夫婦が出來上りましたから、牧師は新夫婦の爲に聖祭を執行して神に感謝いたします、聖祭の央に新夫婦の方に向び爾後夫婦中睦じくすることを祈り、又新家庭の幸福と子孫の繁榮とを祈るのであります。

聖祭が畢つてから新夫婦證據人父母等が各記名捺印して結婚の證據を永久に遺すのであります、其の證文は牧師が預つて居ります。

會堂の婚禮式が畢つてからの酒宴の事は他の饗應の時と大同小異であるから別段記す必要もございません、蜜月旅行の事なども日本に大抵知れて居りますから是れ亦申上げるまでもない。

今や日本も世界に重要の位地を占めて列强と比肩して毫も遜る所なきまでに進んで參りました、是れも今度の戰捷のためでせう、是れからは歐米各國と文明的交際を結ぶのみとなりましたから今後は西洋婚禮式も日本に見受けらるゝやうになるのみならず、或は今日の女學生方を以て實際に行はれるやうになるかも知れません、固より日本風の婚禮式も立派ではございますが、西洋の婚禮式も中々神聖であります、二十世紀の今日では設令直に西洋の婚禮式を其儘採用しませんでも之を日本化させるか若くは東西婚禮式の粹を取つ

て一種の新日本の婚禮式を制定しなければなりません。

# 婚禮の調度

本月は極月とて俗に婚禮月ともいふべきなれば婚禮用具のあらましたる御紹介申さん

## (上) 箪笥長持

婚姻の表道具となつて居る箪笥長持は、箪笥屋と云ふ専業者が販賣するのですが、其の本場と云ふのは京橋白魚河岸と日本橋小傳馬町で、夫から四谷麹町十三丁目にもあれど、之は次品を鬻て居ると云ふ話です、其の次物と云ふのは俗に云ふ仕入箪笥の事です、此仕入と誂ひ箪笥は寸法に由つて區別をされて居る、

上等箪笥は南部の本木で調製するとやらで、普通が地本の桐、次が三方桐と前桐と云ふ事になつて居て、桐箪笥は惣桐の稱で、三方桐とは前面と兩側が桐、他は樅や椴の木材を使用してあるのだ、前桐とは申す迄もなく前面のみへ桐を用ひ、周圍は他の木材で製造してある、が、此三方桐と前桐箪笥は過半仕入物で、其の寸法が惣桐箪笥より迫つて居る、

箪笥屋では誂ひ物を桐寸法といふのだ、桐寸法とは箪笥の定尺で、丈が三尺四寸、巾が三尺一寸、深さが一尺四寸となつて居るのだが、三方桐になると丈巾が一寸宛迫り、前桐となると又一寸迫る、結局桐寸法より前桐は二寸迫る事になつて居るから、誂ひ物でなくては三方桐や前桐には、桐寸法の物品はないのであるから、御購買の節には寸法へ御注意なさるがよい、

### 地製と旅物

同じ仕入箪笥にも地製と旅物があつて地製とは東京の箪笥職人が製造した物、旅物とは中仙道の鴻の巣附近で製造した品で、地製の箪笥に比較したら麁造品だから、旅物の箪笥が問屋へ着荷をすると、抽斗などの工合を修正すると云ふ事になりて居るから、旅物は多く上總房州邊の需用品となり、白魚河岸では市内賣にしないと云つて居るが、何も正直に暖簾を守る問屋ばかりもあるまい、中には旅物を地製で瞞着する向もあるとか、

### 種類と價格

舊時は重ね箪笥と野郎箪笥と分れて居たが、今日の傾向では孰れも重ね箪笥となり、野郎箪笥は衰頽を來したのである、夫に箪笥にも流行品があつて、目下賣行きの善いのが、三ツ重ね箪笥、五ツ抽斗等である、三ツ重ねとは關西で名古屋箪笥と稱し、重ね箪笥の上に戸棚の

上置がある、和洋箪笥とは洋服和服の二重ねとなつて居る、が、併し婚姻用には恁んな變則の箪笥は用いず、矢張舊式の四ツ抽斗に限つて居る、其の價格表は左の如くである、

△總桐十一圓より六十圓位迄 △三方桐七圓五十錢より十圓位迄 △前桐四圓五十錢より七圓五十錢迄

で、總桐箪笥と來たら價格の懸隔に標準が取れない、

重ね箪笥に次ぐのが用箪笥であるが、之にも型違ひなどと云つて、普通品と構造の違ふ向もあれど、婚姻用には普通の用箪笥を用ゆるのであるが、其の寸法に一番と二番がある、

△一番四圓より十二圓迄 △二番二圓五十錢より三圓五十錢迄 △型違ひ八圓より二十圓位迄

併し用箪笥は、二番の方の需用が多いとやらだ、夫から此箪笥の鐶に就ても變遷があつて、一頃に蕨手となり錠前も丸錠、和洋箪笥などは西洋錠となつてゐる、

## 長持は一番

長持は總て一番と云つて二番はないが、其の一番の中に大一番＝並一番となつて居る、木材は桐と樅の二點に限つて居るものだ

△桐製大一番十二圓より十三圓位迄 △同並一番九圓五十錢より十一圓位迄

△樅製大一番七圓五十錢より九圓位迄 △同並一番五圓五十錢より六圓位迄

である、黒塗の長持などは華族道具で滅多にお誂ひがないと云つて居る。

## (中)鏡臺＝針函

如何な裏屋住の婚姻でも鏡臺と針函は、儀式的に輿入の當時携帶するものであるから、其の内容を申し上げませうが、舊式の木地塗の鏡臺針函は孰れも、靜岡の物産で上等を如輪杢、並物を中杢と云つて居る、普通需用する所の鏡臺針函は

△鏡臺二番一圓八十錢 △針函一番一圓三十錢

で、鏡臺の二番と針函の一番を對にして居る、針函は尺差の這入るのを用ゆるから、乃で一番を奮發すると云ふ話しである、

が、此鏡臺針函を昔し風の木地塗を嫌つたら、木材が桑となり硝子屋の店に陳列してある、姿見附の鏡臺となつて、針函も被蓋で總てがハイカラ向きとなる、所で本桑だつたら非常な高價だが、出來合物は孰れも前桑となつて居る、値頃で需用の多い所は、

△鏡臺姿見附二圓三十錢より五圓位迄 △針函一圓三十錢より一圓五十錢迄

夫以上に黒塗の鏡臺針函など嗜好したら、金蒔繪の御定紋附で二十五圓位ださうな、

## 其他の附屬品

先づ夫婦枕＝膳椀＝硯函などは是非とも携帶するものだ。

△黒塗枕夫婦前一圓内外 △木地塗り夫婦前廿五錢より五十錢位迄

であるから、必要な器具でありながら、嫁入道具中での一等廉価なのは、此枕であるさうな、夫から夫婦前の膳椀制度だが孰れも中流以上向きの道具で、膳は蝶足＝椀は腰高、お膳へは無論金蒔絵の定紋、所でお價格と云つたら夫婦前で九圓、夫れから硯函だが

△墨塗二圓二十錢△木地塗上等一圓五十錢下等四五十錢

其他呉服盆や塗文庫と云つやうな物がある、呉服盆とは衣服を容れる亂れ函で、蒔畫があつたら十圓、無地塗で三四圓内外ださうな、塗文庫は一閑張で體裁がよく、お實家歸りに着換を容れるには尤も必要品だ、先づ二尺物で二圓五十錢位だからお祝ひ物には適當品だ、之等の物品は勸工場でも、新物の道具屋へ往てもあるが、兎角價格に進退が多いから、日本橋通り一丁目黒江屋＝同二丁目小林商店＝室町木屋＝などに就て、購買なされば間違ひはない、

## （下）櫛＝笄

俗に髪飾りと云つて婦女子の調度に、缺べからざるは櫛笄であらうが、婚姻は女子の大禮であるから、髪飾りは孰れも舊守に則り、猥に流行物は用ひず、櫛笄は矢張り鼈甲制度であらうが、本甲即ち本鼈甲は價格が高いから、輕便に四方張鼈甲を用ゆる向もある、所で櫛の形は極高尚の半月形、笄は胴入七寸物で兩花と云ふ花笄である、夫に後挿は足附のキチラ形、妙齢の婦人であつたらお芽出度、鶴龜か松竹梅と云つた様な、彫刻した花物が附屬して、之を俗に挿込みと云ふさうな、併し年齢に由り忠臣藏の小浪式でも可笑いから、後挿を平打鼈甲とするのだが、之とても同じく花模様を透し彫してある、前挿も鼈甲で後挿のやうな花模様、先づ此調度が花嫁の髪飾り一式で、其の價格と云つたら本甲が

△櫛笄百五十圓次物で百圓内外△挿込み十圓より二十圓位△平打六圓より十五圓位

△前挿五六圓位

で、之を平民的に四方張としたら

△櫛笄十圓より十二圓迄△挿込み三四圓位△平打二圓内外△前挿一圓五十錢位

本甲と四方張との比較をしたら、四方張は本甲の一割位で調度が出來得るから、普通の婚姻では四方張を用ゆる傾向である、

夫から根掛だが貧福に係はらず丈長元結で、紅白の八分と云ふ事になつて居る、併し之も年齢に準じて紅を省き、白丈長のみを用ゆる向きもある、

## 函迫と帶留

婦人の風俗は昔し還つて元祿模様など、非常に流行して居るから。一斑の風俗が華美となり、一時衰頽に來した函迫が社會に歡迎され、婚姻道具の裡へ數へられて居る、其の函迫の裂地は縫取と厚板に限

る、裏地は朱無地の鹽瀬である、此價格は

△縫取製七圓より十圓迄　△厚板製二圓より六圓迄

である、だが、函迫には鎖簪と云ふ物が附着して居るが、上等が純銀製と定紋などを打出し、下等は洋銀製で出來合て居る、

△純銀製定紋附四圓より五圓位　△洋銀製三十錢より五十錢迄

此鎖簪が附屬をして函迫の價値を高めるのだ、

帶留にはパチン留などもあるが、正式の婚姻には白の絎紐に限る、此丸絎は十錢位だが略式の帶留はパチンの金具に由り價格も一定しない、

## ハイカラ調度

略式の婚姻調度は尋常一般に、如上に述た通りだが、庇髪に蝦茶袴の嬢さん迄がイザ婚姻の話しになると、其の風俗は舊習に則り、文金高髷に裾模様と云つたやうになるから、南傳馬町の白牡丹すら未だハイカラ的、婚姻道具には接しないといつて居た、尾崎市長の如きは例外と見て可なりだ、が、併し之から人智の展ずると俱に、束髪で華燭の典を擧る向もあらうえ、乃で束髪用の三枚櫛だか、黑鼈甲製で六圓より十圓内外であるから、之にカモメの袴でも新調したら、經濟で文明式の嫁女が出來る、

夫から西洋流を學んで、結婚指環と云ふのが流行する、指環の臺は純金で一分五厘巾の、蒲鉾形で裏へ花文字で新郎新婦の頭字を彫り、結納の時に交換する事になつて居るさうな、之も寶石類を嵌たら方圖もないが、純金二匁附で十二圓位ださうな、其他服裝の嗜好は三越呉服店陳列場へお出なさるがよい　（完）

## 新刊紹介

**△白馬會紀念畫集**　金尾文淵堂は東都に於ける出版界の篤志者なることは夙に世の知る所なり、近頃同店より出版さるゝ文學美術の著作物を見るに何れも時流を拔くこと數等のものにして其の印刷の美麗なる裝訂の巧妙なる他の書肆に於いて模倣すべからざるもの今回同店に於て發行せし白馬會紀念畫集の如き蓋し其一ならん、本冊は白馬會著名大家が經營苦心に成りたる製作八十餘種を精巧緻密なる寫眞銅版に寫したるものにて一見現代の洋畫家の手腕を窺ふに足るべし（定價金九十錢）

**△冥想詩劇海堡林師**　新體詩人中新進作家の稱ある岩野泡鳴氏の作にして詩想の飄逸瑰麗なるに加へて取材の奇拔なるは此詩劇の特色なり、本書の如きは通俗多數の讀者には其味容易に解されざらんも、一部詩味を翫賞する人々の間には必らず一段の渴仰を以て迎へらるべし（定價金四拾錢）金尾文淵堂出版

**△心扉錄**　田園詩人の稱ある齋藤弔花が自然を謳歌せる文集なり、鳥を戀ひ花を慕ひ蝶を追ふもの二十餘篇いづれも清新の聲あるを見る　定價（金二十五錢）京橋左久間書房發行

# 軍人家族授産會

一記者

この婦人會は發起人十名、贊成員百七十名より維持費として毎月一口五拾錢づゝ一人に付五口より十口を負擔する仕組にて、當時委員長は千家夫人艶子、常務委員は伊東夫人英津子、岡田夫人靜子、高橋夫人鈴子、村井夫人壽子、黒木夫人百子、江副夫人駿子、齋藤夫人春子、渋澤夫人鐵子、野村夫人菊子の九名が三人づゝ毎月交代して勤務せられつゝあり

## ◎經過

創立は昨三十七年三月日露戰役の初期にありしが、創業には一入の困難を嘗めたり、先づ麻布廣尾町に工場を設け軍隊の洗濯を請負ひ少數なる兵士の家族に就業せしめたるに、元來洗濯業は婦人の業としては健康者にあらざれば勞働に堪へざる憂ひありて總ての依頼に應ずる能はず、勢ひ業務を擴張するの必用に迫りて同卅七年六月赤坂檜町に裁縫部を設け軍用被服裁縫の業を開き、越て八月赤坂新坂町洗濯工場を新築し、稍爾來の設備を爲し得たり、然るに他方には就業中幼兒を抱きて作業の不便を感ずるものあり、又遠隔の地に住居して不便に困しむものありて、折角作業の希望を有しながら斯る障害の爲にその志望を沮喪せしむるを遺憾とし、次て幼兒保育所を開き寄宿舍を設くるに至れり、

抑も本會の組織は十人の發起人と百七十餘人の贊成員によりて維持費を醵出し來れるとなれば、實力に限りあり、餘儀なく篤志家より五百餘圓の寄附金を仰ぎ、又一千四百餘圓の負債を起して維持をなしたりしが、本年に至り帝國援護會より一千圓の寄附あり、又慈善演藝會を開きて其實を得たり、眞なる演藝寄附は外國人ウォルレンス夫人外十五名より西洋活人畫二日間、大倉喜八郎氏より照葉狂言三日間、東京府教育會より蓄音器二日間、天賞堂より同一日間、演伎座は演伎場三日間等なりき、其他特別寄附金亦二千餘圓を得て負債を償還し、工場資設を改善し業務一般の擴張を見るに至れり、此際經營當事者の苦心は想像するに餘りあり、八月に至り再び援護會より四千圓の寄附を受け此に於て九月工を起し裁縫工場及び幼兒保育場百三十九坪を落成し、目出度本會の基礎を確定したりき、

本會の成績十月末日の調べ

一　授業人員二百三十六人
一　作業點數三十九萬六千餘點
一　工賃金一萬八千五百餘圓
一　幼兒保育數八十二人
一　寄宿者收容者三十四人

## ◎作業の現情

本會は軍隊被服の洗濯と裁縫とを以て家族に生業を授け、その原料は專ら陸軍被服廠、近衞師團、第一師團の經理部、及び各軍隊より受負ひつゝあり

△裁縫工場　工場總坪數は八十九坪を有し、縫室、ミシン室、裁斷等に分れ現今百〇八人の女工を收容し、工場の收入は技倆の巧拙によりて差異あり、一定し能はずと雖も月收寡きも三四圓多きは拾八圓を超へ八九圓の者大部分を占めたり、即ち生木綿のシャツと股引一組八錢の手間料にして普通三組の仕立上をなす、初心の者にして一日一組を爲すは餘り困難ならず、而も拾錢未滿の收入者には特に本會より不足額を補給するの方法を取りて獎勵せり、而して本會は一方軍隊より殘飯の拂下を受け就業者に三食を支給せるを以て如上の工賃の外に取得しつゝあるも

のと知るべし、

△洗濯工場　工場の擴張と共に乾燥機を備付けたるを以て、從來洗濯物の乾燥を一に天日に待ちしに比せば向後晴雨に依りて作業に支障を來たさゞるを故工賃の增收は著しかるべし、此工場に勞働せる女工三十二人なるが此等の勞働は刷毛を以て洗濯する位に止まれり、其他力役を要する部分は傭人を以て之に充て、又アイロンの使用等技術に係る部分は二三女工の外未だ其業を執るに至らず、工賃は一日十七錢乃至貳拾五錢なり、

△幼兒保育所　建坪三十七坪七合の平家にして現今八十五名を收容し日々出席兒童數は少くも七十名に降らず、保母一人子守四人、その任に當れり、元來就業者の内に幼兒を携帶せるものあり爲に日々の勞働を妨げらるゝのみならず、折角就業を望めるも幼兒の爲にその志望を抛つの止を得ざるに至るものあり、而も所謂生計の不如意を訴ふるもの多くは此の如き家族に於て之を見る、是れ本會に幼兒保育所を設置したる次第にして、稚兒にはミルクを給し、他の兒童には三食の外、間食品を與ふる等注意の行屆けるは感ずるに堪へたり監督者の曰く、孤兒と異りて朝夕慈母に抱かるゝものとて親を慕ふ事一層深く、時を擇はず泣き叫びて保育所に馴れしむるまでには二ケ月以上を要すと、その孤寂の程にある嬰兒より五つ六つの頑是なき兒童を一室に集めて機嫌とるさへあるに、彼等が大小便の世話より食事の世話に至るまで擧げてこれに當れる女史等の心勞察すべし、さて小兒を遊ばしめんには弄具に待つもの多し、然れども一個五厘の風船丸にても七八十人に行亘らしめんには容易のことにあらず、從來備付の手遊品は大抵夫人會員よりの寄贈品に係る、本會が多大の注意も未だ弄具迄の餘裕なきぞ遺憾なり、もし世の育兒に志ある女性が似合はしき手遊品の一個も携へて此の可憐なる幼稚園を訪問

せられなば衞細工兒や紅葉狩以外に想はぬ快感に接するとあるべし

## ◎成功の原因

△本會成功の原因　は會計の確實に整理されたる事其一なり、會計の不整理紊亂は斯る會團の通弊なりとす、何れの團體も多少とし事業上のバチルスとも云ふべき寄生物の生せざるはあらず、切言せば會を喰物にせんとする野心家否な利己者が入り込むもの是れなり、本會に限り斯る非望家を寄せ附けざりしは本會の今日ある有力なる原因なからめや

△事務の精勵（其二）　本會諸般の會務執掌は主事梅川鎭吉及び古賀貞光の二氏とす、兩氏が隔日に宿直を爲し殆んど日夜の休なく精勵せるの功與て力ありと云ふべきなり、元來責任者は委員なる諸夫人にありと雖も此等の諸夫人は何れも地位ある貴夫人のことゝて直接會務を鞅掌せられざるは、猶ほ彼の他の名譽員たると殆んど異なるなし、而も事務員其人を得て信任事に當らしめられたるは本會の幸ひぞかし、又創立此に二十ケ月事務員には前後二三の異動なきにしもあらざりしが、その當初より一貫して無私專念本會の爲に献替ありしは東京府知事官房主席吉川八郎氏とす、氏が公務多端の身を挺して零砕の餘暇を擧げて本會の爲に盡瘁せしは頗る多とすべきなり、彼の通弊なるバチルスの寄生を免れたる如き一に氏の如き率直なる贊成者が監視したるに依らざらんや

△就業監督の行屆（其三）　如何に名聲を大切に思ふ軍人の家族なりとて、斯る授產場へ志望して勞働する程のものなれば、地位あり身分あり教育あるものと云ふを得ず、云はゞ中等以下のものとせざるを得す、只さへ婦人は多言し易くその中には失言も生じ爭ひも招き端たなき振舞をも仕出かすが常なるに、斯く地位低き婦人の多數集合したる處なれば其の管理の困難は蓋し想像の外なるべきに、本會に限り最初より斯る有り勝ちの喧騷すら絶へて無かりしは案外の好結果なりき、是れ就業

の婦人がその軍人家族たる名譽に省み各自謹愼に謹愼を加へたるにも依るべけれど、取締舍監たま子副取締石井こと子、秋葉しま子等が懇篤に盡瘁したるの功にありと云ふべし

△工女待遇の周到（其四）　幼兒を抱けるものゝ爲に保育所を設け、遠隔のものゝ爲に寄宿舍を設け軍隊の殘飯を拂ひ下げて三食を支給せるなどは云はずもがな、日々の精勤を獎勵する爲には時に幻燈會を催し蓄音器を奏して工女の觀聽を喜ばすとあり、殊に精神上の修養の爲め品位の向上の爲に毎月宗教家を聘して法話の講筵を開きつゝある如き、實に有難き注意ならずや

此の法話講筵に係る費用は岡田夫人の寄附に係ると云ふ、

△工女の勤勉（其五）　出征軍人の名譽は名譽たるに相違なけれどさてその凱旋を見るまでは留守の妻女として內心忡々の至なからめや、然るに雄々しくも進で勞働に服して懈怠なかりしは、會の目的をして空ふせしめざりし重なる原因なりとす、斯くて我が女性の事に當りて如何に健氣なるかを知り得たるは吾人が最も意を强ふすべき所なり、本會就業の日尙は淺きに係らず、その勤儉の賜賞されたる結果を例證せんに、現に本會を經て貯金し其通帳の保管を托せるもの八十名に及び、金額三百七十六圓九拾七錢に上れり、其他各自銀行へ預金を爲し又貸金の內より出征中の夫兄或は留守中の老親に贈金せるもの少なからず

◎女性に對する希望

規約の一條目に「本會の成立戰時中にして戰局終了に至れば一旦解散するものとす」とあるに係らず、平和克復の今日に於て工場を新築すると云ふに至ては何となく矛盾の感なきにあらざるも、退て一考せば軍人家族援護必用は寧ろ戰後に於て益適切なるを感ずべし、何となれば戰爭中に在ては社會が擧げて軍人に同情を注ぎ居るとて爲に留守家族に對しても能ふ限り扶助の方法も講ぜられたりしが、一旦平和克復して凱旋以後は、即ち平時に在ては軍人に對する待遇の自然に冷淡になり行くべきは是れ免るべからざるとにて、將來何時までも彼の戰死して軍神となり又負傷して廢兵となれる同胞勇士が、死後の名譽を保留し生前の地位を保有せしむるに於て、其遺族なり將た家族なりをして成るべく獨立自營の道を立てしむるは啻に遺族諸子の爲めのみならず、抑も帝國士氣維持の上に付て苟且に付すべからざることなり、若し幸に本會の施設に習はば苟も軍隊戍衛の所在地ならば處として作業原料の得られざる筈なければ、一日も速にその普及せんことを希望に堪えざるなり、戰後經營として敢て志篤き女性の斡旋に待つや切なり

（完）

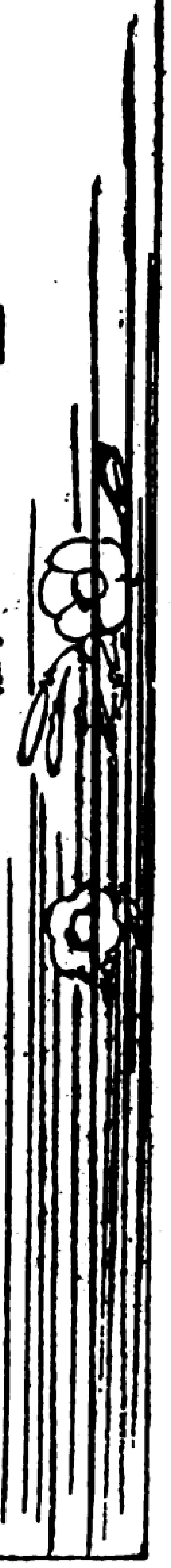
## 少年世界讀者と東鄉大將

弊館發行の雜誌「少年世界」の愛讀者たる少年少女中の有志約三千名は曩に東鄉大將の凱旋に當り其武勳を欽慕するの餘り各自金五錢づゝを醵出して池の端玉寶堂に注文して英國製金時計を購ひ之に紀念の文字と大將の定紋とを彫刻せしめ此程出來したるを以て少年世界の主筆巖谷小波氏は去月新嘗祭の當日を以て右の時計と寄贈者たる少年少女の名簿とを携へて大將邸を訪問して親しく贈進せしに大將は一般紀念贈品は成る可く謝絕する方針を取りたれども此は可憐なる小國民の眞情に出たる贈物なればとて快く受納せられたりと云ふ。

# 家庭の警戒

過般國家醫學會で土肥醫學博士の述べられた家庭と痳病といふ御話は家庭衛生上頗る注意猛省すべき事柄である。其の說の大意は男子の痳病が蔓延して家庭及び社會上に及ぼす害毒の恐るべきを說いたもので、統計によれば目下獨逸伯林では二十歲から三十歲迄の男子で每年同病に冒されるものが千人中二百人の割合にまで進んだといふ事である、所でこの痳疾は從來單に尿道カタルとして輕々に看過されたものであるけれども今日では確かな黴菌で慢性の傳染病たる性質を具へてゐるのである。それ故若し男子が不德の結果病毒を受けたとすると其の病毒は男子が不謹愼の爲めに直ちに其妻に及ぼし其子を毒し延いて公衆衛生の上にも害を及ぼして遂には國家人種の興廢にも關する事となる。今其實例を見ると或三十餘の男子が尿道に疼痛を覺えてから醫師の診察も受けず二十日程經過してゐる内に其妻が下腹に疼痛を覺えて堪へ難き程になッた。すると又五日程の間に九歲になる娘が放尿の際非常に痛みを覺て悶へ苦しんで泣き叫んだ。男も是れを見過すに忍びず發病後二十九日目に大學に診察を受けに來たが三名共に治療が出來て三週間ほどで全治した。これは男子一人の疾病の爲に家族二人まで病毒に冒されたものである。彼の新婦が結婚後間もなく此危險に罹り美貌忽ち憔悴して憂鬱性に陷りヒステリーとなり、或は昨日の紅顏一朝に變じて汚點ある醜貌となるのも全くこの病毒の作用である。恐るべきはこの痳疾である。

# 詞藻



## 停春撰

（天）冬季雑題（千鳥）　岡山市弓ノ町十三ノ一　林　榮子

千鳥なくこゑにねざめて窓押せば
　月傾けり川つらの宿

評　寝覚めて千鳥を聞く、誰でか物思しからざらむ。殊に況や窓を押して残月を見るをや。「月傾けり」の一語、無限の情趣を含む。

（地）冬季雑題（冬月）　京都[illegible]町三ノ入須貝方　高宮安子

うら枯れし柳のかげに辻君の
　かほものすごし冬の夜の月

評　何等の凄まじき景ぞ。枯れし柳、冬の月、皆物すごきに、かてて加へて生白き辻君の顔の照らされつゝあるをや。着想奇抜、才鋒甚しく鋭に、むしろ嫌に過ぐるの趣あり。今暫く之を地位に置き、前者の含蓄多きを天位に推す。

同じ作者の他の詠に、

ふりしきるみ空をさしてはやぶさの羽風しるむし雪のかりくら。（冬季雑題）

さして行く波の入江の船窓に月かげ寒し天草のなだ。（海辺冬）

夕月の影は軒端にほのめきて木からし寒し大木曾の山。（冬季雑題）

（人）冬季雑題（紅葉）　伊賀国佐那郡　服部歌子

村時雨いくめぐりしてもみぢ葉の
　もゆるばかりの色や染めけむ

評　別にかくれたる意はなけれど、流石は調べ健かに、着想造語共に妙也。

## 秀逸（詞歌に擬す）

（右）冬季雑題（千鳥）　石見　宮内登美子

益良男か仇を守りて艦の上に
　立ち明す夜を千鳥なくなり

（左）冬季雑題（湖千鳥）　熊本　安田文子

近江の湖月かげふけてからさきの
　松吹く風に千鳥鳴くなり

左は、琵琶湖畔の松風落月に千鳥を聞く、情趣多からざるに非ざれども、右の縦横に敵を見守りつゝ千鳥を聞くもの更に感傷一段なるに如かず。又句勢より言ふも、左は湖水、月明、松風等種々の景致を併せ歌ひたる爲め、曲折多くして精彩からむとするに反し、右は一意直叙、自ら調べての强きものあり。判して右を勝となす。

宮内孃又左の諸作あり。

しみうすを引く音冴えて賤が屋の軒に更行く冬の夜の月。（冬月）

力なき冬の日あしの傾きて菊の香寒し賤がませ垣。（寒菊）

一顆だに今はとゞめぬ山柿の木の實を照らす片破の月。（冬木立）

○○（右）冬季雜題　上毛　木暮松枝子

秋すぎてなほさかりなる菊見れば
　冬をへだてぬ庭のやれ垣

○○（左）冬季雜題（庭落葉）　足尾　森照野

今朝見れば庭のもみぢ葉散にけり
　夜の間や秋のわかれなりけん

破れ垣に冬の隔てられざりしを見、夜の間に秋の別れありしを驚く、共に落想の嶄新なるもの、殆ど持とすべきが如くなるものも、遣句のなだらかなるは、右左に如かず。右は「冬を隔てぬ」と肯定し、左は「秋の別れなりけん」と疑惑す。故に左は自ら意義の自然に聞ゆるものある也。若し强て之を判すれば左を勝とすべきに似たり。

森孃が又の作。（帰咲花）

ちりて根にかへりし花の面かげを梢に見せてふれる白雪

○○（右）冬季雜題　芝　折村節

一しきりひえの聲しておだやかに
　小春日和の空暮れて行く

○○（左）冬季雜題　越後　坪井わか子

まる窓に烏のかげさす小春日和
　きこりが斧の音も長閑けし

共に平和の思想言外に溢るゝを見る。中にも右の方一層自然に近きが如くなれど、强て甲乙するの要なかるべし。之を持となす。

坪井孃の他の諸作、

濱あらき離れ小島のさびしさに友なし千鳥なくれかなしむ。（島千鳥）

ふる雪に磯山松も埋もれていよ〳〵青し越の海原。（海邊雪）

○○（右）冬季雜題　尾張　佐脇藤子

落葉ふむ小鳥のあしの足音も
　さびし奥畫の山住の庵

○○（左）冬季雜題（冬夜聽雨）　神戸　竹馬利子

衾うすく枕つめたき旅籠屋に
　冬の夜すがら雨を聽くかな

山棲に鳥の落葉を踏む音を聞き、衾冷に枕寒き旅亭の冬の雨を聽く共に物悲しき限り也。何れをあはれとすべき様なし。

竹馬孃が同じ題の他の詠、

板屋もる小夜風寒み寐られざる窓みだれうつ村時雨かな。

○○（右）冬季雜題　大阪　小山ふく子

手洗の鉢に散りたる山茶花の
　花其儘に氷る今朝かな

〇〇(左)冬季雜題　　美濃　山田愛子

いくさかちて歸る吾背の春着にと
　　機織る窓邊山茶花の咲く

永く空閨を守りて凱旋し來る夫婿の春衣を織る、貞女の春待つ心以て寒中一點の紅を動かす窓下の山茶花にも比すべし。手洗鉢に散りたる山茶花の莫蓙に沐れるを憐む亦雅びの至り也。歌ふ所同じからざれども、其巧みは則ち同じ。是亦持とすべき歟。

〇〇(右)冬季雜題(水鳥)　　千葉　田村茂子

人の世の鑑とも見よ鴛鴦の
　　波一つだにたてぬ睦みを

〇〇(左)冬季雜題(冬山家)　　深谷　内田可年子

ましらなく聲もなるればなかなかに
　　さびしき庵の友とこそ聞け

右は好歌調詩たり。左は腸を斷つべき猿聲をも淋しき庵の友と見むとする哀れ深き歌也。亦容易に優劣を判し難きもの。持。

内田孃が庭上落葉の什に曰く、

　　さゝ栗のおち葉におたる音きけば嵐は庭をうづみはてけり。

〇〇(右)冬季雜題　　伊勢　水谷濤子

山風も冬のしらべに吹きかへて
　　時雨を送る雲のひとむら

〇〇(左)冬季雜題(時雨)　　美濃　片田美濃子

村時雨ならぬ日はなし吾か里は
　　雲の起ち居る山かげにして

「雲のたちゐる山かげ」と曰ひ、「冬のしらべを吹きかへて」と曰ふ、一對の警句なるを見る。唯右は山風が冬のしらべに吹きかへて時雨を送るかと解せらるゝと共に、雲の一村が時雨を送るかとも讀まれ言葉の働きに稍明晰を缺くべき恐なからず。左の歌の一意徹底に同じからざる也。所詮は左を勝とすべき歟。今暫く疑を存す。

〇〇(右)冬季雜題　　大阪　伊東種子

夜をさむみをしの鳴く聲さわぐ也
　　池の氷や今かとづらん

〇〇(左)冬季雜題　　下野　外塚みち子

ひとしきり寢覺の床に聞ゆ也
　　沖の千鳥も夢さましけん

持。好一對の作と謂ふべし。

〇〇(右)冬季雜題　　備前　駒井友子

さだめなき世のありさまを見よやとて
　　降るか時雨の晴れくもりして

〇〇(左)冬季雜題　　小倉　林とみの

定めなき浮世のさまをそのまゝに
　　人づてならで降る時雨かな

着想を同ふし、其好歌なることをも同うすれど、左の「人づてならで」の語、斬新なるだけに稍妥當を缺く。むしろ右の無難にして、調べのなだらかなるを勝とすべし。

〇〇(右)冬季雜題(社頭雪)　　伊豫　渡邊梅子

こむ年の豐のしるしと雪ぞふる
　　御代やす國の神のみ庭に

○○(左)冬季雜題(雪)　大阪　林すて子

花もよし月もまたよししかはあれど
　雪こそよけれみよし野の山

右は下句最も妙、寂しく冬意を現はすのみならず、上句「しろし」の語を補ふ力あるものたらしむ。左は雪の芳野山を嘆美し、花にも月にも優るものとなす、亦一見解たり。「み芳野」の「み」の字、花月雪三者の意をほのめかすも亦味あり。持。

○○(右)冬季雜題　豐後　平山良子

うら枯れし荒野のすゑの夕けぶり
　ほそきは賤が落葉たくらむ

○○(左)冬季雜題(時雨)　福井　長谷川糸子

行く人を招きしものを色あせて
　破れし尾花の袖時雨かな

共に詩趣多きもの。左持。

平山嬢が他の作。

　唯一つ水に流れて消え失せぬ筑紫大野は風寒くして。

○○(右)冬季雜題　和歌山　山村順子

老杉の梢に冬の月更けて
　猿ほゆる大臺が原

○○(左)冬季雜題　常陸　菊地峯子

すゝき原霜夜寂かに更け行きて
　片破月に狐なくなり

右は物凄き景を詠び左は物淋しき景を詠ず、何れ優れりとも斷め難き好詩也。持とすべし。

○○(右)冬季雜題　安藝　松阪梅子

道づれと賴しなりたる巡禮の
　身の上に泣く村時雨かな

○○(左)冬季雜題　牛込　田上小金

亡き夫にかへりと見てし夢さめて
　泣く子あやなす冬の夜半かな

共に佳作なれども、右の稍巧んで飾らざるを勝とすべし。

○○(右)冬季雜題(雪)　河内　田中八須子

世の塵を埋めつくして白妙の
　眺めも清し雪のあけぼの

○○(左)冬季雜題(初雪)　秋田　安井波奈

昨日まで錦織りしが野も山も
　白金しけり今朝の初雪

持。田中嬢が他の前作、

　昔語の文の終りに書き添えむ今日我里は初雪の降る。

　火桶抱く身も恥かき霜の夜にあはれ宵の笛聞ゆ也。

　別れにし其松原を今日行けばまたも時雨に濡ぬるゝなり。

○○(右)冬季雜題　牛込　白百合

けぶりのみ埋み殘して白根山
　其名ながらに積る雪かな

○(左)冬季雜題(霜枯)　　評者 小原操

千々のいろに見えたる野邊は霜枯れて
　　ひとつ色にも成りにける哉

最秀持とすべし。共に佳作也。
此の外見るべき作少なからざれども、選歌は凡三十首と限りたれば、已むを得ず佳詠の中に入れたり。又極めて面白き作ながら題意に切ならざるより收むるを得ざるも數首あり。例へば深谷内田貢枝嬢の
淋漫絲消、
ふるさとの夢おどろかす濤音もかへると聞けはなつかしき哉。
安房前田きん子孃の旅泊燈、
ねすは我か故鄕の夢か醒らすらん眠られぬ夜半のともし火の影。
等の如し冬季の寂明かならさるを以て採る能はざるは惜むべし。

## 佳詠

永昌の呼ぶ聲きえて三日月の影らさびしき利根の川面
　　上毛　大澤ちきと

ほろくれは咲くべきものを旅人のしらできりしかさくら木の枝
　　備中　渡邊俊子

みなれにし庭のながめもあつらしきさけしきとなりぬけきの朝霜
　　青山　笠原よし子

武蔵野の尾花か末に月は落ちて木枯寒くひえ鳥の啼く
　　神戸　水野輝子

何事も後れ勝なる山里にきゝがけて見ゆ霜の初花
　　明石　大山桂子

水都のたゞよまくしく雨降りけり淺間寺の入相の鐘
　　東京　堀江花子

明石浦氷るばかりの月影の清きなぎさに千鳥鳴くなり
　　石見　河村清子

亂れし見ゆすがし霜夜の乳を行なくにまぎれあつりきなあらん
　　河内　櫻井眞子

流れ行く桂の川に月照りて渡月橋畔霜夜なりけり
　　河内　竹内歌子

こがらしの音はとたえて夜はふけて窓にわびしき旅寢するかな
　　越前　勝戸ゆきこ子

細戸うつ霰しやみて月はれて夕空に高し片われの月
　　信州　岩間花子

ふけゆけは林の奧も音たえてなたねむ身にしむふくろうのこゑ
　　淺草　寺田節子

一葉ちり二葉ちりうせてたゞ一葉のこる梢にこがらしのふく
　　大阪　清野英子

さまくの思ひに冬の寒さすからをねられぬ床にきく千とりかな
　　伊賀　服部かづ子

刈りはてし門田の面はうらがれておく霜しろく冬は來にけり
　　向じま　千葉子

奧山のつもる木の葉に埋れて僅に出べくしあちね落栗
　　和歌山　曾野節

霜的た夫の遠路身に沁みて思ひたえたる人の戀しき
　　備後　瀬戸樹子

●
　　愛知　白百合

それゆきし堡塞の影の霧に入りて城南十里夕くれの風

● 大阪　加島雄子

風さむき霜夜の月のかげふめばあしたの音もこほるなりけり

● 名古屋　今枝かな子

背戸になくむじなの聲に夜は更けて隈もる月の影さむけなり

● 名古屋　山村榮子

かぞへつゝのこる一夜をまちわびて羽子板いだきはしき子は寢ぬ

● 神戸　鍋島とら子

山里は人目もかれて柴の戸にあらしのみこそ音つれにけれ

● 千葉　鎌田壽賀子

霜に伏す枯野十里を横さまに月に映え行く鴉の聲

● 和歌山　森紫尾

京のたよりたえて幾日になりぬらむ霜げにくもる大原のさと

● 筑後　大島菊子

木枯の行衛淋しく黄昏れて庭潤にこほる冬の夜の月

● 本郷　三谷秀子

ひとしきり風さむき深山路や落葉かく唄夕べさぶしも

● 淺草　寺田錦子

ふるさとの裏山はいかゞ冬かれて都さへにもさびしきものを

● 河内　竹内歌子

入相の鐘のひゞきの遠くなりて紅葉散りしく夕まぐれかな

● 小倉　秋山わき

井戸屋形廂は落ちて井のうちに少さくうつれる冬の夜の月

● 越後　伊倉田鶴子

紅葉いれてやりしたよりの返し文香さへ色さへこぼれぬちりぬ

---

水鳥のはゞたくたびに影寒く波にくだくる冬の夜の月

● 名古屋　伊藤しづゑ

風になく小鴉の群のゆく見えて枯木にかゝる夕月淋し

● 安藝　松原梅子

我宿の垣根に白くはつ霜のおけるを見れば冬は來にけり

● 本郷　濱川しま子

見るがうちに時雨の雲のおくりきて陰なき野路にぬるゝ袖哉

● 大阪　種子

川風に鳴くや千鳥の聲寒みふみ讀む窓に夜は更けにけり

● 山城　古川かつ

霜にてる月影すごき北支那の荒野四百里木枯のふく

● 兵庫　柳田のぶ子

いくさ人がへる故郷の夕暮を紅葉散りて軍馬いなゝく

● 名古屋　菊池靜子

水鳥の三つ四つ二つ影みえて波間に冴ゆる冬の夜の月

● 尾張　吉川宗子

もらすともまた袖ぬらす小夜時雨庭の落葉音にひゞきて

● 本郷　西岡古代子

限りなき枯野かや原月さえてかすかにほゆる野良犬のこゑ

● 能代　小笠千代子

寂しくも幽かに響く鐘の音や時雨に暮るゝ山かげの庵

● 小石川　武内春江

山めぐる時雨に春きて落葉たく煙にくるゝ里七村

● 尾張　伊東花子

● 北海道　すみれ女史

旅人の馬引かへる影もなし雪にうもれしたそがれの道

● 下野　新井琴子

白雲の御堂の欄に京の子が美しき面を射る朝日影

● 鈴木　大谷秀子

白かれの野にこそしれこんとしのこがれいろなすとみ草の花

● 大阪　吉野ひさ

夕時雨むかいの岸の船よびて灯しからはや川の伏庵

● 河内　石田慶子

有明の月の氷るかとばかりうたがふまでにつみし白雪

● 大阪　高林きみ子

静な月ふりみふらすみ定めなき時雨にさむき独寝のとこ

● 福井　鳴眞壽

ふきしなる野邊の風おとさえて雲けの空に氷る月かな

● 豊多摩　麻津みち子

溪木も夕さりくれは氷るらん声の枯葉の風ぞ身にしむ

● 赤坂　葉山しげ子

ほそ〳〵と戀の辻うら門過ぎて霜夜しづかに更わたるかな

● 秋田　竹内つる子

寂れたる古塔の影のいやふけて只だ凍り行く島の月影

● 河内　石田けい子

夜なさむみむすびし夢も今さめて思ひ出おほきおのが行く末

● 大阪　瀬　喜代之

圍居していくさかたりも勇ましや金剛山の初雪の朝

● 麹町　武田満子

小夜ふけて庭の落葉をふきあぐる音すさましき木枯の風

● 岐阜　和田隆子

かへりなんいざこの休み故郷へ父やまちます母や待ちます

● 備中　有田たまき

雪の夜をいろりかこみて背の君の戦語に冬の夜ふけぬ

● 東京　林　はな子

さがの奥かくやとしのぶ此夜ごろ月の光にもみぢちりしく

● 長門　野邊藤子

朝ぼらけ池の面に烟たちておく霜しろし小田のほそみち

● 名古屋　玉村多歌子

さしこめし園の板戸は音つれて間なくひまなく落葉しにけり

● 長野　稲井やう子

木枯の音さへ今朝はうづもれて都大路も雪となりけり

● 上野　大澤ふで子

木がくれの軒端しづかに今日もまたしぐれふるなり山かげの庵

● 佐世保　小宗きよ子

柿の實の一つのこりて山畑の夕日さびしく冬は來にたり

● 大阪　安藤まと

菊紅葉さわぎし庵は戸さゝれて庭の苔路に霜の花さく

● 下谷　兒玉あき子

軒つりの大根ほしたる賤が家の軒端ましろく霜おきにけり

● 新潟　逢坂きそ子

破れ初めし尾花が袖に霜降りて月は淋しく袖に照り添ふ

● 美濃　杉山芳舟女

家ごとの軒低げにつみし雪のなほふりやまで日は暮んとす

● 市内　秋野正子

● 人まねで[illegible]の[illegible]しき[illegible]れてきぬる[illegible]は[illegible]ならん　東京　[illegible]　[illegible]子

● げにかへで人まつ[illegible]の[illegible]にまたかしりぬと[illegible]　[illegible]　[illegible]野てる

● [illegible]はかれ[illegible]はりけり[illegible]の[illegible]しぶ[illegible]ふ　[illegible]　[illegible]田こう

● [illegible]にはれし[illegible]見れば[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]の山に雪は降りけり　伊勢　岸田　[illegible]栄

● [illegible]のふくはつけて[illegible]ふかれわかふさきとめ[illegible]は[illegible]にと　水戸　[illegible]なるを

● [illegible]の夜が入りさそ[illegible]し[illegible]れてきり[illegible]わたり[illegible]ふ降る　山[illegible]　水[illegible]あつま

● [illegible]ひで[illegible]と[illegible]山[illegible]見えずなりて[illegible]し　下野　川[illegible]多加子

● [illegible]の[illegible]をさそふ[illegible]のわたりは[illegible]の[illegible]こそすれ　[illegible]　[illegible]子

● [illegible]が[illegible]の[illegible]の[illegible]て[illegible]したる[illegible]の[illegible]　岡山　[illegible]子

● [illegible]せ[illegible]くぬ[illegible]の[illegible]あたをかれきむくふ[illegible]なくなり　[illegible]　[illegible]中久代

● [illegible]ひで人[illegible]の[illegible]れてはな[illegible]むし所からの[illegible]　高知　[illegible]木しと江

● [illegible]ほ[illegible]の[illegible]に[illegible]　大[illegible]　[illegible]あさ子

● [illegible]の[illegible]の[illegible]りで[illegible]ひ[illegible]れ[illegible]なり

● おしもしし[illegible]はかれて[illegible]に[illegible]て[illegible]日[illegible]すなり　[illegible]　吉村[illegible]

● いはし[illegible]の[illegible]は[illegible]の[illegible]たどりし夢を見るかな　[illegible]　[illegible]田[illegible]子

● [illegible]く[illegible]に月[illegible]へかへる[illegible]の[illegible]に[illegible]の音たかき　[illegible]　町田[illegible]子

● [illegible]におごる[illegible]でゆかし朝あけの月にはゝ[illegible]む[illegible]の花　兵庫　[illegible]田のぶ子

● にほかにし[illegible]山おろし[illegible]になりて[illegible]つみかへる沖のつり舟　[illegible]　伊[illegible]知菊子

● [illegible]ふく[illegible]に[illegible]れて[illegible]の人　下野　田中安子

● [illegible]て[illegible]へる[illegible]めとなくなりあられたばしる野べのにそみち　和歌山　山村順子

● [illegible]せし[illegible]人に似たる[illegible]の[illegible]は[illegible]とまがひぬ　京都　[illegible]尾絹江子

● [illegible]と[illegible]でにし君は[illegible]り来ず日は暮れはてゝ[illegible]降りいでぬ　下[illegible]　岩[illegible]わかな

● [illegible]を[illegible]むまど[illegible]の[illegible]がく[illegible]け行く[illegible]の冬の夜語り　小石川　[illegible]内[illegible]江

● [illegible]なればをのづからふむに[illegible]さ音もしてけり　東京　[illegible]田つる子

● [illegible]が[illegible]ひのはてか[illegible]く[illegible]かせに[illegible]ある木[illegible]しの野や　大阪　[illegible]田[illegible]子

● 　[illegible]　[illegible]　[illegible]

千千鳥は島に残る曠野原蘭をかすめて霜風吹ける
千葉 織田清子

霜暴るまがきのもとに来て見ればやさしく香る寒菊の花
津市 川村貴子

寝ぬ日記む小春日和の縁先に山茶花散りて午の鐘なる
尾張 森 美代子

冬ごもるかやのふせ屋たえまで吹きしきるか木枯の風
備後 森戸菊子

山の端に三ヶ月細きこの夕人かげまむく我世冬めく
讃岐 安藤みつよ

けふもまた宝剣の峯の霧はれずふもとの里は時雨ふるらん
小樽 きだこ

磯や志賀の唐崎風さえて比叡の高嶺に雪ふるなり
長門 飯田ふじ

あれ野原花なきさとに黄蝶一つひく、飛び居て寂しづかなり
周防 入千代

さわがしき夕の嵐は音たへて野に積みし今朝の初雪
神戸 足立芝君

病ませる母を残して醫師へと急ぐ夕な寂たゞならぬ
四谷 岸東陽子

横山の松に二十日の月落ちて沖の白洲に千鳥しばなく
大阪 森 合花

朝な夕な珠数の数のまさり行きて情さびしき冬となりけり
相模 杉山蔵江女

かたね芽のいれしわとのみ跡なくて河原に寒き明月の影
奈良 加藤静子

たつた川ちりて流るゝもみぢ葉をむすびとめたるうす氷かな
越後 長野蝶子

水鳥の鳴きつゝ集ふこやの池の冬のま昼のやゝ暖かき
大阪 沖なほ子

帆なく篁の雪のとほくきえて梢野三里を月寒くてる
神田 英れん子

高瀬は森の彼方に見えずなりて五月の小村の吹雪に暮るゝ
保土ケ谷 かほる

寄旅せる窓より見れば影すごく汽車道ながき冬の夜の月
名古屋 淺野久子

亡き人と野邊に散ひし花の跡なあ深く偲ぶ堤火のもと
名古屋 奥村てる

老幼園爐櫃かこみてたのしげに何語るらん小山田の家
長野 西條むめ

きのふまで草間になきし虫の音はたへて冬野の夜半のさびしさ
奈良 前川静子

うごきなき御代のかためか氷もて谷の岩間にくさびうつなり
越後 大塚みよ子

一列の雁とび去りし冬の夜はそゞろに思ふ古郷の君
周防 貞弘すみ子

星海みかりの一葉落葉ふむ山路のあなた日は斜にて
名古屋 山村柴子

うけとめし露の玉をうなゐ子がかぞふるうちにきえてゆくかな
神戸 藤原しの

木枯のやれし閨戸にみまふ夜中長ふ病みます母くすりめす

● 和歌山　みどり

冬の夜のさやけかりける月影をまどにうつして友とこそせめ

● 京都　ハツヒ

きゝなれぬ落葉にかとなたゝかれて見れば冬こそたつれ来にけれ

● 上總　田村たき子

月落ちて烏啼なる暁や橋のたばしま置霜白き

● 尾張　鈴木たい

神さびし鎮守の森に燈火の光寒けき木枯の夜や

● 牛込　瀬藤ちよ子

冬されば野山の千草枯れ果てゝ落葉が上に時雨ふるなり

● 前橋　宮内りき子

凱旋来し良人の膝に兒は寐れてつもるはなしに更る雪の夜

● 久留米　神野たま子

雪なげにかちたる夢や見たるらむ眠りながらに手吹きて笑める

● 宇都宮　金田つくば子

いくさより兄歸りてまどゐしつ雪に語らふもろこしの冬

● 能登　杉下花菫子

小雀の冬をさとめく聲きゝて日影したしむ君が朝窓

● 三重　中津小五百子

橋はまた人跡もなく川下に櫂の音寒し霜白うして

● 越後　高橋せん

寒の進撃凄く月落ちて深山の小里吹雪となりぬ

● 山口　三坊舍花子

みづ海の底にもつろふひみのれのゆきをもてらす冬の夜の月

● 越後　神代いと子

れやの戸のすきまをもるゝ有明の月の光の寒くもあるかな

● 岡山　丘咲志貴

御軍の背子歸りましこん年はゐろりのほとりにきはひぬらん

● 長門　田中すみれ

宿かりてそと閨戸くる山寺の暮の鐘寒し木がらしの風

● 名古屋　林　夏子

人妻の姿やさしく冬の夜の月の光に砧うつなり

● 福井　長谷川靜子

木枯しに古城のすゝきかれはてゝみ墓にさびし白菊一本

● 信州　神津榮子

山姫は紅葉の錦ぬぎ捨てゝ今白妙の衣や着るらむ

● 宗取　森ふさ子

昨日見し錦の影も夢なれやあしの枯葉にみぞれこぼるゝ

● 仙臺　渡部光子

埋火に寒さ忘れてうたゝねのまだ見ぬ君と夢に語らふ

● 三河　深津すゞ

さをしかのなく音もたえてきこゆなり冬野の小道人かげもなし

● 遠山みさを

すみわたる心のそこにひゞくかな冬の夜さむの山寺のかね

---

## 新年の和歌衆題

『新年風』『春海』『鏡』

（〆切十二月十五日）

# 柳體詩

## 題『風邪』『編物』『雛』

劍花坊撰

### 天

日本橋區濱町三ノ一　上田いね子

編物の上手が姑氣に入らず

評、嫁と姑、古來川柳子幾多の吟詠を作し來る、今日に於て事を用ゐる、多く陳腐にわらずんば古今同想の字の下に埋沒さるるを免がれず、こゝに於てや之を新題に應用して人目を新にせんことを力むるものあり、而も未だ吾人をして拍案三嘆せしむる者、此詠の如きを見ず、平々叙し來り、淡々詠じ去る、作者の此句を作すや多く苦心經營を費やさゞりしに似たり、豈知らん天籟詩人の琴線に觸れて、そこに無上微妙の韻あるを、一十七字の中、幾多人生の悲劇、幾多社會の缺陷を包み、讀者をして卒然として笑ひ、油然として感じ、愴然として默み、慄然として恐れしむ、是れ滑稽の悲哀なる者、人工を以て企及す可からず、社會人事詩、千古之絶案、

### 地

北海道古宇郡神惠内大崎内　大崎たね

枕下の禮で戰地の無事が知れ

評、無底河邊の骨と詩に歌はるゝ御身の果てにあらずやと故らに我からつくりて物思ふ春閨夢裡の銀がゝりも、郵便掣に胡地のたより、いつやら拙なき手わざに編みてまゐらせし靴下の足にかなひてうれしき事書き添へてあり、さては御怪我もなくておはするかと胸撫でおろす妻心、事あらば公の報知あり、靴下の禮を待たずとも夫の無事は分り居れど、そこを氣づかふが小さきやさしき女の情なり、穿ちつくして餘蘊無し、時事吟の上乘なるもの、唐代諸家の邊塞詩に伍して恋ら遜色あるを見ず、誰か謂ふ川柳は小さき文字なりと、川柳はつまらぬものなりと、皆紹す歌人、俳人、新體詩人、漢詩人、此短章の間に於て、よく此意を盡し得るやいかに、

### 人

香川縣木田郡庵治村　向井智恵子

雛は口で鼠つて水を飲み

評、前々號までの二回に名句多く、前號の一回、甚だ振はず、而して今回に至りて何ぞ名句の多きこと此の如きや、雛を川柳化するは一雛事なり、或は架空的に詩化するか、或ひは歴史の事實を借るか或は擬人法によりて奇を鉛るかの手段を擇ばざるべからず、是れ撰者の預期せし所なり、何ぞ料らんこゝに一幅の寫生畫を刷し來りて、是么麼とつきつけらる、撰者莫莫問答のグーの音も出ず、たゞ吉祥々々大吉祥を叫んで、參つたの意を表せんのみ、着眼警拔、取材最佳、つらく\/觀じ來れば天地人三才、殆んど兄弟あるを見ざるなり、嗚、

## 秀逸之部

上野　木暮松技

咳が出て廂もゆらぐ樣な風邪

評、六觀震動、何ぞ其滑稽なる、何ぞ其奇想なる、

長崎　大山さだ子

連發の嚏が風邪の兆なり

評、句體雄渾、千鈞の力なり、而も人をして噴飯せしむ、

越後　つねを

鼻かめば白粉剝げるいやな風邪

評、詩人の情なるかな、前後の面白きを見よ、

なそらないおかせと乳母が申上げ　日本橋　なにがし

評、古句に類似のものありと雖此句の或は優れるを覺ゆ、妙極、

編みかけの今は紀念と涙ぐむ　羽後　三浦とみ子

風邪かと乳母の名醫に母が問ひ　能登　木森一子

編物で奴隷獨立する氣なり　秋田　白染衛門

はつくしよん誰か誹て居るかしら　京都　藤田靜枝

お芝居と聞くと風邪がメタ癒り　越後　坪井わか

編物をあくびとともに抛り出し　栃木　高田せん

寢床からこけこつこうと眞似て居　福島　西野ひさし

きつにはめなんくたかけと八つ當り　福井　小川つう子

お染風邪庭風雅風粋な風　甲府　玉　子

こぼれ茶を見ると雞競爭し　熱海　宇野しげの

雞は天の目ざまし時計なり　周防　井本房子

ほどき見つまた編みて見つ新夫人　千葉　岩瀬わかな

編かけを袂から出す電車中　大阪　林すて子

湯上りに散歩と洒落て風を引き　横濱　立川きよ

編かけを一夜鼠にかじられる　廣島　吉川ゑい

不屆な乳母箱入に風ひかせ　草加　淺見紫涙

肌突に深き心をこめてやり　岩代　阿部つき子

編物のもうけでお芝居いゝでせう　名古屋　横井なみ子

寢したソレ體温器毀入器　神戸　關谷雪子

訥辯の辯士はいつも風と云ひ　京都　井手きみ子

缺席のいひ分け風邪が九分を占め　埼玉　神保歌子

風邪でないハテナと御醫者首を曲げ　横須賀　雲島恭子

乳母子守編物すなり御門前　麹町　井上梅子

呼鈴へ手製の頭巾かぶせて見　山城　石川かつ子

一寸の間子が編かけを解いちまい　大阪　加藤愛

腹に足あてゝ雞思案なり　尾張　八積榮子

肺炎が風邪の油斷へ夜襲なり　岩代　横田周子

雞は一夫多妻を見せつける　廣島　稻田鈴香

靴下が指環となつて戻つて來　仙臺　荒つる子

姫樣へお多福風と申されず　深川　山下みの

未亡人こゝろもとなき風邪をひき　大阪　林はま子

編上げた姉本尊が欲しくなり　横濱　小峰園子

編物の衰えこぼれてる小抽斗　小倉　伊藤さき

## 佳句之部

紅葉狩姫樣お風邪召し給ひ　富山　町田綾子

編物の製造所は御殿なり　伊勢　佐野みよし

會話五分鼻をかむこと約十度　兵庫　武内茂子

編物の糸に小猫が戯れる　大阪　岡山龜鶴子

編物はお隣の方が教師なり　群馬　高眞菊子
すき間を惜み電車で編む毛糸　本郷　鎌力ふみ子
編物いて曰く國家事件　大阪　山中橋乃
立版が編んだ栗を嚙んぢまひ　大和　辻光子
姫様は風がもとでと乳母は泣き　横須賀　岩岡歌子
風邪一つひかせないのを乳母自慢　品川　由眞子
一番鶏に母ア様起してよ　出雲　草てい子
編物を撒散らかして叱られる　伊豆　梅原つい
鶏の鳴くは山家の時計なり　越後　中村すみ
ラブシッツ母にとはれて風と云ひ　山形　菅野隆
ほとゝぎす〳〵とて鶏が鳴き　栃木　松本いづみ子
先生をやめて鶏飼ふ村夫子　山城　古川よれ
あなめ〳〵其甲斐もなく風を引き　大阪　三宅貴子
アラあなたたゞの風邪よと頰を染め　京橋　秋山芳
歌留多會みやげに風邪を持て來る　横濱　中里ます子
妻の編物あなたそんなに所望なの　下總　藤崎美奈子
鶏の御飯當がたべて居る　芝　一宮あい子
坊のかと紅葉のやうな手へはめる　横濱　永野とり
猫さんの靴下ですと得意なり　上總　田村瀧子
ホネムーンはからず婿が風を引き　下總　岩瀬わかな
風引くと玉子のおかず請求し　神戸　藤谷幹子
醫者でさへ分らぬ風邪をひいて居り　同　青風女史
眞夜の寢言で坊は風邪をひき　横濱　飯田そう子
編み上げて見ると手編はいびつたり　備後　中尾芳子
ヘンケチを五日の風邪に一ダース　同　幸子

編出しをふるつて見てはしぼつて見　信濃　齋藤ひこ
風ばやり病院の亭主こぼすなり　甲府　絹子
編物の棒でお芋を串して喰ひ　大里　周子
風邪聲の緑取唄はこぐらかり　下野　大谷とみ子
ひきそこれた風邪は螢の出そこなひ　大阪　前川岡三子
風邪聲に琴の調子を低うする　品川　竹野すゞ女
お囃子の夢で坊やは風邪を引き　所澤　巨果子
編みながら姫の噺す活人畫　日本橋　新宮松子
ホーチムン耶は熱風わしや寒風　本郷　奈良きさ子
ドクトルの風邪を猫が見舞に來　廣島　貞永那賀子
嬉しくてレース一日着てあるく　富山　小竹文子
本草に曰く鼻がつまらば煙草を用ゆべし　紫波　川村つま子
あみあげた靴下郎の寫眞に化す　和歌山　森紫風
風邪ひいて夜具の有たけかけて見る　同　山村順子
鼻水をまぜておさんは菜を漬ける　秋田　安井波奈
長湯してめかして風邪に取つかれ　武藏　齊藤やよ子
小說を耽讀し空想の風邪を引き　新潟　逢坂きう子
編物をおもはゆげさが嬲るなり　牛込　二村ちか
玉子生む鶏はないかと聞いて見る　尾道　中尾民子
鶏の先祖の手柄すばらしい　千葉　鎌田壽賀子
編物をほぢれてほやしてもんぢまい　大阪　服部ひさの
風邪聲で勿體ぶつた法話なり　新潟　鈴木よし
虚風邪を引て學校休んで見　釜山　八坂吟月
編物に理想の丈けをこめて造り　德島　矢部貞子
油斷して風邪肺炎と昇級し　小石川　大河原[illegible]

流行風邪東郷と書いて門に貼り　小倉　笹紫　春子

臥かけを二つ摘んだで怪しまれ　羽前谷山　たに子

撰者曰く同風同想、古より其例多し、去かも其修辭に至るまで符節を合するが如きは奇といはざるを得ず、其一斑を左に示す

貴郎またお風邪召すわと羽織着せ　伊勢　菊子

貴郎まア御風邪召してはと羽織着せ　伊勢　みよし

寝ずめに御風邪召なと夜着を着せ　北海道　たれ

もし貴郎お風邪召すと羽織かけ　横須賀　進子

風ひきがはやりますよと夜着をかけ　和歌山　ゑつ

風邪召さぬやうと肩へ羽織着せ　尾張　綠子

モシ貴郎お風邪召すわとゆりおこし　本郷　しま子

お風邪でも召すなとふとんそつとかけ　石見　徹子

## 撰者吟

冬籠り言譯ほどの風をひき

編かけの帽子かたみの子がかぶり

勝どりの凱歌雞冠(トサカ)の血でうたひ

### 次回の川柳課題

『女の年禮』『羽子板』『餅』

（〆切十二月十五日）

---

## 謎々

『凱旋』『パノラマ』とかけ

### 第一等

▲パ　奈良縣添上郡田原村中ノ庄　中西まさ

新世帶」と解く

心は「理想と實際とをつぎ合せて見る

評、理想と實際は面白からずや、新らしき解方にして、心の說明最も佳なり、眞にパノラマは理想と實際のツギ合せなり、眞に新世帶は理想と實際をツギ合せり、近頃の好解答、謎々欄の爲めに新しき方面を開拓したるを多とす、

### 第二等

▲パ　新潟縣古志郡十日市村　鈴木よし枝

七人眞田」と解く

心は「いづれが實物か見分け難い

評、これも上出來なり「七人眞田」の四字にて大阪の軍師左衞門尉幸村の七人影武者を十分說明したり、一寸思ひ附かぬ材料を取り來り人を驚かすは解答者の働きと云ふ可し、

### 第三等

▲凱　武藏國草加町　淺見ふじ子

墓詣」と解く

心は「線香(戰功)を立てゝ歸る

評、漠如とした解方に値打あり、くだ〳〵しからず、味噌漬からす、されはセンコウのもぢり更に耳立たざるなり、うれし。

▲バ…商人の利得」と解く　北海道　厚谷さだ子
心は「口錢(光線)が命

▲凱…急病に醫師の來診」と解く　岡山　濱子
心は「待ちに待つて歡迎する

▲バ…孫娘の晴裝束」と解く　奈良　まさ子
心は「まはつて見る

▲バ…大廣間の評定」と解く　宇都宮　大谷とみ
心は「千疊(戰場)を一ト目に見渡す

▲バ…五厘銅貨の鍍金」と解く　四谷　小池うめ子
心は「十錢(實戰)のやうに見える

▲バ…白晝の火事」と解く　京都　濱部郭公女
心は「近くても遠くに見える

▲凱…明治初年頃の書生」と解く　越後　滿壽子
心は「破帽弊衣で大威張り

▲バ…贋造銀貨」と解く　備後　小林慶子
心は「實に違はぬほどよく出來て居る

▲凱…秋の山」と解く　越後　坪井わか
心は「錦を飾る

▲バ…上手な嘘」と解く　敦賀　鳥萬酌
心は「眞實のやうだ

▲バ…五錢銅貨二枚」と解く　山形　鈴木とく
心は「十錢(實戰)と同ンなしだ

▲凱…證書授與式」と解く　能登　木森一子
心は「いづれを見ても喜色面に溢る

▲凱…行商人の國歸り」と解く　神戸　岸田生實子
心は「商利(勝利)でほく〳〵

撰者曰くいつもながら謎には同想多し、しかも暗合なること勿論なり、たゞ面白ければ二三を左に掲ぐ。

▲凱……正月元日」と解く　神戸　關谷雪子
心は「お目出たい〳〵

▲同……お正月」と解く　淡路　田中守鈴
心は「目出度く迎へる

▲同……子供の正月と解く　神田　池田須子
心は「よろこんで迎へる

## 次號の謎々課題

「西洋料理」とかけて
「持參金」とかけて
「寫眞」とかけて

(〆切十二月十五日)

# 時報

## 大廟御參拜

この度日露戰役終了御親祓奉告の爲め　天皇陛下の伊勢大廟に成らせ給ひし御事は、誠に曠古の盛儀と拜しまつるになん、今御參拜の模樣を記し奉らんに、十一月十四日午前十時を以て宮城御出門、鹵簿肅々新橋停車場に成らせらるゝ、御奉送の爲め皇太子、有栖川宮、同妃、山階宮の各殿下を初め、各大臣、文武官等先着し、沿道には各區民團體、學校生徒等隙間もなく整列して　聖駕を奉送す、　陛下は陸軍大元帥の御正裝に菊花大綬章を佩はせられ、市民の奉送に對して御機嫌麗しく御會釋あらせ玉へるが　陛下御召の宮廷列車は間もなく高武堅程に動ぎ出でたり、宮廷列車は金線小豆色のヌメ塗りに金の角切を施し御座の間の御窓の下に同じく金の御紋章と鳳凰とを描きたる外、別段事々しき御裝飾等はなく、御座の間には天鵞絨の長椅子一脚と卓一脚とを据え、長椅子は飾るに金銭の刺繍を以てしたれど、卓は木地其儘にて、御飯を奉進すべき臺さへ鐵張に銀の飾あるものに過ぎざりし、此日南風温かく、日麗らかに空晴朗なりしかば、鳳輦到る處民皆な萬歲を祝し奉る。

### 山田御着輦

十四日には靜岡御用邸に一泊、翌十五日を以て伊勢に向はせらる、仍て山田驛にては奉迎の準備に怠りなく、宮廷列車の近づくや二十一發の號砲を放ち、喇手は奉迎の譜を吹奏し、鐵道局長恭しく扉を開き奉りぬ、陛下には大元帥の御正裝を召し菊花大綬章を佩ばせられしが、奉迎諸員に御會釋をたまひ、やがて御馬車に入らせられ、錦旗を捧ぐる騎兵の御先導にて、鳳輦を進めらる、供奉の馬車は伏見宮殿下、桂首相、清浦内相等にて山縣大將の馬車また之れに續く、其の他騎馬の陪從將校列後に續き、二人曳の腕車二百輛に近く、蕭々として宇治の行在所に向はせらる。御道筋は至極靜謐にて沿道到る處群集あり、供奉の大臣以下諸官は行在所まで扈從の後更に腕車にて各旅館に入れり、

## 外宮御參拜

十六日は朝來一天晴れ渡りて數然外る朝日影麗らゝかなり、行在所の邊は御出發の時刻に迫ると共に同人は準備とりどり、拜觀の老若は道の兩側に群集し、家は皆幕を張り日の丸提灯を掲げ敬意を表す、かくて定刻十時三十分　陛下には大元帥の御正裝にて德大寺内大臣を隨へ出御あり、此時儀仗の喇叭手は君ヶ代を奏し、騎兵曹長は錦旗を捧持し、鳳輦徐ろに行在所を出立たせらる、伏見宮、桂、清浦其他供奉の馬車總て御列に入る、鹵簿の前後は近衞兵護衞し今野警務長後驅たり、折しも麗かなる日影は燦爛たる錦旗に輝き、御列肅々として外宮に向はれ、豐川の一ノ鳥居を渡り、橫道正面の一ノ鳥居を過ぎ内苑に進ませ玉ふ、之より先き賀陽宮冷泉大宮司飛原小宮司は正面の御簾を掲げて陛下に御迎禮あり　陛下は御小憩の上更に御前進あり、板垣御門外にて御下乘、假休所に入御、少くして出御内玉垣御門まで侍從御先導を爲し、外の玉垣門外にて禰宜二名御鹽を奉り、次に禰宜は中重御門を開き、御簾を揚げ、次に内玉垣御門内にて御洗手を進む、蕃垣御門、瑞垣御門を悉く開かせられ、宮地掌典及侍從は瑞垣御門外にて奉迎御先導申上げ、陛下は豐受大神正殿階下の御濱床の御座に着せられ、御立拜あり、御幣を奉らせられ親しく御告文を奏し玉ふ、御幣は金一百圓御大刀一口と洩れ承はりぬ、

鳥の間に大寺侍従長は瑞垣御門内にて伏見宮は同御門外にて、山縣桂田中の各文武官は内玉垣御門外にて、以下奏任官は外玉垣御門に候し、供奉一同敬禮、次に冷泉大宮司玉串を執り、宮地掌典に傳へ、掌典之を進め　陛下は殿の中の案上に御奉奠あらせられ御拜あり、一同禮を表し奉る、賀陽祭主宮御玉串を殿上に奉奠せられ、終つて御階を下り西の方男柱の下にて宸儀に向ひ跪座御拜あり、是にて御參拜を了へさせられ御退出あらせ玉ふ。

## 内宮御參拜

十七日は夜來降しきる雨の中に千載一遇の盛儀を行はせらる、儀仗隊は先づ雨を冒して宮城内一ノ鳥居脇に列を作り、前夜より參籠せる祭主宮大小宮司禰宜等は早朝より大御饌奉奠の事を司る、かくて十時二十分先發の日野西子爵の馬車行在所御門を發し、十時三十分御道筋檢分の警部二騎、前驅の警視二騎、近衛騎兵之に次ぎ、御列は第二公式の鹵簿にて近衛儀仗兵四列に進む、眞先の馬車には田中宮相、次に岡澤侍従武官長、次に渡邊近衛師團長錦旗を捧持し、次に近衛將官四騎を先に御拜の馬車を進め玉ふ、御馬車の次には近衛將校四騎供奉の馬車六輛之に續き、山縣侯は第二、伏見宮は第三、桂首相は第四の馬車にあり、最後には近衛儀仗兵四列に進み、後驅には警視二騎之に備ふ、列外には警務長以下數十輛の腕車にて陪従せり、かくて横道を一ノ鳥居橋より宮城内行在所に御着、賀陽宮、冷泉、桑原大宮司以下一同は、陛下の宮城内行在所御出門あらせらるゝに先だち、内苑に參進して大小宮司正殿の扉を開き、御饌を獻げ陛下に拜禮す、陛下は禰宜二名の御先導にて板垣御門外にて御下車、假御休憩所に入御、やがて出御參進せり、侍従は内玉垣御門まで御先導を為し、禰宜二名は玉垣御門外にて大麻御鹽を奉持し、並に禰宜は中重御門を開き、御襲を獻げ、内玉垣御門にて侍従の奉持する御洗手の儀あり、宮地掌典は恭しく瑞垣御門外まで奉迎御先導を為し、陛下は正殿階下の御濱床に着御、平和克復の御告文を玉音朗かに奏し玉ふ、次に冷泉大宮司案上の玉串を掌典に傳へ掌典之を奉り、御幣は振め冷泉大宮司より正殿御戸の内の案上に奉奠したり、次に　陛下の御拜あり、供奉一同敬禮の中に玉串を掌典に捧げ給ひ、掌典之を祭主宮に傳へ、宮は御階を上り正殿御戸の内の案上に奉奠し、階を下り西の方男柱の下にて神器に向ひ跪座あり、一拜本座に退らせらる、是にて内宮御式を終らせらる、時に午前十一時半、其より還御あり行在所御着は零時五分なりき。

## 山田御發輦

十八日天氣晴朗、還幸を奉送せんとて各戸に出せる國旗の影には大御代の目出度き紀念を現はせり、やがて定刻八時廿分　陛下は大元帥の御略服にて德大寺侍従長を随へさせられ御馬車に召させらる、渡邊騎兵の捧持せる錦旗徐々と御前に進めば近衛の喇叭手は君が代を吹奏し、順路山田驛に進ませ玉ふ、沿道の拜觀者は何れも靜粛に御名殘を惜しみ奉りぬ、九時十分前山田驛に御着、驛前に控へたる儀仗隊捧銃、海軍々樂隊の奏樂嚠喨たる間に　陛下は大浦遞相の御先導にて玉車に召さる、其より奉送諸員の敬禮に對し御會釋あり、九時一聲の汽笛と共に宮廷列車は徐々運轉し始めぬ、之より先き樂隊は驛前宮廷列車に對する方向に斜線を行ひ君が代を吹奏すること二回、樂終ると共に宮廷列車は既に驛を離れ、茲に曠古の大典を全く終らせられ芽出度く還幸の途に上らせ玉へり、かくて午後零時四十五分といふに靜岡に御着、御一泊あらせ玉ふ。

## 東京御還幸

なほ東京還御の御模樣を記し奉らんに、之より先き御着發奉迎の爲とて皇太子殿下を始め奉り、閑院、東伏見、山階、北白河各宮殿下には新橋驛に御着、其他奉迎の文武百官一千餘名參集し、品川沖に碇泊の帝國軍艦より發する奉迎の祝砲を合圖に皇太子殿下には各宮殿下及び百官を隨へさせられプラットホームに入らせられ、御待申上る間も無く、宮廷列車は肅々として午後四時四十五分といふにプラットホームに着けり、御陪乘の平井作業局長官は恭しく鳳輦の御扉を開き奉り、やがて御下乘、先づ皇太子殿下、各宮殿下以下百官有司の輩へ御横嚴しく御會釋の上、錦旗を先頭に御劍御璽を御前に捧げさせ玉ひ玉歩を進めプラットホームを出御、第二公式の無蓋の御馬車に乘御あらせらる、總て山藻は彩旗のトンネルとしも云ふべき奉迎門を通り玉ひて萬歲歡呼湧くが如き中を芽出度く宮城に還幸あらせ玉ひぬ。

## 迪宮殿下御養育掛　清水シゲ子

女史は平常女性に似合はぬ嚴格なる性質にて高等女學校敎諭に任ぜられてよりは別して婦女敎育に心を注ぎ往々は海外に渡航して聊か敎育學を研究したしと希望し居たりしが突然第一高等女學校よりの急使に接したれば何事なるかと同校に赴きたるに今回皇孫迪宮殿下の御敎育係り御選任に付す宮内省より文部省に其選任を依頼あり同省より更に東京女子師範學校に關係者たる當果當校に向け是れ〳〵との御内命あり當校出身者にして此光榮ある重任を拜するは當校に於ても此上なき名譽なれば愼で御受ありては如何んとの事に女史も其身に餘る光榮に恐懼の外なけれど斯る重大任の事にもあれば一應家人に相談の上何分の御答へ致すべしとて引取り其夜は深更に及ぶまでも一家の者と協議を遂げたりしが何れも願うても得がたき家門の譽なれば御受け申上ぐるこそ好けれとの事より女史も遂に夫と心を決し三日を經て御請けを致したり斯て其翌日東宮御所に出頭して御敎育主任丸尾錦作氏に面會して挨拶の上諸般の打合せを受け就職する事とはなりたるなり女史が今回の榮任に付き最も心を痛めたるは其身が前記の府立第一高等女學校敎諭として一學年より本年の三學年までも引續き自ら自分に擔當して敎育し來りし百餘名の女生徒等に別るゝ一事にて御請け後は是等の生徒に接する毎に哀別の情、胸に迫まりて腸を斷たるゝ思ひを爲し去る二日御受の前日の夜抔は生徒多數の作文に筆を入るゝに夜を深しつゝ是が作文の直し仕舞ひか抔と無限の感慨に打たれ居たり翌三日は高等女學校に天長節の御祝賀を終へ翌四日改めて生徒等に告別の挨拶を濟まし夫より東宮御所に上るべき準備に取掛りたり愈當日の五日となるや學友生徒等の多數は同家を訪れ來りて告別し御所前まで見送らんとの事なりしも之を辭し共に敎鞭を取れる高等女學校職員三名と姉アイ子に送られて御所に參上し其日直に皇孫殿下より拜謁を仰付けられたりといふ女史は父を景愛、母をエイと云ひ景愛氏は明治二十七八年戰役以來雜業を營みて臺北に渡航し目下尙ほ同地に滯在し前記の姉アイ子大分縣人關田忠三氏に嫁し弟曾直は經濟協會學校の寄宿舍に在りて勉學中なるよし因みに記す前記高等女學校長伊藤氏の語る所に女史は同校が尙ほ神田一ツ橋に在りし時入學し居りて其卒業には八十二名中の第十四位を占めて同校を出で夫より東京女子師範學校に入りて文科を修め明治三十六年三月卒業して同年四月より當校に敎鞭を執るの身となりしが體質最も壯健にして是迄病氣の爲め一日として缺勤したることなく加ふるに職務に對し勤勉誠實にして用意亦周到なる爲め

衆生の職業とする所となり寧ろ學力以上の成績あるを認めたり今回の試驗に就ては定めて其筋に於ても充分の調査を經たりしなるべきも其勤勉誠實なるの點も必ず與て力ありし事ならんと。

## 女子師範學校運動會

東京府女子師範及び第二高等女學校にては去月七日創立五周年紀念運動會を擧行したり此日は特に永井陸軍々樂長の新案に成れる「あさがほ」の遊戯を公表する筈なりしかば朝來婦人女學生の來観者頗る多かりしが扨て各種の運動遊戯總て女性的にて優美なる間に活氣あり就中尋常科女生の遊戯最も喝采を博しビーボールカは無邪氣なる態度能く奏樂に伴ひて亂れず輕快に演じたるは天晴れなり高等女學生の凱旋門は黄白の二組凱旋門の下措へある上へ杉葉を以て綠門を作り上げ「祝凱旋」の額を掲げ了る競技にて女學生等甲斐々々しく襷掛をして手早く裝ひ上ぐる樣得難き興味を覺へしめ三叉行進、美容術亦夫れ〳〵に特色を發揮して來観者興感を呼起したり扨永井氏立案の「あさがほ」は朝起の歌、花の自覺、合唱の三節より成りオペラの古式舞踏に傚ふて先づ夏の朝景色に花の満開を示し花は水を注がれて其惠を感受したるも夜全く明け放るれば燦爛して蝉の飛揚するに至ると云ふ意味にて朝顔を理想的に紹介せんとしたるものなりとか先づ紙にて飾ひたる旗竿を手にせる一人出でゝ程好き處に足を停むると共に之に隨ひ來れる十二人は此旗竿を中止にし二人（内一人は小さき綠の附きたる柄杓を手にす）づゝ六箇所に分れて圍く居並び朝起の歌を謡ひ終れば八人づゝ六組に分れて色美しく造れる朝顔の花を捧げつゝ出で來り各組とも何れも前記の柄杓を持てる者の背後より夫々外方に向け車輪の如く整列して花瓣の形を作れる樣眼を奪ふ計りに美くしく斯くて第二の朝顔自覺の歌に入れば彼の柄杓持てる者は此の花瓣の形を成せる列と列との間を水を注げる態度の舞踏を演出し中途奏の急調となるや花の全體は軸を中心にして忽ち一齊に動き出だし手振足取り面白くして莊嚴たる姿は觀念其節に適ひ艷麗優雅なる例へん方もなく來観者をして坐ろに快感を起さしめたり右の舞踏終れば中央の旗竿より儼然一流の軍艦旗翻へれり出花は開を描きて圓を舞ひつゝ彼方に立去ると同時に蝉の羽衣を肩にせる六人蝶が夏の眞晝に飛び交ふ如く輕快に舞ひつゝ入去る者にして頗る念の入りたる嶄新の遊戯なりしが樂曲の何となく夏の朝に似合はしからぬ樣に聞えしは殘り惜しかりき。

## リツデル嬢の慈善事業

熊本縣の回春病院に於て多年癩病患者の施療に從事せる英國人リツデル嬢が大隈伯澁澤男等の援助を得て汎く世間篤志家の同情を求め其資金を募集せん爲め上京中なりしが大隈伯澁澤男は去月六日嬢の爲めに府下各新聞記者を銀行倶樂部に招待し嬢が十五年間一日の如く癩病患者を施療し來りたる顛末及び癩病の病勢に就て嬢及び同病研究者として有名なる光田氏より説明ありたる後山根代議士、久保田衛生局長嶋田代議士等の演話あり終りて嶋田氏の發意にて澁澤男の指名により委員數名を選び資金募集に關する方法等を委任する事となりて散會したり、今嬢の經歴に關する一節を掲げんに嬢は今より十五年前即ち其始めて日本に渡來したる翌年熊本なる法華宗本妙寺に詣でゝ憐れなる癩病患者が夥しく參詣人に惠みを乞ひ居るを見て坐ろに同情の念を起し遂に故郷の友人等に謀りて其援助を受け熊本にて四千坪餘の地所を買ひ三百坪程の病室三棟を建築し岩井禎三氏を始め土肥、岡田、石黑等の諸國手を顧問として施療入院を許し尚ほ本妙寺附近に施療所を設くる

など百方同患者の爲めに盡す所あり其結果全治若くは根治（全治根治は目下學者間の未決問題）に至らざる迄も病勢の進行を防止して退院したるもの多しと云ふ、又光田氏は同患者の最も多きは印度の十一萬内外にして之に次ぐは日本の三萬内外なれども其人口に比例すれば日本は印度よりも多數の患者を出し居れる事より其傳染の畏るべき事、國家事業又は慈善的事業として一日も忽諸に附すべからざる次第を述べたるよし。

## 第二回の岩崎邸歡迎會

駒込なる岩崎邸にては去月五日第二回の凱旋海兵歡迎會を開きたり、當日の來賓は第一回の歡迎會に洩れたる准士官以下の海兵一千餘人にて東郷大將を始め上村片岡出羽の三司令長官其他の將校悉く列席せられ東郷令夫人令孃も見受けたり會場の設備は殆ど遺憾なしと云ふべく方千數丁に餘る廣き庭園到る處に美酒あり佳肴あり美人あり辻々曲所には道標を建て汽車の時間表を掲げたり此日さしも朝の程は危かりし天候の次第に晴て僅に朝日を洩らしつゝ風も既に靜まりぬほどの暖かさなりしは園遊會日和として此上もなく滿足の限りなりし來賓は午前九時頃より續々と詰かけて定刻には式場の附近全く勇敢なる武夫を以て滿されたり此日主人側なる彌之助氏の如きは病の爲醫師より外出を禁ぜられたるにも拘らず東郷大將を始め皇國の爲に大功を建てたる武夫を招待しながら接待に出でぬと云ふは禮を失すればと病を押して出席し東郷大將以下の來賓に挨拶したり式は極めて簡單に終りて來賓は思ひ〱に飲食店へと赴きたるが各店の前には友禪の摸樣美しき藝妓や、新橋の若妓擬りかしき藝妓等は途に要して只は通さず正宗、ビールは泉の如く湧いて汲めども盡きず、佳肴は山の如くに堆かくして食へども減ることを知らず斯て餘興場は舞妓連の手踊り例の如く佳興に入る每に萬歳々々の歡呼は天を動かし學に閃めく煙火の轟きと相和し興は愈よ加はるに連れて「斯麼に立派な歡迎をされるなら、俺は最一度戰爭に行て來てもいゝ」と叫びし水兵もあり口に出さぬも歡喜の色は面に滿ち〱て將校連さへ嚴肅なる顔をしたるは一人もなく何れも笑ひつ悦れんばかりに打解けて舞妓と手を連ねて踊り狂ひ部下の水兵と相擁し盃を獻酬するさま餘所の見る目も樂しげなりき去つて深翠なる水を湛えたる池の汀に出づれば此處には彼方の騒ぎも知らぬらしく幽邃閑雅の境に茶菓を備へて海軍將校連の婦人令孃が手づから茶を煮て接待の任にあたるもあり俗界清興兩つながら遺憾なくつくされて當日の來賓は十二分の快をつくして歸るを忘れたる有樣なりしも。

## 黑田侯爵邸の園遊會

赤阪の黑田侯爵邸に於ては去月六日舊福岡藩出身海軍々人歡迎會を催されたるが、當日一同の參集するを待て主人侯爵は一場の挨拶を爲し松原中尉之が答辭を述べ、それより設けのビーヤホール、壽司屋、おでん屋、汁粉屋、かん酒屋等に就き各自思ひ〱に飲食し海軍樂隊、カッポレ、仁和加等の餘興を添るあり又水兵側よりは交々劍舞、手踊を演じて主人側に酬ゆる所あり主客陶然たる折しもかねて黑田家の用意したる數百の生鴨の風切羽を切り之を庭園に放つて水兵の捕ふるに任せたりしが或は池中に逃るを追ふもあれば高牆を越えたるを拾ふもありて中々に壯快なりしと云ふ。

## 赤十字社總會

日本赤十字社第十三回總會は去月廿日といふに上野公園内博物館前

に於て擧行す。總裁殿下御名代伏見宮妃周子殿下には閑院宮殿下の御名代にて伏見宮妃、梨本宮妃、久邇宮妃、三殿下及東伏見宮妃殿下を臨ませられ御臨席ある中に會長は式に開會を宣告し御名代妃殿下より恭しく　妃殿下の令旨を賜ふ。

[illegible]令旨を奉讀し[illegible]殿下より御答詞あり

次に於て[illegible]方面[illegible]は先づ[illegible]なる令旨に[illegible]するの情を述べ次に[illegible]年間の事務報告あり

次で[illegible]宮殿下より功勞者及篤志者に對し有功章四十三、特別社員章二百六十四を授與せられ此に閉會を宣告せり、此日朝來の好天氣とて來會者頗る多く各宮同妃殿下を始め奉り全國の參列者無慮五萬五千餘名と註せられ非常の盛況なりき。

# 少女の會

下田歌子女史を會長とせる大日本少女會は天長の佳節を卜し華族女學校附屬幼稚園にて共發會を擧げたるが來會の少女實に三百名に上り其種類は英米清三國の少女を網羅す、先づ開會の辭ありて會員一同の君が代の唱歌洋々として會堂に溢れ日出度き祝日を謳歌するもの清き少女の唱歌する者あり次に下田女史の演說、會員總代として小倉百合子嬢が臆せずして講壇に上り一場の談話をなせしは感ずべく次に英國少女カフサック嬢、米國を代表せるメッウソン嬢、加奈太のチャッペル嬢、清國を代表せる王昌闓嬢などの演說あり次に來賓のハウオス、バシュム兩夫人の挨拶あり日本人側にては巖谷小波、[illegible]博士の小話いづれも有益にして面白く小さき拍手と笑聲頻はしく餘興ありて午後四時頃閉會したり。

# 女子武道奬勵會

前川[illegible]子會主となり去月十二日本所元町東京體育倶樂部に於て女式武術會を開催したるが試合の種目は居合、柔道、薙刀、棒術、半棒等にして先づ第一に登場せしは小峯明十なる人なり此人居合[illegible]拔五六本を演じ次に女式[illegible]劍居合に移り野口宇多子之を演げり次には刀泡と名くる居合を[illegible]正[illegible]演ぜしが此居合は前後左右より敵の現れたる時の拔刀法にして[illegible]一閃時を[illegible]し後ろを刺し左右を薙ぎ拂ふの早技畢竟刀を着ると云ふ意味より刀泡とは名けたるなりとぞ其次に登場せしは芳川栁子[illegible]十一人の女子を對手として初段立合手拔術數番あり次に男式初段座術は小林慶三、岩瀬清三の兩少年によりて演ぜられぬ兩少年の氣合中々凱れたるものにて是も十數番ありしが其對皆通行はるゝ柔道とは少しく異なるを覺ゆ其他女式道手、背負道手は芳川栁子、女式半棒は三橋[illegible]子演じ尚ほ餘興として劍舞數番ありたり。

# 婦人共立育兒會總會

去月十九日午後二時華族倶樂部に於て開會鍋島會頭を始め賛助婦人數十名出席し會頭は[illegible]宮妃殿下より賜はりたる令旨を捧讀し金山政務監督の事業報告、弘田[illegible]監督の治療報告あり理事幹事の改選を爲し終て陛下の萬歲を奉迎し散會したり。

令旨

我が婦人共立育兒會の事業は會頭幹事の盡力と博愛の心に富める會員諸氏の贊助とに依り年毎に其成績の見るべきものあるは予の欣喜に堪えざる所なり今や日露の和議成りて我邦商業の發展すべき時にしあれば此際益々本會の擴張を圖り心緣くして又情に厚き國民の美

性を發揮せんことを望む諸子之を努めよや

明治三十八年十一月十九日

婦人共立育兒會總裁威仁親王妃慰子

## 大日本婦人教育會總會

十一月十八日赤坂福吉町黑田侯爵邸にて開會會長毛利公母堂、副會長鍋島侯夫人を始め黑田侯、三條公の夫人、三輪田眞佐子、以下二百餘名出席、毛利會長の挨拶に次で毛利男爵幹事に代り會務の報告を爲し次に黑田侯爵の演說あり夫れより蔭木氏のハーモニカ、北村氏の獨吟、新粉細工等の餘興あり庭園には錦繡なせる楓の下今を盛りと咲き匂へる菊華壇の邊に種々の模擬賣店を設け各自の好むに任せたり折柄空も澄み渡りたれば會員は三々伍々互に十二分の懽を交して散會したり。

## 學校時事

▲成女學校の紀念會　成女學校第六回紀念會は天長の佳節をトして高等商業學校講堂にて開かれしが、例により生徒の唱歌、英語對話等什々の上出來にて滿堂の喝采を博したり夫より生徒手製の珈琲菓子、饅頭及び細物等の販賣店を開き來賓の好みに應じたるが是亦大繁昌終つて生徒の餘興數番あり五時散會す。

▲府立第三高等女學校運動會　同校第三回運動會は去月十一日開催、來觀者多く頗る盛大なる運動會也き、全部廿六の番組中新らしき競技も少からざりしが中にも、海軍高陞の如きは杉葉を以て二つの大なる艦を造り設けるに、紅白二組の生徒は各々三個宛の菊花を持ち、早く其菊花にて艦を飾り終るを勝となす競技にて、殊の外興味あるものなりき、其他蹴玉通し、稻干競走等も、幾多の競走中注意を呼びしものにして、カレドニアン、方形運動、コチロン、等の美しき遊戲あり、尙ほ行進運動、職員卒業生のセンメーポールあり、最後に君ヶ代の合唱を以て會を閉づ時に四時。

▲淑德女學校の校友會　去月十九日開會の同會には新歸朝者荻原雲來氏文學士加藤玄智氏の精神講話あり活人畫園遊會等あり來會者は百五六十名にて頗る盛會なりし。

▲深川女子技藝學校　深川女子技藝學校にては去月二十三日の新嘗祭當日を以て同區東岸町淨心寺内なる同假校舍に生徒成績展覽會を開き其販賣益金を擧げて同區報公會へ寄附する由。

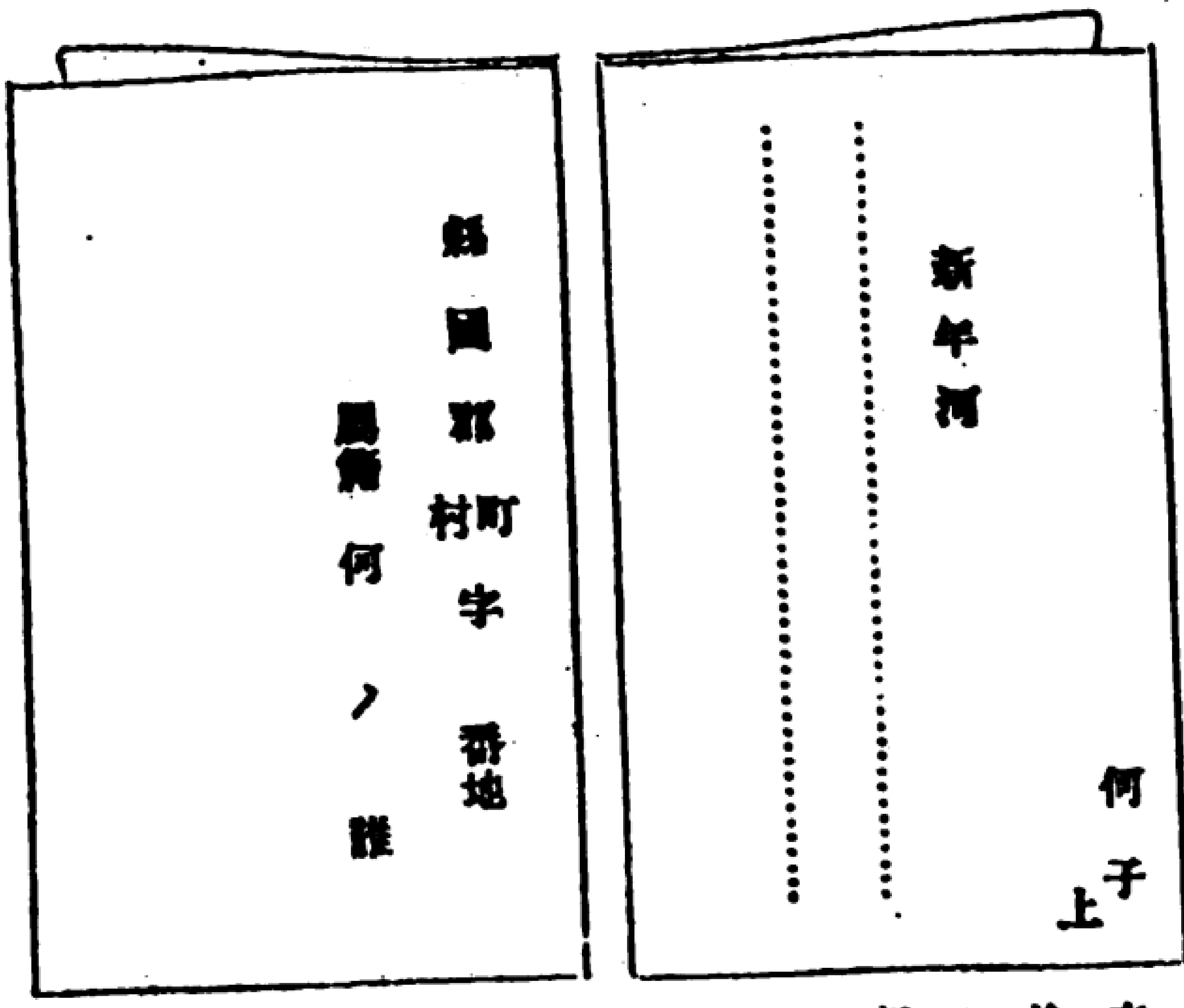
▲女子英學塾の特典　津田梅子氏の女子英學塾師範科卒業生は今回文部省中等教育無試驗檢定の特典を得ることになりたり右に就き同塾は是迄の規則に訂正を加へ第二學年第二學期に於ては言語學同第三學期に於ては英語學史、第三學年第一第二學期に於ては發音學、同第一第二第三學期を通じて英文學史を課する事となせし由。

▲女美學校と淸女學生　日本女子美術學校長島田氏は淸國語に通じ居れるを以て今回大に淸國女子留學生を教育せんと目下頻りに募集準備中なりと。

## 詠進の心得

例年勅題の出る每に其詠進の雛形迄圖にして諸新聞にくはしくあれば之に依てすれば違ふはずはないものゝ奈何なればかとかく形式を誤る人多しと御歌所の人々はいへり違式の物は歌の可不可に拘はらず沒書

となる折角の骨折も水泡と帰て豈くちをしからずや故に新聞にて事は足れども猶其誤ちも多き前轍を踏ひていはむに今年の御題ならば左の如くすへし。




中か小に限る大奉書は用ゆべからず美濃又は薄葉を二つとしそれを又五つに折て其右より下の處に名次の處に題勅題御題詠進等の字書べからず三ツめに上句四に下句

裏は折の二ツめに俗称を記する外何なし書くまじき事女は戸主の名を記して其わきに母妻姉妹又は二女三女

歌名と通称の違ふ人は爰には必ず通称をかくべき也勿論楷書にて歌を詠む又女の名片カナを用ふましき事字あらば字をかき定る字なくばいろはがなを可とす扠それを上封して表に御歌所御中とかき裏面には中に出たる通の縣國郡町村字番地を記し郵券は紙によりて相違あれは其局に持参して不足にならぬ様にはりて投すべし如斯すれは撰歌とならざる迄も始より沒にならず役員の眼を通す中に入るべき也。

# 新刊紹介

## ▲戀の繪葉書（小波山人著） 博文館發行

巌谷小波氏嚮きに獨逸伯林より歸るや「洋行土産」を著して在留中の觀察を公にしたるが、今又た彼の地の見聞に基いて漫錄「戀の繪葉書」をものせらる、紅葉山人が君に贈したる小波渡歐紀念碑は、此の前後の著述によつて全く建て畢ふせられたりといふべし、本書の價値は喋々しく言ふまでもなく、大方は左に抄出したる題目の面白きに見ても知らるべし。

（春）花下の一夜　（夏）山雨水晴　（秋）月と露
（冬）銀婚式の涙　伯林十夜物語　獨逸奇談

加ふるに和田英作氏の挿畫は本文の美趣を助けて錦上花を添ふるの觀あり。（紙數四百六十餘頁、裝釘頗る美、定價金壹圓）

## ▲伯爵夫人 神田表神保町東京堂發賣

家庭小說女夫波の著者田口掬汀氏の新著なり、本編の後篇は目下尚ほ萬朝紙上に連載されて讀者に歡迎されつゝあるものなるが、今其の前篇氏の自費出版によりて美裝して出づ、氏の作は由來作意に於て教訓的意味を含み、結構に於て波瀾重疊、奇趣百出の概あるをもて、讀んで面白く、回を重ねて倦まざるが、此の篇また高潔なる詩趣と場面の變化に富めるはうれし、筋は數代、延代、右太郎の三人が各々父を異にし、其の父が各々の運命に翻弄されて、其死を一にせず、是に於てか右門なる人遺孤三人を養ひ、遺言によつて戀を棄つるの結構、宛ら芝居を見るの心地して芝居よりも面白く、餘りに作意に過ぎたるの嫌なきにあられど、全篇

かも見れば葉山の佳作といふべく、殊に槇成伯、羽田子爵、操子夫人などの性格は能く作者の寫實的描寫なるはしたるものにて、仲々に面白く讀まれたり、但し全篇の結構なる收束のありかは聊か興を引くこと少からず、記者は[illegible]頁の讀物として[illegible]家庭の子女にすゝむ。（定價金八十錢）

▲邦文日本少女の米國日誌　　本郷東京堂發行

野口米次郎氏曩に英文日本少女の米國日誌を著すや、米國の紙價を高めたるは世人の知る所、今又た之が和譯をものせらる、本書は一個可憐の日本少女朝顏孃が渡行前に於ける胡蝶の夢に筆を起して、航海途上の觀察、渡米後の新見聞を經、遂に某家にお小間使として住込むに至る迄の間を會話體の愛らしき筆致にて叙したるもの、之を原文に對照するに譯文また秀麗、更に一段の趣味あるを覺ゆ。文中間々「物皆はね給仕人が温雅なる態度を存して食堂から引退るといふのですよ」と云ふが如き生硬の譯なきはあらねど、大體は有待の才筆に成ることゝて、面白きこと言ふまでもなし。

▲こぼれ月　　日本橋通一丁目[illegible]發行

戸[illegible]竹風子と武田櫻桃氏の合著、收むる所小説あり、小品文あり、韻文あり、戯文あり、俳文ありて、とりどりに面白し、就中櫻桃子の俳文に至つては當代一流の趣味あり、冬夜燈邊の好讀物たるを失はず。（定價金四十錢）

▲男女處世の祕訣　　神田表神保町同文館發行

本書は青年男女に向つて處世の訓戒を與へたるもの、數百ヶ條を集む、[illegible]の[illegible]より若き男は[illegible]する勿れ」「夫を[illegible]に[illegible]く[illegible]れ」[illegible]すべからず。

▲川柳（第一號）　　神田今川小路北[illegible]發行

本誌の柳樽詩評者井上剣花坊氏の經營する雜誌にて、本號は其の創刊たり、先づ巻頭「古人の拋棄」に於て滑稽文學の為めに氣焔を吐く尚又、剣花坊の「柳樽寺說法」仲々に面白く、拙哉庵主人の「三面子と形態觀」銀ン坊の「文士氣質」角恋坊の「予が見たる川柳」「瀧澤茶式部の傳」等いづれも趣味あり、其他今人作句來評、寓句合評評、一人一句評等卷頭微尾川柳趣味の鼓吹に努めたるは、サスガ、サスガ、（一部價金八錢　毎月三回發行）

▲日本の家庭（貳卷參號）　　東京同文館發行

本號の讀物は[illegible]山春子の「家庭の秘訣」、大村仁太郎氏の「半知半解の自然主義」、塚本はま子の「生活の目的」、樋口勘治郎の「わが家のこども」、かきみれの「妻としての法話」等にて、全篇家庭趣味の横溢するを見る。

▲東京裁縫女學校同窓會雜誌（三卷十一號）

本郷東竹町渡邊裁縫女學校より月々發行する機關雜誌也、本號見るべきの記事は坪井正五郎氏の「婦人稱服[illegible]訣」と東京府視學御園生金太郎氏の「女子の學校教育と家庭教育」の二つ、其他裁縫講義に漫錄に文苑に趣味多く、仲々に賑かなり。（定價金貳拾錢）

▲皮製紙入繪葉書　　是迄繪はがきと云へば紙製にのみ限りたるに、今又皮製にて變つた意匠のもの出來たり、こは日本橋區袋物商大勝商店の新案に係り、表裏共山羊の皮を用ひて、紙入仕立に作り、表は種色の無地にて端書形になし、裏は白地にて美人、風景等を摺出し、上部の口よりすれば名刺入、札入となり、そこに封緘を施し表に三錢切手を貼れば、郵便に附する事も出來るといふ至極面白い新趣向なり、年末年始の進物として恰好、（實價一ダース金二圓。）

# 文苑

## 妻

田中ゆう風

此の小說文章婉曲にして一讀了解し難きふしあらんも再讀三讀玩味し行けば中々に金玉の思想を得べし、わけて妙齡女子諸君にすゝむ（編者）

岩がねふみさき　ほりとる玉も
あらがね碎きて　とり出るこがねも
何かは及ばむ　をみなの愛に
愛ある夫婦の　住む家の邊には
幸ある空氣の　人をぞ醉はす
結婚てふ花の香りは　すみれの床より打まさるかも

これは、ミルトンの詩の詞と覺えぬ。

實にわれは、婦人が、尤も不幸なる場合にあらはす、大きなる力につきて、語るべし、そは、男子の精神が殆ど打碎かれ、殆ど塵の中に埋めはてられたる如き、不幸に遭ひし時、その妻は茲に、すべての勇氣を呼起す、彼女の品性に剛氣と、高尚とを加へて、殆ど、その極に達したらんと、見ゆる事あり。

彼女が、さきに、榮ある生活をなし居し時、彼女は、いかに、此の世の波風にも、驚き騒ぎ、いかに、温柔くあはれに、事毎に夫の蔭をのみ頼み渡れりしよ。

さる身もて、いかにして俄に、不幸の淵に沈める男の慰めとなり、男の支柱とにはなれる。

これを譬へていへば、大きなる樫の木の圍りを、細き蔓、やさしき葉もて搦みたる蔦なり。一日、雷の落ちかゝりて、樫の木を打裂く時、かの纖弱く細かりし蔦の糸は、渾身の力を籠めて、いよゝ強くかの木に搦み着きて、折れたる枝をも繋ぐことあり。

平生は、たゞ、男子の附屬物として、否寧ろ、男子を飾るの具に過ぎざりし女も、ゆくりなき不幸に遭ふ時、始めて、男子の力となり、柱となり慰めとはなるなり。まことに、神の御攝理こそ。

さて、彼女の細く溫柔き心の糸は、荒く強く、しかも締りなき夫の心を、巧に搦みて、頸垂れたる頭を、彼女の優しき腕に支ふるなり。

吾は、此の觀察に適ひたる、一箇の實例を見たり。

---

今それを語るべし、吾に一人の友あり。

その友は、最も榮ある樂しき、最も強き愛の糸もて結ばれたる、妻を持てりき。

その友は常に言ひぬ。

吾は世の何物を以てしても、妻と子とを持てる幸に代ふべしとは思はず。

若し、君が榮えん時、君の妻は、君と繁榮を分つべく、若し、君が、不幸ならば、君の妻は、君に慰安を與ふべし、實に、吾は、結婚せる人の、不幸に陥れるを恢復せんは、單獨の人の、それに比して、いかに容易からんと思へり。そは、一半は、愛する處の者を養はでは、といへる必要によりて勵まされつゝ、家庭の愛情によりて、いつも、精神の復活しつゝあるによるなり。

假令、外方のすべては、闇黑に閉され、多くの知人に耻かしめられんも、なほ、わが家庭には、小さき愛の世界の、何物にも犯されず殘り、その世界の王者はわれ自身なればなり。

之れに反して單獨の人は、心焦立ちて荒らかに、堤の潰れたる如く、心の水は、擅に、何方へも狂ひ奔るなり。

さて、自身は、比へ方なく、淋しく、身は、此の世界の外に捨てられたらんやうに、心は、住む人なくて、荒増りゆく家のやうに、あるべしと。

---

渠は、名を、ジヨージ、レスリーと言ひぬ。そして華美しき交際社會の眞中に、美しく育てられ、教へられたる、一個の處女と結婚しき。

渠の富裕なりしに引換へて、彼女は、財産とてはあらざりき。

されば、レスリーは、彼女の、凡ての榮ある事に就きて、研究さすべく、其を唯一の樂みとしつ。そして彼女の生涯を、殆ど、妖怪的に榮華をさせまほしなど常に言ひき。

彼等の性質は、互に最異りたりしが、却に、和聲連合をなさしめき。

そは、渠は、稍眞摯ともいふべき性なるに、彼女はいと活潑に、愉快なりき。

渠は、屢、集會所に於て、彼女の、活潑したる力の迸り出づる樣子を、沈默の喜びもて眺め居たりき。

さて、如何に、多くの人に賞めらるゝ間にも、彼女の眼は、仍、渠の方にのみ向ひけるよ。恰も、愛と、贊成とを、渠にのみ求むるかの如く。

渠の腕により縋る時、彼女の瘦せぎすの形を、渠の丈高く男らしき體格との對照の、如何に見ものなりしよ。

眞に愛すべき、信ずべき、賴もしき夫よ、と彼女がレスリーを見上ぐる時、レスリーは、その纖弱き重荷に向つて、愛に溺れたるかの如く、わが眼には、此の年若く、然も、互によく適合したる、配偶者の比を、他に見出す事能はざりき。

然るに、悼ましきは、或時、不幸にも、レスリーは大きなる投機事業に於て、その財産を殆ど蕩盡しつ。結婚後わづかに數ヶ月にして、然しもの富裕家は、

彼に乞食のやうになりぬ。

されど、暫時がほど、渠は、その悲みを、自身に保ちて、妻には語らざりき。

さて、包むに餘る悲き顏ばせしつ、破裂んばかりの思ひに、日を暮しぬ。

堪へ難き苦みの中にも、別て耐へ難く苦かりしは、妻の前に、笑顏を作るの必要ある事なりけむ。

如何にとならば、渠は、その新き報知によりて、彼女を苦めん事のいかにしても、耐へ得ざりしが故に。

されど、彼女は、愛情の逬る機敏なる眼にて、凡ての事を見破りぬ。

渠が、常ならぬ樣子と、折々苦き吐息を出さんとして、辛う打耐へ居るとによりて。

斯れば、渠が努めて愉快氣に見すべく、苦心せるも聊か効なかりき。

此間、彼女は、何卒して渠を幸福に呼返すべく、彼女の活潑の力と、溫和き方法とを盡しなりしかども、此は又凡て、渠の心に射貫きたる矢を、なほ深く刺通す業なりけり。

渠は、そを見るにつけて、貧といふものゝ、直に彼女を苦めでは置かぬ事を思ひて、愈苦さの添はりぬ。

幾日の後、彼女の笑みは彼女の頰より消え、又歡は彼女の唇より亡せ、輝きたりし眼は、悲の幕を以て覆はれ、胸の中に輕く打ちたりし喜びの心臟の響は、憂さ悲さに、下に押下げらるべし、と思ひつゝ、

數日の後、レスリーはわが許に來り、甚き失望の聲もて、渠の現在のさまを殘りなく語りぬ。

聽了りて、われは斯く問ひたり。

君の妻君は、已にそを殘りなく知りつや。

否！

と渠は涙に咽びつ、さて

君よ、吾に聊にても、愛憐を加へんとならば、妻に付きての總を、問ひ給はざれ。われは、彼女の上を思ふ毎に、殆と狂氣するを。

何故？

と、われは問ひぬ。

彼女は、早晩、そを知らではえあらぬなり。君が、永劫それを妻君に秘し置かん事、到底不可能の事ならずや。もし他より洩れなば、恐らくは、君が語りたらんよりも、驚きは深かるべし。

すべて、愛するものゝ詞は、最も驚くべき音信をも和らかに、小さく、響かするものぞ。

しかも、君は、それによりて、彼女の同情の慰めを得べく、渇望しつゝあるにあらずや。然るを、今、君は、その秘す事によりて、感情の交通をすら、杜絶し居るなり。

君が秘密とする事こそ、却に、その隔ての戸を打破くべき鍵なれ。

妻君は、慥に、君の心に、秘密を食む虫ありと知りて侮辱され、権利を犯されたらんやうに、感じつゝあるべし。

渠は言へり。

されど、わが友よ、爾する時は、吾は、彼女のすべての未来の企を、悉く捨てさせねばならぬぞ。彼女の夫の乞食なる事を語るにつけて、打上りたる氣高き彼女の心を、俄に地にまで引落さねばならぬぞ。責ても保ちたる活潑なるさまを、捨てさせねばならぬぞ。

それも可し。さて、いかにして、貧さに堪へ得む。彼女は實に、社會の凡ての人が崇むる、偶像なりけるものを。

あはれ、いかに、彼女の心を碎かむ。

吾は渠が悲哀に因りて、非常に雄辯となれるを眺めき。さて、そを奔るがまゝに任せぬ。

そは、悲哀は、語るによりて、慰めらるべければ。

さて、渠の感動の、稍靜まりし時、われは、打返し、渠の妻に、疾くそを明すべく忠告しぬ。

渠は、仍悲しげに、頭を打振るのみ。

されど、君。君は、何日までか、よく彼女にそを秘し得るぞ。

君は、君が變りたる境遇に適はすべき方法を取らねばならぬにあらずや。

生活のさまも、變更せではあらぬにあらずや。
斯く言ふ時、渠の顏に黑き村雲の颯と懸りぬ。
吾は、君の現はれたるものを以て、君の幸福の基礎とはせざりき。
君は、なほ、君を愛する友のあるを、自覺し給へ。
その友は、君が卑き生活をすることによりて、必ず君を侮らぬものを。
さて問ふべし、君は、彼女と共に幸福を保つ上に於て、宮殿に住むの要あるか。
否、實に吾は彼女と共ならんには、小屋の中も厭はじ、獄の中に降り行くも辭せじ、必辭せじ、神は彼女を祝福し給ふべければ。
とて、悲哀と愛とに擾亂されたる渠は、裂く如き聲に叫びぬ。
吾は、渠の手を固く握りつゝ、
吾が言を信じ給へ。
君の妻君は、慥に、君と、其點に於ては、同感なるべし。加之、彼女はそれによりて、誇りと勝利との根原を作り得べし。
そは、彼女の性質の中に、なほ發揮されざりし勇氣と、熱心なる同情とを惹起して、彼女は、君をこそ愛すれ、財産を愛するにはあらぬといふ事を、それによりて、證し得べく、却に喜ぶべし。
凡ての眞の忠實なる女の心には、天より與へられたる火の燃えたるも、平常は隱れて見えず。されど暗黑にはその火の燃ゆるなり。されば、人は困難に遭はぬほどは、妻の心の天使のやうなるは、知られぬものぞとよ。
斯く言ひける吾が詞と、吾が樣子に、渠は激動しぬ。
吾は、終に、
疾く家にかへりて、その悲き心を彼女に打明くべく勸めぬ。
されど斯く勸めつる吾も、その結果の、いかにあらんと、密に憂慮したりき。
實に彼女の生涯は、樂みに包まれたりしなり。そを俄に不幸なる境界に堪えさせ得べきか。

彼女の願求せられぬ活潑なる精神が、不意に不幸なる位置に、滿足すべきか交際社會に於て、零落は、多くの苦き經驗を持たねばならぬを。と、

吾は次の朝、レスリーに逢はんを、非常に苦慮しぬ。渠は、終に、渠の妻に、そを打明けたり。

いかなる有樣にて、彼女がそれを聽きしや。と尋ねしに、

天の使のやうに、

と答へぬ。

彼女は、むしろ安心せるさまなりき。

そは、彼女は、わが首に手を打かけて、

此頃、われを、かくばかり不幸にせしものは、唯そればかりの事にか。

と問ひぬ。

されど、あゝ、彼女は、生活上にいかなる變化を來さんかといふ事につきては、理解し得ぬなり。貧困といふ事は、時の上に知りたるのみなれば。

されど君。

と、われは言ひぬ。

われらが、實際に、その貧困なる境遇に遭はん時、始めて、困難といふ經驗を經るなり。

君は、君の妻君に、そを告ぐる事が、最上の困難なりしかども、此度は、社會の人に向つて、能ふ限り早く、その秘密を洩すこそ必要なれ。凡て、零落したる人の苦みは、その傲慢なる心と、空くなりたる財嚢との爭ひなり、虛となりたる装飾は、直に取捨つべし。さて、貧困と見らるゝ爲の勇氣を持ち給へ。さらば、君は已に、第二の難關を通過せしなり。

と敎へぬ。

其の後數日經て、渠は、夜、われを訪問しぬ。

聽く處によれば、

渠は、渠の住居を賣り、さて、町より數哩隔てたる田舍に於て、小さき小屋を買ひぬとぞ。其日、渠は、終日家具を運ぶ爲に、忙がしかりき。勿論、よき家具は、大方賣拂ひつ。

されど、渠の妻の琴のみは、殘しぬとぞ。そは、彼女

にとりて、餘りに深き關係を持ちたれば。

それにつきて、渠は彼等の愛の一小話をなしつ。

吾等が許嫁の間、尤も樂しかりしは、吾の此の樂器を見下して立ちつゝ、彼女の聲の響に融くるやうなるに、耳傾けし時なりき。

と語る

吾は、此の一家族の咄の進行に於て、此上なき興味を持ちたり。

折しも、いとよき夜なりしかば、吾は共に往かんとて立出でぬ。

渠は、一日の仕事に勞らされたり。歩む中に、何となく陰鬱になりもてゆきて、

あはれメレー（渠の妻の名なり）は。

と、深き吐息と共に打呻きぬ。

彼女が何とかしつる？

と、吾は問ひぬ。

何とや？

渠は羞ぢたるらしき眼ざしして、吾を咎めて、さて、

斯くばかり零落しつる彼女を、何とかしつるとか。あはれなる小屋に閉込められて、あはれなる小屋のはかなき營みまで爲ではあられぬやうになりたる彼女を。

さらば、彼女は、其變化につきて、不平にても唱へつるにか。

否々。さればかりかは、彼女は、結婚以來、斯くばかり機嫌よき事はあらず。彼女は、吾を愛し、吾を慰むるより、外の事なきなり。

いみじき婦人かな。

と、吾は叫びぬ。

君は、君自身を貧困なりと打喞てども、君は今ほど富みたる事はなきなり。君は、彼女が持ちたる、秀でたる、加之、無盡藏の寶物を、今までは知らざりき。されど、おゝ、吾が友よ。小屋に於ての最初の會見を果さん時、吾は、そこに初めて、眞の愉快を覺ゆべきなり。今日は、彼女を實驗すべき、最初の日なれば。

かゝる哀れなる住居の中に、彼女は、終日、家を整頓する事に、忙がしかりしなるべし。

家事に疲れを覺えしは、恐らく彼女にとりて、初めてなるらむ。

いかに疲れ、いかに失望しつゝ、來るべき貧乏のさまを、想像しつゝあらん。

と、渠は復呻吟ぬ。

吾も、或は怒るべしと思へば、何とも答へ得で、歩を移すに、渠は、大きなる通りを折れて、小路に入りぬ。

兩側に樹立茂りたりと見る間に、やがて、彼れの小屋に近づきぬ。

いと質素なりき。

されど、田舍めきたる所に、却趣味はありたり。

野生の蔦のいとよく茂りて、片方に、二三本の高き樹、その小屋を越えて、恰好よく枝をさし交したり。

吾は、戸の廻りと、前なる草原の上に、調和よく並べられたる草花の鉢植を見たる時、戸にまで這ひかゝりたりし蔦の茂みを通して、小さき門の披かれたる中より、洩れ來る音樂の響きを、耳にしたりき。

レスリーは、吾が腕を握りぬ。

吾等は、立留り聽きぬ。

そは、メレーの聲なりき。

渠が、二なく好める小さき曲を、最も感深き聲に、唄ひたるなり。

吾は、わが腕に倚りたるレスリーの手の顫ふを感じつ。

渠は、仍よく聽かんとや、歩を進めぬ。

渠の足が砂利に音する時、輝きたる美き面の窓に顯はれ、頓て消えぬ。

と、見る間に、輕き足音の響けり。

メレーが、吾等に出逢はんとて走り來しなり。

美き眞白なる衣を着たり。

二つ三つの野咲の花は、彼女の美き髮の中に簪されたり。

新しき希望の色は、彼女の頰の上にあり、彼女の完全き相は、笑ひを以て輝かされたり。
吾は、彼女の、斯くばかり美きを見たることなし。
吾が愛するジョージよ。
と、彼女は叫びぬ。
吾は、君の居給ひたるを、最喜ばしく思ひぬ。
先刻より、幾度か、小路に出でゝ、歸らせ給ふかと見ぬ。
小屋の後ろに、美き樹の下に、夕餉の支度したり。
さて、われは最新きいちごを摘みたり。君が好み給ふをしれば。
さて又、われらは、いとよきクリームを持ちたり。
閑く、萬事に美く、且つ靜かなり。
と、渠の腕に倚りつゝ、渠の顔を輝く眼に見上げつゝ、彼女は言ひぬ。
あはれ吾等は、此上なき幸福なるかな。
可憐なるレスリーは、ほとほと度を失ひたり。
渠は、渠の胸にまで、彼女を抱きぬ。さて、渠の身に、彼女の腕を纏はせ、再び三度、彼女を接吻しぬ。
尋常ならず感動して、言ふ詞を知らざる渠は、唯、涙ぞ、溢れ出でたる。
其後、渠は、屢々かゝる事をたしかめぬ。
社會に於て、吾は、久き間、繁昌したりしかども、彼の瞬間に經驗したる幸福ほど、大いなるものはあらざりき。
と、

吾は再度言ふべし
　岩がねふみさき　ほりとる玉も
　あらがね碎きて　とり出る黄金も
　何かは及ばむ　女の愛に
　愛ある夫婦の　住む家の邊には
　幸ある空氣の　人をぞ醉はす
　結婚てふ花の香りは　菫の床より打勝るかも
されど、あゝわれらが見たる多くの家庭よ
夫が勝利の月桂冠を頂く時
妻はそれによりて美衣を得べく
それによりて美食を取るべく

それによりて寶石の指環を買ふべく
それによりて歌舞伎の代り目毎に見るべく
彼女の笑くぼには常に愛の泉を湛へられたり
しかも一朝、夫が失敗の谷底に葬らるゝ時
世人がなほ嘲罵の矢を放たぬに先立ちて
彼女は怒り怨み泣き罵りてさらでも痛手に
なやむ夫の腸を寸々に掻むしらではえおかぬなり
恐ろしき妻よ
榮ある時には路ゆく人も崇め慕ふものとぞ。

# 愛の筺

鈴木西湖

## 登場人名

一 大學生　植木道夫
一 道夫妹　雪子
一 天女（實は道夫が從妹）亡花子

## 一　常世の夢

舞臺一面の綠野、其の中央には、幾千歳を經たらん常盤樹一株、枝葉は四方八面に張りて、瓔珞の如く、天空は淡く水色に霽れて、赫耀たる光、綠の葉にきらめき、百千草、此處に白銀と咲き、彼處に碧瑠璃と亂れつ。中央より稍々右手に、白百合の一叢、馥郁たる香を送りて、漫ろに人を醉はしめんとす、奥には淡霞棚引きて、遠く低く連なりたる、模糊たる山影、夢の樣なる遠望の景。洋々たる音樂起り、餘韻遠く微かに聞ゆ。この時、舞臺の左側より白羽の胡蝶ひとつ、翩々と中央に舞ひ來る。其の跡に踵いで、顏容稍々枯瘦せる青年植木道夫、年齡は二十一二歳、大學の制帽制服の扮裝にて出來りつ、常盤樹の右側に立ち止り、胡蝶の躍り上りて、其の姿の次第々々に宙に消へ失するを、凝乎と眺め、茫然としてありしが、ふと氣附いて、我に歸りたる科介ありて、左覗右盻しつ。

道夫「ア、何と長閑な野の景色よな。」
切りに太息を洩し乍ら。
道夫「花も薫れり、鳥も歌へり、ア、想へば今の幻影！

……儚ないは世の姿！………え丶過ぎ來し方の懷慕しや。」

と天を仰ぎ、沈思の思入ありて、

道夫「迚も詮なし、どれ暫時、花を蓐に、空想にでも耽らうか。」

われ不知二三歩移して、白百合の花陰に身を潜ませ、柔らかな靑草の裡に横たはりつ、肱を枕に、ポッケットより聖書を出して、默讀し始める。

この刹那、再びピヤノの彈奏起る。

道夫は忽ち頭を擡げしが、再び舊の如く横になり、聖書を草の上に投出し、眼を閉ぢ、醉へるが如く、恍惚として、伏俯むく。

音樂の響き次第々々に近付くと同時に、彩雲常盤樹の上に下りて、白衣の天女、忽然出現す。此の間道夫は夢心地となる。

天女「たつた今の事、此の邊りに人の氣配の致したのに……ア、何て、ま、この胸の騷ぎは。」

ト少し伏目になり、兩手を胸に充て。

天女「てもさても、不思議なこと。」

ト怪訝に堪へぬ思入。

處へ最前の胡蝶、再び天空より舞ひ下りて、高く又低く、舞ひつ、躍りつ、遂に翅疲れて、白百合の花蔭、道夫が冠れる帽子に留まりて憩ふ。天女は涼しき眼もて、胡蝶の舞に見惚れてありしが、ふと花蔭に若き人の眠れるに氣附いて、靜かに其の側に倚り添ひつ、其伏せり勝なる面を差覗いて。

天女「何と痛はしの御姿よ。哀れ世は憂きことの絶えぬと見へて……。」

と喟然として、同情の念に驅らるゝ如き思入ありて、次で其處に投げある聖書に眼を注ぎ、稍々暫時熟考の體にて、

天女「この品は、何うも覺へのありさうな……オ、覺へがないで………。」

すつと近寄り、懷慕し相に、熟々と靑年の面を覩。

天女「エ、、この御方は、この御方こそ、わが脊の君と………。」

胸騒がしき思入にて、身を摺寄せ、紅に燃ゆる唇を、道夫が耳に觸れて、

天女『道夫樣！、道夫樣！。』

と呼びて、道夫の身體動き初めしを見計ひ、毫し後へに退り、常盤樹の根元に立つ。

爽快なる聲に、道夫はふと目を覺まし、草の上に起き直りつ。

道夫『ハテ、わが名をお呼びなさるは……。』

と唯だ茫然として、四邊隈なく見廻し、漸く常盤樹の側に立てる天女に氣附き、其の淸く、氣高く、神々しき容姿に見とれて、恍惚として、恰も酔へるが如し。

この時天女は二歩三歩進み。

天女『あら、疎ましの世の人や。』

と稍々愁傷の體。

道夫『疎ましの世の人とは、ても、異なことを申さるゝものかな。』

と不審の思入おりて、立ち上り、吾れ不知二三歩近寄り、凝乎と視。

道夫『エッ、御身は、花子樣！。』

驚愕の餘り、よろ〳〵と蹌踉く。

天女はしかと道夫を支へて。

花子『いかに、この園へお越にはなり給ひしぞ。』

道夫『いかに來しか、夫さへ毫しも覺へませぬが、何と美はしき景色にて在さずや。』

と彼方此方の奇しき光景に魂を奪はれて、魔に魅せられしと云ふ科介ありて。

道夫『此處は御園とな。』

と首傾け、思案の體。

花子『さ、其の御園で厶いまする。』

道夫『では、何と呼び給ふぞ。』

花子『貴郎は未だ御存じありませぬか。此園は浮世を遠く離れし、エデンの御園！。』

道夫『エッ、エデンの御園とな。』

と驚ろきの體。

花子『さのみ驚愕給ひぞ。其の太古、智慧の木の實の美

麗しきが、仇となり、アダムとイヴは、この樂園を追はれたれど、現代は神の惠のいや豐かに、其處に嫉妬もなければ、怨嗟もなく、愛の泉は不斷に流れて、無常の風も吹かねば、生とし生けるもの、永遠の生命を歡ばぬものぞなき。あれ見ませ、花は榮光に咲き出づるを、あれ聽き給はずや、小禽の音を、如何に讃美の歌ひの長閑なること。さは云へ、情なや、世の人は、憩はんことも、なか／＼に……。」

と哀傷の思入。

道夫「世の人の憩はんことは、難いとや。」

花子「さればとよ、アダムの後裔の後裔なれば……。」

道夫「と云ふ御身も、其の一人に在さでや。」

花子「妾も嘗は定まれる一人なりしかど、世の罪を負ふ羔の、尊き血潮に潔められたので、雪よりも白くなり、今は御園を守る、あの花守とはなり侍りぬ。」

道夫「われも、今より穢れたる世を棄てゝ。」

と上衣を脱ぐと共に、全身白衣と變る。

道夫「花守とこそ身を變へて、御身と兩人、永遠に御園の春を守らうよ。」

花子「道夫樣！。」

道夫「花子樣！。」

兩人相握手する、この際嚠喨として起るピアノの音に、兩人互にもたれ合ひつゝ、歡喜の科介、宜しくありて（幕）

## 二　覺めて後

場所は伊豆伊東、薫風館の離座敷、六疊の一間、床の掛物、楣間の額等、凡て室の體裁は、旅館向に造られあり。

室は障子を明け放ちて、舞臺の奥に、遙かに天城、東笠、矢筈、柏峠等の山々、或は紫紺に、或は青緑に、色彩せる處を見せ、窓外は直ちに千頃の青田、松川は其の中央を横斷りつ、そよ／＼と稻葉を渡り來る涼風に、道夫（旅館の浴衣を着て）は机に凭れて、心地好氣に午睡の夢圓かなる處にて。

幕明く。

妹の雪子、改良服の扮裝、房々したる前髪額を蔽

ひ、頭髪は三組にして脊に垂れ、紅のリボンを結び、無邪氣なる十一二歳の少女、舞臺の下手より即ち椽傳ひに來り、室の前に立つて。

雪子『あら、兄樣が、よく眠つてらつしやるわ。』

と云ひつゝ、其の側に近寄り、

花子『兄樣！兄樣つてば、兄樣！。』

と搖り起す。

不意に呼ばれて、道夫は驚ろきながら、無意識に机を離れつ、尚夢心地して、

道夫『花子樣！。』

と朦朧として、四邊を見廻す科介、

雪子『兄樣、妾ですわ。』

道夫は漸々われに歸りて、何か物足らぬ思入ありて、ぐるりと、再び四邊を隈なく視。

道夫『ア、夢か、夢だつたか。』

と獨言ちつ、また獨り點頭く。

雪子『兄樣、從姉樣の夢、見て居らしつたの。』

と云ひながら、其の側に座る。

道夫『イエ、なんだ、雪ちやん何時歸宅つたね。』

と話頭を轉せんとする。

雪子『妾たつた今よ、兄樣、昨年のお休暇には從姉樣も、叔母樣も、御一緒で入らしつたわねえ。』

と過ぎし事の偲ばれて、悲しき思入

道夫『ア、さうだつたね。』

と太息して、追懐の情緒一層切なる思入ありて。

道夫『雪ちやん、最其麼談話は止めやうね。雪ちやんには、其の代り雪ちやんの一番仲好の、そら川島樣の秋子さんが見えてるんぢやないか。』

邪氣なき少女の、ふと何事をか感じたるが如く、忽ち微笑みて。

雪子『兄樣、妾秋子さんが一番好き。今も秋子さんとこで、遊んでましたの。』

道夫『また兩人で、川島樣の御邪魔してたんだね

雪子『イヽエ、お邪魔なんてしないわ。――兄樣、川島の阿母樣、耶蘇教だわね。』

道夫『雪ちやん、耶蘇教は嫌いかね。』

雪子『妾嫌ひつてこたないけど、――兄樣、あの川島の阿母樣ね、従姉樣の教會と同じことよ。』

道夫『這麽こと、誰に聞いたね。』

雪子『妾聞かないつて、知つてるわ。兄樣、今日ね、川島の阿母樣が、種々お談話して下すつたのよ。人間は不殘罪人ですつて、ですから、あの神樣がお救ひ下さるですつてわ。ねえ兄樣、イエス樣つて、眞個に天に居らつしやるの。』

道夫は机に倚り、片手もて頰杖つき、情恨愈々募り、胸の燃ゆる思ひにて、默然たるまゝ。

雪子『あら兄樣、兄樣つてば、人に話をさせといて、御返事して下さらないんですもの、妾厭！　最止して了うからいゝわ。』

無邪氣に拗ねる科介。

道夫は吾ながら、よしなき事に胸痛めしよと云ふ思入ありて、苦笑ひしつゝ。

道夫『今度はよく聞いてるから、お談話してお呉れ、雪ちやん、何と云つたつけね。川島の――そら秋子さんの阿母樣が……。』

雪子『兄樣、兄樣は何だかをかしいわ。』

道夫『些ともをかしいことはないよ。雪ちやんこそをかしいわ、這麽こと許言つて。』

雪子『いゝわ兄樣、妾知らなくつてよ。』

可愛らしい頰を膨らして見せる。

道夫『ハヽヽ、雪ちやん、天に誰が居ますつてね。』

雪子『イエス樣つて、言つたぢやありませんか。』

道夫『ア、左樣々々……。』

雪子『兄樣、眞個に居らつしやるの。』

機嫌稍に復へる。

道夫『左樣な、兄樣にも能く了解らないが―耶蘇教では、其樣云つてるんだがね。』

雪子『兄樣、あの、人間はね、病氣して死んだつて、イエス樣を信じて居ると、神樣のお側に行かれますつて、ですから、従姉樣も一時眠つたんですつて。さう言つてましたわ。』

道夫『従姉樣は死んだぢやないつて？。』

と、點頭いて、

道夫『何？……その時、雪ちやんは何う思つたね。』

雪子『だつて、兄樣は、何時も這麼ことはないつて、言つてたぢやありませんか。妾だつて、這麼こと些とも了解らないわ。だけど、兄樣、妾さうとも思ふわ。』

と黑目勝のクリ／＼した眼を睜つて、窃と道夫が顏を見る。

道夫『兄樣には、薩張了解らないがね。』

暫時眼を閉ぢて、

道夫『雪ちやん！』

雪子『エ……あの、兄樣、川島の阿母樣はね、言つてましたわ、何なに金錢があつても、何な豪いお方だつて、屹度一度は、あの、お墓の中へ這入るんですつて──兄樣、妾、あの妾死ぬのは厭！』

道夫『雪ちやん許りぢやない、誰だつて死ぬが好きな人つては、あるもんぢやない。だが、運命ぢや仕方がないもの。』

雪子『だつて、兄樣、川島の阿母樣は、永遠までだつて、生きてますつてわ。ですもの、妾だつて。』

道夫『兄樣も、永遠までも達者で居たいと思つてるさ、花子樣だつて、屹度……ね、雪ちやん！』

と、愁傷の思入。

雪子『兄樣、あの、從姉樣は死んだぢやないわ、眠つたのですつてもの。』

道夫『雪ちやんは、眞個にさう思ふかね。』

雪子『あの、妾、だつて左樣思てたいんですもの。兄樣、妾、川島の阿母樣に、今一度伺がつて來ますわ。行つてもいゝでせう。』

この時、讃美歌を唱ふ、可愛らしき無邪氣なる聲、戸外より聽ゆ。

雪子は耳を欹だつる科介ありて、

雪子『あら、秋子さんが──兄樣、妾、行つて來ますよ。』

雪子は急いで、上手に入る。

後姿を見送りて、

道夫『信することの出來ないものは──ア、不幸福な者だな。』

腕拱き、再び煩悶懊惱の思ひ入。（幕）

## 三　靜海ヶ濱

正面奥深く、鬱然と鎭守の森、神寂びて見え、舞臺の中央へ、ずつと打ち開いて一面の砂濱、下手は波打際の心。遙かの海上には、初島の漁火隱現と見ゆ。森に續き、二三株の磯馴松ありて、六日あたりの弓張月の影、いと物寂しげに、松が枝に懸れり。時々打ち寄する波の音、寥々と響く。

總て伊東海岸靜海ヶ濱の晩景。

忽然一縷の漁歌起りて、この寂境を破りつ、餘音遠く曳いて、波の音に收まると同時に、幕開く。

道夫は白地の浴衣を着て、聖書を持ち、上手より出來り、天を仰ぎ、地に俯し、默然として、悲恨惆悵の體にて、幾度となく砂濱を行きつ、戻りつ、時々太息を吐く。

軈て磯馴松の根に腰打ち掛ける。凄滄たる月光、松が枝より流れて、道夫が半面を射つてあり、道夫は遠く黒ずんだる海の面を眺めつ、再び瞑想に耽る科介。

折柄、ゴーン、ゴーンと松月院の鐘の音、波を渡りて響く。

道夫は夢より覺めたる如く、凝乎と天空打ち仰ぎ。

道夫『生者必滅の理、知らないではないが、夢と云へば、餘りに果敢ない人の身の上！片身の聖書は自分の手に殘つて、追懷の種と成て居るが……。』

聖書を視、悲憤の振ありて、われ不知、潸然として、下る無限の涙を、手巾に拭いて、首を垂れ。

道夫『ア、あの幻影！、花子樣！貴孃は何故私しを捨てゝ。』

と道夫は恰も狂へるが如く、地に俯し、天を仰ぎつ、身の置き處なき體にて。

道夫『されど、されど、花子樣は死んだであらうか。アアあの夢！矢張夢だらうか。否雪子の話と云ひ、エデンの御園に、花子樣は……想へばあれは正夢であらう！。花子樣は、花守となつて、自分を——オオ左樣だ、屹度自分を。』

と稍々精神の沈まりたる體となりつ。道夫は靜かに莊嚴、不動なる天地の相に接して、此處に始めて、偉大なる暗示を感受したる思入ありて。

道夫『畢竟斯の世は一時の旅路たるに過ない、人生の休息所は他にある、屹度他に在るのだ。永遠―永遠―吾々には、永遠不滅の樂園があるに相違ない、花子様は今其處に……自分も後を追ふて、其處に……。』

この時、沖の方に、鷗の悲鳴する聲、切りに聽ゆ。

道夫『花子様！追付參りますよ。』と言つて、松の根を離れて、凝乎と海の面を目戍つて立つ。折柄、悲愴なる音樂の音、切れ〴〵斷へ〴〵に聽こゆ。

此の時、一陣の風、颯と吹き來り、其の一刹那、花子の姿（海水浴の衣、海水帽の扮裝）が、白波の上に、顯然と出現する。

道夫は我を忘れて。

道夫『花子さん――！。』と呼ぶ、花子は微笑みて、顧盼りながら、白波の上を徐々と行く。

道夫『花子さん――！。』と再び大聲に呼ぶ。花子はこの時纖手を上げて、招く振をなす。

道夫『花子さ――ん！。』

と三度叫んで、血眼になり、渚に驅け行きて、あはや、身は海底に躍り入らんとする一瞬時。

花子の姿は、忽然、白衣を纏へる神人と化して、身體より燦然たる光りを放つ。

道夫『アッ……。』と號んで、其處に絶倒する。

この時、白衣の神人、靜かに道夫が身邊に近寄り來り、接吻することありて。

『起きよ、汝は死てふ束縛より脱れて、永遠の生命に歸れ！。』と言ふかと想へば、其の姿は忽然煙の如く消え失せる。

道夫は一時氣絶したるが、此の囁きの聲に氣附いてむつくと起き上り、屹と天の一方を睥睨して。

道夫『オ、、讃美と、榮光と、感謝と、總て神にあれ。わが愛するものゝ生命は、慥かに斯の一巻の聖書に存在する！、自分は可憐なる同胞の爲めに、滅ぶる靈魂に、永遠の生命を與へんが爲めに……。』

この時既に六日の月は、山の端に沈んで、天地黯然。松風の聲、颯々。波の言、鼕々。【幕】

# 新年の女

卅九年一月一日發行

女子教育は全世界仰視の焼點たる我が日本現時の問題なり、家庭の改良は膨脹的、進歩的なる日本刻下の急務なり、我が女學世界は此の必要に應じて婦人社會智識の啓發に資せんと欲す、創刊以來年を閲すること爰に六年、所淺しと雖も、主婦の務を全うすべき家庭と、將來の賢母を造るべき學窓とに對して多少の貢献ありしを信ず、新に來年一月より更に誌面に改善を施し、内容を豐富にし、材料を新たにし、以て將來我が女學界の明星たらんことを期す。

●書畫手本　本誌の卷頭に掲ぐる臨摹帖は精巧なる石版八頁に、水彩畫、鉛筆畫、毛筆畫、人物畫、風俗畫を載せ、揮毫は三宅克己、小山正太郎、荒木寬友、榊原蕉園、上村松園、一條成美の六畫伯に囑託し、以て雲煙龍蛇の筆法、山水草花、禽鳥に各家獨特の妙技を揮灑すべし。

●口繪寫眞　書畫手本に次で掲ぐべき寫眞口繪は世界各國の風景、人物、內地の風俗、好尚、社會上の出來事、模範的家庭の活畫、女學校の內容、生徒の製作品等、新たなる社會の要求に應じ婦人智識の啓發に資すべき材料を網羅す。

●論說　論說は時代の風潮に伴ひて家庭學校、並に時事の問題を說くを主とし、當途專門の大家、斯界の名流に囑託す。

●家庭　家政の學問をして實際に適應せしむるは本誌獨特の設備にして、家事經濟、家庭衛生、家庭教育、家[illegible]の[illegible]事、庖廚百事、室內裝飾、其他日常[illegible]生活の上に必要なる事項を網羅し、世の主婦をして居家處世の務を完うせしむるを期す。

●社交　交際社會に聲名ある貴婦人・江湖名流の內助者、特種の技能ある我が巾幗社會の先覺に就てその平生、嗜好、生活の經歷を紹介し、以て趣味教育の增補を期す。

## 女學世界第六卷第壹號豫告

### 新年附錄

### 新撰女裝双六　水年年方畫

縱一尺八寸横二尺五寸大、彩色三度摺美麗高尚

### 口繪

水彩畫　三宅克己
人物畫　榊原蕉園
風俗畫　一條成美
鉛筆畫　小山正太郎
毛筆畫　荒木寬友
繪葉書　上村松園

### 寫眞版

名流家庭、泰西名畫、人物、風景

### 記事要目

▲婦人界の新發展……女子教育諸大家
▲事物整理法……細川男爵
▲女子の新職業……成瀨仁藏
▲伊太利土產……元良勇次郎
▲名物論……下田次郎
▲夜會の話……鍋島侯爵夫人

# 學世界

來年初刊本誌の豫告

**●談叢**　教育社會、醫學社會、藝術社會其他あらゆる方面の大家を訪問してその談話、口述、講演を筆記し、現代思想の潮流を我が誌上に紹介して以て讀者の智識を啓發し、充實すべし。

**●實務**　婦人世に立ちて如何に活動し、如何に精勵し、如何に成功し以て如何に我が一生の天職を全ふし、以て如何に我が人生の眞趣を完うすべきかに就て、その方法、指鍼を示さんと欲す。

**●史傳**　東西古今に傑出せる賢婦烈女の傳記閲歷を揭ぐるを主とし、又時に英雄豪傑、偉人傑士の事歷を尋ね、以て優美なる婦人の特性と剛毅なる兒童の天性を陶冶せんと欲す。

**●科學**　專ら學術上の利益を與ふるを主とし理化、博物の解說を主とし自然界の現象に就て極めて趣味ある部分の說示をなし、以て讀者に科學的智識を與へ、その才能を啓發するの料に供す。

**●文苑**　文壇の名家が特に本誌の爲めに材を選み、想を構へて洗錬されたる作品を揭ぐ、一面娛樂に供し、一面人情の秘機を悟了せしむるにあり。

**●手藝**　婦人の習得すべき各種の技藝、意匠圖案、編繡、彫刻、裁縫、造花等に就て實習手引を揭げ、以て我が婦人に他日獨立の地歩を作らしむ。

**●衞生顧問**　育兒、看護衞生、百般の質疑應答を揭ぐ。

**●家事顧問**　衣食住、家事經濟等一切の質疑應答を揭ぐ。

**●學校消息**　各女學校の教授意見、成績、教育事項等を紹介す。

**●雜錄**　家庭以外社會百般の事項を尤も趣味ある筆を以て記し、以て世界の風俗習慣、生活の巨細を知るの料に供し從來蟄居的風習に囚れたる婦人の智見を開發せしむ。

▲世帶の新風味……………………………………關子爵夫人
▲米國觀光記……………………………………岡田光子
▲家政の範圍……………………………………塚本はま子
▲老の繰言……………………………………水原翠香
▲世界の三大河……………………………………
▲門松の由來……………………………………
▲東京百風俗……………………………………
▲支那の正月……………………………………
▲朝鮮の正月……………………………………
▲新年の美……………………………………大町桂月
▲花嫁の失策……………………………………巖谷小波
▲小說……………………………………小栗風葉
▲小說……………………………………中村春雨
▲小說……………………………………幸田露伴
▲新年笑話 極樂めぐり……………………………………×××
▲平和の春（唱歌）……………………………………

新年增刊
女重寶記
一月十五日發行

▲國母陛下と米大統領

我帝國の勃興は歷史上の奇跡とまで呼ぶ處なるが米國大統領ルーズヴエルト氏も此事に關しては餘程深く思を潛めて溯探し居りし結果、一に蔚勃たる武士的精神が國民の胸底に遍滿し居るに想到し遂に日本の健全なる家庭こそ此光榮の源泉なれば家庭の女王たるべき婦人は亦國民元氣の泉源なるべきにより女子敎育こそ敎育中の最も考慮を要すべきものとの結論に達し此旨意を敷演して大に米國敎育界に警告するなりしが今回之を一册子とし公刊し右一部を我國母陛下に奉呈せしと云ふ

▲紅葉祭

來る十二月十六日は故尾崎紅葉山人の三年忌に相當するを以て、山人生前の友人達の主催にて、今年も例の紅葉祭を同日午後二時より芝公園紅葉館に於て一層盛大に營む由、當日は岡田、和田垣兩博士の趣味ある演說あり、餘興としては高橋蓮升一座の演劇を初め、淸元、落語、講談、紅葉踊等の催しあり、尙ほ何人たりとも故山人を追慕し斯道の隆盛を翼圖する者は男女を問はず來會を歡迎する由なれば定めて盛會なるべし但し來會希望者は十二月十四日までに紅葉館内紅葉祭幹事宛にて其の旨申込むべしとの事なり、會費金貳圓。

▲東京市内の女醫

明治十七年荻野ぎん子氏等の建議により許可されし以來今日に至るまで百數十名の女醫を出せしが内東京市内に開業しつゝあるは

井上友子（麹町區上二番町山本遂雄方）
市川田鶴子（深川州崎辨天町）
本田せむ子（駒場農科大學官舍）
岡見けい子（角筈衛生園）　小川とし子（淺草象潟町）
大八木幸子（日本橋濱町）　鷲山彌生子（麹町飯田町）
賀川哲子（日本橋濱町）　加賀見のぶ子（深川古市場町）
河野桃野子（駿河臺東洋内科醫院内）
吉田けん子（銀座三丁目）　高橋瑞子（日本橋元大工町）
高田もと子（日本橋區藥研堀）高橋孝子（日本橋區本町）
中村愛子（駿河臺東洋内科醫院内）
丸茂むれ子（下谷仲徒士町）　前田園子（牛込北山伏町）
天田鶴子（京橋南藥研堀）
三上つる子（東京豫備病院本院）
三谷しげ子（内幸町三島醫院）
篠田せい子（本郷丸山新町）

等なりと云ふ。


毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）…前金七十五錢
八册（半ヶ年分）…前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）…前金二圓八十錢
内（定刊數…十二册
增刊四回…一、四、七、十月價格同）

郵稅　一册　二錢

廣告料

| | 特等 | 等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 行（二十四字詰） | | 五十四錢 | 四十四錢 | 三十七錢 |
| 半頁（卅二行） | | 十七圓二十八錢 | 十四圓〇八錢 | 十圓八十四錢 |
| 一頁（六十四行） | 割引 四十圓 | 割引 三十三圓 | 割引 二十七圓 | 割引 二十三圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ





明治卅八年十二月五日發行　第五卷第拾六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千三百三番　二千六百二十番　三千八十八番　三千二百二十九番

# 歳末年始贈答好適書

發兌元 博文館

年初歳末の贈答品は古來我國の慣習として食品物衣類に限られたるが如し、而して其内には全く虚飾に終りて實用の道なく、心あるもの常に之を歎せり、然るに世人未だ書籍を以て之に代用するの有益なるを知らず、書籍は少費にして之を贈るもの心安く、之を受くるもの多益なり、而して食料の如く消費する物にあらず、高潔にして永く其家の備品となり、子女の良風家庭の良習皆な此の贈品より千發萬達すべし

故尾崎紅葉君著、小波君、思案君校訂

● **紅葉全集** 全部六册洋裝大判總クロース金字金模様附帙入堅牢美本

▲正價一册壹圓八拾錢全部拾圓小包料拾五錢宛

以下載する書類の外、贈答品として適切なる發刊圖書甚だ多きも紙數に限りあるを以て悉く採錄するに難し、殊に新刊書類の如きは最も此感を深ふするも、そは近刊の弊館雜誌廣告に就て採擇を乞ふ事とせり、若し夫れ弊館發兌圖書の全豹に至つては圖書總目錄（往復はがきの申込者に進呈す）に就て渏覽を賜はらんことを

△孰地にても圖書と御引換得る圖書切手有之候御進物用には極めて御便利に御座候

幸田露伴君著

● **露伴叢書** 全一册洋布上製大判一八九〇頁 正價貳圓五拾錢 小包送貳拾錢

女へ（後付の二）

# 美文と韻文

美文韻文 **花紅葉** 鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著　全一冊 洋布上綴 正價參拾錢 郵稅六錢

美文韻文 **黄菊白菊** 文學士大町桂月君著　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵稅六錢

**天地有情** 文學士土井晩翠君著　全一冊 洋布上綴 正價[illegible]拾五錢 郵稅四錢

美文韻文 **霓裳微吟** 文學士武島羽衣君著　全一冊 紙皮上綴 正價參拾五錢 郵稅六錢

美文韻文 **暗香疎影** 文學士鹽井雨江君著　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵稅六錢

散文韻文 **深山櫻** 大和田建樹君著　全一冊 紙皮上綴 正價四拾錢 郵稅六錢

散文韻文 **藻鹽木** 大和田建樹君著　全一冊 紙皮上綴 賣價貳拾五錢 郵稅六錢

美文韻文 **磯馴松** 佐々木信綱君、印東昌綱君合著　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾八錢 郵稅六錢

散文韻文 **雪月花** 大和田建樹君著　全一冊 紙皮上綴 正價參拾五錢 郵稅六錢

**時代管見** 文學博士高山林次郎君著　全一冊 紙皮上綴 正價參拾錢 郵稅六錢

**文藝評論** 文學博士高山林次郎君著 （新刊）　全一冊 紙皮上綴 正價參拾錢 郵稅六錢

**大絃小絃** 文學士大町桂月君著　全一冊 紙皮上綴 正價參拾錢 郵稅六錢

**みだれ箱** 齋藤緑雨君著　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾八錢 郵稅四錢

**あられ酒** 齋藤緑雨君著　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵稅六錢

**うもれ木** 與謝野鐵幹君作　全一冊 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵稅四錢

**新文林** 大和田建樹君著　全一冊 洋並綴 正價貳拾四錢 郵稅六錢

**溪韻松聲** 呦鹿庵主人著　全一冊 紙皮上綴 賣價拾錢 郵稅四錢

**透谷全集** 北村門太郎君遺稿 星野、島崎、平田、戸川、四君共纂　全一冊 洋並綴 正價壹圓 小包送拾五錢
▲特製本 洋布上綴 正價壹圓參拾五錢 小包送拾五錢

**龍吹鶴語** 國府犀東君著　全一冊 紙皮上綴 賣價拾五錢 郵稅四錢

**雅三俗四** 石井研堂君著　全一冊 紙皮上綴 賣價拾五錢 郵稅六錢

（後付の二）

# 小說書類

大橋乙羽君著 **風月集** 彩色木版密畫挿入 全一冊 洋布上製 正價參拾五錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著 政治小說 **累卵の東洋** 全一冊 洋布並製 正價拾八錢 郵稅四錢

幸田露伴君著 **ひげ男** 木版彩色密畫挿入 全一冊 洋布並製 正價參拾錢 郵稅六錢

饗庭篁村君著 **聚寶盆** 全一冊 紙皮上製 實價貳拾五錢 郵稅六錢

嵯峨谷小波君著 **女波男波** 寫眞銅版挿入 全一冊 紙皮上製 正價四拾錢 稅郵八錢

江見水蔭君著 **戀** 寫眞銅版挿入 全一冊 紙皮上製 正價參拾錢 郵稅四錢

江見水蔭君著 **星** 寫眞銅版挿入 全一冊 紙皮上製 實價貳拾五錢 郵稅八錢

泉鏡花君外十四名新作 **換菓篇** 全一冊 新形美本 正價六拾錢 郵稅八錢

村井弦齋君著 **女道樂** 木版彩色密畫挿入 全一冊 和裝上製 正價八拾錢 郵稅拾貳錢

村井弦齋君著 **酒道樂** 木版彩色密畫挿入 全二冊 洋布上製 正價一冊五拾五錢 郵稅一冊八錢

若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂 **忘れがたみ** 全一冊 洋布上製 正價壹圓 郵稅拾錢

樋口一葉女史著 **一葉全集** 全一冊 洋布並製 正價四拾錢 郵稅拾錢

押川春浪君著 **海底軍艦** 全一冊 紙皮上製 正價參拾錢 郵稅六錢

押川春浪君著 英雄小說 **武俠の日本** 全一冊 紙皮上製 正價四拾錢 郵稅六錢

押川春浪君著 戰時英雄小說 **武俠艦隊** 全一冊 紙皮上製 正價參拾錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著 **花鳥集** 彩色木版密畫挿入 全一冊 洋布上製 正價壹圓 小包送拾五錢

押川春浪君著 海國冒險奇談 **新造軍艦** 全一冊 紙皮上製 正價參拾錢 郵稅六錢

押川春浪君著 傑奇小說 **銀山王** 全一冊 洋布並製 正價參拾錢 郵稅六錢

江見水蔭君著 軍事小說 **武裝の卷** 極彩色木版畫口繪挿入 全一冊 石版表紙 正價貳拾五錢 郵稅八錢

理學士依綠軒主人著 社會主義新小說 **文明の大破壞** 全一冊 洋布並製 正價四拾錢 郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●家政學　全二冊和並綴　正價一冊參拾錢　郵稅一冊六錢

岸上操君著　彩色木版寫眞銅版挿入
●家政案內　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

湖川昌番君序文　遠山椿吉君題辭
千葉勝狄君　鹿島ゞ巻君共編
●家庭衞生訓　全一冊洋裝　正價參拾五錢　郵稅六錢

治庭會[illegible]四敎場主幹龜井まき子女史著
●家庭料理法　全一冊洋裝　正價參拾五錢　郵稅八錢

博文館記者近藤正一君
新發●家事問答　全一冊洋裝上綴　正價貳拾錢　郵稅四錢

醫學博士井上通泰先生監修　中川恭次郎君編（六卷迄既刊）
●家庭衞生叢書　正價一冊貳拾錢　郵稅一冊六錢

海軍大軍醫隱岐敬治郎君譯
●女子衞生學　全一冊洋並綴　正價參拾錢　郵稅四錢

西田敬止君著　木版刷錦繪及寫眞版挿入
●育兒と衞生　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●婦女家庭訓　全一冊和並綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

干河岸櫻所君評釋
●女訓評釋　全一冊和上綴　正價六拾錢　郵稅拾錢

阪本隆哉君著
●衞生食物調理法　全一冊和並綴　正價參拾錢　郵稅六錢

阪、隆哉君著
●病者の食餌　全一冊紙皮上綴　正價貳拾錢　郵稅四錢

刺繡術專門　磯村大次郎君著
●實用刺繡術　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

山田興松君著
●實用造花術指南　全一冊並綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

吉山調子君著　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入
●裁縫と編物　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

仰谷番四郎君著　木版刷錦繪及寫眞版挿入
●增訂日本女禮式大全　全一冊洋布上綴　正價九拾錢　小包送拾五錢
▲蒔繪函入特製　和上綴　正價壹圓貳拾錢　小包送拾五錢

華族女學校學監　下田歌子女史著
●女子普通禮式　全一冊洋並綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

小岩井幾太郎君　鷲田直三君合著
●實用裁縫全書　全一冊和並綴　正價五拾錢　郵稅八錢

大高乙羽君著
●和洋禮式　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

中島義弌君著　樂譜挿入
●新撰小學女禮式　全一冊洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

干河岸櫻所君編　木版錦繪口繪挿入
●日本女子立志編　全一冊和並綴　正價一冊六拾錢　郵稅一冊八錢

東京女學館講師西田敬止君著
●帝國女子修身鑑　全四冊和並綴　正價一冊拾錢　郵稅一冊貳錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●外國少女鑑　全一冊和並綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●內國少女鑑　全一冊和並綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

（後付の五）

# 和漢字典

石川鴻齋君校訂
鼇頭音釋 **康熙字典**（銅刻上帙入）
全六册和紙刷 正價四圓五拾錢 小包送貳拾錢

市河濟流君、高井思明君校訂
三音四聲 **字貫**（銅刻上帙入）
▲桐函入上製 正價五圓五拾錢 小包送參拾錢
全五册和紙刷 正價五圓參拾錢 小包送貳拾錢

石川鴻齋君校訂
篆文評註 **日本大玉篇**（銅刻上帙入）
▲桐函入上製 正價六圓 小包送參拾錢
全三册和紙刷 正價貳圓六拾錢 小包送拾五錢

土生柳平君校正、木村品太郎君編輯
明治大廣益 **會玉篇大全**（銅刻上帙入）
全三册和紙刷 正價貳圓六拾錢 小包送拾五錢

石川鴻齋君著
**新撰日本字典**（銅刻上帙入）
全二册和紙上綴 正價壹圓 郵稅八錢

太田淳軒君著
**新撰明治字典**
銅刻和紙上綴 正價參拾八錢 郵稅四錢

鈴木寬直君著
**明治文選字引**
銅刻和紙上綴 正價貳拾五錢 郵稅四錢

風月庄左衛門君編
校正三版 **增字文選字引**
全一册和紙並綴 正價貳拾五錢 郵稅四錢

長岡道謙君著
**新刻正字通**
銅刻和紙上綴 正價參拾五錢 郵稅四錢

青蓋居士編
歷史文章 **皇國字典**
全一册和紙上綴 正價貳拾五錢 郵稅四錢



千河岸貫一君撰
作文資說 **格言辭典**
全一册洋布上綴 正價五拾錢 郵稅八錢

青木輔清君編
**廣益中字典**
全一册洋布上綴 正價八拾錢 郵稅拾錢

戸田氣香君著
**文章字典**（銅刻上等和紙刷）
全一册和上綴帙入 正價七拾錢 郵稅六錢

太田淳軒君著
新撰 **歷史字典**（銅刻上等和紙刷）
全一册和上綴帙入 正價六拾錢 郵稅六錢

石川鴻齋君補閱、川田孝吉君編輯
增補 **和漢**歷史文章**字引**
銅刻和紙並綴 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

大和田建樹君著
**日本大辭典**
全一册總皮上綴 正價貳圓貳拾錢 小包送拾五錢

大和田建樹君著
**日本小辭典**
全一册洋布上綴 正價七拾五錢 郵稅八錢

大宮宗司君編纂
**日本辭林**
全一册洋並綴 正價參拾錢 郵稅六錢
▲特製本洋布上綴 正價四拾錢 郵稅八錢

棚橋[illegible]君著
新撰 **漢語字引**
銅刻和紙上綴 正價貳拾五錢 郵稅貳錢

大川曙四郎君編
**懷中玉篇**
銅刻洋布上綴 正價貳拾錢 郵稅四錢

（後付の六）

# 修身及立志

文學士大町桂月君著
●軍國訓
全一冊洋並製 正價貳拾八錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著
●學生訓
全一冊紙和上製 正價貳拾錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著
●續學生訓
全一冊皮上製 正價貳拾五錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著
●青年訓
全一冊洋並製 正價貳拾八錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著
●處世訓
全一冊洋並製 正價貳拾五錢 郵稅四錢

東京女學館教授西田敬止君編
●益軒十訓
全一冊竹皮上製 正價壹圓 小包送拾五錢

文學士荻原朝之助君著
●帝國修身軌範
全四冊和並製 賣價一冊拾錢 郵稅一冊四錢

風間禮助君著
●偉人修養錄
全一冊洋並製 正價四拾錢 郵稅八錢

高等師範學校教諭本田増次郎君著
●處世要訓
全一冊洋並製 正價參拾錢 郵稅六錢

法學士田中次郎君譯述
●學生立身策
全一冊洋並製 正價拾貳錢 郵稅四錢



文學士大町桂月君著
●女學生訓
全一冊洋並製 正價貳拾五錢 郵稅四錢

松原岩五郎君著
●女學生の栞
全一冊洋並製 正價參拾五錢 郵稅六錢

慶應義塾教授菅綠陸君著
●成功要錄
全一冊紙皮上製 正價貳拾八錢 郵稅四錢

慶應義塾教授菅綠陸君著
●言行要錄
全一冊紙皮上製 正價參拾錢 郵稅六錢

文學博士中村正直君譯述
●改正西國立志編
全一冊洋並製 正價貳拾七錢 郵稅八錢

米國ジョントット氏原著 吉田已之助君譯述
●成功遂志勤學要訣
全一冊洋並製 正價貳拾八錢 郵稅六錢

法學士丸尾雄君著 彩色木版寫眞版挿入
●日常行爲法則
全一冊洋並製 正價貳拾五錢 郵稅六錢

法學士桐生政次君著 彩色寫眞挿入
●勤學と處世
全一冊洋並製 正價貳拾五錢 郵稅六錢

澁江保君著
●世界格言大全
全一冊洋布上製 正價四拾錢 郵稅四錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●泰西所見家庭教育
全一冊和並製 正價參拾五錢 郵稅六錢

女（後付の八）

第百五編第卅八號　十一月廿七日發行

寫眞畫報臨時增刊

# 伊勢行幸寫眞帖

全壹册洋裝大判　正價貳拾錢　郵稅貳錢

石版口繪　**大廟御參拜の圖**‖尾竹國觀君筆

口繪寫眞
東京御發輦●名古屋御駐輦●山田御着輦●兩宮御參拜●山田御發輦●靜岡御駐輦●東京御凱旋●內宮●外宮●神苑●行在所●文武官の御供奉●沿道人民の拜觀●其他の光景とも悉く寫眞と爲し五十頁の寫眞版に滿載す

大元帥陛下、親しく、曠古未曾有なる大戰勝を、宗廟に奉告し給はんとて、文武百官を率ひ、鳳輦遠く伊勢に行幸あらせらる、眞に是れ絕代の盛事、億兆臣民皆な聖德の洪大なるに、感泣せざる無し、此空前なる盛典の光景を、目のあたり全國同胞に報せんが爲に、此寫眞帖を發行す、其記事と、寫眞とには、毫末も遺憾無からんが爲に、本館は特に、編輯[illegible]谷水哉、[illegible]寫眞技師[illegible]木覺直の諸氏を、伊勢に派遣せり以て如何に、本誌發行の爲に、全力を傾注するを見るべし實に本誌は、一部の繪卷物なり、一大パノラマなり、抑もまた宮城より大廟に連なる大活動寫眞帖と謂ふも[illegible]ざるなり。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界

明治卅三年十二月廿日第三種郵便物認可

第五卷第拾六號

明治卅八年十二月五日發行
每月一回五日發行



監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊵
明治38年11月(第5巻第15号)、12月(第5巻第16号)

2007年12月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3293-5　C3321